
ファンタシースターポータブル外伝 ~ After the tragedy ~

鳥山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル外伝 After the tragedy

【Nコード】

N0457U

【作者名】

鳥山

【あらすじ】

亜空間事件から1年後の物語。4年前HIVEでヴィヴィアンを失った悲しみから立ち直れない、元ガーディアンズ隊員のディーンは4年間、怠惰な生活を送っていた。ある日、金が底を尽きてどうやって生活していくか考えていたところ、傭兵ギルドに勧誘される。そこでヴィヴィアンの面影を持つ一人の少女のミッションに同行する事になり……。…原作ゲームとは違ったもう一つの物語です。

（注：この小説の世界線はポータブルのノーマルエンドの延長線で

す
)

プロローグ（前書き）

皆様初めまして！烏山というものです！ファンタシースターポータブルのシリーズを友人Kに勧められて買った面白くて、ゲームクリアした後みなさんの小説を読んでもっとファンタシースターポータブル2？をいろんな角度からみれてたのしくて、自分も書きたくなつて投票させていただきました。とりあえず読んでいただけるとうれしいです。

プロローグ

・・・

ヴィヴィアン「あなたも…光を知っていたでしょうに… 心までS E E Dに蝕まれたのね」

ヘルガ「機械風情がああ！私の真似事をするデク人形の分際で！！」

ヴィヴィアン「いいえ 心があるわ 私には…」

ヘルガ「笑わせるなあ！お前は私のコピーだ！ お前に本物の心があるのなら、その中身は闇だけだ！ イルミナスへの忠誠だけだ！！」

ヴィヴィアン「そういう風に作られたとしても今の私は違うわ 変わるの… 心があるから 変れるのよ」

ヘルガ「何を こしやくな…」

・・・ギユウウウウ・・・

ルウ「時空が歪み始めている… …封印が開きます！！」

ヘルガ「私の勝ちのようね…」

ヴィヴィアン「いいえ 共に闇に還るのよ」

…パアアア…

ヴィヴィアン「私に心を教えてくれたグラールの光… あなたなんかに消させないわ！」

ヘルガ「何をするツ　くそ…　離せ　人形が！！」

ヴィヴィアン「私が　時空のひずみに入り　封印を守ります　大丈夫　私には出来ます　ヒトの心は　無限の奇跡を生む　そうですよね？」

…… やめろ………… やめるんだ………… ヴィヴィアン……

ヴィヴィアン「最後まで…　ガーディアンズでいさせてくれてありがとうございました」

…… 行くな………… 戻ってくるんだ…………

ヴィヴィアン「そして　私に心を…」

…… オレの声が聞こえないのか？… 戻ってこい！ヴィヴィアンン
！！！！

ヴィヴィアン「ありがとう」

パアアアア

ガバツ！

「ヴィヴィアンッ！！！！！！」

… チック… タク… チック… タク…

「……………オレの船……………くそっ…またあの時の夢か……………」

謎の飛行物体がパルムに出現してから半年 亜空間事件で騒がれていた時から1年 そしてヴィヴィアンを失ってから4年もの時が流れていた あの夢を見た回数は余裕で3ケタに達している

オレの心にはぼっかりと穴が空いたままだ

あの後 ガーディアンズのコロニーに戻ったら 無断でHIVEに乗り込んだことで少し謹慎を受けたが活躍は大いに評価された
… だけど それを喜ぶには失ったものが大き過ぎた

仕事にまったく集中できず 程なくしてガーディアンズを自ら除隊 その後はフリーの傭兵の仕事をして手に入れた金で生活していたが 気力がわかず 大きな仕事はできていない

ガーディアンズ時代の貯金と 売れるものを売って手に入れた金を頼って今日まで食いつないできた 要はフリーターの肩書を持つニートだ

だけど その貯金も昨日でそこを尽きた オレの財産といえばガーディアンズにいた時にボーナズで買った このマイシップと使い慣れた武器が数種 わずかな衣類くらいだ

……………さて これからどうするかな？

プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれた方、本当にありがとうございます！
前半はほぼポータブルのノーマルエンディングでしたね…（汗
動画流して、止めて、セリフ打ち込んで、また流して…という大変
地味な作業でした。

次回からここではキャラクターのプロフィールでもやろうかと思っ
ています。

次回も読んでいただけると光栄です。ではまた！

スカウト（前書き）

第一章「空っぽの男」

> i 2 9 5 6 5 — 3 7 5 7 <

スカウト

「パルム某所の質屋」

オレは生活費を得るために質屋でマイシップを売りに来ていた

一通りマイシップの外見 内部を確認してから質屋がオレに告げた

質屋「10万メセタ」

「……そんなワケねえ… マイシップが10万でどゆことよ…？買った時その40倍ぐらいの値はしたぜ…」

質屋「つつても兄ちゃんよお この表面の傷！兄ちゃん マイシップで戦場にでも突っ込んだんかい？」

「…歴戦の傷さ…マニアが泣いて喜ぶぜ？」

質屋「ただの事故のあとだろうが！それから船内！見せてもらったけど 高く売りたいんならせめて掃除はしてこよーぜ？ ゴミは散らかってるし なんか埃の層が出来てた？！」

「…誇り高きマイシップ…」

質屋「うまくねーから ……わーった わーった ったく…兄ちゃんには負けたよ」

「おーいくらで買い取ってくれるんだ！？」

質屋は2本の指を立てた

「2000万!!...何?プレミアついてた?」

質屋「んなワケあるかい!20万だよ20万!こんなオンボロにプレミアつくかあ!それにうちは本来マイシップは扱ってねえのよ
買い取ってやるだけでも感謝してほしいよ」

「ふざけんなよジジイ...せめて200万は期待してたぞ...?」

質屋「うるせえ!と言うか突っかかってくるんならもっとテイション上げろや!!...!」

???「すみません? ちよつといいですか?」

後ろから声がした どうやらオレの後ろで待っていた客がいたようだ

30代後半〜40代前半のニューマンの長身長髪の男だ メガネをかけていて 微笑んでいるような顔をしていた

質屋「こいつあすまねえなあ ホラ 兄ちゃん どいたどいた!それでダンナはどんな用件だい?」

???「いえ、私が用のあるのは こちらの青年のほうでしてね?」

「...へ?...オレ...」

???「君のマイシップ 私が100万で買い取ろう」

「は?」

「質屋近くのカフェ」

全く話がつかめないまま その男から詳しい話があるとかでカフェに入った

「???」私はアイスコーヒーにするが 君はどうするかね?」

「...コーラ... なあ... アンタなんでオレのマイシップ買ったの? しかも100万で...」

「???」レトロマニアだからですよ」

「ウソだろ」

「???」わかりやすかったですね... 私はね 君の力を借りたいんですよ 元ガーディアンズ 『ディーン・オーシャン』さん?」

この男の目つきが変わった

この男から危険な香りにオレは警戒した

「... 人違いだ...」

「???」HIVEにガーディアンズに無断で突入し...」

「.....」

「???」イルミナスのヘルガと戦い 勝利...」

「……………めろ」

「君のパートナー…ヴィヴィアンと言いましたか？」

「……………やめろ」

「彼女がSEEDの封印を守るためにヘルガを道づ……………」

「それ以上しゃべるなあ……………」

「すみません…君に話を聞いてもらいたくて…悪く思わないでください……………」

「……………」

「…では君は『ディーン・オーシャン』で間違いありませんね？」

狐が…

ディーン「……………アンタ何者だ？」

あのことはガーディアンズ内部の者しか詳しく聞かされていないはずだ

「そうですね まだ自己紹介をしていませんでしたね すみません 私はこういうものです」

男は懐から名刺を取り出し オレにそれを渡した

ディーン「…傭兵ギルド 管理人『フォレス・アーラニヤカ』…」

フォレス「はい 私 傭兵ギルドの管理人をしていまして あなたのような有能な無所属の傭兵を探しているのですよ… 要はスカウトです マイシップの100万メセタは 契約金と思っていただいて結構です」

ディーン「オレ1人をギルドにいれるためここまでする必要があるのか？」

普通に考えたらありえない話だ 功績があるとはいえ 前線から4年も姿を消していた人間をそこまでして手に入れたいものなのか？

フォレス「わがギルドは少数精鋭で運営してましてね 人数は20数人ほどですが みな優秀なフリーの傭兵です 人数が少ないゆえにメンバー1人に大金をかけることも可能なのです」

ディーン「そういうことじゃない… なんでオレなんだ？優秀なフリーの傭兵なら探せばいくらでもいるだろ…？」

フォレスは下を向いた

フォレス「…………… 君は自分の価値をわかっていない…」

ディーン「…なんて言った？」

フォレス「いえ、君の功績は君の思っている以上にすごいことだということだよ」

なんか誤魔化された感じがする

フォレス「それでどうします？我がギルドに入りますか？契約金100万 さらに安定した仕事を紹介します いい話だとは思いますが？」

コイツは何かほかのことを企んでいる気がする かといって断つても オレの情報をあそこまで収集できるやつだ 何をしてくるかわからない それに金がほしいのは本心だ 今のままでは金がなくなれば死ぬのを待つようなものだ

ディーン「……わかった…… ギルドに入ろう……」

フォレス「ありがとうございます… では飲み終えたらギルドにお連れしましょう」

ディーン「……………」

こうしてオレはギルドに所属することになった

（傭兵ギルド ロビー）

???「マスター お帰りなさい」

ロビーに入るとウェイトレスのような恰好をしたキャストの女性が挨拶してきた マスターとはフォレスのことだろう

フォレス「ただいまエレナ… 紹介しよう ギルドでの事務をこなしてくれている『エレナ』だ」

エレナ「初めまして 先ほどマスターから通信で話は聞いています デイーン・オーシャン様でございますね？ ようこそ 私たちのギルドへ」

深々と頭を下げられた

デイーン「…はあ…」

フォレス「エレナ 彼と仕事の話をしたのですが ミーティングルームは今使えますか？」

エレナ「はい 現在利用者はいません」

フォレス「そうですか では デイーンさん 私についてきてください」

オレはだまってフォレスの後をあるいていた

すると…

???「よう フォレス！なんだ？ 後ろのやつぁ新入りかぁ？」

一人の男が話しかけてきた 髪は銀色の長髪で眼帯をしていることからデューマンだと思える

フォレス「やぁ ラグナ そうですね 今から彼と話をするところです」

ラグナ「へえ」 また有能そうなやつを連れてきたもんで…」

その男の視線がオレに向けられた

ラグナ「オイッ！オレはラグナってんだ！お前はなんて名前だ？」

なんだかフレンドリーなデューマンだな

ディーン「ディーン・オーシャン…」

ラグナ「ディーンか！仲良くやってこうぜ？」

名前に反応しないことから彼にはオレのことは話されていないのだから

フォレス「ラグナ そろそろいいですか？」

ラグナ「おっとすまねえな！ そんじゃまた後でな！」

男はロビーの方に歩いて行った

ディーン「…今のヒトもアンタがスカウトした傭兵か？」

フォレス「いえ、彼は自分からこのギルドに入った数少ない人物です。しかし腕はかなりのものですよ。おっとこの部屋です。どうぞ入ってください」

オレは部屋に入り フォレスに指定された椅子に腰を掛けた

フォレス「では ギルドについてももう少し話しておきましょう」

フォレスは一方的に説明し始めた

フォレス「うちはギルドと名乗っていますが 実際は軍事会社に近いシステムです ですが軍事会社となると 他の軍事会社との会社間のやり取りもしなくてはならず少々めんどうでしてね このようにギルドと名乗っています 少数メンバーなのは私が管理しやすいからですな」

この男のいつていることにはやはり裏があるように思える

その後そのほかギルドについての話を聞いた

フォレス「では、そろそろ最初の仕事をお願いできますか？」

ディーン「ひとつ言っておくけど オレは4年間 ほとんど傭兵としての仕事はしてないぞ？ときどき小型の原生生物の討伐をやったくらいだ」

フォレス「大丈夫ですよ 最初の仕事は本当に簡単なものです」

微笑みながらフォレスは続けた

フォレス「実は私 娘がいましてね その娘が今日初のミッションにでるのですよ アナタにはその娘のパートナーを務めてもらいたいのですよ」

ディーン「…娘？」

フォレス「はい」

ディーン「……」

フォレス「なんで黙るんです？」

そうか…わかったぞ オレが今までコイツに抱いていた疑問はこの
単語ですべて片づけられる

親バカ

娘が安全にミッションを終えるために大金をかけて優秀な傭兵を探
し出したのか まあオレのことは過大評価しているようだけど

なんだか急にこの男がしょーもなく思えてきたが 仕事の割がいい
ので引き受けることにしよう

ディーン「わかった…引き受ける」

フォレス「そうですか！助かりますよ では今呼び出しますね」

フォレスは通信機で取り出した

フォレス「私だ 今すぐミーティング室に来なさい パートナーが
お待ちです」

思ったより厳しい口調だ オレが目の前にいるからだろうか？

ピッ

フォレス「少々 お待ちください すぐに来ると思います」

（１０分後）

ディーン「遅くないか？」

フォレス「おかしいですね」

その時

ウィーン

ミーティング室の扉が開いた

???「……す、すみません……はあ……はあ……」

息を切らしたニューマンの少女が入ってきた

フォレス「遅かったじゃないですか？まあいいです　こちら　ディーン・オーシャンさんです　ご挨拶なさい」

マナ「は、はい！……えーと……　マ、マナ・アーラニヤカです！　よろしくお願いします……！」

少女がかなりテンパリながら自己紹介をした

ディーン「……ああ……よろしく」

この時　なぜかオレの脳裏にヴィヴィアンの顔がよぎった

スカウト（後書き）

キャラクター設定（？）

デイン・オーシャン

> i 2 9 3 1 4 — 3 7 5 7 <

種族：ヒューマン

年齢：21

身長：175cm

体重：65

髪色：暗い青

髪型：ポータブル2のオープニングでドラゴンと戦っているヒューマンと同じもの

詳細：基本的に無表情。笑うときやボケるときもポーカーフェイスを通す。また、ポータブルの設定の通り寡黙。戦闘スタイルは近距離の剣術と中距離射撃が得意なため右手にセイバー系、左手にハンドガン系の武器を使うものがメイン。

他の武器はほとんど生活費に変換された。名前の由来はデインは『D』という作者のポータブルの主人公キャラから、オーシャンは髪が青だから。

初陣（前書き）

今回からやつと戦闘に入ります
楽しんでもらえると嬉しいです

初陣

マナ「マ、マナ・アーラニヤカです！ よ、よろしくお願いします
……！」

なぜだろうか？オレの中でこの娘とヴィヴィアンが重なる

種族も違うし 顔も似ていない 髪型も髪色も違う 背もヴィヴィアンに比べて小さい 声もあまり似ていない 雰囲気も落ち着いていたヴィヴィアンに対してなんだか頼りない感じた……

……そうか わかったぞ 『初のミッションに同行する』 このシユチエーションが初めてヴィヴィアンに会った時と同じだ だからそう感じたのだろう

オレはそう解釈した

ディーン「……ああ……よろしく……」

マナ「（なんだか悲しそうな眼をしている人だなあ）」

フォレス「まあ挨拶も軽く済んだことですし 君たちに出てもらったミッションの説明をしますね？」

フォレスは書類を取り出した

フォレス「このミッションのクライアントはニューデイズ・アガタ諸島の農村の村長です 最近 この地域には生息しない『テンゴウ

グ」10体が現れるようになり 村人や家畜が襲われるなどの被害が出ていたそうです 村には農民しかおらず 村人だけではどうにもならないと判断し ギルドにこの『テンゴウグ』10体の討伐を依頼したとのことでした」

『テンゴウグ』…巨大なコウモリのような姿をした飛行型の原生生物だ 大きさはヒトよりもひと回り大きいといった特殊攻撃もなく 並の傭兵なら倒すのに苦労はしない 実際オレもガーディアンズ時代はもちろん たまにしていたフリーの仕事の時にさえ 何度か討伐をしたことがある

ディーン「…わかった… …ところで彼女は訓練などはしていたのか？」

確かにテンゴウグは強い原生生物ではないが 戦闘経験皆無の者が勝てるほどではない

フォレス「半年前から定期的にVR空間での戦闘訓練をうけさせていました そうですよ？マナ？」

マナ「は、はい…テクニクなら少し自信があります…」

そう自信なさげに答えた

大丈夫だろうか？まあテンゴウグくらいなら今のオレでも倒せるわけだし

フォレス「今のところ『オンマゴウグ』の目撃情報は無いとのことですが、何かあるか分かりません 気をつけてミッションを遂行してください」

『オンマゴウグ』… テンゴウグの群れを統治するリーダー 大きさもテンゴウグよりもはるかに大きく 攻撃のバラエティも多様
ガーディアンズ時代に2、3度倒したことがあるが 今のオレでは倒せる気がしない

フォレス「先ほど私たちが乗ってきたマイシップをご利用ください
村の詳しい位置についてはマイシップにナビゲーションさせる
ようにしてありますので そちらの指示にしたがってください」

コイツの不気味なぐらいの用意の良さはなんなのだろうか？

ディーン「じゃあ行ってくる」

オレは席を立った

マナ「ま、待ってください あっ……お父さん…行ってきます…」

フォレス「ええ 行ってらっしゃい」

フォレスは笑顔で俺たちを見送った

オレたちはミーティングルームを出てマイシップに乗った

「マイシップ」

ギルドを出て10分ほど沈黙が続いていた

マナ「（このヒト全然喋らないよお 気まずいよお な、何か話さ

ないと)…あ あん？」

ディーン「…あ？」

マナ「ひっ！ごめんなさい！！」

マナは急にオレに謝った 意味がわからない

ディーン「なんで謝んの？オレに何か話があるんじゃないの？」

マナ「ご、ごめんなさい！なんかびっくりして…」

本当にこの娘は戦えるのか？というかオレはびっくりするような声をだしたか？

ディーン「そう………で？オレに話があるんじゃないの？」

マナ「（そ、そうだ このヒトのことを聞いたりして話を盛り上げないと…）ディーンさんの好きな食べ物ってなんですか？」

なんて素朴な質問なんだろうか

ディーン「……麺類全般……」

マナ「そ、そうなんですか…おいしいですよね……」

ディーン「…ああ」

マナ「……………」

ディーン「……………」

マナ「（会話終わったあ　ていつかなんなのこのヒト？　暗いよ！
暗すぎるよ！）」

その後ニューデイズに入るまで沈黙は続いた
（ニューデイズ・アガタ諸島）

ナビゲーション機能は想像以上に詳しいもので　ニューデイズにつ
いて数十分でその村についた

村長と仕事内容の話を軽く挨拶をした後　テングウグが出現するエ
リアに向かった

マナ「……………」

マナは緊張しているようだった　初の実戦だ　無理もないが　彼女
の場合余計に緊張しているように見える

流石にこれを見かねて　今度はオレから声をかけた

ディーン「…大丈夫か？ガチガチだぞ？」

オレは肩を叩いた

マナ「ワァ！」

まあ予想通りの反応だ

マナ「お、驚かさないでくださいよ……」

ディーン「別に驚かしてねえよ　ただそんなに緊張してたら　まとも
に戦えないぞ？」

マナ「……はい……」

下を向いてしまっている

なんとかしないとほんとにテンゴウグに負けかねない

ディーン「……別に戦闘自体は初めてじゃないんだろ？実戦もVR空
間の訓練も大差ないさ　それに……」

オレは少し間をあけた

ディーン「それに……オレがついてる　昔はガーディアンズにいて
実力もあった　今だってそれなりに戦える　だからヤバくなったら
オレを頼ってくれればいい……　だから……その……なんだ？……　自信も
とうぜ……？」

久々に長文を話したからだろうか？らしくないことを言っていたし
後半がぐだぐだだ

マナ「……はい　がんばります！」

表情が明るくなった　これでなんとか戦えるといいんだが

その時

バッサバッサ……

羽を動かす音がした 来たか…

ディーン「来たぞ…構えろ…！」

マナ「は、はい！」

オレは武器のナノトランスを解除した 片手剣『クレアサベラ』と短銃『ブドウキ・レイ』を構えた

マナはロッド系の武器『ヘリクセン』を取り出した

グガアア…！！

1体のテンゴウグがこっちに向かって飛んできた

オレは銃をチャージした

ディーン「オレが撃ち落とす 落ちたやつにテクニクを叩きこんでやれ」

マナ「わ、わかりました！」

テンゴウグはこちらの様子を覗って空中に止まっていたが 次の瞬間急降下してきた

ビューンッ…！！

急降下と同時に引き金を引いた

グオギアア…！！

フォトンの弾丸は命中しテンゴウグは地面に落ちた

ディーン「よし…今だ！」

マナ「ええい！…！」

ドゥーン！！！！

低いところから雷がテンゴウグに落ちた 『ラ・ゾンデ』だ

グギヤアアアアア！！！！！！

断末魔を上げた後 テンゴウグは動かなくなった

ディーン「いいテクニクを使うな…」

技を決めて呆然としているマナに声をかけた

マナ「あ、ありがとうございます！！…すごい 本当に倒せた…」

ディーン「…喜ぶのは早いぞ？…次が来る」

バッサバッサバッサ

さっきのテンゴウグの断末魔を聞きつけたのだろう

9体ものテンゴウグが集まってきた

ディーン「随分とここのテンゴウグは結束力があるんだな…」

マナ「感心している場合じゃないですよ！…どーするんですか？あんなにたくさん！！」

すごいあわてようだ

ディーン「どうするって…さっきと同じさ オレが落として 君がとどめを刺す」

マナ「落とすってこんな数を…ってちよつと！」

オレは走りだしテングウグの注意を集めた

すると2体が急降下して襲いかかって来た

1体目の攻撃をかわし…

ブァン…！

クレアサベラで両断した 断末魔も上げずにそのまま地面に墜落し動かなくなった

2体目は攻撃をかわした後 尻尾を掴んでそのまま空中へ…

マナ「ええゝ！？」

まあ驚くのも無理はないか

グギャギャー！！

オレを振り落とそうと暴れた　オレは大樹の枝に乗り移った

ディーン「この高さからなら狙えるな…」

ビュン！ビュン！ビュン！ビュン！

さつき尻尾を掴んでいたやつを含め4体の翼を撃ち抜いた

グギヤアアア

4体とも地面に落ちて行った

マナ「す…すごい…」

ディーン「そいつら頼むわぁー!!」

マナ「は、はいー!」

ドゥーン！　ドゥーン！　ドゥーン！　ドゥーン！

4発の雷が落ちて行ったテンゴウグたちに止めを刺した

マナ「ふう〜」

ディーン「ポケットとするな!1体行ったぞ!」

雷の光に反応したのだろうか　空中にいた1体のテンゴウグがマナに向かって飛んで行った

マナ「わぁー!!」

ディーン「今いく！逃げてろ！」

オレがマナのところに向かおうとした瞬間 残り3体のテンゴウグ
がオレに向かってきた

ディーン「…くそが…」

マナのところへ

マナ「きゃあ！こないでえ！」

1体のテンゴウグから逃げ回っていた

マナ「…（1体くらい私だけで倒さなくちゃ！）」

マナは急に足を止めて後ろを向いた テンゴウグは10mくらい離
れたところを低空飛行している

マナ「えいつ！」

ドゥーン！

雷が落ちた！

マナ「た、倒した！？」

グガアアア！！

テンゴウグは襲いかかってきた 『ラ・ゾンデ』は外れたようだ

テンゴウグはもう目の前に迫っている

マナ「（だめだ…やられる…!）」

マナは目を瞑った

グガアアア…!!

鳴き声が聞こえたが何も起こらない

マナ「…え？」

目を開くとそこには頭を後ろからフォトンの刃で貫かれて絶命しているテンゴウグの姿があった

ディーン「ふう…なんとか間に合ったか…」

マナ「え？ディーンさん？なんで？残りのテンゴウグはどうしたんですか？」

マナが少々テンパリ気味で聞いてきた

ディーン「一瞬で倒した」

マナ「…あっさり言うんですね…」

そついうとマナはまた下を向いた

マナ「…ぬかと…った…」

ディーン「…？なんか言ったか？」

顔をのぞきこむと涙が流れていた

マナ「死ぬかと思った…怖かった…」

まあそうだろうな　初めての実戦だ…　オレはマナの頭をポンと叩いた

ディーン「…大丈夫…君は死なせない…」

今の言葉で失ったヒトのことを思い出したのだろうか？それともマナに近づいたからだろうか？

またヴィヴィアンの顔が浮かんだ

オレはそうしてマナが泣き止むのを待った

↓数分後↓

泣き止んだマナとオレは依頼を達成したことを伝えるべく村に向かっていた

その時…

グゴアアアアア！！！！！！！

すさまじい鳴き声…いや咆哮といった方が正しいかもしれない　そ

れと羽を動かす音も聞こえてきた

マナ「え？何？テングウグは全部倒したはずじゃ？」

ディーン「いや この声はテングウグなんかじゃない…」

バツサ バツサ！ ドシンッ！！！！

咆哮の主がオレ達の前に姿を現した

巨大な翼 強靱な腕 不気味な複眼 そして見るものを圧倒する巨体

ディーン「…オンマ…ゴウグ…」

〜ギルド〜

エレナ「ディーン様とマナが向かったアガタ諸島ですが オンマ
ゴウグも目撃されていることを伝えましたか？」

フォレス「いえ？ 知らせていませんか？」

フォレスはとぼけた様に答えた

エレナ「そんな！ なぜ黙っていたのですか！？」

フォレス「そのことを話してしまいましたら 彼はミッションを引き受けてくれませんか？」

エレナ「では なぜ？なぜ 今アガタ諸島に行かせたのですか！？」

フォレス「フフフ… オンマゴウグ… 彼のリハビリには持って来いの相手だとは思いませんか？

…彼には一刻も早く実力を取り戻してもらわないといけませんからね…」

フォレスはその閉じた様に細い眼の奥を光らせた

初陣（後書き）

キャラクター設定（？）

マナ・アーラニヤカ

> i 2 9 3 6 4 — 3 7 5 7 <

種族：ニユーマン

年齢：17

身長：155

体重：45

髪色：暗い緑

髪型：ややロングで髪にアクセサリは着けていない

詳細：雰囲気としては森ガールな感じ。

気が弱く、よく怯えたり泣いたりする。でも、そんな自分を直そうと努力はしている。戦闘はテクニクオンリー。腕前は威力は高いが精度がイマイチ。今後強くなっていくかもしれません。

名前の由来は「なんか自然っぽい名前がいいなあ」って思いマナ（why?）。アーラニヤカはバラモン教の経典で「森林書」を意味する「アーラニヤカ」から

『死なせない』

… テンゴウグからマナをギリギリのタイミングで守ったとき、オレはガーディアンズ時代の実力に戻った気でいた。うかれていた。やっていること自体はたまにやっているショボイ仕事と変わらないのにもかかわらず…

それは、『少女をモンスターから守った』ということで自分を英雄かなんかだと思ったからであろう。

だから「死なせない」なんてらしくもないことを軽々しく口にしてしまったのだ。

だが、今はなんだ？

目の前の『オンマゴウグ』を見て足が震えている。恐くてしようがない。

ディーン「… なんで、オンマゴウグが…？… 目撃情報は無かったんじゃない？…」

確かにフォレスはそう言っていた。どういうことだ？

フォレスがウソを教えたのか、情報自体が間違っていたのか、はたまた偶然今この地方に到着したオンマゴウグに出くわしたのか？ いずれにせよ目の前に巨大な怪物がいる現実是不変。とても勝てる気はしない… ともなれば選択肢は一つだ。

「デーン……逃げるぞ！」

そうマナの方を向き、呼びかけた。

しかし:

マナ「……あっ……あ……ムリ……こんな……」

完全に飲まれていた。オレの声は届いていないようだ。

「デーン、オイ！」

マナ「…えっ？…は、はい！」

マナは我に返った。だが一歩遅かった。オンマゴウグは振り上げた腕を、振り下ろすモーシヨンに入っていた。狙いはマナだ！

マナ「え？」

「ディーン、かわせえ!!!!!!」

ドウゴオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

マナはオンマゴウグの拳の50cm程前で尻餅をついていた。逃げ

ようとした動きをしたおかげでかわせたようだ。

拳は地面を粉碎していた。

マナ「……ひっ……」

ディーン「何やってんだ！？早く逃げるんだ！！」

マナ「……ム……ムリ……です……体に……力が……」

震えた声で訴えてきた。

そうしているうちにオンマゴウグは次の構えに入っていた。あの構え……石投げか？！

『石投げ』……オンマゴウグの攻撃パターンの一つとして燃えている石をばらまくものがある。石と言っても大きく、どちらかと言うと岩だ。

あの状態でまともに食らえばただでは済まない。

ディーン「立って逃げるんだ！！死ぬぞ！！！！」

……「死ぬぞ」この言葉が引っ掛かった。

「死なせない」と言っただけなのに………なんてオレは無責任な

んだろうか？

オンマゴウグが手を振り払おうとする。

………まただ。またマナとヴィヴィアンが重なった。確かにヴィヴィアンと共にオンマゴウグを倒したことはあるが、そうじゃなかった……

…初めてあった時は、「初のミッションに同行」ということで思い出した。テンゴウグを倒した時は自分の力がガーディアンズ時代に戻ったと錯覚したからパートナーがヴィヴィアンに思えたのだろう。そして……またパートナーを守りきれなかったという状況に陥りかけているからそう思えたのだろう……

そう……どれもヴィヴィアンを犠牲にしてしまったことへの後悔のあらわれだったんだ。何度も見た、あの時の夢もそうだろう。今まで、過去から逃げていたから気づかなかったんだ……。自分にウソについて戦いから逃げていた。

…オレはもう逃げたくない……オレはもう後悔はしたくない、

…もう誰も「死なせない」！！！！

ディーン「ヴィヴィアンンン！！！！！」

思わずそう叫んでいた。体も勝手に動いていた…

………
私は今度こそ本当に「死」を覚悟した。「もうだめだ」…そう思った。

そんな私の耳にディーンさんの叫び声が入ってきた。人の名前だろうか？

そのあと一瞬だった。

すぐ目の前に黒い影が現れた。

ディーン「らああああああ！！！！！」

その動きは目で追えるものではなかった。私に当たるはずだった岩が次々とはじかれていった。

マナ「……………」

全ての岩を弾いた後、ディーンさんは後ろ向きのまま声をかけた。

ディーン「……わるい…『死なせない』とか偉そうなこと言ったくせに、逃げることばっか考えて……」

ディーンさんが振り返った。

ディーン「…でも、絶対に『死なせない』…」

相変わらず表情は全然変わらないけど…悲しげな眼が少しだけ温かい眼になっていた…。

………

体が軽い。自然と動く。オンマゴウグの動きが見える。

まるで本当にガーディアンズ時代のような。

オンマゴウグの攻撃を回避しつつ、オレは距離を詰めた。そして…

ディーン「せいっ！！！」

オレの剣がオンマゴウグの腹部を切り裂いた。

グガウウツウ！！！！

うめき声をあげた。深く入ったようだが流石に一撃で仕留めるのは無理だったようだ。

なら、もう一回だ！

ディーン「うらぁ！」

ガスッ！！

ディーン「……何っ……！？」

オンマゴウグの脚がオレを蹴り飛ばした。腕の動きばかりに注意していたせいか足への警戒がまるでなかったオレは10mほどぶつとんだ。

とつさに武器を盾にして直撃は避けたが、強靱な脚だ。なんだかクラクラする。

マナ「ディーンさん！！血が！！」

額から血が流れていた。直撃していないわけだから、地面にぶつかった時だろう。

バツバツバツ……！！

オンマゴウグが翼を動かし始めた。

ディーン「……くそ！空へ逃げる気か……！」

空に逃げられたらオレの攻撃は届かない。銃もあるがこの状態で正確に狙いをつけられることは無理そうだ。なんとしても飛び立つ前に仕留めないと…

オレが起き上がってオンマゴウグのところへ走り出そうとした時…

ドゥーン！！！！！！！

雷がオンマゴウグの翼を貫いた。

グガアアアアア！！！！！

若干浮き上がっていたオンマゴウグはそのまま地面に落ちた。

ふとマナの方を見ると起き上がりロッドを構えていた。

マナ「ディーンさん今です！！！」

ディーン「…頼りになるパートナーだ…！」

オレはそう呟くと銃をチャージしながらオンマゴウグのもとへ駆け出した。

った。

マナ「やつ…やったの？倒したの？」

マナがどうしていいかわからない顔をしている。

ディーン「ああ…オレ達の勝ちだ…！ナイスアシストだ！」

マナ「え…そんなあ…。私なんかディーンさんがいなかったら今頃…。そ、それよりディーンさん！血が！早く治療しないと…！！」

そういえば額から血が出てたな。止めを刺す時とか忘れてたけど…

ディーン「大丈夫、こんなのはケガのうちには……」

バタッ！

マナ「ちょ…ディーンさん！？ディーンさん！！！！しっかりしてください！！」

ここから先のことはオレの記憶にはない。

くマイシップく

ディーン「ん？…」

目を覚ますとマナが心配そうに覗き込んでいた。

マナ「あ、よかった…気が付いた。」

ディーン「ああ、悪いな…手間かけさせた…。…マイシップまで運んでくれたのか？」

マナ「いえ、とても一人では運べないと思って、ディーンさんを原生生物に見つからないようなところに動かして、村に人を呼びに行つてその人達に手伝ってもらいました。」

ディーン「…そうか…ありがとう…」

マナ「そ、そんな！お礼なんて・・・わ、私も…」

なんだか言うのをためらうように止めたが、すぐに口を開いた。

マナ「私も、ディーンさんを『死なせない』ですもん！」

最初に会った時の頼りなさがウソのようだ。

マナ「だから、私ももっともって強くなってディーンさんの役に立てるようになりたいです！」

ディーン「そうか……それじゃあこれからよろしく頼むよ…オレもまだ一人では戦いきれない…」

マナ「はい！…ところでディーンさん。気になったことがあるんですけどいいですか？」

ディーン「なんだ？」

マナ「『ヴィヴィアン』で誰ですか？オンマゴウグの攻撃から私を助けようとした時にそう叫んでましたけど……あの、私自己紹介しましたよね？私、マナって名前なんですけど、もしかして覚えられてませんでした？」

あ……あの時かああ……！！

とっさにそう叫んだけど、今思うとめっちゃくちゃ恥ずかしい！！

デイン「あ、あれはだなあ……」

マナ「いいんです……私みたいな、ちんちくりん覚える価値ないですもんね……」

デイン「そういうんじゃないから……！……ちょ、涙目になってる！？」

マナ「……ぐすつ………そういえば私の名前全然呼んでくれませんでしたしね……」

デイン「いや……聞こう！オレの話を！」

……こうして、新しいパートナー『マナ』との初のミッションを終えた。

『死なせない』（後書き）

キャラクター設定（？）

フォレス・アーラニヤカ

> i 2 9 3 7 6 — 3 7 5 7 <

種族：ニューマン

年齢：42歳

身長：179cm

体重：67kg

髪色：黄緑

髪型：センター分けの長髪

詳細：マナの父親でギルドのマスター。特徴は敬語口調と常の微笑んでいるかのように細い目。この目はマナには遺伝しなかった（マナはパッチリお目め）過去の経歴は不明。目的も不明。マナとの親子関係の良し悪しも不明。とにかく謎の人物。

名前の由来は英語の「forest（森）」から。名字のアーラニヤカもフォレスが先につきました。アーラニヤカ、「森林書」とは秘密が書いてある経典のことなのです。謎の人物にはもってこいの名前ですね。

マイルーム

フォレス「いやあ、二人とも無事で何よりでしたよ」

ミッションから帰ってきて文句を言いにも管理者室に入ったオレとマナをフォレスが満面の笑みでを迎えた。
果てしなく殴りたい。

ディーン「おかしいだろ…その出迎え方は……。一発殴らせてくれない？ほんと」

かなりイライラが溜まっていたオレは手をコキコキと鳴らせた。

マナ「あの…暴力は…ちょっと…。お父さんも…空気読んでよ…」

マナが仲介に入った。

フォレス「…そうですね。確かに情報には大きな誤りがありました。本当に申し訳ございませんでした」

フォレスは深々と頭を下げた。

ディーン「……」

いきなりそんな風に謝られても困るってもんだ。

マナ「い、いいよ。そんな！頭上げてよ！」

フォレス「…ですが……」

ディーン「もういい。生きて帰って来れたんだ。なんも問題ねえさ。その代り、今後こういうことは無いようにしてくれ」

フォレス「…はい…」

ディーン「じゃあ、オレは行くわ…」

オレが部屋を出ようとした時、フォレスの横にいたエレーナが呼び止めた。

エレーナ「今回のミッションの報酬はこちらのカードで引き出すことができます。ご確認ください」

カードを手渡された。

ディーン「どこで引き出せばいいんだ？」

エレーナ「ロビーにあるギルド専用のATMでお引出してください。また、金額の確認だけならマイルームのビジフォンでも行えます。」

ディーン「じゃあ、オレのマイルームってどこ？」

エレーナ「7号室です。マナ、案内してあげて…」

マナ「う、うん！」

ディーン「じゃあ、頼むわ。それじゃあ出るぜ。」

ウィーン

フォレス「出ていきましたか…」

フォレスが頭を上げた。

エレナ「……やはり演技でしたか…」

フォレス「ええ、まあ無事でよかったとは本当に思っていましたよ？
いや、生きて帰ってきて貰わなければ困りますからね」

エレナ「何故、あの男に執着するのですか？」

フォレス「…あなたはヘルガ・ノイマンをご存じですよね？」

エレナ「ええ」

フォレス「彼女は自分の自我を保持したままSEEDフォームになりました。彼はそれと戦い勝利した数少ない人間なのですよ」

エレナ「！！…まさかあの計画に…」

フォレス「はい、我々の…切り札になりうるかもしれません」

………

〈7号室〉

ディーン「……広いな…」

マナ「そうですか？あ、これがエレナが言っていたビジフォンです」

何か違和感を感じた。

ディーン「マナって、エレナには、さん付けしないんだな。エレナもマナには慣れた感じで話しかけるし、誰にでもつけている感じがしたけど…」

マナ「えっ…まあ、エレナとは3歳の時から一緒だから…」

ディーン「ふうん…そういや、父親はフォレスだよな？母親は？」

マナ「…死んじやった……私を産んだときに…」

ディーン「悪いこと聞いたな…」

マナ「いいんです。特に思い出もないし、エレナがお母さんみたいにしてくれたから…」

ディーン「そうか…」

その後、マイルームについての説明をひととおり受けた。ビジフォンの機能が多すぎてよくわからなくなったが、まあ、また後で聞けばいいか…

マナ「じゃあ、私は自分の部屋に帰ります。」

ディーン「ああ、サンキューな」

ウィーン

まだ時間も寝るには早いし、マイシップでけっこう寝てしまった。
少しギルド内の散策に行くかな？

くギルド・ロビーく

ディーン「…げっ…」

ロビーに来ていきなり目に入ったのは、ミッション前に会ったデューマンの男性。名前は確か『ラグナ』。…その人が女性とキスをしていた。

ラグナ「んん…ふあ…」。…じゃあ、またな」

女性「うん！今度はもつとおいしいお店つれてってねえ」

ラグナ「おう！ニューデイズに新しい店できたらいいからよお、そこ連れてってやるよ！」

女性「楽しみ〜　じゃあまたね〜」

タッタッタ…

ラグナ「…ふう〜…。…おっ！ディーンじゃねえか！」

ゲゲツ…見つかった。名前もしっかり憶えられてる。

ディーン「…今の人は？」

ラグナ「ああ、ソフィーのことか？あいつはオレの3番目の彼女だよ。スタイルいいだろお？」

…ああ。こういう人だったのか。オレの中でラグナのイメージが確立された。

ディーン「…何人彼女いるんだ…？」

ラグナ「え〜っと、…リリ…ヘレン…ソフィー…マリー…アーニヤ…はこの前別れて…。…ルーシー、ロゼ…あと一人…名前なんだっけなあ…ん〜7人だ！」

ひどいぞ！このヒトひどいぞ！？一人名前忘れられてる娘いたぞ！ダメだ…この話題だと、殺意が溜まる一方だ。話題を変えよう。

話題…話題…そういえばこのヒト自分でギルドに入ったと聞いたな。

ディーン「話変わるが、ラグナはどうして自分からこのギルドに入ったんだ？」

ラグナ「変わりすぎだ〜ん〜、その話、フォレスに聞いたのか？」

ディーン「ああ」

ラグナ「そうか…。…まあアレだ！色男には色々と事情があるのさ」

ダメだ！…どの話題にしようともイラっとくる！

〃 〃

音楽が鳴り始めた。ラグナの端末がなっているようだ。

ラグナ「おっと、悪いね？…もしもし？ああルーシー！え？今？ああ空いてるよ？うん…うん…わかった！じゃあ今から向かうよ。それじゃあ…え？ああ！もちろん君だけを愛してるよ！…それじゃあ」

ピッ！

ラグナ「ルーシーから、デートの誘いだ…。じゃあディーン！また今度ゆつくり話そう！」

結構だ。…とは言わなかった。軽く会釈をするとラグナはどこかへ去って行った。

その後、一通りギルド内を回り、部屋に戻ろうとしていた時にあることに気付いた。

オレ…何号室だっけ？

たしか6…9のあたりの数字だと思った。どれだ？

ヤバイもう部屋の前だ。部屋の前に来てわかったが、8号室と9号

室は違う。 9号室は少し離れた場所にある。 8号室は鍵がかかっていた。

ディーン「…これはどっちかが空き部屋でどっちかがオレの部屋ってことだよな？」

なら間違っても問題ないか。 そう思ってオレは6号室に入った。

ウィーン

特に飾り気もない部屋。 まだ何もいじっていないオレの部屋かと思っただが、違った。

部屋の隅のベッドでマナが寝ていた。 疲れていたのだろう、さっきの服装のまんまだ。

ディーン「…コイツ…隣の部屋だったのか…。 …めんどろなことになるように寝てるうちにオレの部屋に戻るか…」

オレが部屋を出ようとする…。 …

マナ「…ディーンさん…」

ディーン「…！…！…」

起きたか！？

しかし、振り返ると寝ているままだった。

ディーン「なんだ…寝言か…」

マナ「…私…もつと、もつと…強く…なります…それで、今度は私が…ディーンさんを…」

ディーン「…ああ…」

オレはこの時、久々に少しだけ笑顔になったかもしれない

オレは7号室に戻った。

ビジフォンをなんとか起動させて今回の報酬をチェックした。

ディーン「!?!?!?!?!」

オレの口座の金額はなんと150万メセタだ。

100万は契約金としても、あのミッションが50万!?

たしかにオンマゴウグが出現するという予想外の出来事は起こったが、それで謝礼金として額が跳ね上がったのか? いや、それにしても高すぎだ。

やっぱり、何かあやしい…

ディーン「…まあ、いいか。とりあえず、明日も仕事するんだろうから寝るかな?」

オレはシャワーを浴びた後、すぐに寝た。

～翌日のロビー～

マナ「デインさん～！ミッション貰ってきました～！」

意気揚々と駆け寄ってきた。

デイン「…ああ！行くか…！」

オレ達はマイシップに乗り込んだ

マイルーム（後書き）

キャラクター設定（？）

エレーナ

種族：キャスト（女性）

年齢：？？

身長：163cm

体重：75kg（機械だし）

髪色：桜色

髪型：前髪有のポニーテール

詳細：ギルドでさまざまな事務をこなしている女性。基本いつも冷静なクールビューティー。フォレスに従順だが実際どう思っているかは不明。マナとはとても仲がよい。

名前の由来は、何故かロシアっぽい名前を付けたくてテキトーに検索したらでてきて『これでいこう』と思ってつけた。

クソガキ（前書き）

今回から新しい話です。楽しんでもらえると嬉しいです。感想、アドバイスなどあればお願いします。

クソガキ

第二章「温泉クライシス」

> i 2 9 5 7 1
— 3 7 5 7
<

「マイシップ」

ディーン「そういえば、ミッションの内容はなんなんだ？」

マナ「ハイ！モトウブの温泉が有名な村で、温泉が出なくなったと
のことで、私たちに原因の調査をしていただきたいとのことだそうです」

ディーン「なんだそりゃ？ギルドに頼むことか？村人でなんとかしろよ」

マナ「まあまあ…簡単そうな任務ですし、いいじゃないですか？」

ディーン「…それもそうだな…」

そういつている間にモトウブの大気圏に入ろうとしていた。

「モトウブ・雪原地方の村」

村は、雪国の温泉街な作りはしていたが、人影が少なかった。たまに人を見かけたが、みなどこかにケガをしているようだった。

しばらく村を歩いていると、筋肉ムキムキでかなりゴツくて、身長は2mを超えているビーストの老人（？）が歩み寄ってきた。この老人もケガをしているようで右手にギブスをしていた。

ゴツイ老人「ギルドの方々ですか？！よく御出でなさった！ーワシ

が村長のガラーです！」

コイツ村長かよ！イカツイわ！

マナ「こ、こんにちは！私はマナと言いますっ！…こつちが…」

ディーン「…ディーンだ…。…アンタ、なんでオレたちがギルドの者だとわかった？」

マナ「…あ！」

ガラー「ああ、それについては少しお話をさせていただきましょう。この村：『ガリヤーチィ』は以前は温泉の村として、外部からの観光客も多く、活気に溢れていました。しかし、一月ほど前から、なぜか温泉のお湯が出なくなったのです。温泉のない温泉の村に来たと思うものはいるわけがなく、観光客は激減し、ついには村の出入りは村人だけになってしまったので…ゆえに今このタイミングで外から入ってくる村人以外のものと言えば依頼をしたギルドの方々しか考えられないのです。旅人がこの村にたどり着いたこともありませんしな」

ディーン「なるほどな…」

だから、人影が少なかったのか。

じゃあ、みんなケガをしているのは？

マナ「あ、あの、ミッション内容の調査とはどのあたりで行えばいいんでしょうか？」

確かに。ここの源泉はどこにあるんだ？

ガラー「ふむ、調査はこの村の源泉は、この村をでて北西に1kmほど進んだところに地下へと続く洞窟の最深部にあるのです」

ん？あれ？

ガラー「おそらくその源泉に何かが起きたのだろつと思い、ワシを筆頭に村の男たちで調査に行つたのですが…」

ちよつ、ちよつと？ちよつとまで？

ガラー「道中には凶暴な原生物がおりまして、やつらには敵わず、次々とやつらに喰われていき、情けない話なのですが、生き残つた者はみな命からがら逃げてきたのですじゃ…」

こ、これつてもしかして…

ガラー「頼みます！村のために…いや喰われて死んでいった者たちのためにも…どうか！…どうか、この源泉に行き、原因を説明して、村を復興させてくださらぬか！？」

ハイ、こういう展開キター！

ディーン「（小声で）オイ、マナ、どういふことだよ？！めっちゃくちゃハードなミッションじゃねえかよ？あの爺さんの方が明らかにオレ達より強そうだぞ？」

マナ「（小声で）わ、私のせいですか！？…でい、ディーンさんだつてミッション内容に対して何も言わなかったじゃないですかあ！

それに大丈夫です！ディーンさん、村長さんより強いです！…たぶん」

ディーン「（小声で）たぶんかよ！つか、どーする？断れないぞ？コレ」

マナ「（小声で）どーするって…わ、私に振らないで下さいよお！」

小声で言い合っていると…

???「村長！！本当にこんなやつらにまかせちゃうんスカ！？」

若い男…いや、少年の声がした。

ガラー「ジャン！！ギルドの方々に失礼だぞ！！」

ジャン「ギルドの方々って…」

このビーストの少年、14～15歳くらいに見える。それがこちらを向いた。

そしてジロジロと見てくる。

マナ「な、なんですか…？」

ジャン「……」

一通り見つめ終わると、村長方に向き直った。

ジャン「こんなのどう見ても、大して実戦も積んでないシロウトと、
だらしのない生活を送ってるダメな大人じゃないツスカ!？」

ガラー「いい加減にしろ!!ギルドの方々…申し訳ない。ホラ!お
前も謝れ!」

マナ&ディーン「(…だいたいあってる)」

………

ガラー「では、お氣をつけて!!」

マナ&ディーン「あ、はい」

オレ達は結局断ることができず、村をでて北西に進んだ。

ホワイトアウトで周りがよく見えない状態だ。

マナ「どーするんですか?結局断れませんでしたよ?」

ディーン「しょうがない…村長には悪いが、適当なところまで行っ
たら引き返してオレ達には手が負えないって伝えよう…」

そうして『僕たちにもできませんでした ゴメンね 作戦』の算段
を考えていた時。

ビュッ!

ディーン「!?!」

後ろから、フォトンのナイフが飛んできた。

ディーン「クッ！！誰だ！？」

白いもやの中から一人のビーストが姿を現した。

ジャン「…流石にこの程度の攻撃には反応できるんスね…」

ディーン「てめっ…！さっきのクソガキ！！何しやがんだコラア…！！」

低いトーンで脅すように言ったが、このクソガキは全く悪びれていない様子はない。

ジャン「…フン！」

ディーン「んのがキ…！」

生意気な子供が大嫌いなオレは殴りかかりかけたが、マナ仲介に入った。

マナ「だ、ダメですよ！殴ったりしたら…！ホラ、君もなんでこんなことしたの？」

ジャン「年上ぶるのやめてくれないッスか？貧乳女！」

マナ「…ひ、貧にゆ…！？あ、ほ、ほら…コートを着てるから着痩してt…」

ジャン「黙るツス貧乳！」

マナ「……う……う……」

マナは涙目になり少し離れたところに歩いていき、何かを呟いている。

マナ「（ボソボソと）……そりゃさ……別に大きくないけどさ……そこまです小さくないよ？……」

そもそもさ……胸は関係なくない……？……それにさ……」

見事に撃沈していた。

ディーン「オイ……どーしてくれんだ？うちの相方が使い物にならなくなったじゃねえか？」

ジャン「俺は見たまんまを言ったまでツス！」

ディーン「……そんでお前……さっきなんでナイフを投げた？」

ジャン「あの程度もかわせないようではとてもこの依頼を完遂できとは思わなかったので試させてもらったツス！」

ディーン「試しただあ？何様だコラ？」

ジャン「フン！」

ディーン「（マジでしばらくか？）じゃあわかったろ？オレは大丈夫だ！オラ、とつとと帰れ！そして二度とツラ見せん……」

ジャン「そうはいかないッス！俺はまだアンタらを信用してないッス！だから、途中で逃げないか見張りながらついて行くッス！！」

デーン「はっ？何言ってるんだ？オイコラクソガキ？ついてくんじやねえよ！」

ジャン「なんスか？逃げる予定でもあったんスか？」

図星だったが、そんなことはもうどうでもよくなっていた。

オレの中の何かがブチ切れた。

デーン「上等だクソガキイイイ！！！！ついてこいやあああ！ただし、モンスターの餌になりかけても一切手えかさねえからなあ！！！！」

ジャン「もちろん構わないッスよ！」

デーン「よーし言っただな！？オラ！！」

オレはクソガキの腕を掴んだ。

ジャン「！！ちよっ！何するんスか？！」

デーン「オイ、マナア！！とっと仕事済ませんぞお！！！！」

オレはマナにダッシュで駆け寄り、防寒コートのフードを掴みよせ

た。

マナ「…どーせ私に色気なんt…って、えええ！？ちよ！どーしたんですか！？ディーンさん！？って、きゃああああああ」

オレは怒りにまかせ二人を掴んだまま、目的地の洞窟めざし猛ダッシュした。

ディーン「らあああああ！！！！」

ジャン「わあああああ！！！！」

マナ「きゃあああああ！！！！」

…久々にガチでキレた気がする。

つい此間までの抜け殻のようなオレでは考えられないことだ。

オレはいつの間にか「心」を失っていた…

それを今、少しずつ取り戻してきている気がする…。

クソガキ（後書き）

キャラクター設定（？）

ジャン・ブレイダー

種族：ビースト（男性）

年齢：14歳

身長：162cm

体重：55kg

髪色：ブラウン

髪型：ツンツンのウ二頭

詳細：口が悪いが村のことを第一に考える正義感の強いガキ。ただ、村での扱いはやんちゃボウズ。そのため子供扱いされるのが大嫌い。ダガー系の武器とシールドを使用。実戦経験は皆無で源泉に村人が向かった時も村でお留守番。村の少子化で同年代の友達に村に全然いないので村の大人たちの仲間に入りたがるが、子供扱いされている。名前の由来はジャンは勢いで、ブレイダーは「無礼だ」からw

ナイフ（前書き）

期末テストで結構間が空いてしまいました。

最初のほうはテスト前に書いたので、なんか変な部分があるかもしれないので、見つけたら教えてくれると嬉しいです。

ナイフ

みなさん、こんにちは。 マナです。

私は今、源泉のある洞をやや暴走気味のディーンさんと、かなり毒舌な村の少年のジャン君と3人で進んでいます。

そして、私の周りには『ル・ダツゴ』というタコのような原生生物の亡骸がたくさん転がっている。暴走気味なディーンさんが一人で倒したのです!!

ジャン「(…っ、強い…)」

ディーン「…なんだあ？お前の村の奴らはこんな雑魚も倒せなかったのか？ああ？」

さつきまで、めちゃくちゃ怒ってたのに、とっても嬉しそうだ。

ジャン「ち、違う！村長たちはこんな雑魚じゃなく、もっとでかくて気持ち悪い奴にやられたって言ってたッス!!」

ディーン「ほう…？もっとでかくて気持ち悪いやつね……。…まあ進めばわかるか…」

…そんな具合で、洞窟の最深部へと向かって行くのでした。

「源泉の洞窟 最深部エリア」

ディーン「…確かに厄介なのが、たくさんいるな…」

このエリアには『ル・ダッゴ』よりも大きい中型で2本の触手を持った浮遊している原生生物が至る所にいた。

マナ「…！！ディ、ディーンさん！なんですか？！この気持ち悪い生物はあ！？」

ディーン「『ダゴ・グジェリ』。属性を変化させたり、属性に応じたテクニクを使ってきたりと、色々めんどくさい奴だ…。気をつける！コイツはさっきの『ル・ダッゴ』を主食にしてるぞ！」

マナ「つまり、さっきのタコみたいなのも格段に強いってことですネ…。それが、こんなに…。…ジャン君、村の人たちがやられたのはこのモンスター？」

ジャン「…わかんないスけど、恐らく…」

ディーン「…流石にこの数をオレ一人で捌くのは厳しい…。オイ、クソガキ。お前は戦力として考えていいか？」

ジャン「何言ってるんスカ！？俺はあくまで監視なんで手は貸さないツスよ？自分の身は自分で守るんでそっちもお構いなく！」

ディーン「あゝわかった…。つか期待してなかった。…マナ！テクニクでサポートを頼む！」

マナ「あ、はい！」

ディーン「…よし、じゃあ行くか！」

ギューイイイイ！！！！

ディーンさんは左手に銃を構えチャージを始めた。

ディーン「オラア！！」

ディーンさんはまだこちらに気付いていない様子の『ダゴ・グジェリ』の群れ向かって行き、チャージショットを打ちこんだ。

ピギアア！！！！

一匹に命中して、他の『ダゴ・グジェリ』達がディーンさんに気付いて向かってきた。

ディーン「こっちにこいや！ノロマども！！」

『ダゴ・グジェリ』がディーンさんに注意を向けた時…

マナ「えい！！」

ドゥーン！！！！

ピギアア！！！！！！！！

私のお得意のラ・ゾンデが『ダゴ・グジェリ』たちにヒットした。

土属性だったようでかなり効いているみたいだったが、すぐにまた

浮遊しだして・・・

じゅうつうつうつ...!!!!

体から煙を出して変色した。

ディーン「マナ！やつら電気属性になった！今度は土属性のテクニックで頼む！」

マナ「え！？わ、私、まだゾンデ系のテクニックしか攻撃使えませんよ！？」

ディーン「はあ！？お前マジか！？」

そんなことを言い合っているうちに『ダゴ・グジェリ』達が触手に電気を集め始めた。

ピギヤアア！！！！

電気の矢のようなテクニック【ゾンデ】を一斉に放ってきた。しかも、さつき攻撃をしたせいで狙いは私だ！！

マナ「わ、私！？」

ディーン「やべえ！」

ディーンさんがこっちに向かおうとしたが、間に合わない！

マナ「（じ、自分でなんとかしないとっ！）はあゝゝゝえいつ！！」

少しためを入れて、私の前方に雷を放電させて電気の壁を作った。

バリバリバリバリ！！！！

ゾンデは電気の壁に飲み込まれた。

マナ「う…うまくいったあゝ」

ディーン「【サ・ゾンデ】か！やるじゃねえか！…じゃあオレも久々に使ってみるかな？」

ディーンさんは剣を構えて、その刀身フォトンを集中させた。

そして次の瞬間…

ザンツザンツザンツ…ザンツ！

マナ「えっ…？」

突然ディーンさんが消えて『ダゴ・グジェリ』たちの懷にいて4回斬りを決めた。

ディーン「ハァー！！！」

最後に一発斬撃を決めた。まるで、その場を嵐が通ったようだった。

その周囲にいる『ダゴ・グジェリ』は全て両断されていた。

斬撃はどれも速すぎて目に見えなかった。しかも、私の目に間違え

が無ければ直接刀身に触れていなかった『ダコ・ジュエリ』も斬られていた。

マナ「…い、今のなんですか…？触れてないのに斬れてましたけど…」

『ダゴ・グジエリ』の亡骸が転がっているところの中心にいるディーンさんに問いかけた。

ディーン「…ふう……。…ん？今の？フォトンアーツ【インフィニットストーム】。速過ぎる斬撃によって発生した旋風の刃がこいつらを斬ったんだ…。…久々にしては、よく斬れた方かな？」

「ジャンのいるところ」

ジャン「（な、なんスか？！今は！？ここまで風が…）」

ジャンはマナやディーンがいる場所から10mほど後方で戦いを見ていた。

ジャン「（あの青髪の男…強い過ぎるツス…それにあの女も…。…村の男総出で歯が立たなかった原生生物をたった二人で……。…凄い…凄すぎる！…！）」

ジャンが二人に見入っている時…

マナ「……ジャン君……！危ない……！後ろ……！」

ジャン「へっ？」

マナがジャンの後ろで今まさに触手をジャンに向けて伸ばしている
『ダゴ・グジェリ』に気付いて叫んだ。

ジャン「……！（いつの間に……く、喰われる……！）」

ヒューー！ザスッ！

何かが飛んできて『ダゴ・グジェリ』のコアのような部分に刺さった。

ピギヤアアアア……！！！！

急所なのだろうか？その一発だけで『ダゴ・グジェリ』は動かなくなった。

ジャン「……！へ？俺の……ナイフ？」

ディーン「おゝ当たった当たった……。……ナイフ一応返しておいたぞ？」

ジャン「なんで……？オレのことは助けないって言ってたじゃないッスか……！」

ディーン「別にオレはナイフを返したただけだぞ？そしたら偶然『ダゴ・グジェリ』の急所に当たっただけだ！」

照れくさそうに言った。

マナ「…ディーンさん、やっぱり優しいんですね」

ディーン「だから、違っって言うてんだろ!? 誰がこんなクソガキ
!?!」

マナ「フフフ」

ディーン「…クソ…。まあ、これで殲滅できただろ? さっさと原因
見つけて、仕事終わらそうぜ?」

マナ「そうですね」

ジャン「…………ディーン…さん…」

奥に進もうとした瞬間に、そう呼び止めた。

ディーン「あ? なんだよ?」

ジャン「……その……ありがとうございました!」

深々と頭を下げた。

ディーン「オイオイ、急になんだよ? 気持ち悪いな……。ほら、行
くぜ?」

ジャン「は、ハイ!」

3人は最深部の調査を始めた。

（１０分後）

マナ「あれ？ここ煙出てません？それにちよろちよろお湯も出てますよ？」

天井が崩れ落ちたのだろうか？岩が積もっている場所を指さして言った。

ディーン「…おゝよくやった！多分地震かなんかで天井が崩れて源泉をふさいだんだろう」

ジャン「…ここ数年、この地方で天井が崩れるほどの地震は起こってないッスよ？」

ディーン「は？じゃあどうして岩が…？それによく見たらこの辺、天井が崩れまくってないか？」

確かにこのように岩が積もっている場所がたくさんあった。

マナ「…！！ディーンさん！あっちにつ！」

指を刺した方向には『ダゴ・グジェリ』が速いペースで動いていた。

ディーン「…まだ残ってたか…」

剣を構えるが、『ダゴ・グジェリ』は全然違う方向に向かっていった。

ディーン「あ？なんだ？オレ等に気付いてないのか？」

次の瞬間…

ドォーン！！！！

天井が崩れて、そこから巨大な触手が伸びてきて『ダゴ・グジェリ』を捕まえて、天井にできた穴の中へ連れ去っていった。

マナ「な、なんですか！？アレエ！？」

ディーン「わからん！ただ、なんとなく見覚えがある……。…来るぞ！！」

ドォーン！！！！ガラガラガラ！！！！

さっきよりも天井が大きく崩れて、触手の主が落ちてきた。

ディーン「…ウソだろ？」

オオオオオオオ！！！！！！！！！！

タコのような6本の触手、薄れたピンク色のヌメヌメとしたボディ…

ディーン「『ル・ダツゴ』か！？こんな大型が存在するのか！？オ
ンマゴウグより全然でかくねえか！？突然変異にもほどがあるぞ！
？」

マナ「ま、まさか…この『ル・ダツゴ』が暴れたせいで天井が！？」

ジャン「じゃあ…コイツが村を…それに多分、村のみんなを食べた

のも……」

ディーン「多分ってか確実にコイツだな……。天井崩した犯人もな……」

ジャン「じゃあ、コイツを倒さないと、村は……」

ディーン「ああ、つまりそういうことだ！……お前は下がってろ、死ぬぞ？」

ジャン「……いえ、俺にもやらせてください！！村は……村は俺が救う！！！！」

ディーン「……ふっ……勝手にしやがれ！……それじゃあ、マナ、ジャン……来るぞ！！」

オオオオオオオオ！！！！！！！！！！

地下の洞窟にオオダコの方が轟いた。

ナイフ（後書き）

キャラクター設定（？）

ラグナ・ワイバーン

> i 2 9 3 7 2 — 3 7 5 7 <

種族：デューマン（男）

年齢：28歳

身長：182cm

体重：68kg

髪色：銀

髪型：ロン毛

詳細：モデル体型、イケメン、強い…と理想的な人物だが、女癖が最悪。デートは7人の彼女と毎日交代でしているため、仕事をする暇がほとんどないように思えるが、生活は普通にできていて、デートでもいつも奢っている猛者。ギルドに入った理由は今後明らかに・・。

名前の由来は、北欧神話の世界における終末の日「ラグナロク」から。ワイバーンは架空の生物のワイバーンから。

特異種

目の前には、大きさが普通のサイズの5倍くらいの『ル・ダッゴ』が触手をうねうねと動かしながらこちらの様子を覗っている。

1年ほど前から変異した新種の原生生物が姿を現していると聞いたが、それとは恐らく違ったものだろう。本来の『ル・ダッゴ』と違って、いるのは大きさだけで、その他に変化している部分は見当たらなかった。

自然に生まれてきた大きさの異なる個体だと考えられる。

その特異個体が触手の動きを止めた。

ディーン「……来るぞ！」

『ル・ダッゴ』が6本の触手のうち前の2本をオレ達のいるところに向けて振り下ろしてきた。

ドゴーン！！！！

体が大きい分動きが読みやすかったから、避けるのは容易かった。しかし、威力は凄まじいもので地面が抉れていた。

ディーン「なんつー威力だ……。オイ！二人とも無事か！？」

地面が抉れたせいで発生した土煙で二人の姿が見えない。

マナ「は、ハイ……！なんとか避けられました」

ジャン「お、同じく！」

デーン「よし、固まってる狙われやすい。やつを三方向から囲むぞ！」

マナ&ジャン「了解！」

オレ達は散開して『ル・ダッゴ』を囲むことに成功した。配置は『ル・ダッゴ』の右前方にオレ、左横にマナ、背後にジャンといった形だ。

移動中、オレは銃をチャージしながら自分の持ち場についた。

デーン「おし！攻めるぞ……はあ……！！！」

マナ「えい！」

ジャン「うりゃ！」

オレのチャージショット、マナの【ラ・ゾンデ】、ジャンのナイフの一撃は、タイミングこそ多少の誤差があったがすべてヒットした。

……が、

オオオオオオオ……！！！！！！

奇声を上げたがそれは断末魔ではなく、怒りの表れだった。

怒りにまかせて全ての触手を乱舞させた。

ドガン！！バコン！！！！

ディーン「グハッ！！」

マナ「きゃっ！！」

触手の届くちょうどいい範囲にいたオレとマナは触手で叩き飛ばされた。

ナイフで攻撃したジャンはまだ『ル・ダッゴ』の後頭部付近にいたので触手は当たらなかった。

ジャン「大丈夫っスか！！??」

ディーン「オレは大丈夫だ！直撃は避けた。それよりも……」

マナ「……うゝ……うう……」

マナがうめき声を上げながら倒れている。

ジャン「マナさん！！??」

ディーン「多分頭を打って気絶したんだろう……コイツをマナから遠ざけるぞ！！」

ダッダッダ！！！！

オレはわざと音を立てながら『ル・ダッゴ』の後ろ側に回り込んだ。

『ル・ダッゴ』はオレを追うように体を回転させた。

ディーン「銃撃はあんま効果がないみたいだったな……。…それなら…」

ダッ！…ザンッ！

走った勢いで、して剣の届く範囲のところまで飛んで頭に一太刀入れた。

しかし、予想以上に表面が硬く、浅くしか斬れていなかった。

ディーン「チッ…！」

ジャン「ディーンさん！！危ないッス…！」

ディーン「はっ！？」

次の瞬間、回り込むかのように伸びた触手がオレの体に巻きついた。

ディーン「ガッ…！」

締め付ける力が強く全身の骨が軋んだ。

ジャン「…！！ディーンさん…！！」

『ル・ダッゴ』はオレを巻きつけた触手をグルグルと回し、思いっきり投げた。

ディーン「ガアアアア！！！」

空気抵抗で空中分解するんじゃないかと言っくらの勢いで投げられた。そして…

バゴーツン！！！！

崩れた岩でできた山に激突した。

ディーン「ガハッ！！！！！」

かなり血を出したようだ。液体が体を伝っていく感じがした。

しかし、眼を開けてみると血は思ったほど出ていない。それに液体はとっても熱い。

ディーン「…そうか…ここは源泉に栓をしていた瓦礫の山か……」

液体は血ではなく、源泉のお湯だった。

ディーン「…って熱っ！…流石源泉だな……。……待てよ…。？」

くジャンのいるあたりく

ジャン「ぐわっ！！！」

1人で応戦していたジャンは攻撃することができず盾で攻撃を防ぐのが精いっぱいであった。その防御も限界で盾ごと吹っ飛ばされた。

ジャン「…くそっ…俺だけじゃ…」

『ル・ダッゴ』が触手を振り上げジャンに止めの一撃を加えようとした。

…しかし

ビューーン！！！！

ジャン「え！？」

フォトンの弾丸が『ル・ダッゴ』の触手にヒットした。『ル・ダッゴ』の注意は弾丸が飛んできた方に向いた。

ディーン「やっぱり普通の攻撃は効いてないみたいだな……オラ！タコ助！こっちに来いや！！」

銃を連射しながら挑発をすると『ル・ダッゴ』はディーンの方に向かって行った。

ジャン「…いったい何を考えて……」

『ル・ダッゴ』がディーンから3mほど離れたところに来た時、ディーンは連射をやめて、チャージを始めた。

そこに前の触手2本を伸ばして攻撃してきた。

ディーン「ていつ!!」

剣で触手の攻撃を弾いた。防御に集中すればそこまで難しいことはなかった。

ディーン「ほら?どーした?触手じゃオレは倒せないぜ?」

この挑発の言葉が通じたかのように『ル・ダッゴ』は高く飛び上がりディーンめがけてプレスをしようとした。

ディーン「…来たな?とうっ!」

これを瓦礫の山から下りてこれをかわした。そのかわりに『ル・ダッゴ』が瓦礫の山に乗っかる形になった。

ディーン「……ぶっ飛べ!!!」

めちやくちや溜めたチャージショットを放った。

ジャン「ダメッス!あいつに射撃は通らないッス!!」

しかし、弾丸は『ル・ダッゴ』ではなく、その下の瓦礫の部分に当たった。

ジャン「外した!？」

バゴーン!!!!!!!!!!

爆発が起きた。そのせいで瓦礫は吹き飛んだようだ。そして…

オオオオオオオオ！！！！！！

『ル・ダッゴ』が悲鳴を上げている。

ディーン「……へっ！うまくいったか…」

そう、瓦礫が爆破されたことで源泉に栓をしていたものがなくなり、熱湯が噴出したのだ。それが『ル・ダッゴ』に直撃。『ル・ダッゴ』は変色し始めた。

ディーン「どんなにデカくて硬い皮膚を持っていようが、結局は寒冷地に生息する熱耐性を持たない生物……いい茹で上がり具合じゃねえか？」

ディーンが剣を構える。

オオオオオオオオ！！！！！！

怒り狂った『ル・ダッゴ』が触手の渾身の一撃をディーンに叩きつけようとしてきた。

ジャン「危ない！！！」

ディーン「……タコ助が…動きがわかりやす過ぎなんだよ……」

ザシュ！！！！！！

『ル・ダッゴ』の触手を切断した。触手は地面に落ちた。

オオオオオオオオオオ！！！！！！

またも『ル・ダッゴ』の悲痛な叫びだ。

ジャン「！？なんで！？あんなに硬かったのに…」

ディーン「タコは熱処理すると刃物が通りやすくなるからな…こいつタコっぽいからもしかしたらと思って試したんだが、ビンゴのようだ…！」

そう言うと、剣を構え直して『ル・ダッゴ』に向かって走って行った。

インフィニットストームが吹き荒れた。

「ル・ダッゴ」はバラバラに吹き飛んだ。

[illegible]

ディーン「…ふう、終わった…と…」

デイーンが剣を収めた。

ジャン「……す……すげえ……」

ディーン「…オイ、ジャン！源泉も復活したし、オレ等の依頼は達成したってことでいいんだよね？」

そういえば元々はそういう依頼だった。

ジャン「い、一応、村に戻って温泉に通じたかどうか確認してもらう必要があるッス！」

ディーン「…そうだな…、まあどの道村にはもどるつもりだったからな…」

二人は帰路につこうとした。

ディーン「…なんか忘れてねえか？」

ジャン「…そういえば…？」

そう話していると…

マナ「…ふ、二人とも…ひ、酷いですう！」

マナが半泣きで追いかけてきた。

ディーン&ジャン「ああ！そうだ！マナだ！」

マナ「そ、そんなあゝホントに忘れてたんですかあゝ?!」

ディーン「すまんすまん…じゃあ帰ろうぜ？」

マナ「えっ！？もう置いてったことはスルーするんですか！？…それよりもあの『ル・ダッゴ』はどうしたんですか！？」

ジャン「ディーンさんが倒したツスよ？」

マナ「えっ！？ウソ！？スゴイです！…源泉は？」

ディーン「岩破壊して復活させたぞ？」

マナ「え〜っ、わ、私何もしてないじゃないですか!?!?...それより、二人ともなんだか仲良くなってませんか?」

ディーンとジャンがお互いの顔を見る。

ディーン「そうか?最初からこんな感じじゃなかったか?」

ジャン「ディーンさん、まじパネエッスよ!同行できて光栄ッス!」

マナ「……………」

そんなこんなで3人は洞窟を出て村に向かって行った。

特異種（後書き）

紹介するようなキャラクターが切れたので今回はキャラクター紹介はお休みです。この作品への質問などありましたら、どうぞ遠慮なく…

温泉

地下洞窟での巨大ル・ダッゴとの死闘を征したディーン一行はミッションが完了したかの確認…つまり無事温泉が復活したかの確認をしに村に戻った。

〽温泉の村〽

ガラー 「おおっ！ギルドの方々！よくぞやってくれました！見ての通りこの村の温泉は復活し始めましたぞ」

村長が一目散に駆け寄ってきた。巨体ゆえにドストスと音を立てながら走ってくるものだからスグに気が付いた。

ディーン 「ああ…無事ミッションは完了したみたいだな…」

ガラー 「ええ…本当になんとお礼を言ったらいいのか…」

ディーン 「まあ…仕事ですから…報酬をもらえればそれでいいですよ…」

ガラー 「そういうわけにはいきませぬ！貴方たちはこの村の英雄なのですぞ！？…そうだ！この村の温泉に入って行ってください！」

ディーン 「…あ、せっかくですが早く帰ってギルドに報告を…」

断ろうとした瞬間…

マナ 「ええ！？温泉！？いいんですかあゝ！？」

ガラー 「もちろんです！」

ディーン 「…オイ、マナ…」

マナ 「わあゝ！やったー！私、温泉って初めてですうー！」

ディーン 「…報告を…」

マナ 「きゃーっ！楽しみいゝ！」

大はしゃぎでディーンの声は全く聞こえていない。

ディーン 「……………」

ガラー 「では、あの赤い屋根の建物の温泉をご利用ください！
ワシが管理している温泉で、ご存じの通りお客はいらっしゃらない
ので貸切状態でございます。どうぞごゆっくり！」

マナ 「ディーンさん！私は先に行ってますね！…あっ！覗い
ちゃだめですよあ？」

そう言うときさま赤い屋根の建物に入っていた。
そして、ディーンは思っていた。

ディーン 「……………」（オレってどういう風に見られてんだ…？）
「

あっけにとられているディーンの10m後ろ…村の入口あたりでジ

ヤンがこそこそとしている。

ガラー 「ムツ!? ジャンか!? お前そこで何をしとる!?!」

こそこそすると逆に目立ってしまう。皮肉な話だが…

村長にこっちに来いと言われ渋々こちらに歩いてきた。

ガラー 「服もボロボロだし、怪我もしてるではないか!?!…まさかギルドの方々について行ったのか!?!」

この村長とても勘がいい。

ジャンが何か訴えるようなまなざしでディーンを見ている。

ディーン 「……あ、いやっ、別についてきた感じはなかったですよ?」

ガラー 「そうなのですか!?!…ジャンよ?ではその怪我はどうしたんだ?」

ジャン 「…ちよっとね…」

ガラー 「なんだ言えないことなのか?!また、悪さをしたのか!?!」

ジャン 「ち、違っ…」

ガラー 「問答無用じゃあ!?!」

村長の拳がジャンのミゾオチに入った。きれいに入ったらしくジャンは気絶してそのまま村長に担がれた。

ガラー 「ワシはこいつと少々話をしに行つてまいります…。どうぞ、ご自由に温泉に入ってください」

そう言つてジャンを担いだままスタスタと去つていく村長の姿をディーンは何も言わずに見送つた。

〈温泉・男湯〉

かなり広々とした空間に一人ポツンとディーンはお湯に浸かつていた。貸切とは贅沢なもので自然の音しか聞こえてこない。ディーンはこの静かな空間が好きだったりした。

ディーン 「（やっぱ入つといてよかったな…）」

そう一人でゆつたりしていると垣根の向こうから声がした。

マナ 「ディーンさん？入ってますかあ？」

垣根越しの女子の声…とても趣があるものである。

ディーン 「ああ…」

マナ 「凄いですね！温泉つて！私、こんな広いお風呂初めて入りました！」

ディーン 「親父やエレナには連れて来てもらったことは無いの

か？」

マナ 「お父さんは仕事が忙しくて…エレーナも私を連れてどこかに行く余裕は無かったんで す…。…だから、外に出たことも全然なかったんです…」

ディーン 「……そうだったのか…」

マナ 「で、でもですね！お父さんも私のために一生懸命働いてくれるし、エレーナも優しくしてくれたから全然よかったんです！ただ…仕事でも、どんなに怖い生き物と戦うことになっても…初めてのがいっぱいなこの仕事が私…好きです…」

…やっぱりどこかヴィヴィアンに似ている。よくわからないが、雰囲気がとても似ている。…そんなことを思いながらディーンはマナの話の聞いていた。

マナ 「そういえば、ディーンさんってギルドに来る前は何をしていたんですか？」

そう言えばマナはディーンが元ガーディアンズと言うことをまだ知らないのだった。

ディーンは話した。自分がガーディアンズだった時のこと、H I V Eでのこと、四年間のニート生活のこと、そして…ヴィヴィアンのこと…。そして話しているうちに気が付いた。自分が話している内容によって表情や感情が変化していることに…。心を自分の中に感じること…

.....

・・・

ディーン 「…だいぶ長話になっちまったな…。…のぼせる前にでるかな…。…お前もほどほどにしとけよ?」

しかし、これに対するマナの返事がない…

ディーン 「?…オーイ?どうしたあ?」

マナ 「…ふにやゝゝ…頭があゝ…ブクブク…」

ディーン 「おまつ!のぼせたのか!?大丈夫か!?沈んでってねえか!?…ちよっ…誰かああ あ!…!!…!!」

大慌てで風呂を出て人を呼びに行ったとき…

ゝ数日後・ギルドゝ

なにやらロビーが騒がしい。誰かが演説のようなことをしている。

ディーン 「なんだあ?ありゃ?」

そこへマナが駆け寄ってきた。

マナ 「大変です!ディーンさん!来てください!」

ディーン 「えっ?…ちよっ?…どーした?」

マナに引つ張られながら演説をしている人物の前まで来た。

??? 「自分！今日からこのメンバーになったツス！！みなさん！よろしくお願いしま　　ッス！」

ディーン 「お…お前はっ・・・！」

聞き覚えがある口調、ツンツンの茶髪、歪みのない真っ直ぐな瞳…

ディーン 「ジャン！！」

ジャン 「ウス！ディーンさん！こんちわッス！」

ディーン 「いやいや、なんでお前ここにいるわけよ？」

ジャン 「自分、ディーンさんやマナさんの戦いにあこがれてここに入ることに決めたツス！研修と訓練があるからすぐには無理ッスが、いつかお仕事手伝わせてほしいッス！！」

意気揚々といった言葉がぴったりであった。

ディーンは啞然とした顔から少し笑い、そのまま満面の笑みになり、ジャンの頭に手を置いた…

ディーン 「オウ！！頑張れよ！！」

温泉（後書き）

『温泉の村 編』 完結です（なんだそりゃ?!
ゲームで言う2章的なポジションの話でした。

次回から新しい章です。あの男を活躍させる予定です!
ぜひとも読んでください!

あと出来たら、感想書いたり、評価していただけるとほんとにうれしいです!

それではまた!

キャラクター設定もたぶん復活します。

内部告発（前書き）

先日ウィキを見ていたら、PSUの登場人物の中にマナというキャラがいてびっくり。もうこんな悲劇が起こらないようにしたい。

今回から新章です！

悲鳴が実験室中に響きわたっている。

拘束されて何やら怪しい薬品を投与されている者や、檻にいられている者がいる他、室内には液体に満たされたカプセルがいくつも設置されていてその中にはヒトが入れられている。

奴隷 「頼む！！ここから出してくれーっ！！」

??? 「…クツクツク…それはできないのだよ…」

檻の中で叫ぶ奴隷の近くにヒューマンの男が近づいて来た。とても高価そうなコートを着ている。

??? 「君たちは、私が奴隷商から高値で購入したからね……。やはり…人体実験が新しいものを作るためには一番効率が良いからね…是非ともわが社の発展の糧となってくれたまえ…」

奴隷 「ふざけんなーっ！！あの商人も…お前も、ヒトをなんだと思っただがやる！？」

??? 「ヒト？…商品に人権があるとでも…？ …オイッ！13番に投与した筋肉増強剤はどうだ？」

研究員 「人体への負担が大きすぎました…筋肉が破裂しました…」

??? 「そうか…。では、成分を調整して14番に投与しろ…」

研究員 「了解です」

狂気に満ちた実験室の隅で一人の研究員がこの光景に絶句している。
気の弱そうな男である。

男 「……………うつ……………おえっ……………」

「実験の日から数日後・ギルドのロビー」

温泉村でのミッションから2週間が過ぎたため、ディーンもかなり
ギルドに慣れてきていた。

ディーン 「あゝ…眠い……………」

あたかも今さつき起きたの如く眠そうにロビーに入ってきた。ちな
みにもう10時を過ぎている。

マナ 「あ、ディーンさん！おはようございます！」

ディーン 「おゝ…おはよう…。…それよりロビーがまた騒がしい
けど、どうした？ジャンがまた演説してんのか？」

マナ 「わからないです。ちなみにジャン君は今朝から訓練に
出てますよ。」

ディーン 「アイツも熱心だなあ…とりあえず言ってみるか…」

くロビー・受付く

なにやらエレナとクライアントらしき男性がもめているようだ。

エレナ 「…ですから当ギルドではそのような違法調査の依頼は受け付けていません。」

男 「だから、違法なのは会社のほうなんですって…！」

この男、実験室で絶句していた研究員である。

ディーン 「何もめてんだ？」

エレナ 「ディーン様。おはようございます…。こちらの方が『コーライル』に潜入調査をしてほしいとおっしゃるのですが…」

男 「あの会社は地下でいかれた人体実験をしてるんです！だから、その証拠を突き止めてほしいんです！」

ディーン 「…『コーライル』…って製薬会社の？確かに最近新製品をよく出してるけど…流石にそれはないだろ？」

男 「僕、この前実験室に連れて行かれて実験を手伝わされたんですよ…とても普通じゃなくて最後まで続けられませんでしたけど…」

デーン 「内部告発ってことか…てかここよりもガーディアンズとかに申し出た方がいいんじゃないか？」

男 「申し出ましたよ…。でも…証拠不十分で調査してくれませんでした…。」

デーン 「だからつってもなあ…」

エレナ 「パルムに本社があるのでは同盟軍に行かれては？」

男 「そんなあ…」

男が下を向いて諦めかけた瞬間…

ラグナ 「オイオイ？お二人さん、冷たいんじゃないか？」

『女垂らし』ことラグナが話に入ってきた。

デーン 「…ゲツ…」

エレナ 「ラグナ様…」

ラグナ 「話はさつきから聞いてたぜえ…。『コーライル』ねえ…ってえと、ケルビン・グラス代表だろ？」

男 「え…ハイ。グラス代表が実験を取り仕切っています…」

ラグナ 「やっぱりな…あのオッサン前から怪しいとは思ってたんだ…」

ディーン 「？」

少しこの言葉に違和感を感じた。

ラグナ 「よし！お前さん？名前はなんだ？」

男 「…名前？僕ですか？コルン・マルチツールと申します」

ラグナ 「よし！コルン！俺はラグナだ！お前の依頼は俺が受けよう！」

コルン 「えっ！？」

ディーン 「はっ！？」

エレナ 「ええ！？」

どこか覚えのあるやりとりの後、ラグナはそう切り出した。

3人とも突然のことに唖然としていて口が開いたままだったが、エレナが初めに口を動かした。

エレナ 「ちょ…ちょっと待ってください。ギルドでは公式に犯罪組織と扱われている団体以外への潜入調査は禁止されています！」

ラグナ 「じゃあ俺が個人的に依頼を受けたことにするさ！一応フリーの傭兵だし…」

エレナ 「ですが…」

渋るエレナにラグナは肩をかけた。

ラグナ 「もうゝエレーナちゃんってば心配症だなあ…そんなに俺が好き？」

エレーナ 「ふざけないでください！企業を敵に回すんですよ？ただじゃすみませんよ？」

ラグナ 「大丈夫だって！いざって時のためにコイツ連れてくから」

ラグナの指さした先にはディーンがいた。

ディーン 「……………はっ？…オレ…！？」

ラグナがディーンの近くに寄り、耳元でささやいた。

ラグナ 「…昨日…飲んだよな？そんで全部おこったよな？」

ディーン 「……………昨日って…」

そう、ディーンが今日こんな遅起きなのは昨日の夜、ラグナに強引に酒に誘われて、遅くまで飲んでいたからである。強引とはいえ、全額ラグナがもってくれたのだから断りづらい…。

ラグナ 「…トータル10万メセタ…」

ディーン 「…わ、わかった…（高い酒ばっか自分で頼んだくせに…）」

エレーナ 「ちょ…ちょっとディーン様まで！？」

ラグナ 「そいじゃあ作戦会議だ！ディーン！コルン！俺の部屋に集合」

二人を引き連れてロビーを去って行った。ラグナは満面の笑み、ディーンは納得のいっていない顔、コルンはまだ呆気にとられたような表情をしていた。

エレナ 「ああっ！待ってください！！」

マナ 「エレナ？どうしたの？男性陣3人、どっか言っちゃったけど？」

エレナの珍しく大きな声に気付いて、マナが近寄ってきた。

エレナ 「ああ、マナ…ううん…なんでもないの…」

大きなため息をついた。

内部告発（後書き）

キャラクター設定（？）

コロン・マルチール

種族：ニューマン（男性）

年齢：25

身長：168cm

体重：55kg

髪色：黒

髪型：特に変哲のない短髪

詳細：製薬会社『コーライル』の入社2年目の社員。気弱だが正義感が強い。理系に強い人物だったのである日突然実験室に呼ばれた。ただのクライアント。今後の出番はいかに？

実力（前書き）

この章はかなり長くなりそうです。そしてこの章ではディーンが空気がもしれないです…

実力

「深夜・『コーライル』本社・排気通路」

ディーンとラグナは一列になってほふく前進で排気通路を進んでいる。

ディーン 「…オイ……」

ラグナ 「んあ？どーしたよ？」

ディーン 「ベタ過ぎるだろ？これ？」

確かに隠密調査ではよくあるパターンである。

ラグナ 「…ディーンよお…いい言葉を教えてやる。」

ディーン 「は？」

ラグナ 「ベタがB e t t e r…なんつってな！ナハハハハ！」

おやじだ…おやじがここにいる…。自分の前で笑いながらほふく前進しているラグナについていきながらそう思った。

ディーン 「つーか、いいのか？そんな声出して笑ってて？」

ラグナ 「ん？大丈夫だろ？コルンによると実験室までの道は入り組んでたどり着くことができないだけで警備は案外手薄らしいから……」

ディーン 「……。…質問が二つある」

ラグナ 「なんだ？」

顔を直接合わせてはいないがディーンの声の調子で真剣な顔をして
いることが読み取れた。

ディーン 「どうしてコルンをそこまで信じられるんだ？」

ラグナ 「んゝ…アイツを信じたというか、アイツの訴えで俺の
考えが確信に変わったって感じかな？」

ディーン 「どういうことだ？」

ラグナ 「とある事情で俺はこの代表、ケルビン・グラスとい
う人物を知っていてな。このオッサン、なかなかの曲者でヤバイ組
織とつながりがあるってある一部のヒトたちの間じゃあ有名な噂に
なってるよお…そんで俺が個人的に調べたら…」

ディーン 「ちょっと待ってくれ！」

ラグナの話を遮るような鋭い声でディーンが話を止めた。

ディーン 「…アンタ何者なんだ…？」

ラグナ 「俺が何者って？…ご存じの通りただの女好きさあ」

いつもの調子でペースを崩してくる。顔が見えなくてもどんな表情
をしているかはすぐにわかった。

ディーン 「真面目に聞いてるんだ…」

ラグナ 「…へいへい…だが、今話すには色々と面倒だ。俺のことについては今度話してやるよ…。で、もう一つの質問は？今は違うだろ？」

先送りにされて少々納得がいかない顔していたディーンだったが、二つ目の質問をした。

ディーン 「…なんでオレを同行させたんだ？」

ラグナ 「…フフフ…。お前…最近自分の顔、鏡で見たか？」

ディーン 「…？毎朝、顔を洗う時に見てるが？」

ラグナ 「ハッハッハ！やっぱ毎日見ると気付かないもんなのかねえ？」

ディーン 「オイ！どういうことだ？」

ラグナ 「お前…顔が変わったんだよ…。初めてギルドで会った時は心ここにあらずな顔をしてたが、マナちゃん達と依頼をこなしてく度にいい顔つきになっていくからよお…俺もお協力したいワケよ…お前の心を取り戻すのに…」

いつものノリとは違いとても重く、しかし優しい感じがした。

予想外の理由にディーンは何も言葉が出なかった。

ラグナ 「…まあ、それもあるけど、ぶっちゃけエレナちゃん
の困った顔が見たかったってのもあるんだよな！」

固まったデインの空気をほぐすためか本音かはわからないがいつもの軽いテイションでそう加えた。

どちらにせよディーンもいつもの調子に戻ることができた。

数分後

ラグナ 「おっ？…あそこ下から光が漏れてるぞ？…こんな時間
に…コイツあーいよいよ怪しいな…」

そう言っ てラグナが光の漏れているところまで行き、 下の様子を見ようとした瞬間…

ぎゃ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああ！！！！

実験体にされているヒトが叫び声を上げた。

「デーン　なんだ！？今の叫び声！ラグナ！下で何が起こってる！？」

ラグナ 「オイオイ……こりゃマジでビンゴだわ……」

ディーン 「……それって……どうする？映像を撮ってガーディアンズに報告するか！？」

ラグナ 「……そんなことをしてる余裕はねえ……実験体にされてる人が助けられねえ……」

ディーン 「助けられねえって……まさかつ……！？」

ディーンは何か言いかけたがその前にラグナは自分の武器のナノトランスを解除して自分たちの真下を切り裂いた。

ディーン 「うお……！！……いだっ！」

ディーンは実験室に腹から落ちたが、ラグナは無事着地していた。

堂々と両手に剣を構えている。

研究員 A 「なっ！なんだお前たち！？」

研究員 B 「ガーディアンズの犬か！？」

ラグナ 「ああ？ちげえよ……でも、現行犯逮捕なら一般人でもできるよなあ？……おめえら全員しょっ引いてやんよ！！」

剣を前に突き出しての決め台詞。……横でこけているディーンは思わず見入ってしまった。

ケルビン 「…その二人を始末しろ!!」

研究員達 「ラジャ…!!」

研究員達が銃を取り出して二人に向ける。全員で12人だ。ケルビンは実験室を出て行った。

ラグナ 「あつ、てめっ!逃げんなコラ!!」

ラグナが前に体を動かした時、一番近くにいた研究員が引き金を引いた。

フォトンの弾丸がラグナに向かって射出された。

ディーン 「危ない!!」

ラグナ 「ああ?」

ビュン!!

弾丸はラグナではなく壁に命中した。

しかし、ラグナのいる場所はさっきまでのままだ。

ではなぜ弾丸が当たらなかったのか?

ラグナ 「アブネエ真似してくれんじゃんよ？」

ラグナの声は下の方から聞こえる。

そう、ラグナは頭が床に着くくらい体を反ってかわしていた。そしてそのキツそうな体制をキープしている。

ディーン 「！？（体やわらかっ！）」

ラグナ 「そいじゃあ……………行くぜ？」

反った体を一気に反り返してその勢いで一気に研究員との間合いを詰め、その勢いを二本の剣の動きにも生かして外側から挟むように前方にいた4人の研究員に横斬りを入れた。

予測不能の動きに研究員は誰一人反応できなかった。

研究員 「ぐへっつ！！！！」

4人ともその場に倒れた。しかし、血は出ていない。

ラグナ 「スタンモードだ…安心しな…。ディーン！お前はケルビンを追え！」

ディーン 「あ、ああ！」

研究員 「い、行かせるな！！」

ケルビンを追って扉に向かったディーンに銃を向ける。

が、その銃は両断された。

研究員 「なっ!？」

ラグナが銃を構えた研究員の真横まで間合いを詰めていた。

ラグナ 「お前たちの相手は俺だ?…俺相手にこの程度の間合いは意味ねえぜ?」

そう言うと研究員を斬り捨てた。

ディーンは無事、扉を開け実験室を出た。

ラグナ 「さあて…覚悟はできたか…?」

実力（後書き）

こいつがいたのを忘れてた。
キャラクター設定（？）

ガラー村長

種族：ビースト（男）

年齢：75

身長：210cm

体重：102kg

髪色：茶色

髪型：オールバック

詳細：温泉村の村長さん。見た目はNARUTOの雷影をイメージしていただければOKです。とっても元気なおじいちゃんです。ただ、武器を使うことが嫌いで、体術のみに頼る戦闘なので、洞窟の生物には負けちゃいました。
こんなもんかな？

正体（前書き）

元々は前回の話と今回の話で一つの話にする予定だったので更新の間隔が短くなっています。

何か誤字脱字などあれば指摘していただけるとありがたいです。

正体

『コーライル』地下実験用広場

さっきの狭い実験室とは違い、広々とした何もない空間が広がっている。壁はいくつもの降りたシャッターになっている。体育館のような作りで部屋を囲むように高い通路がある。

明かりは天井に薄暗い電灯があるだけで、薄暗くなっている。

デイン 「…フォレスも言っていたけど、ラグナが本当に強いとは…。あの強さだったらすぐにカタが付くだろう…」 ……ケルビンッ！どこだ！？」

薄暗い空間を見回すが、姿は見えない…。しかし…

ケルビン 「クッククク…来たのは君の方だったか…」

なんらかの装置を使っているのか部屋全体からケルビンの声が聞こえる。

ケルビン 「…どこの回し者かは後で調べさせてもらうとして、このことを知られてしまったからには生かして帰すつもりはないよ…」

ガーーーーーッ

壁のシャッターが開く音がする。そしてそこからヒト型の何かがたくさん出てくる。

ディーン 「なんだ…？」

そのヒト型はディーンに近づいてきて、両手に持っているナイフのような武器でディーンに攻撃をしかける。

ディーン 「うおっと…！」

攻撃をかわして、目を凝らしてそのヒト型をよく見る。

ディーン 「『シノワビート』か…」

『シノワビート』…近距離戦闘用に作られたヒト型の機械兵器。両手のナイフのような武器で攻撃する他、火炎系のテクニクの使用、テレポートのようなことも行つ。それらが20機ほどでディーンを囲んでいる。

ケルビン 「…その男を…殺せ…！」

ケルビンの号令と共にすべてのシノワビートがディーンに襲い掛かる。

ディーン 「（この数じゃリーチの短いセイバー系やハンドガンはやりづらいな…。…ヴィヴィアン…久々に使わせてもらっぜ…？）」

ディーンはナトランサーから両剣を取り出した。ディーンには似合わない可憐なデザインのその両剣の名は『ヴィヴィアン』。かつてのパートナー・ヴィヴィアンの形見である。

ディーン 「こいよ…ガラクタ軍団…！！」

ブウン！ブウン！ズバツ！

踊るように両剣を振り回し、襲い掛かってくるシノワビートを一機、また一機と両断していく。

ケルビン 「な…なんという…」

シノワビートはあっという間に半数ほどになってしまった。

ディーン 「なんだ？もうかかってこないのか…？」

残ったシノワビートはディーンから距離をとり、何かを念じるように手を合わせた。

ケルビン 「クッククク……消し炭になるがいい！！！」

ディーンを囲む形で陣を組んだシノワビート達から一斉に火炎が放射された。

ディーン 「…逃げ場無しか…。…それなら…」

両剣ヴィヴィアンのフォトン出力が音を立てて上昇した。

そして一方向の炎に向かって両剣と体を回転させながらダイブした。

両剣に触れる前に炎は回転によって生じた凄まじい風によって掻き消された。そのまま突っ込んだ先にいた三機のシノワビートを撃破した。

ディーン 「…これで陣からは抜け出したな…」

ケルビン 「な、何だ今のは!？」

ディーン 「両剣のフォトンアーツ・『トルネードダンス』。…体軀を竜巻のように回転させ、身体ごと前方に突っ込む技だ…。さてと…… 囲まれてなきやこつちのもんだ!…行くぞ!」

直後、近くにいる順にシノワビートを両断していった。ものの十数秒で残り7機だったシノワビートは全滅した。

ディーン 「オラ!おっさん!こんなガラクタじゃあオレは殺せねえ…諦めて出てこい!」

ケルビン 「…ククツ…クハハハハ!!!」

ディーン 「…どした?おかしくなったか？」

ケルビン 「何を勝った気にいるんだ?…出てこい!」

まだ開いてなかったシャッターが開き中から大型の機械が数機出てきた。

ディーン 「…『シノワ・ヒドキ』か…厄介だな…」

『シノワ・ヒドキ』…元々はグラール教団が開発した大型ガード・マシナリー。機動力、攻撃力が優れており両手についているブレードはあらゆるものを両断する。

ディーン 「(倒せない相手じゃないが、この数とやり合うのは少し分が悪いな…どうするか…?)」

シノワ・ヒドキを見つめながらそう考えていると、実験室と繋がっている扉が開いた。

ラグナ 「デイン無事かぁ！…って、こりゃまたデッカイのがたくさんいたもんだ」

呑気にやってきたラグナが頭を掻きながらシノワ・ヒドキを見上げている。

ケルビン 「ほう…君も来たのか？…やはりうちのスタッフでは力不足か…」

ラグナ 「おっと、どこから声出してんだ？…まあいいや…それよりもケルビン！…俺の顔覚えてねえのか？」

ケルビン 「はて？…私の知り合いに眼帯を掛けている者はいなかったと思うが？」

ラグナ 「そうかい…。なら、いいや。まずはこの物騒な機械を片付けるとするかな？」

そういうと剣をナトランスし、そのかわりに体中から青く光る炎のようなものを出し始めた。そしてそれらはラグナの右腕に集まっていく。

その青い光に反応したのかシノワ・ヒドキ達もラグナの方に近づく。

ラグナ 「デイン…ちょい危ないかしんねえから俺の後ろに来てくれ」

ディーン 「あ…ああ」

とりあえず走ってラグナの後ろに着く。ディーンが後ろに来るとラグナは腕を振り上げた。

ケルビン 「???…何をする気が知らないが、そのシノワ・ヒドキ達は改造を施されたもので本来のシノワ・ヒドキの能力を大きく上まわ…」

ケルビンが言い終わる前にラグナは腕を振り下ろした。腕に集まっていた青い光は巨大な剣のような形になり、前方20mほどにいたシノワ・ヒドキ達を粉々に粉碎した。

ケルビン 「なっ!？」

ラグナ 「オラッもう一発だ!」

今度は腕を横に薙ぎ払った。青い光の剣がシノワ・ヒドキに当たるたびに爆発が起こる。

改造シノワ・ヒドキ軍団は、ラグナのたった二発攻撃で全滅した。

ラグナの青い光のおかげで、この部屋全体を見渡すことができたが、ケルビンはどこにもいなかった。

ケルビン 「…な…何をした…?」

ラグナ 「なんだ、知らねえのか?俺等デューマンの固有能力『インフィニティ・ブラスト』。よくわかんねえけど、体内に蓄積したフォトンを武器化して体と融合してこんな感じでブッぱなす技だ。」

青い光でラグナ自身の顔も照らされている。

ケルビン 「…そ、その顔…」

ラグナ 「なんだ？…やつと思いついたのか？」

ケルビン 「…な、なぜアナタが…バカな！…どこでバレたんだ… ブツンッ…」

通信の切れるような音がした後、ケルビンの声は全くしなくなった。

ディーン 「オイ！出てこい！」

ラグナ 「ああ…多分ここにはもういねえよ。あそこ見てみる」

部屋の天井の四隅に設置されている4台カメラを指さした。

ディーン 「…！」

ラグナ 「…多分赤外線カメラだ。これで逃げながら俺等の様子を見てマイクかなんかで話してたんだろうな…。…やつあ多分もう会社の外だろうな」

ディーン 「なんで、そうだと言いつけるんだ？」

ラグナ 「お前はホント質問攻めだなあ」

また、ラグナは頭を掻いた。

ラグナ 「…広くて暗い部屋に逃げたこと、装置での会話、あのカメラ、それにあのオッサンの性格を考えると妥当な結論だと言えるワケよ…。それより、ガーディアンズへの連絡と閉じ込められている人を保護しねえとな…」

その後、駆け付けたガーディアンズによって実験をしていた研究員は全員逮捕され、実験体にされていた人は全員保護され、すでに何らかの実験に使われた人は病院に運ばれた。
しかし、首謀者のケルビン・グラスだけは発見されず、指名手配となった。

『コーライル』には親会社である『ヴィーヴル社』から新しい代表が派遣されることになり、無関係の社員は路頭に迷うことはなかった。

このことは翌日、ニュースで大きく取り扱われた。無論ディーンとラグナのことも紹介された。

『コーライル』親会社『ヴィーヴル社』・社長室

デスクに座っている男…つまり『ヴィーヴル社』の社長である。とても若く20代半ばくらいである。その人物がニュースで取り扱われているディーンとラグナの姿を見ている。

??? 「そうか……こんなところにいたのか…」

その男はテレビの電源を切った。

〽数日後・ギルド〽

ディーン、マナがロビーでテレビを見ている。

チャーチャーチャー

ニュースが始まった。

ハル 「グラールチャンネル5！ヘッドラインニュース！今日のニュースをピックアップ〜！！」

マナ 「わぁ〜…やっぱりハルさんスタイルいいなあ…」

ディーン 「そうか？…エレーナの方がよくねえか？」

そう言い切った瞬間、ディーンは自分の背後に凄まじい殺気を感じた。

エレーナ 「ディーン様？セクハラですよ？」

エレーナが不気味な笑顔で後ろに立っていた。顔は笑っているが明らかに怒っている。ラグナと勝手にミッションに出た次の日からずっとこんな調子である。

ディーン 「す、すまん…！別にそういった感情は…。…そ、それよりコレ『コーライル』についてじゃね？」

ハル 「先日、『コーライル』での人体実験について親会社『ヴィーヴル社』の社長、ローク・ワイバーン氏が会見を開きました。その様子をご覧ください」

ディーン 「（ワイバーン？どつかで聞いたような…）」

会見の映像が流された。『コーライル』の今後の処分についてや被害者へのケア、無関係の社員への対応についての発表だった。

マナ 「アレ？なんかこの社長さん、ラグナさんに似てないですか？」

ディーン 「…そーいえば…」

種族はヒューマンのようだが顔つきが似ている。髪も短髪だがラグナと同じ銀髪。ただ、表情がラグナと比べて硬く、とても真面目そうで、そういった面では全く似ていない。

ディーン 「つか、ラグナは？今日まだ見てないけど…」

マナ 「ラグナさんならまだ寝てるんじゃないですか？」

ディーン 「マジで？もう10時過ぎてるけど？」

マナ 「ディーンさんも人のこと言えないですよ…起きてきたのさっきだったですし…」

噂をするとラグナが眠そうに起きてきた。

ラグナ 「ねみいなあオイ…」

マナ 「あ、噂をすれば…」

ラグナ 「おう、マナちゃんおはよう！今日もかわいいねえ」

マナ 「もうラグナさんったら」

マナは照れてニヤニヤになる。

ラグナ 「おうエレーナちゃんもお 今日も綺麗だね…」

エレーナの不気味な笑顔を見てラグナは固まった。

ラグナ 「アハ…ハハハ…。おう、ディーンもいたか。そうだが、せつかくみんないるワケだから俺のことでも話すかな？」

ディーン 「（なんでこのタイミングに？）」

マナ 「俺のこと…？」

ラグナが話始めようとする瞬間…

??? 「すみません！こちらのギルドにラグナ・ワイバーンという方はいらっしゃいますか？」

1人の男がギルドに入ってきた。

エレーナ 「え、ええ…。ラグナ様ならこちらに…。って、ええ！

「？」

マナ 「ウソ!？」

ディーン 「!？」

ラグナ 「あちゃー…もう来ちゃったか」

訪ねてきた男は、今テレビで会見の映像に出ていた『ヴィーヴル社』社長・ローク・ワイバーンだった。

ラグナ 「おっす、ローク、久しぶりっ！思ったより来るのが早かったな！」

ローク 「全く、どこに行っていたと思ったら……。…会社には帰ってきて貰うよ？会長が勝手していたら社員の示しにつかないんだよ…兄さん？」

マナ 「…か…会長…？」

ディーン 「…に、兄さん…？」

二人が一斉にラグナの方を見た。

ラ
グ
ナ

「ま……じつに……」

正体（後書き）

キャラクター設定（？）

ローク・ワイバーン

種族：ヒューマン（男）

年齢：26

身長：180cm

体重：66kg

髪色：銀

髪型：短髪

詳細：『コーライル』親会社『ヴィーヴル（フランスのワイバーン社）』の社長でラグナの2つ年下の弟。（会社は亡くなった父から継いだもの）ナンパな兄とは違い、硬派で生真面目。ただし、兄の能力については認めている。本人も若くして社長をしているだけあって仕事能力は凄まじい。あらゆる事業で成功している。幼少の時から兄弟そろって父親にしこまれたため、戦闘能力も高く、ツインハンドガンを使うレンジャータイプ。

名前の由来は、ラグナと同じでラグナロクから。

兄弟（前書き）

マナが地雷キャラとして覚醒しました。

後半少し残酷かもしれませんが、よろしく願います。

兄弟

「ギルド・ロビー」

ラグナ 「そう！俺、実は『ヴィーヴル社』の会長だったの！」

一同 「ええーーーーっ！！！？？」

ディーン、マナ、エレナは突然の発表に驚愕している。

マナ 「か、会長って一番偉い人ですよね！？」

ラグナ 「そだよ」

ディーン 「一番エロいの間違いじゃなくて！？」

ラグナ 「おい。殺すぞ？」

エレナ 「でも、なんでそんなヒトがこのギルドに？」

ラグナ 「まあ、俺、特に仕事なかったし……デスクに座ってるだけの毎日に嫌気がさしてな……」

何かを悟ったような顔で何もなかったところを見つめていた。

ローク 「そんな理由だったのか……。そんな理由で一年半も……あつ、紹介が遅れました。皆様、はじめまして。ラグナの弟のローク・ワイバーンと申します。兄がお世話になっていました。」

深々と一礼をして、ここにいる3人に一人ずつ名刺を配る。

真面目な性格、礼儀正しい態度……とても兄弟とは思えない。しかし顔は一緒に、表現としては『短髪の眼帯をしていない固そうなラグナ』といったところである。

ラグナ 「オイオイ、ローク、かしこまり過ぎだぜ？まあ座ってゆっくり話そうぜ？」

ローク 「なんとも言わせなくてくれ。僕は世間話をしに来たんじゃない。兄さんを会社に連れ戻しに来たんだ」

ラグナ 「連れ戻すたって、俺、実際会社に必要か？お前だけで十分まわってるみたいじゃん」

ローク 「そういう問題じゃない！会長がこんな勝手ばかりしていては会社としての信用が……。とりあえずこれ以上の勝手はさせるわけにはいかないんだよ！！」

ラグナ 「……いや、俺、ここでも仕事あるから！会長の仕事より重要な仕事！……つな？みんな？」

ここでいきなり部外者3人に話を振ってくる。

エレナ 「なんですか？仕事って？ナンパですか？デートですか？それともセクハラですか？」

相変わらず表情と感情が連動していないエレナが満面の笑みで聞き返す。

ラグナ 「ちよっ…！」

マナ 「ええ！？ラグナさん、仕事してたんですか！？私、この前の『コーライル』の仕事以外知らなかったんですけど…！」

この発言には全く悪意はこもってなかったが、殺傷能力は高い。天然ものである。

ラグナ 「マナちゃんまでっ！ちよつと女性陣！？俺に厳しくないつ！？」

ローク 「この人たちもこう言っているし、兄さんはこのギルドにいらなくても大丈夫みたいじゃないか？ほら、早く戻ろう！」

ラグナ 「お、オイ…あんまり引張んなよ！」

ディーン 「待ってくれ！」

連れて行かれそうになるラグナの肩を掴む。

ディーン 「会社のことはよくわからないが…その…ラグナはこのギルドには必要な人間なんだと思う…あと…それに会社では仕事がないんだろ！？だったら、ここにいてもいいじゃないか？」

よくわからない主張ではあったが、言いたいことはこうである。「ラグナを連れて行かないでくれ」。ディーンの中で、『コーライル』

でのミッションを経て以来、ラグナに対しても仲間意識ができていた。

ラグナ 「…ディーン…」

マナ 「そ、そうです！ラグナさんはギルドに必要な人です！」

ラグナ 「マナちゃん…」

マナ 「仕事しているところは見たことなかったけど、私に私の知らなかった色んなことを教えてくれました！ とかとかっ！（放送禁止用語）」

ラグナ 「ちょっと、マナちゃん！？」

一気に場の空気が凍りついた。

マナ 「えっ？みんな、どうしたんですか！？」

ディーン 「……」

ローク 「……」

何も言葉が出なくなっている二人。

エレナ 「…ラグナ様？いったいマナにどんなことを教えたのですか？詳しく聞かせていただきたいですね？」

さっきまでとは比べ物にならないほど不気味な笑顔でラグナに近づいていく。

ラグナ 「…ちよつ、ち、違うんだ！ほ、ほら知つとかないといけない…こと…だ…し…」

エレナがラグナの目の前に立つたと思ったら、振り返りロークの方を向いた。

エレナ 「そうですね。この方には色々と聞かなくてはならないので、会社に連れて帰るのは、しばらく待っていただきたいでしょう？」

不気味なオーラゼロの表情でロークに微笑んだ。

ラグナ 「エ…エレナちゃん…」

ディーン 「……このヒトを……ここに居させて欲しい……！」

ディーンが頭を下げると、マナとエレナも続けて頭を下げた。

ローク 「……」

ラグナ 「…みんな…」

ローク 「……とりあえずこの話は後回しにします…」

やれやれといった感じである。

ローク 「ただし、今は一旦僕についてきて貰うよ！？」

ラグナ 「ハッ!? 意味わかんねーぞ?!」

ローク 「実はケルビン・グラスの居場所を会社とガーディアンズの連携で見つけ出したんだ。ただ、奴のことだからどんな奥の手があるかわからない。ガーディアンズにも動いてもらっているんだが、ニユースのおかげで兄さんの居場所もわかったし、念のため兄さんにも来てもらいたくてね… ついでに会社にも戻ってきて貰おうと思ったんだがね…」

ラグナ 「…アイツ、見つかったのか!? 場所はどこなんだ?」

ローク 「モトウブ・グラニグス鉱山の現在は使われていない発掘エリアに潜伏しているらしい」

ラグナ 「よし…! この前は俺が逃したようなもんだ! 今すぐ行って俺が捕まえる! 行くぞ! ローク!」

ラグナがいつになく真剣な表情を見せた。

ディーン 「ちょっと待つて欲しい! この前、逃したのはオレのせいでもある! オレも連れてってくれ!」

マナ 「デイ、ディーンさんが行くなら私も行きます!」

ラグナ 「…二人とも…。…何があるかわかんねえぞ? 特にマナちゃん…」

ディーン 「…だったら尚更人数が多い方がいいだろ?」

マナ 「だ、大丈夫です!」

ラグナ 「……わかった！ついてこい！ローク、いいよな？」

ローク 「…ええ！では早速行きましょう！」

デイン 「そういうことで、エレナ。また、個人的にミッションを受諾しちゃったわ…。あとよろしく！」

四人が駆け足でギルドを出ていく。

エレナ 「しょうがないですね……。……いやな予感が……。気のせいですかね？」

「モトウブ・グラニグス鉱山・現在は使われていない発掘エリア」

逃亡生活で少々やつれているように見えるケルビンがそこにはいた。

ケルビン 「…くそっ…くそっ…！くそっ！！なんでだ！？誰かがバラしたのか！？このままじゃ私は終わりだ……。…オイッ！いるんだろ！？出てきてくれ！！」

ケルビンがそう叫ぶと岩陰から一人の大柄なビーストの男が出てきた。

「???」 「ああ…いるぜえ？つかよお、おめえさん指名手配されてんだろ？困るんだよねえ？ここでもう商売できなくなっちまうよ

？」

その男は掛けているサングラスのずれを直しながら迷惑そうな顔を
した。

ケルビン 「だから、アンタにかくまってほしいんだ！あいつ等が
…アイツ等が来るんだ！散々マシナリーやら奴隷やらを買ってやつ
ただろう？」

必死にその男にしがみつくケルビン。…しかし

??? 「あゝ？買ってやっただあ？寝ぼけたこと抜かしてんじ
やねえぞコラア！！」

その男はケルビンを思い切り蹴とばした。流石、体格のいいのビー
ストだけあって威力のある蹴りである。10mほど吹っ飛んだ。

ケルビン 「グヘエ！！！」

地面に叩きつけられてグツタリとするケルビンに近づきその男はケ
ルビンの背中を踏みつけた。

ケルビン 「グウウウウ！！」

ミシミシと骨にヒビが入る音がする。

??? 「俺がおめえに売ってやったんだろ？口のきき方には気
をつけるよ？ああん？…ったく…仕事場は減らすは無料でかくまっ
て貰おうとするわ…ホント迷惑な客だなオイ？！」

脚に力を加えた。ボキツと言う骨の折れた音がした。

ケルビン 「グワアああああ！！！！！」

??? 「あゝ？イテエか？死にそうか？」

ケルビン 「…た…頼む…。…たす…けて…く…れ…」

虫の息で男の方を向く。口から出た血がついて顔はすでに真っ赤である。

??? 「なんだあゝ？まだ助けてほしいのか？……………いいこ
と思いついたよ…」

男はポッケから一粒のカプセルを取り出した。

??? 「イテエんだろ？助かりてえんだろ？だったらこれを飲
みな…。イテエのも感じなくなるし、おめえを捕まえに来るやつを
皆殺しにできるぜ？」

そのカプセルを地面に落とした。

ケルビン 「……………ほん…とう…か…！？」

ケルビンは必死でそのカプセルを摘み、口に入れた。

??? 「おゝう飲んだな？その薬はタダにしといてやる。商人
の情けだ。…それじゃあな？…生きてたらまた会おうぜ！？ギャハ
ハハハハ！！！！」

男は大笑いしながら坑道の奥へと消えて行った。

〈1時間後〉

ガーディアンズの警察部隊が坑道でケルビンを発見した。顔は血で赤く染まっていたが普通に立ち上がっていて、ガーディアンズのいる方とは逆の方を向いて呆然としている。

部隊員A「ケルビン・グラス！貴様を連行する！おとなしく従え！」

1人の部隊員がケルビンに近寄る。しかし、ケルビンの真後ろまで来たとき…

ケルビン「ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ……！！！！！！」

急に振り返り、近づいた部隊員の腹部を腕で貫いた。よく見ると腕が鎌のようなものに変異していた。

部隊員A「があああああ！！！！！！ああああ……ああ………
……」

他の部隊員「！？」

貫かれた部隊員は断末魔を上げて数秒で動かなくなった。

ケルビン「ゲヒヤ……ゲヒヤヒヤ………殺シタ……？殺シタ……」

腕を引き抜いて他の部隊員の方を見つめる。

部隊員B 「こ…殺された！？…なんだ！？様子がおかしいぞ！？」

部隊員C 「ぶ、武器を構えろ！」

ケルビンの目は焦点が合っており、口も半開きでヨダレは垂れ流し状態。まるで廃人のようだった。

次の瞬間、猛スピードで部隊員に奇声を上げながら襲い掛かってきた。

ケルビン 「ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ……！！！！！！」

部隊員B 「う、撃てー！！」

フォトンの弾丸がケルビンに命中するがまるで効いていない。

ケルビン 「痛ク…ナイ？痛クナイ……キモチイ……！」

部隊員B 「効いていない！？ば、バカな！！……うああああ……！！」

部隊員を一人ずつ体を貫いたり、切り裂いたりして殺していくケルビン。目はすでに白目をむいていて、もやはヒトではないかのようである。

部隊員達 「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああ……！！！！！！」

しばらくの間グラニグス鉱山にガーディアンズ部隊員達の悲鳴がこ
だました。

ケルビン 「ゲヒャ……楽シイ……」

兄弟（後書き）

キャラクター設定（？）

ケルビン・グラス

種族：ヒューマン（男）

年齢：45

身長：177cm

体重：62kg

髪色：暗いブラウン

髪型：ソフトモヒカン

詳細：『コーライル』代表。会社を大きくするためには手段を択ばない野心家。自分の保身を一番に考える性格でとてもずる賢い。部下に対しては完全に自分の道具としてしか接していなかったためコルンの裏切りは予想していなかった（マヌケ）。以前からビーストの商人とは接触していて、奴隷、マシナリー、その他実験用の材料を秘密裏で購入していた。

今回の章のボスです。彼にいったい何が…！？

不死身（前書き）

今回からボス戦スタート！

不死身

「モトウブ・グラニグス鉱山・現在は使われていない発掘エリア」

デイン 「……………なんだ……………これは……………」

坑道をしばらく歩いてケルビンを探していたデインたちの目の前には今、身体の一部が破損して息絶えているガーディアンズの制服を着たヒト達が倒れている。中には武器を持ったまま絶命している者のいることや、壁一面に血痕が残っていることから、ここで戦闘が行われたことがすぐに読み取れた。

そして、坑道の奥にポタポタと垂れて点線を描いている真新しい血痕もあった。この悲惨な光景を作り出した犯人の血が、それとも生き残った者の血か…それはわからない。

マナ 「……………あ……………あ……………」

目の前の死体の山を見て口を押えながら涙目で硬直している。無理もない。何度かデインと共にミッションに出て、危機的状态には陥ったことはあるが、惨殺された死体を見るのは恐らくこれが初めてなのであろう。

ラグナ 「…見るんじゃない!!」

とっさにマナの前に回り込み、視界をふさぐラグナ。流石である。

ローク 「…ガーディアンズに通信を入れてみます…」

ラグナ 「くそっ！何がどうなってんだ！？」

ディーン 「…ケルビンがやったのか…？」

ラグナ 「まさか…？あのオッサンが訓練を受けたガーディアンズ複数を相手にこの光景をつくれると…？…それこそ何がどうなってんだ？」

ディーン 「…でも…この奥から何かとても嫌なものを感じる…」

血の点線が続いている坑道の奥を指さす。やや下り坂になっており、ところどころ壊れかけの電灯が設置されているがその奥は見えない。そこから醸し出されるプレッシャーと目の前の光景からこの場にいる誰もがディーンと同じものを感じているに違いない。

ローク 「…ガーディアンズからは援軍をこちらに送るとのことですが、少々時間がかかるそうです。とりあえず我々だけでケルビンの搜索を続けましょう…」

ラグナ 「…了解だ…。…どうするマナちゃん？船に戻るか？」

少し落ち着いたようだが、まだ口を手で押さえている。

マナ 「……大丈夫です……私だけ戻るわけにはいきません…。」

…それに…こんな酷いことをするヒトを…許せません…！」

押さえていた手を放して、心配するラグナにそう返した。弱々しくだがどこか芯が通った調子だった。

ラグナ 「……………わかった…犯人をぶっ潰そう！」

マナを安心させるためか満面の笑みで答えた。ラグナの笑みにはヒトを安心させる作用があるんじゃないかと思うほどホッとするものがある。これはディーンもわかっていてる。

坑道の奥に進めば進むほど、いやな感じは強くなっていった。それに反比例して血の点線は薄くなっていき、終いには消えてしまった。

ディーン 「(…この嫌な感じ…どこかで感じたことがある…でも少し違うような…) ……マナ…。ホントに大丈夫か？この先にヤバいのがいるのは間違えないぞ？」

マナの方を向くと思っていたよりも落ち着いていた。やっぱりラグナスマイルの効果があつたのだろう。

マナ 「そうですね…凄いやな気がします……。でも、大丈夫です！ラグナさんにロークさん…それにディーンさんがいます！…だから私もがんばります！！」

ディーン 「……。…そうか…！無茶はすんなよ？」

マナ 「ハイ！」

しばらく進んでいると広いところに出た。使い捨てられた鉱石採掘用の道具があたりに捨てられていることから、元採掘現場のようだ。しかし、電灯はほとんど壊れていて周りはよく見えない。『コーライル』の地下の広場の方がまだマシだ。さらに嫌な感じがさっきの坑道の比ではない。ここに何かいる…ディーンはそう確信が持てた。

ラグナ 「なんだあ？ここは？」

ラグナが一人、前に出て落ちている採掘道具に手を伸ばした。
その時…

ローク 「！！ 兄さん！！危ない！！」

??? 「ゲヒャー！！」

ラグナとディーンたちの間：つまりラグナの真後ろに黒い物体が上から現れ、着地した瞬間ラグナに横から殴り掛かった。その手はブレードのようになっていて殴り掛かったというよりは横斬りをしたと言える。

??? 「死ネ！」

ザンツ……！！

ディーン 「！」

黒い物体越しにラグナを見ると、上半身が見当たらない。

マナ 「……ウ……ソ……？」

ラグナ 「ふうゝアブネエ！」

突然のラグナの足元から声がした。そう。『コーライル』の研究員の銃弾を交わした時のように上半身だけでかわしたのだ。今回は後ろからの攻撃なので前屈のような体制をとっている。

??? 「……?」

マナ 「……え?…アレ?」

ローク 「……フフッ…兄さん、やっぱり綺麗にかわすね」

マナ 「えっ!?!…どういことですか?」

ディーンは一度『コーライル』で見ているが、マナは所見なので何が起こったかよくわかっていない。というか暗くて今ラグナがどういう体制なのかを理解していない。

ローク 「あれは『竜首回避』と言う対人用見交わし術の一つだね、上半身を竜の首のように自在に動かしてその場を動かずに攻撃を交わし……」

ロークがここまで説明している間にラグナは前屈の状態で双剣のナノトランスを解き、それを握って、その体制から一気に体を回転させ、後ろにいる黒いカゲを切り裂いた。

ローク 「……カウンターを決める!…僕たち兄弟が幼いころから父さんに仕込まれた技だよ」

??? 「……!!あああああ!…!!」

黒い影はその場を転げまわった。しかしすぐに起き上がった。

ラグナ 「ありゃ？浅かったか？両断したつもりだったんだけど…… よおし！もっかいいくか！」

ローク 「…兄さん！ちょっと待って……コイツ…」

ロークが黒い影にライトを当てて正体を確認した。

黒いコート、ソフトモヒカン…それは辛うじてケルビンと認識できた。しかし、返り血と自ら吐いたが黒く変色して全身不気味な黒で、目は白目で充血、口はつねに開きっぱなしでヨダレは垂れ流し状態、そして極めつけは二刀のブレードに変異した両腕。もはやヒトとしての面影は無いに等しかった。

ラグナ 「なんだコイツ！？気持ちワル！！」

ローク 「間違いない…ケルビン・グラスだ…。…いったい何が！？」

ケルビン？「ゲヒヤ…ゲヒヤヒヤ…。…知ッテルゾ、オマエ達。俺ノ会社ノ上ドイツモ偉ソウニシテタ兄弟ダロ？」

デイン 「（…やっぱりだ…この感じどこかで…でも全く同じじゃない…）」

そう考えながら片手剣とハンドガンを構える。その後ろでロークは

ツインハンドガンを、マナはロッドを構えた。

ケルビン？「オマエも知ッテイルゾ！俺ノ実験邪魔シタ奴！！…ア
トソコノ女ハ知ラナイ…？知ラナイ！！？」

マナ 「…え、えっ！？」

黒目の無い目でマナを凝視する。3秒ほど経つとヒトとは思えない
動きでマナに接近した。

ローク 「しまった！！」

ラゲナ 「アブネエ！！」

しかし、ケルビンはマナの前で急に止まって間近で凝視する。

マナ 「ヒッ！…な、何…？」

ケルビン 「…コノ女…知ラナイケド…知ッテル…」

マナ 「え……？」

ケルビン 「ソウダ！！ソウダソウダ！！オマエハ俺トオ……」

ザシュ！！！！！！

ケルビン 「…オリヨ…？」

デーン 「…ソイツに触れんじゃねえ…！」

ケルビンの左胸を片手剣で後ろから貫いていた。スタンモードではないようだ。

マナ 「…！！」

デーン 「うらあ！！」

刺した剣をそのまま左に動かして脇のあたりまで裂いて剣をケルビンから引き抜いた。ケルビンはその場に倒れた。

ラグナ 「…！！…お、オイ！…お前何やって…」

デーン 「…アレは…もうヒトじゃない…」

ラグナ 「は？…！！！」

心臓を貫かれそのまま脇まで裂いたのに血は一滴も流れておらず、ケルビンはそのまま立ち上がろうとしている。

ラグナ 「！？！？」

デーン 「…アレはおそらく…SEEDの類…それも以前グラー

ルに現れたものよりも強力な……」

ラグナ 「！？SEED……だと！？」

ローク 「た、確かに生命力はあるようですが、なぜSEEDの類だと……！？」

ディーン 「似ているんだ……感じが……昔戦った、SEEDフォームになったヒトと……そいつはもっとしっかりと自我を保っていたんだが……」

ラグナ 「……イマイチ断定しかねるな……」

ケルビンは完全に起き上がりながら貫かれた左胸に手を当てている。

ケルビン 「……ヤッパリ痛クナイ……。……デモ……ムカツク……。オマエ等ノ体ニモ穴ヲアケル……！！」

両手のブレードを前に突き出し、ロークに向かって突進を始める。それに対して、ツインハンドガンで何発もの弾丸を撃ち込むが、まるで効いていない。

ローク 「……！！」

ケルビンのブレードを上半身を横にずらして交わす。そして持っている銃にエネルギーをチャージさせ、ケルビンの腹と頭に突きつける。さきほど説明のあった『竜首回避』の拳銃バージョンである。

ケルビン 「ゲヒャ…!？」

ローク 「この距離ならどうだ!?!」

カチャ……………ブォン!!!

引き金を引いた瞬間、ケルビンの頭が吹き飛び、腹に穴が開いた。
そのまま倒れピクリとも動けなくなった。

ディーン 「…やったのか…!？」

マナ 「ロークさん大丈夫ですか!？」

ロークのもとに駆け寄りケガがないか確認する。さっきの攻撃は完全にかわしていたようなので傷は無かった。

ラグナ 「しかしまあ…SEEDというよりゾンビだな、こりや…!ガーディアンズにどう報告するよ?」

ローク 「とりあえず、遺体の検視をして彼に何が起きたのか知るところからですね…」

マナ 「…ちょっとまってください…。…あ…アレ、なんです
…か…!？」

倒れているケルビンを指さして、他の面々に訴えかける。

ディーン 「!？」

ラグナ 「なんだこりゃ!？」

ケルビンの体から黒い煙のようなものが現れ、身体を瞬く間に覆った。その煙はどんどん大きくなり半径3mほどの球状になった。

ラグナ 「……まだ復活するのか!？」

…ドス……ドス……ドス…

黒煙の中から足音が聞こえる。かなり大きい。

そして黒煙から足音の主が現れた。もうケルビン…いやヒトの面影は全く残っておらず、大きさは4、5mくらい、両手は鎌のようになっ
ていて、下半身は別の生物と合成したかのように四足の生き物がくっ
付いている。そして、腹に開いた穴もなくなっていて、頭も再生して
いる。しかし、顔はヒトの顔ではなく、大きな黄色い宝石のような
ものが一つ付いているだけである。

デーン 「…キャリガイン…!？」

ラグナ 「オイオイ…マジでSEEDかよ…!？もつわけがわかんねえぞ!？」

マナ 「…!!ロークさん!危ない!!」

ローク 「!?!?!」

黒煙から完全に出てきた途端、ロークに向かって行った。さっきやられたことを覚えていたのか偶然かはわからない。巨体ゆえにさっきのような交わり方不可能である。

ローク 「(まずい!!)」

キャリガインが両手の鎌を挟み込むように振りかざした。

ガキンッ！！！！！

ローク 「！？」

キヤリガインはロークの目の前で止まっていた。いや、これでは語弊がある。ロークの目の前にいるラグナが止めていた。

鎌は双剣で受け止め、突進もその力を前に押し出して止めている。しかし、かなりきついようでもプルプルと腕が震えている。

ローク 「兄さん……！」

不死身（後書き）

紹介するキャラがないので新コーナー（？）

イメージボイス（？）

登場人物の（作者の）イメージの声優を紹介したいです。
作者の妄想なので軽く、しょーもなく受け止めてください。
ただ声優がわかる人なら少し読みやすくなるかもしれませんw

ディーン…中村悠一

マナ…花澤香菜

フォレス…遊佐浩二

ジャン…梶裕貴

エレナ…坂本真綾

ラグナ…小西克幸

こんな感じですw

自分もそこまで詳しくないので「この人のほうが良くない？」というのがあったらよろしくお願いします。それではまた次回！

ワイバーン（前書き）

過去話はいりまーす！現在の話もちゃんとありまーす！それではど
ーぞ！

ワイバーン

「20年前・ヴィーブル社」

当時ラグナは8歳、ロークは6歳。

ラグナ 「キャツホ ……!!!」

社員 「あつ！坊ちゃん！ダメですよ！オフィスを走り回った
ら！！」

ラグナ 「ええ…だって今日の分の勉強全部終わっちゃったし、
ロークはまだ終わってないから暇なんだもん…!!おじさん！あそ
ぼーぜ！！」

社員 「今日の分って…まだ午前中じゃないか！ホントに終わ
ったんですか？」

ラグナ 「終わったよ！数学も、公用語も、経済学も！」

社員 「…すごいな……。…じゃあロークお坊ちゃんを手伝っ
てあげては？」

ラグナ 「あっ！そうだな！そうしてくる！」

…兄さんはこの時からあらゆる面で才能を発揮していた。…それに比べて僕は…できる方ではあるが、兄さんには及ばない存在だった。

〈15年前〉

ローク 「父様！父様に言われていた経営学の本読み終わりました！」

父 「…そうか…。…それでローク？お前は何回その本を読んだんだ？」

ローク 「えっ…？…い、一回ですけど…」

父 「……オマエの兄さんはこの本を5回は読んでいたぞ？それにこの本は一回読んだくらいで理解できるものではない！…もう一度読み返してきなさい！」

ローク 「……ハイ……」

僕は早く父様に認められたかった。そしてこの会社を僕に任せてほしかった…。なのに父様はいつも兄さんばかり見ていた。

〈10年前〉

この頃、僕は兄さんと3日に一度は手合わせをしていた。

ローク 「せいっ！たあ！！とう！！！！」

ラグナ 「おつと！ういつと！あぶねつと！！」

ローク 「そんな！…あっ！」

ラグナ 「一本いただき」

ペシッ！

ローク 「あたっ！」

ラグナ 「おしかったな〜！今回はなかなか危なかったよ！ロークう？お前腕をあげたんじゃないか？」

竜首回避を完全にマスターしていた兄さんに僕の攻撃が当たることはなく、僕が兄さんに勝ったことは一度もなかった。

僕をフォローする周りのヒトは「2年も歳の差があるんだからしかたない」というが、明らかにそれだけでは無いと僕が一番感じていた。

父 「おお！ラグナよ、また腕を上げたようだな！回避から反撃に転じる際の動きに無駄が見当たらなくなってきたぞ！」

ラグナ 「いやあ！自分ではよくわかんないんですがね〜！

父さんがそう言うんじゃないかな？ハハハ」

ローク 「父さん……」

父 「ローク……！オマエはまだまだ動きに無理があり過ぎる！ラグナを毎回最前線で見ているのだから、少しは見て学ぶことも覚えるんだ！」

ローク 「……」

父 「返事はどうした？」

ローク 「……はい……」

正直兄さんのことが恨めしかった、憎かった……兄さんさえいなければこんなに比べられることは無かったと考える日々だった……

しかし……父がどちらを跡継ぎに任命するかと言つとき、この考えを持っていた自分を許せなくなった……

（3年前）

父 「お前たちもわかっていると思うが……今日お前たちを呼んだのは他にもない……この会社の次期社長を発表する。……私もいい年だ。今月いっぱい隠居させてもらつよ……」

これを言われた時…いや、ずっと前から僕は自分の名前が言われな
いことをわかっていた。

それでも、もしかしたら…と考えてもいた。

父 「伸ばしたところで何も無い。…早速だが、告げるぞ
？」

…

父 「…ラグナ…。…会社はお前に預ける…」

ラグナ 「……！オレツ！？」

この時兄さんは本当に予想外というような反応をしていた。でも、
僕には嫌味な反応としか受け取ることができなかった。

父 「…お前は少々軽いところがあるが、やるべきことは
全て簡易にこなし、お前の持つ経営の才能はSEED事変からの復
興には必要なものだ。お前の手腕を持つてすればヴィーヴル社は…
いや、グラール全体を立て直すことができる…」

ラグナ 「…ええ…ええ…じゃあ、ロークはどうするんでしょう
か？」

父 「……ローク、お前は、まだ若い…お前の能力があれば他の企業でも十分に活躍することも自分で事業を起こすこともできよう…好きにきなさい…。…しかし、ここに残ることは許さん！ヴィーヴルと言う空に座するワイバーンはただ唯一だ！」

この父の無責任な言葉に我を忘れ、本気で父を殴ろうとした。

しかし、それは無理だった。…先客がいたのだ…。

ガッ！！

兄さんが父さんの胸倉をつかんでいた。いつもヘラヘラとしていた兄とは別人みたいな恐ろしく、力強い形相だった。

父 「な！何をするラグナ！！??」

ラグナ 「父様よお…！それはないんじゃないのか！？コイツがどれだけこの会社を継ぎたかったか知らないわけじゃねえだろ！？俺なんかよりもずっとこの会社のことを考えてたんだぞ!？」

父 「そ…そんな簡単な問題では無い…のだ！…お前の才能を持ってすれば……」

ラグナ 「…アンタはいつもそうだ！！いつも俺ばつかでロークのことを見てやってねえ！…そんなんだからコイツの才能を見落とすんだよ！！コイツは俺なんかよりもずっと大事なもんを持っている！」

父 「な…なんだというのだ……」

ラグナ 「…本当に父親かよ……。努力…コイツは人一倍…いや、百倍努力できる！…そんなこと俺にはできねえ！…俺はただ言われたことをやることしかできなかった！だから会社をもとに戻すことはできてもそれ以上はできねえ！…でも、コイツなら…ロークならできる！言われたこと以上のことができる！…本当に会社をでかくできるのはコイツだよ！」

父 「……………」

驚いた。兄さんがそんな風に僕のことをみていたなんて知らなかった。

そついうと、兄さんは父さんから手を放した。

ラグナ 「……ヴィーヴル社にワイバーンは唯一なんだろう？だつたら問題ねえよ……」

父 「……？…どういうコトだ……！？」

ラグナ 「俺達は二人で一つ……つまり二つ頭を持った一匹のワイバーン……『双頭の翼竜』だ!!」

父 「……そんな屁理屈が通用するものか……!？」

ラグナ 「……屁理屈じゃねえ……本当に俺は会社経営をするためにコイツが必要だ……!……下らない家のポリシーなんて俺は認めない!!」

父 「ふ……ふざけるな!!……ゴホッゴホッ!!グハッ……!!」

ローク 「……父さん!!」

溺愛していた兄さんにそんなことを言われたショックが、年のせいかはわからないが、父さんは倒れて、そのまま帰らぬ人となった。

兄さんは葬式には参加したものの、墓参りには一度も言っていない

様子である。

その後、兄さんの考えに異見するものは無く、ヴィーヴル社初の二人の社長が誕生した。しかし、会社を立て直し終わると兄さんは隠居し、そして会社を飛び出して行った。

今思うと、今の僕は兄さんがいなくてはありえないものと言える。そしてそれは今も言えることである。

キャリガインの突進を止めてくれなかったら、多分僕は死んでいた。

く今

ローク 「兄さん!!」

ラグナ 「…ちつとキツイな…!!でも…こりゃチャンスだ…!!」
ローク!!俺の考えてることわかるか!?!」

キャリガインの両手は兄さんによってふさがれている。しかし脚は自由に動かせるため、突進は続いていてこのままでは兄さんは押し負けをして轢かれてしまう…。

なら、僕のすることは一つ…

ローク 「もちろんだ兄さん!!」

僕は腕を横に広げ、その状態でチャージをしてやや内側に弾丸を放った。

兄さんの脚の近くを通り過ぎ、キャリガインの下半身の生物の黄色い部分に命中した。

グギヤアアアアア！！！

ローク 「よしっ！やっぱりだ！」

ラグナ 「オラア！！！」

兄さんはそのままキャリガインを押し返し、腕を剣で貫いて地面に拘束した。

ラグナ 「これでうごけねえ…な？」

そのまま新しく二本の剣を出現させ、キャリガインの胸にある黄色い部分を突き刺した。

グギヤアアアアア！！！！！！！！！！

ラグナ 「やっぱりここが効くんだな・・・？みんな！顔の黄色い部分を狙ってくれ！！！」

ディーン 「ああ!!」

マナ 「は、ハイ!!」

ローク 「了解!!」

ドーーーーーン!!!!!!!!!!

ディーンとロークのチャージショットとマナのノス・ゾンデがキャリガインの顔についていた黄色い宝石のようなものを砕いた。

するとみると小さくなっていき、元のケルビンの姿に戻った。ただ、さっきの傷は残っており、生きてはいないようだ。

マナ 「も、戻った!?!? どういうことでしょうか?というか
また復活しませんよね!?!」

ラグナ 「…恐らくアレが核かなんかだったんだ…!それがこいつをSEEDフォームにしていたみたいだな…だからもう復活もないだろうな」

ディーン 「…確かに今思えばわかりやすい弱点だが、よくあの状況で二人ともあそこが弱点だと気付いたな…?」

ローク 「…兄さんが考えていたことがなんとなくわかった気がする……」

照れくさそうにそういったロークにラグナは肩を組んだ。

ラグナ 「そう！俺等意外と一心同体！一心同体のワイバーン…『双頭の翼竜』だからな！」

ワイバーン（後書き）

ディーンとマナの若干いいところ取りでした…

円卓会議（前書き）

『双頭の翼竜』は今回で最終話です！お楽しみください！あと、評価してくださった方がとっございました！！

円卓会議

SEED化したケルビンを倒したオレ達はその後遅れて到着したガーディアンズにその死体を預け、事情聴取のために一度ガーディアンズに連れて行かれた。どうやらガーディアンズの警察部隊員の殺害の容疑がオレ達にも掛けられているらしい。1、2時間ほど質問攻めにされたが、ロークの焦り一つ見せない対応で容疑は晴れ、ガーディアンズ・モトウブ支部を後にした。

そして数日後、ケルビンの検死の結果がロークのところに来たという。

〈ギルド〉

ローク 「今日は皆様に先日私のところに届いたケルビンの検死をお知らせに参上しました…」

浮かない顔のロークがギルドのロビーにオレとラグナ集めた。マナはこういった話かはきかなくてもいいだろ？というラグナの提案で呼ばなかった。

ディーン 「…何かわかったのか？」

ローク 「ええ……結論から述べると、確かにケルビン・グラスはSEED化していました…。…ただ…」

ラグナ 「ただ…？」

ローク 「…ただ、SEEDウィルスなど、今までに例があるものとは違った方法でSEED化したとのことです…」

ディーン 「…じゃあ、いったい？」

ローク 「…検死医は、彼の体のに小型のHIVEの残骸のよ
うなものが見つかったことから、その小HIVEに体に乗っ取られ
たのではないか…？と言っていたのですが詳しいことはわからない
そうです…」

ラグナ 「…そうか……。…すまないな…わざわざ報告のために
ここまで出向いてもらって…。それと…」

何やら照れくさそうに眼をそらしながら口を動かし始めた。

ラグナ 「…俺はやっぱり会社に……」

ローク 「……いいよ……！兄さんはこのギルドでやっていけばいいさ……！」

ラグナ 「えっ！？」

ローク 「……あの時の……僕らのどっちが会社を継ぐか父さんともめていた時の兄さんの言葉を思い出してね……」

ラグナ 「……あの時の……？！」

ローク 「……ああ……。……兄さんはあの言葉通り会社を元の状態に戻したからね……今度は僕が会社を発展させる番なんじゃないかな……って思ってたね……」

ラグナ 「それはそうだが、会社はもう十分……」

ローク 「僕がこの程度で満足するとも？……兄さんはどこでもいいからブイール社のことを見守っていてくれ……。……もちろん危なくなった時はすぐに来てもらおうよ？」

ラグナ 「……ああ……。……お兄さんに任せなさい！」

…『双頭の翼竜』…確かにこの兄弟にはピッタリな二つ名かもしれない……そうオレは思うとゆっくりと席を外した。

く???く

奇妙な色のライトに照らされた部屋の中央に円卓があり、5人の人物が均等な距離をとって座っていた。

それぞれのビジュアルは、顔を包帯で覆った男、口元がコートの襟で隠れている鋭い眼光をした男性ニューマン、仮面をしている女、バイザーを着けているヒューマンに近い姿をしたキャストの男性……そして最後の一人はケルビンと接触していたビーストの商人だ。

ビースト 「……ったく、めんどくせーな……こっちは商談があるんだよ!!! 話ならとっとと済ませてくれねえか!？」

ニューマン 「静粛にしろ……！今回は貴様の勝手な行動について言及することも兼ねた会議だ……」

ビースト 「ああ？俺様がどーしよーが勝手だろうが！？潰すぞ根暗ヤロー……！」

ニューマン 「……愚か者には口で言っても無駄なようだ……いいだろう……灰になるがいい……！」

円卓に足を乗つけたビーストに対して、ニューマンは手の平を向けた。そしてその手からは青い炎が発生した。

仮面女 「……………」

キャスト 「オッ！？殺っちゃうのか！？ついに殺りあっちゃうのか！？」

無関心な仮面の女とハイテンションなキャストはこの二人を止める様子はなかった。

包帯男 「…フアング…シエン…止めろ……！」

リーダー格らしき包帯の男がそういった瞬間、フアングと呼ばれたビーストの男は円卓から足を降ろし、シエンと呼ばれたニューマンは手を引いて包帯の男に頭を下げた。

フアング 「…チツ！…しょうがねえな……！！」

シエン 「…申し訳ございません……！！」

包帯男 「…構わない…それより話を始めようじゃないか……」

キャスト 「…なぐんだ……っで！今日の議題はなぐにかなっ？」

シエン 「…先ほども言った通りまずはコイツの勝手な行動によつて世間に『OS』^{オス}が出回ってしまったことだ……。…なんでも『OS』によつてSEED化した者のなれの果てがガーディアンズで検死されたそうじゃないか…そうなんだろう？」

仮面女 「……ええ……間違いないわ……」

フアング 「……！！オイオイ！ありゃ失敗作だろ！？」

包帯男 「…確かにアレは失敗作だったが……あまり表社会に
でていいものではないのはお前もわかってるだろう？……お前には
我らの資金を担当してもらっているが、ドラッグのように失敗作を
売ることをこれ以上許すわけにはいかないな……」

ファンゲ 「わあゝた、わあゝた！これ以上はウラネエ！！」

シエン 「……それだけで済むと思っているのか！？」

ファンゲ 「うるせえな……じゃあ、アレだ！！今度、その仮面
女んとこのスパイを使って作戦があるらしいじゃねえか！？……ソイ
ツに俺様も同行するぜ？」

シエン 「貴様……何を寝ぼけたことを……！！！！」

シエンがまた手を伸ばしかけたところに包帯男がいつの間にかに、
後ろに移動していてシエンの手を抑えた。

包帯男 「……いいだろう……。……万が一の時は任せた……」

フアング 「……ゲヘヘ……仰せのままに……」

サングラスの奥の瞳が不気味に光った。

（ギルド・管理者室）

管理者席に座っているフォレスと部屋の隅によっかかっているラグナがいつになく真剣な表情で話している。

ラグナ 「……やっぱり、アンタの言うとおりだった……。……予定より早いんじゃないか？」

フォレス 「……そうですね……。……こちらはまだ準備は万全とは言い難いですからね……。……本当にディーン君にも出てもらうしかないかも

「しません」

円卓会議（後書き）

第三章『双頭の翼竜』終了です！ですが、この小説全体としてはここからが本番スタートです！

なんだか、お約束な感じの怪しい連中が登場してきましたが、今度も読んで行ってもらえると嬉しいです！

イメージボイス（？）

ローク・ワイバーン…小野大輔

なんかそんな感じです。オレの中でw

古巣（前書き）

新章です！原作ゲームにも登場のキャラを出してみました！

あと、2話の『スカウト』のキャラ設定のところに挿絵でディーンを載せました。初めて描いた絵なのでヘタクソですが、そちらも見ていただけるとディーンがどんな見た目かわかるんじゃないかと思います。

それではどうぞ！

古巣

第四章「吹き荒れる蒼い風と蠢く黒い影」

> i 2 9 5 7 8
— 3 7 5 7
<

こんにちは！マナです！

私とディーンさんは今、最近発見されたニューデイズのレリクスに向かっています！

もちろんミッションで向かっているのですが……そのミッションがなんと！！ガーディアンズと共同のミッションなのだそうです！！

なんでも、この前のケルビンの件で私たちのギルドの評判が上がり、ガーディアンズの方からギルドに協力の依頼が来て、お父さんが私たちにこのミッションを任せたのです！

私的には初めての大事な事でとても気合が入っているのですが……

デーン 「……はぁー……」

船に乗ってもう20回くらいはため息を吐いたと思います…。

このミッションを任されたときからずっとこんな感じなのです…。

マナ 「デーンさん…！そろそろ着きますよ？いたいど
うしちゃったんですかぁ！？」

デーン 「ん？あぁ……。だってさぁ…。気まずくね？…
自分から退職した組織と合同のミッションだろ…？……ふつーに
气まずいでしょお？」

「………。確かにそうかもしれないですが、この人は本当に
プロなんだろうか？」

マナ 「大丈夫ですよ！だって向こうから依頼してきたんで
すよ？堂々で行きましょうよ！」

デーン 「…そうは言ってもだな…。…この前のモトウブ支部
でも結構気まずかったんだぞ！？マジで…！」

マナ 「で、でも誰もなんとも言ってこなかったじゃないで

すか!！」

ディーン 「まあ…知り合い、いなかったからな…。でも、どうすんだよ…合同ミッションに知り合い来たら…」

マナ 「も、もしかしたら、気付かないかもしれないですよ!？」

ディーン 「…それならいいんだけど…。…あ、でも、それはそれで凹むわ…」

なんだか、今日のディーンさんとはとてもめんどくさいです…。

そんなこんなやっているうちに目的のレリクスの近くまでやってきました。

くミズラキ・レリクスく

集合場所に指定されていた場所にはすでにガーディアンズの制服を

着た人が一人待っていました！茶髪のロングヘアーの女性です！

???

「あ！あなた方がギルドからの協力者ですか！？」

マナ
ヤカです！」

「あ、ハイ！そうです！初めまして、マナ・アーラニ

???

「マナさん！協力感謝します！……そちらの方は……？」

ディーンさんは私の5mほど後ろで目を細めて変顔をつくっていた。そのあと、ガーディアンズの女性の方をみてなにやら安心したような顔をして近づいて来た。

マナ
と……」

「ほら！ディーンさんもこちらの方に挨拶をしません

ディーン

「ちょっ……まっ……！」

???
なたもしかして元ガーディアンズのディーン・オーシャンさんですか！？」

「……？……ディーン？……その海のような青い髪……あ

・・・どうやら知っている人のようでした…。

デイン 「……！！……ん、ああ……確かにオレはデイン・オ
ーシャンだ……。君とは面識がなかったと思うんだけど、どうして
オレのことを？」

??? 「そりゃあ知ってますよ！ガーディアンズに吹き荒れ
た『蒼い風』といえば今、ガーディアンズの都市伝説的なものにな
っていますから！」

デイン 「『蒼い風』？オレにそんなあだ名あったか？」

??? 「あ……多分、あなたがガーディアンズを辞めてからみ
んながそう呼ぶようになったんだと思います……。兄から聞いた話
だと、吹き荒れる嵐のような連続攻撃の使い手だとか……」

デイン 「……兄……？」

??? 「あつ！イーサンです！イーサン・ウェーバーです！
……何度かあなたとミッションを合同したとか……」

デイン 「……英雄イーサンか！……じゃあ君は……」

ルミア 「あ、紹介が遅れましたね…！ガーディアンズ総合調査部のルミア・ウェーバーです…！…伝説の『蒼い風』とミッシェンを共にすることができて光栄です…！」

デーン 「…そうか…君がイーサンの…。…イーサンは元気にしてるかい？」

ルミア 「ハイ！それはもう…！」

なんだか、私が入れないような話の内容になってしまいましたが、デーンさんはいつもの感じに戻ったみたいなので結果オーライみたいですよ…！」

マナ 「…ルミアさん！ガーディアンズからのメンバーはアナタ一人だけですか？」

ルミア 「いえ、もう一人ニューデイズ支部から来ると聞いていましたが……」

…カツカツカツ……

「……いやいや……みな様……すでにお揃いでしたか……」

サラサラの整えられた赤髪にメガネをしたガーディアンズの制服を着た男性が草陰から現れた。

「……スミマセン……道に迷ってしまいまして……ハハハ……」

「……集合時間には間に合ってますよね？」

マナ 「ギルドのマナ・アーラニヤカです！」

マルコ 「そうですか、あなたがギルドからの……。……私はガーディアンズ・ニューデイズ支部のマルコ・テリエーです。以後お見知りおきを……。……そちらの貴女は本部の方ですよね？」

ルミア 「ええ、初めましてマルコさん。本部のルミア・ウェーバーです！」

マルコ 「おお！英雄イースンのご兄妹の！貴女がでしたか……いやはや光栄ですよ……」

マルコは最後にディーンの方を向いた。

ディーン 「オレは……」

マルコ 「ああ……知っていますよ？……ガーディアンズの『蒼い風』。……そう、ご友人を失ったショックでそよ風のように消えて行った……『蒼い風』・ディーン・オーシャンさんですよね？」

メガネのズレを直す動作をして、不気味な笑みをつくった。

ディーン 「……………！！！！！！」

古巣（後書き）

キャラクター設定（11）

マルコ・テリエー

種族：ヒューマン（男性）

年齢：27歳

身長：173cm

体重：51kg

髪色：赤

髪型：サラサラヘア

詳細：ニューデイズ支部に努める入隊8年目の中堅ガーディアン。二刀のダガーを使用する。とても嫌味な顔つきをしている。なぜ、ディーンにこんな挑発的な態度をとったのか？答えは次回で明らかになるのだろうか！？

レリクス（前書き）

今回所要により、あわてて書きました。
レポートがあるというのに……

そんなギリギリな状態で書いたものですが読んでもらえると嬉しい
です。

レリクス

オレはこのサラサラメガネ男の発言に対して、黙って拳を強く握ることしかできなかった。もちろん殴っていいわけではないが、このサラサラメガネ男が言ったことが本当のことである以上オレには何も言うことができなかった。

確かにオレはコイツの言うとおりヴィヴィアンを失ったショックでガーディアンズを辞めた。

こういわれて改めてあの時のことを考えると自分の無力さしか感じない。…何が『蒼い風』だ。

本当にただの弱々しいそよ風の方がお似合いなのかもしれない…

そして、ことを荒立てないようにオレは握った拳の力を抜き、マルコに軽いあいさつをすませるために近づこうとした。…しかし

ルミア 「ちょっとマルコさん！そんな言い方はないと思います！」

マルコの前に足を一步踏み出して強い口調でそう言った。流石イースンの妹。こういう時にすぐに行動にできる。

それに反してマナは後ろでこのちょっとした修羅場のような空気に混乱して、あわわ…と慌てふためいている。

マルコ　「ルミアさん…。…そうですね…私としたことが……。どうにも人を悪い気にさせてしまう言い方しかできないようです…。…ディーンさん…申し訳ありません。どうかお気を悪くなさらず…。」

さっきの悪意のある表情とは打って変わって誠意に満ちた顔で頭を下げられた。

…いつかのフォレスの時といい、今といい、オレはどうも頭を下げられるのが苦手らしい。

オレは頭を下げるマルコに手を差し出した。

ディーン　「…いや、気にしていない…。改めてオレはディーン・

オーシャンだ。よろしく頼む……」

マルコ 「……あ……はい。マルコ・テリエーです。こちらこそよろしく願います。」

マルコも手を差し出してきて握手を交求めてきた。そしてオレはマルコの手に触れた。

デイン 「……！！！！……？……？……？」

手に触れた瞬間とんでもない寒気が全身に走った。マルコの手は冷たかったが、絶対にそれだけが理由じゃない。

だが、とくに行動には示さず何事もなく握手を交わした。

ルミア 「では、メンバーがそろったところで改めて自己紹介させていただきます。今回のミッションのリーダーを務めさせていただきます、ルミア・ウェーバーです。ディーンさんやマルコさんの方がベテランでこの役職はあなたの方がふさわしいと思いますが、本部からの指示ですし、実際名前だけのリーダーなのであまり気にしないでください」

自己紹介をおえるとルミアの端末からこのレリクスについてのいくつかの情報が載っているデータが立体で表示された。

レリクスとこの周辺の地図のようだが、サーモグラフィのような色で表示されていて、レリクスの中心部分は真っ赤である。

ルミア 「この図で赤く表示されているのはAフォトンの濃度なのですが、ご覧の通りレリクスの中央は真っ赤です。レリクスなのでAフォトンの濃度が濃いのは当たり前なのですが、これはちょっと異常です。以前、亜空間問題に関連したレッドタブレットの類と予測されていますが、まだ何もわかっていません。私たちに与えられたミッションはこの濃度の原因と原因がものであればそれ回収です。」

その後、このレリクスの発見の経緯について一通りルミアから説明があった後、オレ達は調査のためにレリクスの内部に入って行った。

ミズラキ・レリクス 内部

内部は一本の道がまっすぐ続いているだけの単純なもので原生生物の姿は見当たらなかった。しかし、入って100mほど歩いたあたりから道の両脇に大型の自立起動兵器『スタティリア』が起動していない状態で何十体も並んでいた。

『スタティリア』とは旧文明人がレリクスに設置した、対SEED用の兵器の総称でいろいろな種類がある。

ちなみに今オレ達のまわりに配置されているのは『スヴァルタス』というヒト型の大型スタティリアである。手に持った剣での直接攻撃や衝撃派、火炎放射の機能もついている上位種である。

ディーン 「スゴイ数だな……これ全部動き出したら流石にお手
上げだな…」

ルミア 「ちょっと、不吉なと言わないで下さいよ…」

ディーン 「わるい、わるい……。…そういえばマルコさん。オレ
のことを知っていたようだけど、有名なのはあだ名だろ？どうして
顔見てオレが『蒼い風』ってわかったんだ？」

マルコ 「ああ…そのことですか！それはですね…。…おや？
マナさんがいらっしやいませんが…？」

オレも周りを見渡すが近くにはマナはいなかった。…近くには…

マナ 「わあ~~~~~!!!!!!」

前方50mほど先を無邪気に走り回っている。普段おとなしめなの

で、こんなマナは珍しい。

ディーン 「オーイ！？何やってんだ！？勝手に前行くんじやないよー！」

マナ 「ディーンさんー！！なんだかこことっても落ち着くんです！！いや、開放的な気分になれるんですよー！！」

こちらを振り返りながら叫んでそう返してくる。

レリクスが落ち着く？何言ってたんだこの娘は？

ディーン 「…ったく…いいから戻って…。…！！！！危ないっ！！」

マナ 「えっ？」

マナの前方（今振り返っているから目では見えてない）のスヴァル

タスが動きだし、マナ目掛けて剣を振り下ろそうとしている。

オレは全力で地面をけってマナの元に向かったが、距離が離れてい
るため間に合わない。

ルミア 「はあゝ…ていつ…!!」

後方でルミアがロッドを振りかざした。

ボオオオン!!!!!!

突如スヴァルタスが爆発した。

…火属性のテクニック『ラ・フォイエ』である。

爆発でよろめいた隙にマナは逃げ出した。しかし、まだスヴァルタスは停止していない様子である。

「ただ、オレとスヴァルタスとの距離はすでに5mを切っている。…この距離ならやれる…」

オレは手に持っているセイバーのフォトン出力を高めた。そして……

ザザザザザンッ！！！！…

フォトンアーツ『インフィニット・ストーム』を放ってそのまま駆け抜けた。オレがスヴァルタスの10mほど前に着いたとき、後ろでスヴァルタスがバラバラに崩れ落ちる音がした。

すぐに後ろから3人が掛けてきた。

ルミア 「スゴイです！あだ名に違わぬ神速の剣でした！」

デイン 「キミのテクニクだってスゴイ制度だよ……。…あんなに離れていたのに座標はピッタリだし威力だってかなりのものだ。イーサンに負けてないな！」

マナ 「み、みなさん！！本当にすいませんでした！！」

マナがペコペコと何回も頭を下げる。今日はよく謝罪されるな…

マルコ 「みなさん……。…どうやらゆっくり話している暇はなさそうですよ？」

後ろを見るとすべてのスヴァルタスの目が光っている。どうやら起動してしまったようだ。

前方にいる何体かのスヴァルタスの目も光り始めた。

ルミア 「この数を相手にするのは無茶があります！…あそこまで駆け抜けましょう！！」

前方に見える扉を指さす。扉はヒトくらいの大きさのため確かにスヴァルタスには通れそうにない。

オレ達は後ろから聞こえる、たくさんの足音を振り切って扉まで走った。

ミズラキ・レリクス さっきディーンたちが通ったところ

全てのスヴァルタスが起動していて道をふさいでいる。

そこへ一人の男が現れた。

ファング 「オイオイ？アイツ等ちゃんとこついの掃除して
けよぉ？」

少し前かがみになりながらサングラスを取り外して懷にしまった。
あらわになった彼の目は獲物を狩る獣のような目だった。

ファングに気付いたのかスヴァルタスたちは剣を振り上げながら近づく。

ファング 「おっと、俺様に敵意剥き出し？…そりゃそうか…
w」

特に焦った様子もなくコートのポケットに手をつ込んだままである。

ファング 「ほいじゃあ掃除でも始めますかあ…」

不気味な笑みを浮かべた直後、ファングの体を黒いオーラが覆った。

５分後

フアング 「ふい…ご馳走様でしたあつと！」

スヴァルタスの残骸でできた山の上に座って口に手を突っ込んで歯に挟まった食べ物のカスを取っている動作をしている。

彼の周りには食い散らかされたような（生ものではないが）スヴァルタスの残骸が散らばっていて、ディーンたちの入って行った扉のあたりまで続いている。

フアング 「さあ…と…そろそろ行きますかあ？」

懐からまたサングラスを取り出して掛けた。

まるで獣のような目を隠すかのように…

レリクス（後書き）

ファングのキャラ紹介は事情により後回しです。

感想、指摘、レポート完成への応援メッセージ……お待ちしております
すw

スパイ（前書き）

1～4章の表紙イラストみたいなもの描いてみました。
よかったら見てください。

それでは本編すた～と～！

スパイ

ガーディアンズ・ニューデイズ支部の過去の報告書

月 日：アガタ地方で観測された高濃度のAフォトンについての調査。メンバーはリーダー：カイネ・ドロフ、部隊員：キサラ・アソート、マルコ・テリエー、トイー・ルギユラ。

反応は一時的なもので彼らが現地に着いた時には反応は消えていた。しかし、周辺調査の最中、部隊が原生生物の大群に襲われ、カイネ、キサラ、トイーが戦死。報告は生還したマルコ・テリエーによるもの。

月×日：ハビラオ禁止区にて高濃度のAフォトン反応が観測されたため反応の原因の回収。メンバーはリーダー：マルコ・テリエー、部隊員：アニス・コーラン、ウォーレン・ジャツサム、ジョー・オータム。

調査の途中に有毒なガスが発生。手分けしての調査で洞窟内を調べていたジョーとウォーレンが死亡。その後、2名で調査を続けたがAフォトンの反応は間もなく消失した。報告はリーダー：マルコ・テリエーによるもの。

月 日：グラール教団の管轄している山岳地帯にて高濃度のAフォトン反応が観測された。このミッションはグラール教団の教団員10名と当支部のマルコ・テリエー、アニス・コーランが協力して原因について調査を行った。

高度100m付近の山道にて大型の原生生物の強襲を受け教団員6

名が山道から転落、行方不明。生存は絶望的。その後、原生生物の撃退に成功。調査を続行。

反応の強かったエリア周辺を搜索するもこれと言ったものは何も見つからない。そして突如、反応が消失。その刹那、強力な冷気を放つ謎のヒト型原生生物と遭遇。部隊はバラバラになりなんとか逃げてきたところマルコとの合流に成功。教団員4名は行方不明。生存は絶望的。報告はアニス・コーランによるもの。

月×日…

…原生生物に襲われアニスが死亡。……………報告はリーダー…マルコ・テリエーによるもの。

「ミズラキ・レリクス」

スヴァルタスの大群から逃れ、奥へ奥へと進んでいく途中何度か小型から中型のステイリアに襲われたが、さっきのような絶望的な状況だったわけではないから容易に倒すことができ、オレ達は中心部へつながっていると推測される扉の前に来た。

ルミア 「Aフォトンの濃度から見て、この先がこのレリクス
の中心部だと思います」

マルコ 「……今度こそ……何か分かればいいのですが……」

ボソツと下を向いてそう唱えた

少し気になったので、どういうことが聞いてみることにした。

ディーン 「……今度こそ……って、前にもこんな反応があったんです

か？」

マルコ 「ええ、ニューデイズ支部にはよくこんな仕事回ってくるんですよ。ですが、毎回私たちが到着した時には反応が消えていて、その上、仲間が原生生物に襲われて任務中に何人も死にました…。私は、死んでいった仲間たちのためにも、この高濃度反応の正体を確かめねばならないのです…」

そう言いながら虚空を見つめるマルコの目には哀愁を感じた。

ただ、反応が消えるというのはどういうことなのだろう？こんなに高濃度なAフォトンがいきなり消えることなんてありえるのだろうか？そんなことを考えながら反応の元があるとされているレリクスの中心の部屋に入って行った。

ルミア 「…こ、これは…」

マナ 「綺麗……」

中央部の部屋の中にはヒトくらいの大きさの赤い結晶があった。
すぐさまルミアは端末を操作し始めた。

ルミア 「…間違いありません！あの物体から高濃度のAフォトンが観測されています」

ディーン 「…Aフォトンの結晶とでもいったところか？…やっ
たな！マルコさん！」

オレはマルコさんの方を振り向いたがそこには誰もいなかった。
すでにAフォトンの結晶に向かって歩き出している。よほど嬉しか
ったんだろうか？

ルミア 「ちよっ…マルコさん！まだ調査していません！危険

なものの可能性も……えっ?！」

ルミアが驚いたのも無理はない。マルコが突如ナノトランスした何らかの装置を結晶に触れさせた瞬間、その装置に吸い込まれるかのように結晶は消えのた。

ルミア 「……!? どういうこと!?! ……は、反応も消滅した!」

マルコ 「……いやはや嬉しいですね……。今回もアタリだとは……」

Aフォトンの結晶は存在した。しかし、マルコが過去に行った調査では該当するものは見つからなかった。マルコはAフォトンの結晶を反応ごと消失させる装置を持っている。今回「も」アタリ。同行した仲間が死亡している。オレ達は回収の瞬間を目撃して、反応が消えた原因も知った。これは以前同行した仲間も同じはず……

なるほど……そういうことか……

ディーン 「……それで次はどうするんだ? オレ達を殺して、デ

タラメな報告書を書くのか？」

オレは確信を持ってマルコに銃を向けた。

マルコ 「…フフフ…いやですね…勘のいい人は…」

やれやれと言った感じで両手を上げた。しかし、観念した様子はない。奥の手があると言わんばかりの余裕の笑みを浮かべている。

マナ 「な、なにやってるんですか！？ディーンさん！？」

ルミア 「いったいどういうコトなんですか！？」

二人ともまだ状況が把握できていないようだ。だが、なんとなく危険を感じ取ったのかオレが銃を構えているからなのかはわからないが、二人ともロッドを構えている。

ディーン 「まあ…要約すると、そこ居るのは連続殺人犯ってことかな？」

ルミア 「ますます意味がわかりません!!」

オレは銃を構えた状態で目線をマルコから逸らさずにルミアとマナにオレの推理を手短に話した。

ルミア 「…そうですか…。多分…いや、マルコさんのあの対応からするに間違いなさそうですね…。マルコさん…いや、マルコ・テリエー!!ひとまずアナタを拘束します!!」

ルミアがそう言い放った直後、オレ達がこの部屋に入るために使用した扉が開いた。

ウィーン

1人のビーストの男が入ってきた。上半身裸の上はかなり高級そうなコートのを羽織っているうえに全てに指に高価そうな宝石のついた指輪をしていて、首にはブラックパールのネックレスをしている。

全身にまもっているものの合計金額で豪邸が買えてしまいそうだと。

その男は特に警戒している様子もなく無防備でこちらに近づいて来た。

ファング 「おう！なんだよ、いきなりピンチみてえじゃねえか？助けてやるうか？」

マルコに手を振ってダルそうな声でそう放った。

まずいな…。コイツ、マルコの仲間か？

マルコ 「結構だ！…貴様のような奴の助けはいらない！」

ファング 「オイオイ？オレ一応お前より立場上だからね？あんま調子乗ってつと喰い殺すぞ？マジで…」

マルコ 「私の上官はラヴカ様一人だ…」

フアング 「ったく…あんな鉄仮面女のどこが良いんだかなあ…？」

なんだかコイツの内輪ネタの会話が始まってしまった。とても銃を突きつけられているヒトのしていることとは思えない。

デーン 「オイ！お前ら！！…状況わかってんのか？一人は銃突きつけられて行動不可能で、お前は2対1の状況になる。ケガする前に……」

サングラスの男に目を向けた時だった。一瞬体が凍りついたかのようにな動かなくなった。まるで肉食獣に睨まれた草食動物の気分だった。やばい…コイツはマジでやばい！！

そしてマルコはその一瞬の隙をみのがさなかった。ヒトとは思えないような動きで間合いを詰め、ダガーで切りかかって来た。

デーン 「……！！」

オレはギリギリのところで銃を盾にして攻撃を防いだ。そして攻撃

が失敗すると反撃のチャンスを与えることなく、オレから一定の距離を取った。

サングラスの男はマナとルミアをジロジロと見ている。

マナ 「…な…なんですか…？」

フアング 「うんうん…二人ともなかなかの顔立ちだ…！ただ、発育がな…。…まあマニアが喜ぶか！」

グラサン男は何かを納得したのか手をポンとたたいた。

ルミア 「どういう意味ですかっ！？」

若干キレながらルミアがロッドを振り回して巨大なフォイエを放った。男はなんの迎撃の準備もしていなかったため、もろにその火の玉を喰らった。炎が一気に燃え上がりグラサン男の影が見なくなった。

ルミア 「（やばい…少し強すぎたかも…）」

ところが炎の中にまた影が現れ、何事もなかったかのように男は炎の中から出てきた。

フアング 「なるほどなるほど？気が強いつてオプションもついでるのか…こりや変態金持ちマニアに売るしかねえな…」

ルミア 「ウソ……やけど一つないなんて……」

フアング 「うおーい！マルコ！コイツら全員処分すればいいんだろ？だったらこの女二人はオレが貰ってくぜ？そこそこ金になりそうだし。オマエはその青髪を殺れ！」

マルコ 「貴様の指図を受ける気はないですが、それなら私の

仕事も減りますし…いいでしょう」

軽くグラスンの方を向くとすぐにオレの方に向き返した。

マルコ 「…さて、それでは『蒼い風』さん…。始めましょうか…？」

最初会った時と同じメガネのズレを直しながら不気味に微笑んだ。

スパイ（後書き）

よくある展開ですね。はい。

感想、アドバイス、レポート完成への応援メッセージお待ちしておりますw

OS（オズ）（前書き）

おっす！オラ烏山！ワクワクすっぞ！

… 失礼しました。

ディーンのピンチ！さてどうなるのか…！？

OS（オズ）

マルコは二刀目のフォトンナイフを出現させ、左手に逆手で握った。ナイフと言っても刃の部分（要はフォトンの部分）がとても長くそのあたりの剣と同じくらいである。

もう一度口元を不気味に歪めると、またさっきと同じように急接近してきた。そして二本の刃で上段と下段を同時に攻めてきた。

片手剣とハンドガンでは防ぎきれないと感じ、オレはすぐさま両剣ヴィヴィアンを取り出して二本の刃をうけ止めた。

マルコ 「なるほど…いい反応をしますね…。ですが、その両剣は亡くなったご友人の形見なのでしょう？…なんとも未練たらしいですね…」

ディーン 「……………」

オレは込み上げてくる怒りに任せて両剣を回転させてマルコのナイフを弾き飛ばした。ナイフは宙を舞っている。

武器が無くなって無防備な状態のマルコに両剣で突きを放った。

しかしそれはあっさりと避けられてしまった。そしてマルコは落下してきたナイフをキャッチした。

マルコ 「怒りと動揺で動きが丸わかりですよ？よほどその友人のことに触れられたくないようですね？」

凶星だった。ヴィヴィアンのこと出されると、あの時の無力な自分とそのけっしてその現実と向き合おうとしない今の自分に腹が立つ。なにより言われていることを否定できないことが一番辛い。

そもそもなんでコイツはヴィヴィアンのことを知っているんだ？ガーディアンズに潜伏していたとしてもあくまでいたのは支部。…知り過ぎだ。しかも、この両剣を形見だと見抜いた。…何者なんだ？

マルコ 「おや？私がなぜこんなことを知っているのかという顔をしていますね…」

なんだコイツ！？マジでエスパーか？

マルコ 「私の上司はかなり情報に精通している方でして、ガーディアンズの詳しい情報はほとんど知らされています。…アナタの個人情報もね……」

…個人情報だと…？　いつたいどんな奴だ！？

ただ納得はできた。ペラペラとしゃべってくれたお陰で多少不気味さは薄れた。少しオレは冷静になることができた。

デーン　「うらあー！！」

突きを放った状態のまま横に斬りつけた。だがこの攻撃もしゃがんでかわされた。そしてそのまま反撃に転じてくるようにナイフを構え体重を前に移動させた。

マルコ　「これで終わりですー！！」

デーン　「お前がなっー！！！！」

両剣を回転させさつき使ったのと反対側の刃でマルコの顔面を下から切り裂いた。

マルコ　「なっ…バ…バ力なっー！！…ガアアアアアー！！！！！！」

血で赤く染まった真つ二つに切断されたメガネが地面に落ちた。

「マナ・ルミアの方」

フアング 「なんだなんだ？もうお終いかあ？…っ！かマルコは何やってんだ？油断してっからそうなるんだよ…っ！たっく…」

私のルミアさんでさっきから何度もテクニクで攻撃して全て命中しているのに、服に汚れが付く程度でダメージは与えられていない。

ルミア 「…なんなのこのヒト…！？本当に無敵！？」

マナ 「こ、この前私たちが戦った、『コーライル』の代表さんも無敵でしたが、それとは圧倒的に違います……」

私のこの発言にサングラスの男は反応した。

ファング 「ん？『コーライル』？…もしかして、お嬢ちゃん達がケルビンを処分したのか？」

マナ 「えっ！？あのヒトのこと知ってるんですか！？」

サングラスの男は腹をかかえて大笑いした。

ファング 「はーっはっは！…！…！そうかそうか！…！アンタらで処分してくれたのか！…！…！そうだ！オレがアイツに闇のOSを^{おす}プレゼントしてやったんだよ！…」

マナ 「お…ず…？」

ファング 「ああ…！…！そうかそうか！知らないんだっただ…！…！まあどおせ一生奴隷として生きていくことになるんだろうから話しちゃうか…！…！Original Seed…！通称・OS。オレ等のトップに立っているやつが作り出した人工SEEDだ！」

ルミア 「人工SEED！？そんな技術聞いたことが…！…」

ファング 「…無いだろうな！だが、驚くのはまだ早え！…！このOSは四年以上前…！SEED事変以前から存在したものだ…！…！だ

からまあ、OSって名前は最近ついたんだがな……」

マナ 「そんな前から……」

フアング 「まあ……あの男に渡したのはSEEDに自我を喰われ、暴走するだけで……決してヒトと適合しない失敗作の闇のOSだけだな！……ちなみにアイツは無敵になったわけじゃねえ！ただ、本人の自我が喰われ痛覚もなくなったただのSEEDの入れ物になっただけだ！」

マナ 「……そんなものをわかってて渡したんですか！？……ひ、酷過ぎます……」

フアング 「……ヒデエのはソイツに止めを刺して殺したてめーらもだろうが！……さてと、これから一生表世界に出ないとはいえ、話過ぎちまったかな？……そろそろオレも攻めさせてもらっぜ？」

男は鋭い目つきで私たちをにらむとツインクローを出現させて装備した。

フアング 「安心しなあ……殺しやしねえよ……！！」

「ディーン・サイド」

顔面血だらけになったマルコが顔を両手で押さえてふら付きながらなんとか立っている。攻撃は浅かったようで普通に生きていた。

マルコ 「…よくも…よくも……！！そよ風ごときが、この私の顔に傷をお……！！」

ディーン 「その傷でこれ以上やっても結果は見えてんだろ？…大人しく投降しやがれ…」

そついうと急に不気味な声で狂ったように笑い始めた。血を出し過ぎておかしくなったか！？

マルコ 「かは…かはははは！…！なんだ？勝った気でいるのか！？顔に一太刀入れただけで！？…貴様ごときに使う予定はなかったが、顔を傷つけられたからには…全力で八つ裂きにしたくなつたよ……」

「なんのハツタリだ？」

マルコ 「ハツタリかどうか自分の目で見極めるんだな…そよ風クン！…ハアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

叫び声をあげるとマルコの体中を黒いオーラが包みはじめた。全体を隠したかと思うとそのオーラはどんどん巨大になっていった。

インフィニティブラストかと考えたが、明らかに違うし、マルコはヒューマンだ。そして、あることを思い出した。

…ケルビンがキャリガインの姿になった時のことだ。

マルコ 「クフフ……！！いい！！いいですよ！！この姿は！！」

黒いオーラの中から変異したマルコが姿を現した。

SEEDフォームの『ディルナズン』に似ているが、両手のブレードは氷の剣のようになっていて、全身も氷の鎧のようなもので覆っている。そして顔の部分は氷でできた鬼のお面になっている。

周りの空気が一気に下がった。…なるほど、握手した時に寒気がオレを襲ったのはコイツの正体がこんな氷の化け物だったからか…

それよりも驚くことは、ケルビンのように自我を失っていないことだ。それにさっきまではコイツから何も感じなかった。

マルコ 「さてさて………それでは第二ラウンド・スタートです！」

周りの空気は冷たいのにオレは妙な汗をかいていた。

OS（オズ）（後書き）

マルコのOSの力による変身は、某死神漫画の仮面が破れちゃった人たちの変身みたいな感じですよw
そんなイメージで読んでください。

それではまた次回。

氷鬼（前書き）

今回はセリフ多めです。

ゆっくり読んでもらえるようにしています。

氷鬼

オレの目の前に今、鬼の面を被った氷の化け物がいる。そんなもつてソイツの体からは冷気が漏れている。そのせいであたりの空気は一気に冷たくなった。

デーン 「……オイオイ……。……その姿は一体どういうことだよ？」

マルコ 「まあ……。一種のSEEDフォーム化ですね。あなたも過去に何度か見たことあるでしょう？」

デーン 「そんな姿のSEEDフォームは見たことが無いんだがな……」

マルコ 「ああ……!!それはそうでしょう……。私はただのSEEDフォームではありません。Original SEED……通称OS。そちらを体内に取り込みました……。……と言ってもわかりませんよね？」

デーン 「……………」

マルコ 「ふふふ……。……いいでしょう……。……人ISEED『O

S^Ⅱ…。正式名称の通り、取り込んだ者、全てが独自に進化したSEEDフォームに変異することができます…」

デイン 「ちょっと待て…！…ケルビンは普通にキャリガインになったが、アレはOSとやらじゃないのか？」

マルコ 「…ああ！…彼が取り込んだのはOSですよ？…ただし、あのOSはヒトとはけっして適合しない、『闇属性のOS』なのですよ…。…闇のOSはその力が強すぎるあまり取り込んだ者の自我を喰いつくし、残るのはSEEDの意識だけで、その結果ただの『少し強い』SEEDフォームになるだけなのですよ…」

アレが『少し強い』だと…？

デイン 「闇の…ってことは他にもあるんだよな？」

マルコ 「ええ…。OSはそれぞれの属性のフォトンも使われていて、実用されているのは「火」「雷」「土」…そして私の「氷」…。あと、失敗作の「闇」。ご覧の通り本来のSEEDフォームに属性の要素を取り入れた形態に変異することができます」

デイン 「光はどうした…？」

マルコ 「闇の化身たるSEEDが光と交わると……？……さてさて少し長くなってしまいましたね……。…覚悟はいいですよね？」

マルコは両手のブレードを構え3歩前に出た。

いったい何が来る！？

マルコ 「ハアアアア……！」

ブレードを空中で振るとオレの頭上にオレの方に先端が向いた状態の氷柱が5本現れた。静止した状態で現れたが、すぐにオレを目掛けて振ってきた。

ディーン 「……！」

ガシャン……！！！！

マルコ 「……おいしいですね……」

オレは寸でのところで横に回避した。

ディーン 「……イカツイ見た目してるくせに、遠距離攻撃とは意外だな……。……テクニクの応用か？」

マルコ 「……ふふふ……。これが私の能力ですから……。……これはどうですか？」

今度は両手のブレードを体の両脇に向かって振って「セーフ!」のポーズを取った。

するとオレのまわりにオレの方を向いた氷柱が3本現れた。

ディーン 「何っ!？」

ヒュー……………パリンッ!!

氷柱はオレにぶつからず3本がぶつかり合って砕けた。オレは上に飛んで3本の氷柱をかわした。

マルコ 「…あまいですよ!」

刹那、オレの上に氷柱が一本現れた。

ディーン 「!!!!クッ!!!!」

何とか体をひねって避けようとしたが、空中では限界があり、左肩に突き刺さった。

ディーン 「ガハッ!！」

マルコ 「…まだ終わりませんよ!？」

すでに、オレの落下先に上を向いた氷柱が1本かまえていた。

ディーン 「…ぐっ…ウソだろ…!？」

マルコ 「串刺しです!！」

ザスッ!!!

ディーン 「……………つぶねえ…!!」

両剣ヴィヴィアンを地面に突き刺して氷柱に刺さるのは避けることができた。

ディーン 「…そいじゃあ、反撃行かせてもらっぜ?」

着地と同時に加速してマルコ（OS）との間合いを詰めた。

マルコ 「（…!!速い…!!）」

マルコがブレードを振りかざし、直接攻撃をしかけてきたが、オレはステップを踏んで方向転換をしてかわすと同時にマルコの後ろに回り込んだ。

ディーン 「オラッ!!」

キンッ!!!

ヴィヴィアンで後ろから突き刺そうとしたが、横から飛んできた氷柱がヴィヴィアンの柄の部分に当たって弾かれ、攻撃を外してしまった。衝撃でさっき氷柱が突き刺さった肩が痛んだ。

ディーン 「グッ!!!」

マルコ 「アナタは確かに速い…。…ですが、手負いでは…いや、手負いでなくとも目で追うことができないほどではない…ゆえに動きを予測して先に氷柱をセットすることができるよう…。…では死になさい!!」

オレの周囲に氷柱が4本現れた。

デーン 「チツ!!」

すぐにヴィヴィアンを掴み直して氷柱を破壊しようとするが、間に合わず一つ破壊した瞬間に他の氷柱が動きだし飛んできた。

かわそうと無理に足を動かしたら、足を絡めてこけてしまった。こけたおかげで氷柱はかわすことができたが、次に対応できない!!

デーン 「(!!まずいつ!!殺られる!!)」

.....

しかし、氷柱は現れない。

デイン 「(…???…どういうことだ?)」

マルコ 「かわされましたか…。…それなら…食らいなさい！」

マルコはブレードを振り下げる動作に入った。

オレはすぐに立ち上がり、現れた氷柱をかわした。

デイン 「(……なんでだ…?なんですぐに氷柱を出してオレに止めを刺さなかったんだ?……よく考えろ…。…何かの策になるかもしれない!!)」

マルコ 「なんですか?作戦でも考えているんですか?…フフ…無駄なことですよ…SEEDフォームと化した…私を…OSの力に生身で勝てるわけがないでしょう?」

デイン 「(……考えろ…。コイツがSEEDフォーム化した時から今まで、どんな攻撃をしてきた…。?…不審な点はあった

か？…弱点はあったか？」

マルコ 「シカトですか…。…さてさて…考えているところ悪いですが、いかせてもらいますよ？」

ブレードを一振りするとオレの後ろに氷柱が2本現れた。

ディーン 「…！！あぶねっ！」

しゃがんでかわした。

すると足元に一本現れて顔に目掛けて飛んできた。

ディーン 「…！！」

首を動かしてかわしたが、ほほにカスってしまった。

マルコ 「まだですよっ…！」

両サイドに一本ずつ現れ飛んで来たが、これは一歩下がってよけた。

デーン 「チツ…やつかいな連続攻撃だ…。…連続…？…まてよ…？」

オレはマルコの連続攻撃の回数について思いだし考えた。…そしてあることに気付いた。

デーン 「…そうか…そうか…！…ハッハッハ…！…そういうことか…！」

マルコ 「どうしました？頭でもおかしくなりましたか？」

デーン 「いや……ただ、お前の弱点と…倒す方法が思いついただけだ…」

声を出して笑うのではなく、オレはニヤリと笑みを作った。

気温の変化のせいかレリクスにビューと風が吹いた。

デーン 「…『蒼い風』……見せてやるよ……」

氷鬼（後書き）

なんだが、表現が難しかったです。

よくわからないところがあれば言うてください。

言葉でどこまで説明できるかわかりませんが…

ではまた次回。

風（前書き）

さてさて、この章もそろそろクライマックス！

どうぞお付き合いください。

風

マルコ 「…一体なんのハッターでしょうか？」

ディーン 「『ハッターかどうかは自分の目で確かめるんだな？』…さっきのお前のセリフの引用だ…。…行くぜ？」

地面を蹴りマルコに向かってヴィヴィアンを振り回しながら距離をつめにかかった。それに対応するようにマルコはブレードを振った。

ディーン 「（…振った…）」

マルコとディーンの距離が10mほどに詰まったところで、ディーンの前方に氷柱が2本ずつ現れた。

ディーン 「（……2本…）」

2本ともヴィヴィアンで破壊して、さらに距離を詰める。すると後方に1本、足元にななめ上…つまりディーンの方を向いた氷柱が現れた。

ディーン 「（…1本…。…いや後ろにもう一本…）」

身体を横に向けて回避した。回避後は体をそのまま一回転してもとの大勢に戻った。

ディーン 「（…これで計4本…）」

すでにディーンとマルコの距離は3mほどだ。あと一步で攻撃が届く。

マルコ 「小賢しいですよっ!？」

マルコの前に先端がディーンの腹にすぐ届く氷柱を作り出した。

マルコ 「今度こそ串刺しです!！」

ディーン 「…!!こりゃ予想がいつ…!!！」

即座に体重を右に傾けてかわそうとするが、すぐに氷柱は発射された。

ブシュ!!!!!!!!!!

血の飛沫が床に飛び散った。

マルコ 「……………!!! なっ!!!」

ディーンは左わき腹に氷柱がかすったせいで血が流れているが、マルコの左斜め下でしゃがんだ状態でヴィヴィアンを構えていた。

マルコ 「(かわしただっ!?!あの至近距離の氷柱をつ!?)」

ディーン 「これで5本だ…！」

マルコ 「…！…！まだですよ…！」

ブレードを振りかざす。

ズバッ…！！！！！！

ディーン 「…振らせねえぞ…？…そのブレードを振るのがお前の能力の発動条件だろ？」

斬り落とされたマルコの左のブレードが床につく。

マルコ 「ああ！……腕があああああ！……！」

ディーン 「あと、一振りで出現させることができる氷柱は5本までみたいだな……？」

今さっきまで左前にいたディーンの声がマルコの後ろから声がした。

マルコ 「（こ……コイツいつの間に……）」

ディーン 「アンタはオレのことをそよ風って言うってたけど……案外目で追えないもののようにだな……？」

ディーンはマルコの背後で両剣を構え、フォトン出力を高めた。

ディーン 「コイツは……そよ風とは少し違うぜ……？」

ズバババ……！！！！

両剣を高速で回転させながら振り下ろした。マルコの背中 of 氷の鎧が砕け散った。

マルコ 「グハッ！！！」

ザシュ！！！！

すぐにディーンは高くジャンプして落下の勢いにのせて両剣を振り下ろしてマルコの鎧の中身を切り裂いてそのまま床に刺した。

マルコ 「（……反撃をする間が……！！！！）」

ディーンは着地すると両剣を蹴り上げキャッチした。そして回転させながら体もねじり、溜めを作った。

ディーン 「……………吹き飛ばよ……？」

身体のねじれを一気に戻し、両剣を高速回転させて、前方にステッ
プを踏んだ。

マルコ 「……………速過ぎる……これが……『蒼い風』……！
？」

ザンシ

> i 2 9 9 9 1
— 3 7 5 7
<

両断されたマルコが床に倒れると黒いオーラに包まれ元の姿に戻った。元の姿は腕もあるし、身体も繋がっている。

ディーン 「…フォトンアーツ『スパイラル・ダンス』……。…
そよ風にしちゃあ…激しすぎたか？」

ドサッ!!

ディーン 「なんだっ!？」

ルミア 「……うっ……う」

ルミアがディーンの横に吹っ飛んできた。

ディーン 「しつかりしろ！ルミア！！」

ファング 「なんだなんだあゝ？マルコのやつ、ホントに負けたのか？SEEDフォーム化まで使ったのに情けねえなあオイ！！！死んだかー？」

グラサンの男越しにマナが気絶しているのが見える。

ディーン 「マナッ！？」

マナに向かって駆け出した。

ファング 「オイオイ？俺様を無視してんじゃねえよ！！！」

すぐにファングがディーンの前に立ちはだかった。そしてディーンを蹴り飛ばした。

ディーン 「ガハッ！！！」

ルミアの横に蹴り戻された。

ファングは首をコキコキと鳴らしながらディーンに近づいて来た。

フアング 「ったく、あのクソメガネ仕事増やしやがって……！！
っ！わけでその青髪い？死ぬ覚悟とかできた？」

風（後書き）

ちよつと能力が弱すぎましたね…（汗

次回はこの章の最終回です。

嘆き（前書き）

4章最終話です！

嘆き

…痛てえ…。…氷柱で刺された左肩が…氷柱で切られた左わき腹が…アイツに蹴られた鳩尾が…。オレはそれらの激痛でぶつけられた壁から動くことができなかった。…特に最後の蹴りがめちゃくちゃ効いた…本当に脚でけられたのだろうか？硬い金属の太い棒で殴られた感じた。間違いなく骨がイツてる。横にはルミアも倒れている。

あのグラサン男は一步一步オレ達に近づいてくる。

フアンゲ 「ハツハツハア！！辛そうだなあ！オイ！！…でも樂にしてやるのはちよいと後だ…！公的なビジネスと私的なビジネスをしねえといけねえのよ…！？だから…念仏でも唱えて待ってるよ？ヒヤハハハハハ！！！！」

そういうとオレ達から少しづつ離れて行って、倒れているマルコの横に立った。そして、ナノトランサーからピストルのような形の何かを取り出した。

フアンゲ 「マルコよお？死んではいねえよな？…オレの任務を果たさせてもらうぜ？」

マルコ 「……………すう……………」

マルコは気絶をされていて意識はないが、呼吸はしていた。
ゆっくりとピストルをマルコに向ける。

デーン 「（…アイツ…。…まさか！？）」

ルミア 「（…仲間を！？）」

ビューーン……！

レーザーが発射され、マルコにふれるとたちまちマルコの体は粒子のようになり、消えて行った。…いや、そのピストルに吸い込まれていったという感じだ。

デーン 「……！！……な、何をしたんだ！？」

ファング 「さてと…公的ビジネス終了！！…次は私的ビジネス

行きますかい!!」

マナの方を振り返って歩き出す。オレ達の方に背中を向けていて隙だらけなのだが、身体が動かないし、仮に動けたとしても今の状態じゃ止められる気がしない。

ディーン 「…てめ・・・何するつもりだ…!？」

ファング 「ああゝ?だから私的ビジネスって言うてんだろ!？」

気絶しているマナの横に立ってさっきと同じように銃形体のものを向ける。そして…

ディーン 「やめろ!!!!!!!!」

ビューン!!!!!!!!!!!!!!

レーザーの着弾と共にマナは粒子となり、消えた。

ファング 「キヒッ！…終了…！！！」

ディーン 「……マ…マナ……」

とてつもない絶望を感じた。4年前と似ている。オレは放心状態になった。

ファング 「なんだなんだあ？そんなにこの女が大事だったのかあ？…まあ…安心しろや…殺しちやいねえ…！！」

ディーン 「…………じゃあ何をしたっ！！…ゲホッゲホッ！！」

ファング 「俺様の蹴りけっこういいところ入ったから叫ぶとつれ

えぞ？…この銃はリボルバー型のヒト用ナノトランサーだ…！意識の無い者なら最大二人まで3時間の間保管できる！よくわからんが、うちのトップがナノトランスやワープホールの技術を応用して作り上げたんだと！便利なモンだが、条件がキツイのがやかいだな…」

ヒトをナノトランス！？そんなことができるのか！？

フアング 「…とまあ、色々しゃべっちまったが、お前これから殺すからあんま意味無さげだな…！ハハハ…！！」

ヤバイ…！！オレこっちに来る…！！
オレもルミアも殺される…！！

歩きながらライフルを出現させた。

フアング 「最初に殺っちゃうのは…ど…ち…ら…に…し…よ…
う…か…な…！？て…ん…の…か…み…さ…ま…の…」

銃口をリズムにあわせてオレとルミアの顔に順番に向けている。

フアング 「…お…い…う…と…お………」

ヴァーニッシュ……！！

「動くな……！！」

この部屋の入口のドアが開き何人もヒトが入ってきて、グラサン男に銃を向けている。

全員ガーディアンズの制服を着ている。次々と部屋に入ってくる。

隊員 「ガーディアンズだ！！そこのお前！！何者だ！！」

援軍か！助かった！形成逆転だ！！…でもなんで援軍が来たんだ？

隊員 「過去の例と同じように、マルコが同行したミッシェンでAフォトンの反応が消えたから、来てみれば…… どのような状況なんだ！？」

ファンゲ 「ああゝあ…めんどくせえことになっちまったな…！これじゃあ全員殺さないと口封じはできそうもないが…。… つつても皆殺しにしたら大事になってオレが上に殺されっからな…。… 青髪の兄ちゃん…命拾いしたな？」

そういうと、ライフルをナノトランスして球体の何かを取り出した。なんだ？

ファンゲ 「じゃあずらからせてもらっわ！」

その球体を地面に叩きつけようとする。…スタングレネードの類か

！？

デイン 「！！！！まてっ！！マナを……っ！！！」

カッ！！！！！！！！

凄まじい光で視界が白一色に染まる。完全に白に染まる前にオレが見たのは白い空間の中に消えていくグラサン男の姿だった。

10秒もしないうちに光が消え、30秒ほどで視力は元に戻った。しかし、すでに部屋の中に男の姿はなかった。

隊員 「逃げられたかつ！？……だが、外にもバリケードを張ってある！捕まえるのは容易そうだな！……それより、二人とも無事か！？き、君！血がこんなにてているじゃないか！？」

隊員の一人が駆け寄ってきて、オレに話しかけるが耳に入ってこない……。

ディーン「マナ。マナ。マナ……守れなかった……。
 ……まただ……。クソ……。クソ！クソオオオオオオオ
 オオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

悲痛な叫びがレリクスに響き渡った……

↓数時間後・どこかの廃墟↓

フアングと仮面の女が何かを話している。

フアング 「とりあえずマルコの奴は回収しといたぜ？Aフォトンの結晶も回収はしたみたいだ…これでまた、OSを作り出せるだろ？」

仮面女 「……………そう……………。……………感謝するわ……………。同じ『ペンタクル』のアナタを同行させて正解だった……………」

ファング 「まあこっちはこっちで金になりそうな奴隷が手に入ったからかまわねえよ……」

仮面女 「……金になりそうな奴隷？」

ファング 「ああ！今はうちの牢に入れてあるんだが、ツヤのいい緑の長髪の娘だ！……まだガキっぽいけど、あの年頃が一番いい値段で売れるんだ！もう一人ガーディアンズの娘がいたんだが、気絶しなかったし、リボルバー・ナノトランサーの定員オーバーだったから連れてこれなかったんだよなあ……。ガーディアンズと言えば途中で援軍が来やがって脱出の際レリクスの外にバリケード張られててよ？マジ面倒臭かったわ……それにしてもあいつらは……」

（以下省略）

自慢げに語るファングを見つめながら、仮面の女は黙って話を聞いていたが、ボソッと質問をした。

仮面女 「……それはガーディアンズのメンバーではないの……？」

ファング 「ああ！！確かギルドの方だったと思うぜ？」

これを聞いた途端、仮面の女はくすくすと笑いだした。

フアング 「なんだ？何がおかしいんだ？オイ？」

仮面女 「……くすくすくす……。……ごめんなさい……。……なんで
もないわ……」

フアング 「不気味な女だぜ……。じゃあこれから別な取引がある
から上がらしてもらおうわ……。……！」

仮面女 「……そう……。さようなら……。……」

フアングはその場を立ち去った。

仮面女 「……どうやら気付いていないみたいね……。緑色の
長髪のギルドの少女……間違いなさそうね……。でも彼は気付い
ていない……。皮肉ね……。面白いことになって来たじゃない……？」

クスクスと笑いながら闇へと消えて行った。

嘆き（後書き）

ハイ…以上「吹き荒れる蒼い風と蠢く黒い影」でした！蒼い風は吹き荒れましたが、黒い影は蠢いてたのか微妙です…

次章もよろしくお願いします！

五芒星（前書き）

新章です！

あまり書く時間がないので文量は減りますが、更新のペースは変えずにガンバっていこうと思います。じっくりですが、よろしくお願いします

五芒星

第5章 「星碎きの刻」

> i 2 9 8 1 8 — 3 7 5 7 <

レリクスで叫んだ後の記憶がない。どうやら失血と痛みで気絶したようだ。

目が覚めたらそこはギルドの医務室のベッドの上……お約束のパターンである。

一瞬レリクスで起こったことは夢なんじゃないかと思ったが、肩やわき腹に巻いてある包帯や、腹部に残る痛みからすぐにそんなわけが無いと思い直す。

部屋には誰もおらずオレしかない…

アレからどれくらい時間がたったんだ？あの後どうなったんだ？…
マナは無事なのか？

……情報がほしい…。

身体を起こしてみると腹部の痛み以外、特に痛みは感じず、情報を得るために部屋の外に出ようと思った瞬間、医務室の扉が開いた。

ラグナ 「よっ！…目え覚めたんだな？」

デーン 「……ああ…。…なあ…オレが倒れてからどれくらい時間がたったんだ？」

ラグナ 「…ざっと2日くらいだな…」

2日だっ！そんなに長い時間寝ていたのか！？オレは！？

ディーン 「マナは！？マナはどうなったんだ！？」

思わずラグナに肩に掴みかかっていた。

ラグナ 「お、オイ！まずは落ち着けよ！？」

ディーン 「……………。…………わるい…………」

ラグナ 「…………マナちゃんは…………拉致られた…………」

ディーン 「……………」

あのグラサン男の威圧感から考えるに、結果はおおよそ見当がついていた。ただ、そんな結果を認めたくなかった。

ラグナ 「…………今後の動きについてフォレスから話があるそうだ…………。目が覚めて動けるようだったら連れて来いって言われたんだが、どうだ？動けそうか？」

黙って起き上がり、ベッドから降りて数歩進む。…大丈夫、腹部は痛むが体は普通に動く。

ディーン 「…大丈夫だ…」

オレ達は医務室を出て、ミーティングルームに向かった。

「ミーティングルーム」

室内にはフォレス、エレーナの他に赤い髪のデューマンの女と、どういいうわけか着物を着たキャストが座っていた。

フォレス 「……ああ！ディーンさん！目覚めました！……どうぞ、腰を掛けてください…」

いつものように表情に余裕がない。やつれている様にも見える。当たり前だ…娘を奪われて平気な父親はいない。

ディーン 「……そっちの二人は？」

フォレス 「…ああ…そうですね、まだ会ったことはありませんでしたね…こちらの赤い髪の女性が…」

フォレスが紹介しかけるのを遮るようにその女が口を開く。

ギラード 「…ギラードよ…」

それだけ言うとまた虚空を見つめている。

その瞳と髪は血のように鮮やかな朱色をしていた。 ……ギラード？

…朱色？…どこかで…。

ラグナ 「…お前、このヒト知らないのか？『朱い魔女 ギラード・ルーラー』と言えば結構有名な傭兵だぞ？」

！…！…そうだ！…！…何度かこのヒトの活躍を新聞で見たことがある！…！

どんな凶悪犯も、凶暴なモンスターも彼女の朱い髪を見れば後ずさりをし、その朱色の瞳で見つめられたら戦意を喪失するほどの猛者……ついたアダ名が『朱い魔女』。

そんな実力者がいるとは…このギルドは本当になんなんだ！？

ギラード 「……おしまい……」

フォレス 「……。……彼女にはマナの特訓をしてもらってね、いわばマナの先生と言ったところですね……。そして彼が彼女のパートナーを務めているヤマトさんです」

紹介をされると着物のキャストは立ち上がり妙なポーズをとる。……時代劇でたまに見る武士が名を名乗るときのポーズだ。

ヤマト 「ああ！ディーン殿！！お初お目にかかる！！拙者、生れはパルム、育ちもパルム……科学の星にて科学の武士として生き長らく主の元につかえておりやしたが、ある冷たい夜の日のこと……」

歌舞伎役者のような喋り方で自己紹介というよりも自己語りをしはじめたが……

ギラード 「……やめて……」

先端がとがったウオンドをヤマトの首元につきつける。

ヤマト 「…す…すまぬ」

フォレス 「彼も、かなりやり手の傭兵ですよ…。さて、一段落ついたところで本題に入りましょう。…ディーンさんにはまず、このギルドの真の存在意義とマナをさらった人物についてお話しします…」

部屋が暗くなりミーティング室のテーブルの中央に置いてある端末から立体写真が1枚現れた。

………あのサングラスの男だ。

ディーン 「………コイツ………!!」

フォレス 「ガーディアンズの方から聞いた情報から検討するに、マナをさらったのはこの男で間違えありませんね?」

そうだ…間違えるはずがない。

オレは黙ってうなずいた。

フォレス 「…この男、『ファング・テェヴェ』はとある違法商団の首領であると同時に五芒星の一角を担っています。」

ディーン 「…五芒星？」

フォレス 「はい…。ペンタクル…それは5人の人物から構成されている同盟。目的は不明ですが、現在OSと呼ばれている人工SEEEDを使用した実験を行っている他、それらの失敗作をドラッグのように販売、また犯罪に利用している集団です…。OSとはディーンさんも戦ったからわかりますよね？」

ディーン 「ああ……。…それじゃあ、マルコを倒したからペンタクルは後4人なのか？」

フォレス 「いえ、彼はペンタクルではありません…」

ディーン 「どういうことだ？」

フォレス 「ペンタクルとは同盟のトップ5人のことをさし、それぞれが部下がいるため、組織5つ分の強大さを持ちます。そのマルコという人物はファングか、他のペンタクルの誰かの部下だと思われる…」

…確かあいつら会話でそんなことを……………

ディーン 「ペンタクルについては、大まかで謎だらけだが、もう大丈夫だ…。…ギルドの存在意義ってのはなんだ？」

フォレス 「…それは……………」

一旦溜めてその場にいる全員に目を配る。他のメンバーは知ってるようで、うなずいている。

フォレス 「…………ペンタクルを…壊滅させることです……………。…このギルドは、対ペンタクルの…傭兵集団です……………」

ディーン

「……はっ？」

五芒星（後書き）

キャラクター紹介（12）

ギラード・ルーラー

種族：デューマン（女性）

年齢：29歳

身長：168cm

体重：49kg

髪色：赤（朱色）

髪型：ワイルドな感じのポニーテール

イメージキャラクターボイス

ICV：小林ゆう

詳細：『朱い魔女』の二つ名を持つ。今までずっと一人でミッシェンをこなすフリーの傭兵だったが、3年前にフォレスに勧誘された。戦闘はテクニクが主体だが、あらゆる武器を自在に操る縛りがないタイプ（一応フォース）。口数が少なく、表情も無いが、教え子のマナのことはとても大事に思っている。また、パートナーのヤマトのことは嫌いではないが時々ウザさで殺意がわくらしい。

名前の由来はオーストラリアの首相、ジュリア・ギラードから。

写真（前書き）

内容一話に詰め込み過ぎた気がします…。

なんか変な部分あったら言ってください！

それでは始まり〜w

写真

……うう……。ん！あれ？私寝てた？いつから？

…アレ？ここは…どこ？

目を覚ますと薄暗い部屋に私はいた。

起き上がって部屋の様子を眺めるとそこがすぐ牢屋だと気付いた。

……そして、レリクスでのことを思い出した…。

マナ 「私…捕まっちゃったんだ…」

牢屋の外には見張りがいる様子は無かったが、当たり前のように鍵がかかっていて外に出ることはできない。

どうしようか考えていると不意に後ろから声がした。

??? 「…お嬢ちゃん…やっと起きたのかい？」

男の人の声だ。振り向くとボロボロの布をまとった乞食のような格好をしたビーストの男の人がいた。

マナ 「！！誰っ！？」

??? 「何、警戒することは無いさ……お嬢ちゃんと同じ、ここに連れてこられた奴隷だよ……」

マナ 「えっ？奴隷……ですか……？……奴隷って法律で認められてないんじゃない……」

奴隷男 「ハッハッハ！面白いことを言うね……。やっぱり最近捕まってここに連れてこられたのか……。……まだまだ若いのに……」

その人の目は本当に死んだ魚のようだった。そしてその眼から一切の希望を感じなかった。

マナ 「そんな……！私いやです！……協力して脱出しましょうよ！……あ、自己紹介してませんでしたね！私の名前はマ……」

私が自分の名前を言いかけたが、その人は声が遮った。

奴隷男 「あゝあゝ自己紹介とかいいから…どうせ名前なんてすぐに意味を無くすさ…。…それに君とは明日までの付き合いだからね…協力して逃げるにも時間が無さすぎる…」

マナ 「…ど…どういうことですか…？」

奴隷男 「…明日の日の出と同時に、俺とお嬢ちゃんとは別々のところに売られる…。俺はどっかの組織の実験室でお嬢ちゃんは金持ちに売られるそうだ。…昨日、お嬢ちゃんが寝ているとき牢屋の前で飯を持ってきたやつが嫌味のように教えてくれたよ…」

マナ 「…うそ…？」

奴隷男 「…ああ、ホントさ…。俺も長いこと労働系の奴隷をしてきたが、実験室に売られるってことは……死んだかもな…ハハハ…。…お嬢ちゃんも変態金持ちの相手か…可哀そうに…」

マナ 「……んで…？」

奴隷男 「…ん？何か言ったかい？」

マナ 「なんで笑っていられるんですか！？…どうして…どうして死ぬかもしれないのに……諦めちゃうんですか！？何もしよ

うとしないんですか!？」

…こんな大きな声を出したのは久々かもしれない…。気付いたら涙も出てた。

奴隷男

「……お嬢ちゃん……」

マナ

「……うっ……うっ……ぐすっ……ひっく……」

その人はどうしたらいいのかわからず一瞬戸惑っていたが、すぐに口を開いた…

奴隷男

「…俺も…何度も逃げようとしたんだ……でも失敗した……それで、このザマさ……」

布で隠れていた手を私に見せてくれた。…私は驚きのあまり声が出なかった…

その人の手に爪というモノがなかった。

マナ 「……！！！！……うっ……うっ……おう……」

奴隸男 「……ごめんよ……驚かせるつもりはなかったんだ……ただ、失敗するとどうなるかを知ってもらいたかったのさ……。……それに俺はまだついてる方さ……殺された奴がほとんどだ……」

マナ 「……ぐすっ……ふう……ふう……。……ごめんなさい……わ……私、アナタのこと、その……勘違いしてました……」

奴隸男 「……いや、いいんだ……実際今はお嬢ちゃんが思っている通り、生きることを諦めてたダメなやつさ……」

マナ 「……そんなことないです！！必死に逃げ出そうとしたんじゃないですか！……それにあんな傷をつけられたら……」

奴隸男 「……それでお嬢ちゃん……この手を見ても脱出を試みるかい？……もしかしたらもつと酷いことになるかもしれない……」

マナ 「……命がけで助けてくれた人がいるんです……。……でも、ただ捕まって待っているだけだったら、またその人を危険な目に合わせちゃいます……。……だから……どんなリスクがあっても……私は……逃げ出してみせます……」

奴隷男 「……覚悟は…あるんだな？」

目を瞑り何か悟ったような表情をした。

マナ 「…？」

奴隷男 「お嬢ちゃんを見ていたら、なんだか生きる気力がわいて来たよ…。…一つ…昔考えた脱走の方法があるんだ…君のよ
うな女の子が必要になるであろう作戦だったから使うことはできな
かったが…聞いてくれるか？」

あ…………このヒト…………目が…！

マナ 「は、はい…！」

〈ギルド・ミーティングルーム〉

ディーン 「…ペンタクルを倒すため？ ……確かにヤバそうな組織だけど目的がピンポイント過ぎないか？」

フォレス 「……そうですね。 ……これを見てください…」

> i 3 0 8 3 6 — 3 7 5 7 <

懐から一枚の写真を取り出した。…少し昔の写真のようだ…

写っているメガネの男に見覚えがある。

ディーン 「…これって……」

かなり若いがこの目と髪色は変わっていない…。…間違いない…

フォレス 「…ええ、そうです…私です…。これは私がある研究機関に属していた時代に取ったものです…」

研究機関！？…やっぱりコイツ何者だ！？

フォレス 「ディーンさん……マナから母親のことは聞きましたか？」

ディーン 「ああ……マナを産んだ時に亡くなったって……」

フォレス 「そうですか……その中央の女性……『ミドリ・クロバー』……いや、『ミドリ・アーラニヤカ』こそ、私の妻……そう、マナの母親です」

……確かに似ている……。……ただ、この女性、マナに似ているとは思
うがそれ以上に……

エレナ 「……？ディーンさん？どうしました？そんなに写真を見つめて？」

ディーン 「あ……ああ、何でもない……。……で、この写真がギルドの目的とどう関係あるんだ？」

フォレス 「……このメンバーで……OSを作り出してしまったの

です…」

ディーン 「!？」

フォレス 「…少し昔話をします…。…20年前、私たち三人はその研究所で人工生命の開発をしていた研究者でした…。…そして、3年後…私たちは成功したのです…。人工生命を作り上げることに…」

人工生命！？明らかに科学の領域から一線を超えている…そんなことが許されていたのか？

フォレス 「…そこで完成したのが…そう…OSなのです…」

ディーン 「!？」

バカな！？SEEDが現れたのは4年前だぞ！？なんでOSが20年前に…

フォレス 「OSは当初、新生物という意味をこめて『ネオ』と呼んでいました…。いや、驚きましたよ…SEEDが現れた時には！構造がそっくりなんですよ！」

ディーン 「…SEEDとOSが似ているのは偶然ってことか？」

フォレス 「…はい、そういうコトですね…。…話の続きです…。…完成したOSはSEEDのように違う生物に寄生し、その生物を強化することができました…。…そしてそれはヒトにも適用すのかと、あの男…『クイント・エストレジャ』は自らを実験体として…暴走し、OSのサンプルを奪い、行方不明に…私たちはネオを世間に発表しなかった…。…そしてあるときOSを使う集団が現れた…。…そういうことです…。…」

ディーン 「……………」

フォレス 「…ですから私が責任を持って自ら作り出したものを消し去らなければなりません…。…勝手なのはわかっています…。…ですが…どうか力を…。…」

ディーン 「…誰がOSを作ったとか、アンタの過去がどーだとかは、問題じゃない…。…」

フォレス 「…えっ？」

ディーン 「今は、マナを助けることだ！！そのためにオレはペンタクルをぶっ潰す……」

フォレス 「……ディーンさん……」

ディーン 「……いいから……マナの居場所を教えてください……」

フォレス 「そうですね……。……エレナ、説明をお願いします……」

エレナは中央の端末を操作して地図を出現させた。これは……モトウブの砂漠地帯だろうか？赤く記されている部分がある。

エレナ 「……マナのナノトランサーに仕込んでおいた発信機によると、現在この赤い部分の建物……しかも発信機のバグが強いことから地下深くにすることがわかっています……。敵戦力も不明のため、このままでは奪還がとても難しいので、取引の時を狙います……」

ディーン 「取引？」

エレナ 「はい……。……先ほども説明があつた通りファングは商人です。そして、彼にとってマナは商品……。『商いとは疑うことか

ら始まる』という言葉通り、信用できない買い手をアジト内部には入れないでしょう…。…そこで取引の情報を集めたところ、今から7時間後…。…明日の日の出にこの建物の裏手で取引を行うという情報を買い手側の下で働いているローグスから買い取りました…。…その時、マナも建物の外に出ます…。…そこを狙います…。…このミッシヨンのメンバーは、ラグナ、ギラード、ヤマト…。…」

間を開けてオレの方を見る。そして見ているのが肩や腹に巻いた包帯だと気付く。

エレナ 「ケガは…大丈夫ですか？」

デイン 「……問題ない……！」

その後、作戦の詳しい場所について説明があった後、一時解散となった…

オレはマイルームに戻り武器の調整をした……。

ディーン 「……待ってるよ……」

夜は更けていく……

写真（後書き）

キャラクター設定（13）

ヤマト

種族：キャスト（男性）

年齢：40くらい

身長：195cm

体重：200kg

髪色：黒

髪型：基本的に機械だが、後ろにちょん髷がついている。

ICV：大塚芳忠

詳細：ギラードのパートナーでサムライに憧れる時代劇大好きさん。

「〜ござる」などふざけた口調で話すが、剣の腕前はまさにサムライ！傭兵としての実力も高い。意外とギルドの古株。

名前の由来は戦艦大和から。

作戦（前書き）

今回、ちょっとだけよくある変態な表現がありますが、特に問題ないと思います。気にせず読んでもらえればと…（オイ）

作戦

くモトウブ・旧砂漠都市跡地く

デイン 「……ここにマナが……」

まだ夜明け前……オレ達は発信機の反応と情報を頼りにその昔、とても栄えたというが、500年戦争の戦火により、一晩で焼き払われた砂漠都市『ザート』の跡地の一角にあるファング達が取引をする場所の近くで張っていた。跡地と言っても当時の建物はある程度原型をとどめている。しかし、砂嵐や風化によって砂に埋まったり、脆くなり崩れていたりしてまるで侵略モノの映画の中に入ったかのような風景だ。

万が一、ばれた時のために二組に分かれて隠れた。オレはラグナとペアになり、建物と建物の間の路地に隠れた。ヤマトとギラードは少し離れた廃墟の2階から様子を見ている。

ラグナ 「……ふうく……やっぱり日が出てないときの砂漠は冷えるな……」

緊張感のないセリフに聞こえてしまうが、夜の砂漠は本当に寒い。ワイシャツに薄いコート一つのラグナとオレは極寒の中、ある廃墟の入口を見張っていた。

ディーン 「……まだ動きはないな……。…乗り込むか？」

ラグナ 「…おっ？珍しいな！ディーンが冗談言うとは！」

ディーン 「……割とマジで言っただけど…？」

そう割とマジな顔でラグナの方を向くと、その顔を見たラグナは「あちゃー」と言わんばかりの表情をした後、オレの肩に手を載せた。

ラグナ 「……まあ、気持ちはわかるよ…。でも力入り過ぎてもいい結果は出ねえぞ？いったん肩の力抜こうや…！」

…やっぱりこのヒトは兄貴肌なのだろうか？こんな時でも冷静だ。オレは冷静でいるのがギリギリな状態だったが、どうにか抑えられた。

ディーン 「……ああ……。…すまない…」

時間は過ぎて行った……

「廃墟地下の牢獄」

檻の中も外も松明の明かりだけでほとんど薄暗くなっている。
マナは部屋の中央で眠っていて、奴隷男は布のローブを被って部屋の隅で座っている。寝ているか起きているかはわからないがピクリとも動かない。

看守 「おい！お前ら起きろー！！……ここから出してやるよ……
ヒヒヒ……」

キツネ顔のヒューマンの男が階段を下りてきて、持っているライフ
ルで檻をガンガン叩いて嫌味をいいながら二人を起こす。

奴隸男 「……ああ……起きている……。……すぐ出る……」

男は立ち上がり、マナのところへ起こしに行った。

奴隸男 「……お嬢ちゃん……覚悟を決めるんだ……！……売られる時間だそうだ……」

マナ 「………は、はい………」

マナが起き上がる瞬間、奴隸男は耳元でささやいた。

奴隸男 「（昨日言ったとおりに頼む……俺を信じてくれ……）」

看守 「よいしい！二人とも出たな？…ん？どうした？女？
もじもじして？」

牢から出たマナは顔を赤らめて、動きづらそうにもじもじしていた。

マナ 「…あ…あの…ト…トイレに行きたい…です…」

看守 「はあゝ？そんなの我慢しろよ？」

マナ 「……でも……き、気絶してましたけど……この
檻に入れられてから……ずっと……してませんし……」

マナはその場に座り込んでしまった。

看守 「…ったく……奴隷が……。……ん?!」

看守は何かを思いついたかのようにニヤリとした。

看守 「…いいぜ?ただし、逃げる可能性もあるからその隅でやれよ…?…俺が見張ってやるよ!ヒハハ!!」

マナ 「……………」

牢屋の前の廊下の隅にいき、そこでまたしゃがみ込む。

看守 「ヒハハ!!早くしろよ!!脱げよ早く!!漏れちまうぞ!?手伝ってやるうか!?ヒハハ!!」

看守はハイテンションでマナの方を向いて野次を飛ばしている。スカートの中に手を入れているマナに夢中だ。

奴隷男 「……下衆が……………」

看守 「んあ？」

ゴスッ！！！！

看守 「げふっ！！！！」

奴隷男の拳が看守の顔の横を直撃し吹っ飛んで檻に叩きつけられる。
そして床にライフルが落ちた。

看守 「……いったあ……て……てめえ……！……あ……」

見上げると自分に銃口を向ける奴隷男の姿があった。

奴隷男 「……変態看守が……まあ、おかげで逃げられそうだ……」

バン
ツ
!!
!!
!!
!!

奴隸男 「…うまくいったな…。…お嬢ちゃん…すまなかったな…。…あんな演技させて…」

マナ 「私は大丈夫です…。…このヒト、し…死んじやったんですか？」

奴隸男 「…いや、スタンモードだから死んではないはずだ…。…そうだ、このライフルはお嬢ちゃんが持っていてくれ…」

マナ 「えっ！？…私、そんな大きい銃、使えませんか？おじさんが持っていた方がいいんじゃない？」

奴隸男 「…俺は大丈夫だ…。お嬢ちゃんは体術が使えるわけでもなさそうだし、ナノトランサーも着けてないことから戦えないが、俺は肉体労働がほとんどだったから腕力には自信がある…。それに銃は使えなくても脅しにはなる…。…だから、お嬢ちゃんが持っていてくれ…」

マナ 「…は、ハイ…（このヒト、歳は全然違うけど、ディ

ーンさんに少し似てる……）」

ライフルを受け取るとき、じいゝと男の顔を見つめる。

奴隷男 「ん？お嬢ちゃん？」

マナ 「い、いえ！！な、な、なんでもないです！！……そ、それより、私のナノトランサーとコートが奪われていると思うんですけど、それを回収できれば、私も役にたてるかと……」

奴隷男 「……そうか……じゃあ、お嬢ちゃんの持ち物が保管されてるところを探しながら、上に向かおう……！！」

マナ 「……は、ハイ……！！」

二人は倒れた看守をそのままに階段を上って行った。

く 廃墟・外 く

ラグナ 「…日が明けるぜ？…準備はいいな？」

オレは片手剣とハンドガンをトランスして両手に構えた。

ディーン

「……いつでも……！」

作戦（後書き）

はい、よくある脱走方法です。

そして今回挿絵は残念ながらかけませんでしたw

次回は描けるか！？…お楽しみに…

土煙（前書き）

> i 3 1 3 6 2 — 3 7 5 7 <

扉絵（？）とおまけ書いてみました。ついカツとなつて、おっさん（ロリコンではない）と少女のペアとチビキャラを書きたくなつた。反省はしている。後悔はしてない。

たまにこんなのも描いていこうと思います。文章も手を抜かずに関立できるようにがんばるので応援していただけるとうれしいです。

それでは27話です！

土煙

（廃墟前・取引場所）

廃墟の中から大柄のビーストが出てきた。ファングだ。両脇に武装した男が二人ついている。

ファング 「……まったく、どおいうことだあ？！奴隷に逃げられたってよお？！看守は何やってたのよ！？」

右横の男 「……申し訳ございません……。看守は気絶しており……」

ファング 「『申し訳ございません』で済んだら世の中色々必要なくなんだよ！！ホラ見る！！取引先がお待ちしてらっしゃんぞ！？」

廃墟の外ではすでに取引相手と思われる、身分の高そうな肥満体型の男と黒スーツの従者数人がファングを待っていた。ファングが出てくるのを見ると『おお！』と言わんばかりの表情でファングに駆け寄った。

肥満男

「おお！！ファングよ！待ちかねたぞ！」

これに対してファングは、いつもとは別人のような態度で貴族張りのお辞儀をした。

ファング

「お待たせしました…デブ……デИБ卿！」

デИБ

「オイ！てめー今、デブって言っただろ！？」

ファング

「そんな、私があなた様にそのようなことを申すわけがないでしょう？…空耳では？」

この返しに明らかに腑に落ちない様子だったが、デИБは話を進めた。

デИБ

「…ったく…まあいい！それで？手に入れたという緑髪の娘はどこにおる！？」

ファング

「ああ…そのことについてなのですが、少々こちらの不手際で、奴隷どもの脱走を許してしまいました…。現在、全力で搜索しておりますので、もう暫しお待ちいただきたい…」

これを聞いたデイブはファングに掴みかかった。しかし、慎重さがかなりあるので、胸倉ではなく、横腹あたりを掴んでいた。

デイブ 「どういうことじゃ！！お主も商人ならば、取引先の希望に完全に答えぬか！？ワシは今すぐ、その緑髪の娘で遊びたいのじゃ！」

言い終えた後、上を見ると物凄い形相のファングの顔があった。

ファング 「…離せよ変態デブ野郎…喰うぞコラ？」

デイブ 「…ヒッ！！」

すぐさま手を離して、ファングから距離を取った。

デイブ 「わ、わかった…！す、少しの間待ってやろつぞ…！！…だから食べないで…」

ファングは表情をさっきまでの営業スマイルに戻した。

ファング 「ご理解ただけて光栄でございます…今しばらくお待ちを…」

廃墟の方に向かって歩き出したが、何かを察してファングは振り返った。その眼は、あの肉食獣のような眼になっていた。

ファング 「…臭うぞ？」

〈取引場所・周辺の廃墟の二階〉

廃墟に空いた穴から大弓でファングを狙うギラードと通信機器を操作しているヤマトがそこにはいた。

ヤマト 「ギラード、今拾ったの奴らの会話を聞いたでござるか？」

ギラード 「…ええ…奴隷が逃げたって……。…緑髪の娘って言うってたからマナのことね…」

弓を構えたまま振り返らずに答えた。

ギラード 「じゃあ、人質に恐れることなく射つていいのね……？」

ヤマト 「うむ！……作戦開始でござる……！」

ビュンッ……！

一本のフォトンの朱い矢がファングに向かって放たれた。

く取引場所く

ファング 「……ああ、やっぱり臭った通りだあ……オラッ！」

左横の男 「エッ?!」

左横にいた男の肩を掴んで自分の前に寄せた。

ビューアン!!!

朱い矢が盾にされた男にヒットした。その男はそのまま気絶した。
スタンモードだったようだ。

ギラード 「（…防がれた！！）」

デИБ 「……！……こゝ、これはどういづことじゃ！！ファング
！？」

ファングの方を向くとすでにグレネードランチャーを矢が飛んで来た方向に構えている。

ファング 「……ったく、なんでバレたかねえ？……デИБ卿？
危ないんで下がっててもらえますかあ？」

ドゴ シ……！！！！

廃墟に着弾すると大爆発が起こり倒壊した。

ファング 「さあて、まだ臭うぜえ？」

ドゴ ン！！！！！！！！！

細路地の方にも一発放ち、爆発で細路地を形成していた、二つの廃墟が半壊する。大量の土煙で周りは茶色一色になり、ほとんど見通すことができない。

ファング 「…この匂い…！！なるほどなあ…！！」

武器をグレネードランチャーから、ツインクローに変更する。

刹那、土煙の中から蒼いフォトンのセイバーでファングに斬りかかろうとするデーンが現れた。

グァン！！！！！！

二人は走って去って行った。

奴隷男 「…行つたか…。…行くぞ？お嬢ちゃん…」

マナ 「…あ…あの、今スゴイ音がしましたよ？外でいったい何が…？」

奴隷男 「わからん…。だが、奴らに不利益な何かあったのは間違いない…この混乱に乗じてお嬢ちゃんのコートとナノトランサーを取り返そう…！」

マナ 「ハイ！」

人気のなくなつた廃墟の中を二人は駆けていく。

土煙（後書き）

おまけ

> i 3 1 3 6 4 — 3 7 5 7 <

拡大して読んでください…お手数おかけします

獅子覚醒（前書き）

> i 3 1 6 6 6 — 3 7 5 7 <

ゴッドイーターの2が発売することなのでコラボってみました。
わかる人はコメントくれると嬉しいですw

ちなみに今回の内容とは全く関係ありません。

獅子覚醒

く取引場所く

グレネードの爆発で廃墟が倒壊し、土煙であたりが茶一色に染まっている中、ディーンとファングは刃をぶつけたまま鏢迫り合いを続けていた。

ディーンが両手で剣を振りかざして、それをツインクロードファングが受け止めている形だ。

ファング 「オイオイく！勢いがあるのは声だけかあ？一向に動かねえぞ？ああ！？」

ディーン 「そいつはどうかな！？」

左手を剣から離すと、押し返される前にハンドガンのナノトランスを解除し、左手に持ちファングに向けて引き金を引いた。

ファング 「なっ！」

バァン！！

フアング 「グフッ!!」

フォトンの弾丸はフアングの左胸に当たり、そのまま後ろに吹っ飛び土煙の中に消えて行った。

ディーン 「(…今で仕留め……られてはいないだろうな…。だが、心臓近くを狙ったから多少のダメージは…)」

フアングの消えて行った方向の土煙が晴れてきた。そして、当たり前のように立ち上がったフアングの姿があった。

ディーン 「……マジかよ……」

銃弾を撃ち込んだ左胸は少し汚れているだけで傷一つ付いていない。

フアング 「おゝ、びっくりしたあゝ…てめえ、いきなりチャカ使ってどおなのよ？まあ、なんともねえからいいけど…?」

ディーン 「(…すこし焦げているような跡があるから避けられたわけじゃないんだろうが…OSの能力か?)……化け物が…」

ファングは大きなあくびをするとツインクローをナノトランスした。

デーン 「！！…なんのつもりだ…？」

ファング 「…ったく、おめえ俺様の能力が気になってんでしょ？『な、なんで銃弾はヒットしたのに傷がないだーっ！？』とか思ってたんだろ？……もっかい試してみるよ？動かねえからよお？」

ポケットに手をつ込み余裕の笑みを浮かべている。

デーン 「（…畏か…？何をかんがえているんだ？）……マジで行くぞ？」

ファング 「おうよ？…とつと来いよ？もしかしたら今度は心臓貫けるかもしれな…」

言い終える前にデーンは走りだし、走りながらハンドガンで顔面、左胸、腹に打ち込み、一瞬でファングの目の前まで距離をつめ、首に一太刀いれた。

しかし、それは弾かれた。

ディーン 「………なんだその姿……？」

ファング 「……ああ？だ……か……ら……能力だよ？OSの」

全身が銀色に染まり鉄のように硬くなっている。当然銃弾による傷もない。

ファング 「じゃあお返しいくぜ？オラア……！」

ディーン 「……クッ……！」

膝を前に押し出し、目の前にいるディーンにニーキックを入れたが、銃と剣を盾にして直撃は避けた。それでも数メートル吹っ飛ばされた。

ディーン 「……ッ……（硬い……あの能力……あの時の蹴りの威力が強かったのもこの能力のせいかな……）」

ファング 「おうおう、青髪ちゃんよお？俺様の能力わかったあ……？」

剣を杖代わりにして起き上がりながらディーンは答えた。

ディーン 「……硬化の類か…？」

その答えにフアングは腕を組んでうんと首を傾げる。

フアング 「…おいしいな…。いや、この姿じゃあ正解ちゃあ正解だ！厳密には、表皮を鉄に変化させたんだ！」

ディーン 「（この姿…？）…ペンタクルつてのはヒト型でも能力が使えるのか…？」

フアング 「まあな！少しくらいなら使えるぜえ？…なあ～んかお前には喋り過ぎちまうな？…一発で終わらせてや…ガフッ！！」

喋っている途中フアングの頭上に巨大な氷の塊が出現し、そのまま押しつぶした。

よく見るとフアング越しに、ウォンドを構えているギラードの姿があった。

ファング 「オイオイ！なんだってん…ギハツ！！」

ヤマト 「御免！」

氷の塊の下から這いずり出て起き上がった所を土煙のなかから突如現れたヤマトの居合切りがファングの腹を切り裂いた。そして刀を打ち付けられたところにはヒビが入っている。

ファング 「！！オイ！？ウソだろ！？」

ヤマト 「…拙者のコクイントウは鋼鉄をも砕く…！」

ファングが腹を抑えようとした瞬間には既にラグナが間合いに入って双剣を振り下ろそうとしていた。

ファング 「！！テメツ……ガハッ！！！！」

Xを描くように切り裂かれた腹部は、鉄の表皮が完全に碎かれ、血が出ています。

ファング 「痛ってーーーー！！ざけんなよ！？お前等！？俺様を誰だと……」

ビュン！……ザシュ……

弓を射る音がした直後、ファングの表皮が碎かれた部分に朱い矢が刺さっていた。

矢の飛んで来た方向には弓を放ち終え、無表情で次の矢を放とうとしているギラードがいた。

ビュンビュンビュン……！！

3本の矢が続けて放たれ全て鉄のはがれた部分にヒットし最後の一本は背中の中の鉄の表皮を砕き貫通した。

ファング 「うぐ……ガハッ……ゴホッゴホッ！」

腹を押さえながら、血を吐き土煙の中に消えて行った。

ディーン 「……（っ……強い……）……ん！？」

突然肩に重さを感じた。ラグナが肩を組んできた。

ラグナ 「どうだ？ギラードもヤマトも強ええだろ！？」

ディーン 「……ああ……あの硬い表皮を砕いた居合……同じ箇所への正確な弓での射撃……普通じゃない……」

ディーンはどこか不機嫌そうだった。

自分のせいでマナが奪われたのに、完全に自分が足手まといなのが悔しかったのだろう。

ラグナ 「……フッ……ディーンよお？気持ちにはわかんねえでもねえけど、オレ達はギルドなんだ！マナを助けたいのはお前だけじゃないよ……。……それにもし、自分が役に立ててないか思ってたんならそれは違うぞ？お前が一对一でファングとやり合ってたからこそ、

オレ等も奇襲攻撃ができたんだ！お前のおかげだよ……！」

ディーン 「……………」

すぐそこにヤマトも近寄ってきた。

ヤマト 「そうでござるよ！？ディーン殿！ディーン殿がやつ
の隙を作ってくれたからこそ、奴を倒すことができたのでござるよ
！」

二人に励まされ、ディーンは下を向いたままどうしていいかわから
ず黙っていた。

ディーン 「……（結局、今のオレじゃあ罔ぐらいにしかない
か……）」

ギラード 「……油断しないで……まだ生きてる……」

ギラードの声で二人はすぐに戦闘態勢に戻った。

ファング 「イテエ……」

土煙の中からファングの声がした。動いているシルエットも見える。

ファング 「……あゝあ、マジでイテエ……。油断してたわ……。ホント……。その赤髪の女『朱い魔女』だろ？……そりゃ、こんな深手を負わされるわけだわ……」

ラグナ 「……オイオイ……随分余裕そうな声じゃねえか？……化け物か？」

ファング 「化け物が……違いねえや……。でも、これから本当の化け物に会わせてやるよ？……ハァー……！！」

土煙の向こうで黒いオーラが発生しはじめた。そしてその黒オーラはファングのシルエットを包み込んだ。

ディーン 「！！（マルコの時と同じだ！）オイ！アイツ、SE
EDフォームになる気だ！変身するまえに倒さないとまずい！！」

ディーンの声でギラードはフルチャージの弓矢を黒いオーラの中に
打ち込んだ。

しかし、その弓矢は何かに弾かれたように消えて行った。

ディーン 「…（遅かったか…！）」

黒いオーラが消え始めると、土煙の中に巨大なシルエットが現れた。
それ影は段々と近づいてきて次第に姿を現し始めた。

ラグナ 「…こ…こいつぁ……」

ディーン 「!!!!こんなSEEDフォーム見たことないぞ!?
SEEDフォームをベースにしてるんじゃないのか?!どいうこ
とだ!?!」

ファンゲ 「ああゝ?お前等知らないの?五芒星と敵対してん
に?」

口は動かしていないが、テレパシーのように直接ファンゲの声が伝
わってくる。

ディーン 「何をだ!?!」

ファンゲ 「…あ、マジでしらねえんか…。…青髪よお?普通の
OS使用者とペンタクルの違いってなんだと思ってる?」

ディーン 「……………!？」

フアング 「戦闘能力の差？権力の差？違う…もっと根本的な部分だ!!……………そう…ペンタクルってのはOSを投与された、ヒトの姿をしたSEEDフォームってのが定義として当てはまんだ!」

ディーン 「なっ!？」

フアング 「……………そう……………俺達は一度死んだんだよ!!……………さて、無駄話はここまでで、今度こそ全員喰わせてもらっぜえ!？」

鋭い牙がならんだ口を開き、真っ赤な舌をペロリと出した。

く 廃墟内・倉庫く

マナ 「あ!ありましたよ!私のコート!」

奴隷男 「よし、早く回収して脱出しよう!」

マナが部屋の隅に掛けてある自分のコートと、それについているナノトランサーを取りにいったが、いきなり動きが止まった。

部下 「ああ、やっぱり、ここで張ってたら来るんだよねあゝ!女ゝ動くなよ?」

部屋のテーブルの下に隠れていた男がマナに銃を向けたのだ。そして、もう一つハンドガンを取り出し、奴隷男にも銃を向ける。

部下 「さあて、動くなよ?」

獅子覚醒（後書き）

キャラクター設定？

ファンゲ・テーヴェ

種族：ビースト（SEEDフォーム）（男）

年齢：35歳（見た目）そのまま生きていれば52歳

身長：197cm

体重：99kg

ICV：杉田智和

詳細：ペンタクルの一角で、違法取引を行っている商業団体のヘッド。17年前に事故で死亡したとされているが、一度SEED空間に飛ばされ、SEEDフォームとして再構成され、元のグラールに戻ってきた。そこでペンタクルの一人としてスカウトされた。

作者のイメージする「戦闘が本職じゃない悪人」のイメージを叩き込んでみました。何故マッチョかはあまり気にしないでください。

名前の由来は獣っぽい響きがほしかったのでファンゲ（牙）、テーヴェはスペイン語（だったっけ？ドイツかも…）でライオンの意味。

窮地（前書き）

> i 3 1 8 2 6 — 3 7 5 7 <

今回の扉絵はペンタクル集結シーンです。

以前から用意していたのですが、悪役が好きという意見もいただいたのと、自分も悪役の集合シーンというものが好きなのでこの絵を選びました。はい。

では29話をどうぞ！

窮地

（取引場所・細路地）

デИБ 「…ん？…土煙はもう晴れたのか？」

砂に埋もれていたデИБが起き上がりあたりを見渡す。

デИБ 「こ、これは！？」

周囲の光景に腰を抜かした。お付の黒スーツの男たちが全滅しているのだ。

全滅といっても死んでいるわけではなく、スタンモードの武器で倒されて気絶しているようだ。

デインとファングが戦っている間にラグナ達がやったのだろう。

デИБ 「これはどういうことじゃ！？何があったのだ！？…

ファング！…どこにおる！？状況を説明しろ！！」

ファングを探しながら叫んで歩き回っていると、さっきまで自分がいた取引場所まできた。そして、そこにいる銀色の巨大な獅子を見てまたもや腰を抜かした。

デИБ 「な！なんだこのバケモノは！？ファ、ファング！！
どこだ！？早く来てくれ！！バ、バケモノがおる！！」

ファング 「デИБ卿！バケモノバケモノ言わないでくれます
？？自分で言う分にはいいんですけど、他人に言われると結構傷つ
くんですよ？…いや、喰い殺したくなるんですよ？」

デИБ 「お、お前、ファ…ファングなのか！？な、なんなん
だ！？なんでそのような姿になっている！？」

ファング 「少しは自分で考えてくれませんか？今結構イライラ
してるんでこれ以上話しかけないで貰えます？」

デИБ 「オイ！貴様！！私は客だぞ！！そのような扱いが許
さ…」

ド
ン！！！！！！！！！！

フアング 「…喋んなつつつてんだろ？」

その巨大な前足をデイブのいる所に振り下ろした。
しかし、それはデイブの目の前に振り下りて、デイブにダメージは
なかった…だが、デイブは脱力して震えている。

デイブ 「は……はひ……」

フアング 「…ったく……じゃあおっ始めよーぜ……」

足元にはすでにヤマトがいて、鞘に刺してある刀を抜こうとしている。
る。

ヤマト 「再び御免!!」

ファング 「んなっ!？」

ガキ ン!!!

その力強い斬撃は、ファングの右前脚の表皮を破壊した。

ヤマト 「…ふむ…姿形こそ変われど材質は変わっていないようでごさるな…。皆、今でござる!！」

この合図と同時に3人とも武器のフォトンを解放した。
デインは片手剣のフォトンリアクターを最大にしてリーチを伸ばしながら右側から傷口を狙い、ラグナは先ほどと同じように手をクロスさせて傷口に左側から走って地近づき、ギラードは弓で正面から傷口に狙いを定めている。

ファング 「……チヨロチヨロうぜえぞ? 雑魚どもがあー!！」

叫びと共にファングの体が白く光った。

ディーン 「な、なんだ!？」

ラグナ 「……!わからないが、このままぶつた切れ!！」

ザンツ!……!……!

ディーン 「!……?」

間違えなく斬撃は傷口の部分をつめた。弓矢もヒットした。

それなのに弾かれた。傷口が再生していた。さらに光沢がさつきと微妙に違っている。

ディーン 「……さ、再生能力……？」

ヤマト 「……ならばもう一度拙者がっ！！」

身体を捻らせ勢いをつけてヤマトはファングの後ろ脚に斬りかかった。

ガキンッ！！

ヤマト 「ば……ばかな……」

壊れたのはヤマトの刀の方だった。

フアング 「死ねや！似非侍！！」

ヤマト 「ガハッ！！！！」

そのままヤマトは後ろ脚で蹴り飛ばされた。

ラグナ 「ヤマトッ！！！！」

フアング 「おめえらも死んどけ！！！」

前足を振り払おうとした。

ラグナ 「まずいつ！」

ラグナは防御の態勢をとったが、ディーンは振り払う前の動作を見て、違和感を感じた。

ディーン 「（…さっきアイツに寸止めをしたときよりも動きが遅い？…かわせるっ…いや、かわさないとマズイ！！）…ラグナッ！！！！奴の脚の間に飛び込め！！！」

そう叫ぶと自分は後ろに緊急回避した。

ラグナ 「ど、どどういうことだ！？…クソッ！！！」

すぐさまラグナも前に飛んだ。

ズガガガガ

!!!!!!!!!!!!

ファングの前足は誰もいない砂上をひつかいた。しかし、威力が凄まじく、砂の床が大きくえぐられて前にはクレーターが出来ている。

ラグナ 「……マジかよ……」

そのまま前足と後ろ足の間から横に抜け出すことに成功した。

ファング 「……チッ……やっぱこれだと、小型相手の攻撃にはむかねえな……。オイ青髪……なんでこの攻撃がかわさないとヤバいつて気付いたんだ？」

デイン 「……お前の動きが遅くなった……。それはつまり重さが増えたと考えるのが、妥当だ……。重けりゃ威力も上がる……。だから、避けた。ラグナも避けさせた……。……おかげでアンタの能力もわかったよ……」

ファング 「…ほう……？」

「廃墟内・倉庫」

実弾タイプのハンドガンを向けられた二人は動けずにいた。

部下 「まったく、手間かけさせがやって…。ただ、今すぐ売りに出してやるよ…」

…。…。その男！手を挙げろ！この娘撃つぞ？」

奴隷男は無言で手を挙げた。

しかし、男がこっちに目を向けてマナに対して無警戒なのを見逃さなかった。

奴隷男　「お嬢ちゃん！！その男をライフルで殴るんだ！！」

マナ　「えっ！？」

部下　「なっ！！」

部下の男は慌ててマナの方を向いたが、すでにライフルが振り下ろされるところだった。

マナ　「えいっ！！！！」

ガンッ！！！！

バンッ！！！！

ライフルは男の頭にヒットし、男は倒れた、しかし、殴られた衝撃でトリガーを引いてしまい、銃弾が発砲された。

マナ 「……………うそ……………」

マナ 「……………そ……………そんなあ……………」

マナはその場に崩れ落ちた。

奴隷男 「……………お嬢……………ちゃん……………！」

マナ

「おじさん

!!!!!!」

目の前には胸から血を流し、片膝をついている奴隷男がいた。

窮地（後書き）

キャラクター設定（15）

奴隷男（本名不明）

種族：ビースト（男）

年齢：39歳

身長：192cm

体重：95kg

髪色：黒

髪型：無造作ロング

ICV：平田広明

詳細：何年も前から奴隷としていろんなところで労働作業をしてきた不幸なヒト。

本来は出す予定がないキャラでした。というかマナが特に行動を起こさない予定でしたが、それじゃあつまらないなと思い、彼を作り出しました！大好きなキャラになりましたw

名前はそのうちでもしれないですのでお待ちください。

レアメタル（前書き）

今回は扉絵は無しです。 すいません…

あと、内容の方が若干サイエンスな感じになってますが、わかりずらければ言うてください。

それでは30話です！

あ、今回おまけありますよw

レアメタル

〔廃墟内・倉庫〕

マナ 「おじさんっ！おじさん …！」

ライフルを投げ捨てて奴隷男のそばに駆け寄るマナ。その眼は少し涙ぐんでいる。

奴隷男 「……ぐっ……」

マナ 「い、ごめんなさい…！わ…私のせいで……」

胸を押さえながらゆっくりとマナの方を向けて少し微笑んだ。

奴隷男 「……大丈夫…お嬢ちゃんのせいじゃない……。…それにこの出血量からして…心臓には当たってないみたいだ……」

マナ 「す…すぐに私がテクニクで…！」

ナノトランサーからロッドを取り出し、祈るように握る。

マナ 「（…レスタは一度も成功したことがないけど……お願いっ！）エイッ！！」

奴隷男 「……？……お嬢ちゃん……？」

レスタは発動しなかった。光のフォトンすら出ておらず、はたから見たらただロッドを握って叫んでいる様にしか見えない。それでもマナは何度も叫んだ。

マナ 「エイッ！！エイッ！！……レスタッ！！レスタッ！！……レスタッ！！……」

最初の方は涙をこらえ、弱気を抑えるために大きな声を出していた

が、だんだんと弱まっていき涙もポロポロと零れ落ち始めた。

マナ 「…レスタ…レスタ…。…どうして…？…どうして私…光のテクニクが使えないの…？」

ロットを握っている両手から力がなくなり、床に落とす。カランカランという音が倉庫内に響く。

奴隷男 「…お嬢ちゃん…。…俺はこう見えて奴隷になる前は医者をしていた…。その俺から見てもこの出血量なら布か何かで血を抑えられれば…。…って、お嬢ちゃん？」

マナ 「…うして…？…どうして…？…なんで…？」

頭をかかえ虚ろな目から涙を流しながらボソボソと呟いていて心ここにあらずな状態のマナに奴隷男の声は聞こえてないようだった。

奴隷男 「…オイ…お嬢ちゃん？テクニクはもう構わないか

ら、とりあえず何か血を止めるものを……。：！？お嬢ちゃん！後ろだー！！」

痛みとマナの様子の変化のせいで気付かなかったのか、先ほど殴られて倒れていた男が、マナの投げたライフルを手に持ってマナの後ろに立っていた。

部下 「ああゝいて…やってくれたもんだなクソガキー！！？」

ライフルの銃口をマナの後頭部に押し付け勝ち誇った顔で罵声を浴びせる。しかしマナの様子は一向に変化しない。…いや、変化はしている。どんどん負のオーラのようなものを強く醸し出すようになった。

マナ 「……………して……………？……………どう……………て……………？……………」

部下 「オイ！シカトこいてんじゃねえぞ！？…お前は売られる予定だったが抵抗した場合は殺していいことになってんだ！死ねやコラー！！」

奴隷男 「お嬢ちゃん！！！！」

トリガーを引こうとした瞬間、妙にはつきりとマナの声が聞こえた。ただ、それはマナの声のトーンではなかった。

マナ？ 「…ドウシテ？」

刹那、黒いオーラがマナの体から後方に放出され、強力な重力が発生した。

部下の男は立っていることができずその場に倒れ、すごい力で床に押し付けられている。ライフルは既につぶれて使い物にならない。

部下 「ぎゃああああああ！！！！…っ…つぶ…つぶれ…っ…！！」

奴隷男 「（闇のテクニク！？…この子の力なのか！？…このな大規模なものは見たことがない…）」

十秒ほどたった時。

グチャ！

部下の男が全身から血を吹き出し完全に潰され絶命した。

マナは相変わらず虚ろな目から涙を流しながら頭をかかえ「どうして？どうして？」と呟いている。ただ違うのは体に黒いオーラをまとっていることだ。

30秒ほどして黒いオーラが消えた。マナも気を失ったのかそのまま前に倒れた。

マナより後ろの倉庫と部下の男は原型を留めておらず、倉庫はただの瓦礫の山で男は服と血と肉塊だけ残している。

そんな状況で取り残されたように奴隷男は啞然としていた。

〈取引場所〉

フアング 「なんだあ？俺様の能力がわかった？…言ってみるよ？」

ディーン 「…一つは皮膚の再生能力だ…だが、これはきっとオプシオンに過ぎないんだろうな……。…硬化、重量変化、性質変化…そして光沢の変化…これらをすべて満たす能力は……」

その場にいる全員がディーンの推理に注目する。

ディーン 「『金属変化』……………違つか…?」

……………

一瞬その場が静まり返った。しかし、すぐにフアングが笑い出す。

フアング 「ギヒツ……………ヒヤハハハハハ！！！！！！こいつあ傑作だよ！！」

ディーン 「……………違つか…?」

フアング 「ハハハ……………ああ？違えよ！全くその通りだから面白れえんだよ！！そう、俺様の取り込んだ『地のOS』は俺様に、この姿の時肉体を『あらゆる個体金属』に変化させる能力を授けた！まあ、俺様はSEEDフォームだからヒト型の時も使えんだけど、

その場合は人体に一定量存在する金属元素と同じものにしかねえからたかがしれてんだけどなあ……。だが、よく性質の変化まで見抜いたもんだな？この戦いでそこを意識して利用した覚えはねえぞ？」

ディーン 「ああ、それに気付いたのはここじゃない…。レリクスでルミアのテクニクを喰らって無傷なのは鉄じゃあおかしいと思ったからな……」

ファング 「ヒハハ！本当に気持ち悪いくらい見てやがんぞ！…まあ能力がわかったところでどうにかなるわけでもねえだろ？能力フル活用で殺してやんよ！！」

またファングの体が白く光った。

光が消えるとその場にはいなかった。

ラグナ 「消えたっ！？」

ギラード 「違う！上！」

ファングはとういうわけか、100mほど空中にいた。

ラグナ 「どういうことだっ！？」

ファング 「この姿の跳躍力で重さが最も軽い金属であるマグネシウムになればこんなことは余裕なんだよ！！！！こっからがショータイムだ！！！！」

地上によく聞こえるほどのうるさい声で叫ぶとまた体を光らせた。

ディーン 「……！！まずいっ！！少しでも遠くに逃げ……」

言い終える前に空中で急加速したフアングが隕石のように降ってきた。落下地点を中心に巨大なクレーターが形成されていた。落下地点付近廃墟は全て瓦礫となった。

衝撃と風圧で吹き飛んだのか、砂に埋もれたのか、はたまた潰されたのか……そこにデーン達の姿は無かった。

フアング 「最も軽いマグネシウムで大ジャンプしてからの最も重いイリジウムでの落下……さらにこの巨体……！数回使えば町一つ潰せるぜえ？……っておい？全員死んだか？ヒヤハハハハ……！！」

瓦礫の山の上で銀色の獅子が勝利の雄叫びを上げるように笑う……。

数分後…

もぞ…もぞもぞ…

砂の中で何かが動いている。

ファング 「ああ？」

もぞもぞ・・・バフツ！

ディーン 「…はあゝやっと出れた……」

頭から血を少し流しているが、それ以外に外傷が見当たらない。銃をナノトランスしてファングに向ける。銃

フアング 「なんの強がりだ？」

ディーンはニヤリと口元をゆるめると銃のチャージを始める。

ディーン 「…アンタを倒す算段がついてね……。…来いよ…その隕石もどき打ち破ってやるよ…！」

……砂漠地帯に風が吹く……

レアメタル（後書き）

おまけ！

> i 3 2 0 1 8 — 3 7 5 7 <

あ、なんとなく「おまけ」コーナーの面白い、それっぽい名前を募集してみようと思います！何か「これだっ！！」ってのがあればコメントに下さい！

それではまた次話！

星砕き（前書き）

またまた扉絵が……。…忙しもので……。言い訳ごめんなさい…。w

代わりに昔用意しておいた挿絵があるんで…

それでは31話をどうぞ！

星砕き

〈取引場所〉

ディーン 「……こいよ……。…その隕石もどき打ち破ってやるよ……！」

フアング 「ああ？…頭から血い流しておかしくなったんか？…次は確実に殺しに行くぜ？」

ディーン 「……だったら早く殺しに来いよ？…来ないんなら…こっちから行くぜ…！？」

トリガーを引いて弾丸を放った。その弾丸は真直ぐにフアングの顔に向かって行く。

フアング 「バカですかああ！？こんなちやっちい攻撃が俺様に効くわけねえだろ……！」

しかし、弾丸は攻撃用の弾丸ではなく、ファングの目の部分にヒットした瞬間液体になって飛び散りファングの視覚を奪った。

ファング 「なっ！？ペイント弾！？…小賢しいぞザコがああ！
！SEEDフォームになってから俺様には獣並の嗅覚がついてんだ
！！視力なんて必要ねえんだよ！！おめえの位置はわかってる！！
死ね！！」

身体を光らせ、高くジャンプしようと脚に力を加え地面を蹴ろうとした。

ファング 「…！？んあ！？」

全ての脚が凍りつき地面に固定されている。軽いマグネシウム力では抜け出すことができない。対応しようにも、目が見えず、厚い金属の皮膚で触覚も悪くなっているので何が起きているかわからない。

ギラード 「……いめんなさい……。…少し……。じっとして
貰える…?」

ディーンよりも離れた位置でギラードがウオンドをくるくると振り
回している。

ファング 「その声はああ!! 朱い魔女おお!! ……それとこ
の距離! 何をした!?!」

ラグナ 「お前にそれを知る必要はねえよ…?」

ヤマト 「うむ…。…では…参る!!!!」

ファングの両サイドでラグナがインフィニティブラストの蒼い光の
巨刀を…ヤマトがサブウエポン・エクシア・エスパダ（デッカイ
剣）を構えている。

ファング 「（この匂いつ!?! マズイ!!!!）くそがあああ!!!!」

身体を光らせるがすでに二つの巨大な剣がクロスする形でファングのまだ変化していないマグネシウムの体を切り裂き始めている。

ダンッ

!!!!!!

ファング 「……ハア……ハア……テメエら……やってくれんじやねえかよー!!」

ラグナ 「…ちっ！切断しきれなかったか！！」

切断の途中で体が完全に変異し再生する最硬の皮膚に押しつぶされて逆に二つの巨刀が切断されてしまった。

フアング 「…最硬の金属…『タングステン』！！深手を負わされたが、もうおめえらの攻撃は効かねえ！！全員喰い殺してやんよおお！！！」

叫びとともに口を大きく開け、氷で張りつけられている脚に力を入れる。皮膚の再生によってペイントも落とされたので目を開く。そこで目にしたのは……

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 2 \\
 & 1 \\
 & 8 \\
 & 5 \\
 \hline
 & 3 \\
 & 7 \\
 & 5 \\
 & 7 \\
 <
 \end{array}$$

ディーン 「お前は……一撃でオレ達を殺しておくべきだった……
じやなきやこの作戦を立てられることもなかったのにな……」

視覚を失った時と同じ……いや、もっと近くの瓦礫の山の上で銃をフルチャージで構えているディーンの姿だった。

フアング 「青髪いいい！！！！死ねえええ！！！！」

そのままディーンに喰らいつこうとしたが、ディーンは表情一つ変えず銃を向けている。安全装置が外れているのかフォトンリアクターが轟音を立てている。

ディーン 「……どんなに表面を硬くしても内側は金属じゃないだろ？じやないと筋肉が機能しねえだろうし、何より舌が赤いわけがねえからな……。……吹き飛ばえええ！！！！」

フアング 「……………ま……………待て……………！！！！」

ブ
ォ
ー

ン
!
!
!
!
!
!

巨大なフォトンの弾丸がファングの口内に放たれた。体内で爆発を起こし、硬い表皮のせいでその熱エネルギーは外に逃げることなくファングの体を内側から焼いた。

ファンゲ 「クソガア！！ザコどもの分際でええええええええ！！！！！！ああああああああああああ！！！！！！」

行き場を無くした爆発が口から出て倒れるファングを瓦礫の山の頂上からディーンは見下ろしていた。

ディーン 「……その最硬の表皮が自分を苦しめるとは……想像もしてなかったんだろーな……鉄壁の防御力が仇となったな……」

ファングは黒いオーラに包まれ、どんどん収縮していき、オーラが晴れるとヒトの姿になって片膝をついていた。口から煙と血を吐いて両肩に刀傷がついて血を流しているが生きていて、意識も保っている。

ラグナ 「……オイオイ……。マジでバケモノか！？……くっ……」

ラグナも片膝をついた。よく見るとラグナも後頭部から血を流して

いる。この状態であんな大技を使えば立っているのもつらいはずだ。

ラグナ以外にもヤマト、ギラードも大ダメージを負ったうえでの大技でかなり疲労している。

ディーンは、リアクターが暴発した状態の銃を撃つたので右肩が反動で脱臼しているが、なんとか動くことはできそうだ。

フアング 「……てめえら……このままで済むと思うなよ……？」

なんとか立ち上がり、フラフラと歩いて建物の影に消えていく。

ディーン 「……待て……！」

ラグナ 「わりいが追ってくれ……！今動けるお前だけが頼りだ……！」

ディーン 「わかった……！」

ディーンもフラフラとファングの後を追った。

く 廃墟の入り口付近く

奴隷男が気絶しているマナをここまで運び込んだ。出血は肉片になったファングの部下の男の来ていたもので血があまりついていない部分を使って止めている。だが、それでも完全に止めたわけではなく、血が噴き出したのでここにとどまっている。

奴隷男 「……さっきから外でスゴい音がするが……いったい何
が起きているんだ？……この商団の団員もさっきから姿を見せない
し……」

マナ 「……う……う……」

奴隷男 「ああ……お嬢ちゃん……。大丈夫か……？」

マナ 「…あれ…？私、また気を失って…？！！おじさん！！傷は大丈夫ですか！？」

奴隷男 「ん、まあ…。…ある程度の間だったらこのまま安静にすれば動けるだろ……」

マナ 「…よかった……。…って、あれ？ここってさっきの場所じゃないですね？！」

奴隷男 「…（さっきの男のことに触れないな…。覚えてないのか？）…ああ、さっきの倉庫は崩れてしまったから、ここに移動したんだ…」

マナ 「…そ…それってつまり、おじさんが私を運んでくれたんですか！？ああ、ホントにゴメンナサイ！！もぉ…私何の役に立てないどころか……」

奴隷男 「…いや、それは気にしないでくれ…。お嬢ちゃんの言葉があつたから俺も逃げ出そうと思えたんだ…。…それより、どこまで覚えている？さっきの倉庫のこと…？」

マナ 「…え…え…と…男の人の流れ弾がおじさんに当たっちゃって、それで私がレスタを使おうとしたけど、できなくて…どうして？どうして？って思ってる…。アレ？ここからどうになりましたっけ？」

奴隷男 「（やっぱり覚えてないのか…）ああ、そこで急にお嬢ちゃんが気を失って…それで俺がなんとか立てるようになった時、外で大きな音がして部屋が崩れだしたからお嬢ちゃんを運んだってわけさ…」

マナ 「…あ、あの男の人は…死んじゃったんですか？」

奴隷男 「……………ああ……………瓦礫に潰されてしまったよ……………」

マナ 「……………」

沈黙の中、外から声がした。

ディーン 「…待てっ！…逃げんな！！」

マナ 「……！今の声……！お、おじさん……！助けが来てくれしました……！私、呼んでくるんで、ここで待っててください……！すぐに来ます……！」

奴隷男 「……あつ……お嬢ちゃん……？……行っちゃった……。……（あの子……いつたい……？）」

本人は気付いていない、マナの背中にびっしりとへばり付いた潰された男の血を眺めながら、奴隷男はまた横になった。

「廃墟入り口前広場」

マナ 「デーンさんっ!!……あっ……」

廃墟を飛び出してすぐ目の前にいたのは……

デーン 「マナっ!?!……は、離れろ!!」

フアング 「……お前は……。……キヒッ!!」

血まみれで邪悪な笑みを作るフアングの姿だった。

星砕き（後書き）

まだ終わらんよw

挿絵なんですけど本当はファングから見たディーンの姿を新しく書こうと思ったのですが間に合わず……wwそのうち変えるかもしれない

月曜から修学旅行なのでなんとかこの章を終わらせたいです！
（つまり明日しあげる！！オラに氣力をわけてくれw）

次回は「星砕きの刻」の最終話です！

名前（前書き）

> i 3 2 2 4 3 — 3 7 5 7 <

おわったー！ー！！！

これで心置きなくスクールトリップに馳せ参じることができます！！

扉絵はヤマトとギラードコンビです！でっかく書いたことはなかったからなあ…

そういえばジャンもエレーナも書いてないっ！近々書こうかと…

32話！どうぞー！！（おまけもあるよ！）

名前

「廃墟入り口前」

ディーン 「マナッ！ー！離れろ！ー！」

ファングと目があった一瞬ひるんで動きを止めたマナは、ディーンの声ですぐに反対方向に走ろうとしたが、ファングの手につかまり、盾にされる。

ハンドガンのナノトランスを解除し、マナのコメカミに突きつける。

マナ 「…ヒッ……！」

ファング 「青髪い……動くんじゃないぞ？動いたらこのガキの頭にトンネルが開通するぜえ？」

マナ 「いやあーあああ！ー！ー！ー！」

ファング 「てめえも黙ってる!!」

マナ 「……」

悲鳴を上げるマナに強く銃を押し付け怒鳴る。ディーンの方を向き直し少しずつ後ずさりをして離れていく。

ファング 「……そうだ!手を挙げてじっとしてろ!いいか!?俺様からお前が見えなくなるまでずっとその体制をキープしとけよ!」

ディーン 「くっ……」

苦汁をのみながら手を挙げた。

入り口前

フアング 「しかし残念だったなあ！！青髪よお！まぐれとはいえ、俺様をここまで追い込んだまではいいが、俺様には逃げられ、助けに来た女も助けられずに帰ることになるとはなあ！？ヒヤハハハハハ！！！！」

「……！！！！」

廃墟の中から飛び出してくる人影に気付く。ボロボロのローブをまとった大男だ！

ファンゲ 「まあ、命があるだけありがたいと思うんだなっ！ただ、次会った時はブッコロ……ああん？」

ファンゲも自分に近づいてくる何者かに気付く。

「うおおおおお……！！！！！！！！！！」

奴隸男

ファング 「! ! ! ! ! なっ
… テメーは

」

> i
3
2
2
4
4
—
3
7
5
7
<

フアング 「ガハッ！！！！！」

大男に殴り飛ばれさ向かいの廃墟の壁に叩きつけられたフアング。
ゴホゴホと血を吐いている。

マナ 「！！おじさん！！！」

奴隷男 「……ハア……ハア……無事でよかったよ……」

脱力してその場に倒れ込むと、マナが無事なことがうれしいのか、
自分を捕まえていた商団の首領を殴ったのがうれしかったのか、奴
隷男は大笑いし始めた。

マナ 「……ごめんなさい……また、私、おじさんにむちゃさせ
て……」

奴隷男 「……ハハハハハハ！！！！……んああ、俺の意思で殴っ
たんだ……。……全く……いい気分だよ……！！」

泣き出すマナに大笑いする奴隷男……そして……

ディーン 「……アレ……？……つか誰……？」

何が何やらと状況がつかめず哑然とするディーンがいた。

ラグナ 「……ハッハッハ！ーいーとこ持ってかれちまったな！」

いつの間にか肩を組んでいるラグナが二人を嬉しそうに眺めながら言う。

ディーン 「……動いて大丈夫なのか？」

ラグナ 「ああ、ギラードがレスタしてくれたから動ける程度には回復したよ……。……それよりファングはどこ行った！？」

ディーン 「ああ、アイツならさつきそこの壁に叩きつけられ……あ？」

叩きつけられた部分には血痕がなく、ファングの姿は無かった。

ラグナ 「…やべえな…アイツが逃げ切る前に見つけるぞ…！
まだ遠くには行ってない…！」

デーン 「あ、ああ…！…ま、マナ！少し待っててくれ…！そ、
そのヒト、マナのことを頼む！」

二人は血の跡を追い始めた。

奴隷男 「……………ありやお嬢ちゃんの彼氏かなんかい？」

冗談風にいった奴隷男だったが……

マナ 「か…か…かかかか…カレシイイイ…！？？ち、
違いますよ…！！デーンさんは…えーと…えーっと…そうだ…！
そう…！仲間…！同じギルドの仲間です…！！…！」

真っ赤になって手をブンブンと振って焦りまくるマナだった。

〽旧砂漠都市・裏路地〽

フアング 「……クソッ！クソッ！クソッ！……こんな屈辱を受けたのは生き返ってから……いや、生れて初めてだ……もう、アイツの野望なんかにつき合ってらんねえ……。……ペンタクルの情報と闇OSを金にしてしばらく身を潜めるか……」

??? 「……それ、本当？」

刹那、裏路地の壁に次元の歪が生まれ、その中からヒトが現れた。

ファング 「！！！！テ……テメエは！！！」

??? 「……そんなことはされては困るわ……。……それにア
ナタはきっとあの人から見て、もう用済みだから……」

謎の人物はファングの左胸に手を伸ばした。

ファング 「……やめろ……やめろ！やめろ！！やめろおおおおお
！！！！！！」

??? 「さよなら……」

伸ばした手が光った。

ファング 「ぎゃああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

- - - - -

ラグナ 「……こりゃ……一体？」

ディーン 「……………」

二人の目の前に左胸の部分が、まるで初めからなかったかのように綺麗に削り取られたファングの死体があった。

ラグナ 「……自殺……？……は無いか……。しかし、いったい誰が……？」

ディーン 「とりあえず他のやつらと合流して、マナとあのヒトの保護を優先させよう。……ガーディアンズも呼んでおくか……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

この後、ガーディアンズが到着し商団のメンバー、並びに取引相手のデイブとその部下は次々に捕えられた。また、ファングの死体もガーディアンズが回収した。ここからOSについてもっと詳しいことが分かればいいのだが…

その場にいた、オレ、ラグナ、ギラード、ヤマト…そして捉えられていたマナと一緒にいたヒトも全員そのまま病院に送られた。

〳三日後・パルム総合病院〵

病院のロビーでマナとディーンが話している。

ディーン 「しかし、驚いたな…あのオッサンには…」

マナ 「ディーンさん！！オッサンなんて言っちゃ失礼ですよ！！！」

ディーン 「んああ、スマン！…名前はなんていうヒトなんだ？」

マナ 「…えっと…アレ？そっいえば私、あのヒトの名前知らないんです！」

ディーン 「なんだそりゃ！？」

奴隷男 「ビオスだ…。ビオス・ゲルソンだ…！」

いつの間にかマナの後ろにいた。服装はボロボロのローブではないし、髪や体も洗い整えられていて分かりづらくはあるが、奴隷男…

もといビオスだ。

ディーン 「ああ…どうも…。傷の具合はどんなですか？」

ビオス 「君は…ディーン君だったか？…もうなんともないよ…！ビーストの体は頑丈さ…。…明日退院で、そのあとはここに再就職できそうだ！」

マナ 「えっ！？ここに！？」

ビオス 「…ああ、言っただろ？もともと医者だって…。この院長とは知り合いでなんとかしてくれるそうだし…。…自分で言うのもなんだが、若いころは天才と呼ばれていたからね…。…腕もすぐに戻るはずだよ…。」

マナ 「よかったです…」

ビオス 「…そういえばお嬢ちゃんの名前もまだ聞いてなかったな？…教えてくれないかい…？」

マナ 「あ、そうですね！マナ！マナ・アーラニヤカです！」

意気揚々と言ったマナだったが、ビオスは急に表情を変えた。

ビオス 「マナ……アーラ……ニヤカ……？」

マナ 「……ど、どうしたんですか……？」

ビオス 「君の父親の名前は……もしかして、フォレス・アラニヤカか……？」

マナ 「……は……はい……そうですね……。お父さんを知ってるんですか！？……ってビオスさん……！」

ビオスは涙を流していた。

ビオス 「……あ……いや、スマナイ……。あの人は昔、ちょっと……。……そうか……君が……君がああの時の……。……そういえば、ミドリさんそっくりだ……。……うう……」

マナの肩に手を乗せ号泣する。

マナ 「…ビ…ビオスさん！？だ・大丈夫ですか！？」

ビオス 「あつ…ああ…すまない…。…じゃあ、俺は病室に戻るよ…。お父さんに…。…よろしく頼む…。…」

マナ 「は…はい…！」

ディーン 「……………」

マナ 「…どうしたんですか？ディーンさん？」

ディーン 「…なんでもない…。…！」

マナ 「ええ！？なんか怒ってません！？えっ！？なんで！？」

ディーン 「…怒ってない！」

マナ 「……………」

ディーン 「……………」

マナ 「……………ちゃんと、信じてましたよ……。…ディーンさんが助けに来てくれるって…」

ディーン 「……………別に今、そんなことは関係な……………」

マナ 「ありがとうございます！ディーンさん！」

満面のマナの笑顔に、オレもつられて笑顔になっていた…。

〈病院内・廊下〉

ビオス 「…あの闇のテクニック…。…そういうことだったのか…。…フォレスさん…あなたのあの時の選択は…。…幸せな未来か…それとも世界の終焉か…。…一体どちらに転ぶのか…。…」

カツカツと足音を立て、病室に入っていた。

名前（後書き）

おまけ！！

> i 3 2 2 4 2 — 3 7 5 7 <

真っ白に燃えつきました…。

明日から海外…楽しみです！

その影響で1週間ほど更新できません…。もうしわけないっ！！

それではみなさん！また次章！アンニョンヒ ゲセヨ！（またね！）

ディーンの大事な日（前書き）

> i 3 2 6 3 3 — 3 7 5 7 <

アニヨハセヨー！帰国しました！

まあ本編と関係ないようでありそうな話です。ディーンの日曜日ですね。

ではどうぞ！

ディーンの大事な日

ディーン達が退院して一週間ほど日にちが過ぎたある日の朝9時。

くギルド・ロビーく

マナ 「ディーンさん！ ミッション行きませんかあく？」

ロビーで大声をだしてディーンを探すその様子からこの前の一件については吹っ切れたようだ。

ジャン 「あつ、マナさん！ チャーッス！！ ディーンさんなら居ないッスよ！？」

マナ 「ジャン君、おはよう …… って、あれ？ ディーンさん居ないの！？ まだ9時なのに！？」

エレーナ 「…ええ、ディーン様なら7時半頃に出られたわよ？ なんでも今日は大事な日だと言っていたけれど……」

マナ 「エレーナもおはよう …… 7時半っ！？ あの寝坊助デ

イーンさんがっ!？」

エレナ 「まあ…その時間で間違いなかったと思うけれども…
…(この子からディーン様っていったい…:」

マナ 「…ふうん…せっかくリハビリプログラムも終わって
ミッションに行けると思ったのに…。…アレ?ジャン君っても
う訓練期間終了したの?」

ジャン 「ウツス!昨日、最終訓練をクリアしました!俺も今
日からギルドのメンバーツス!」

生き生きとした表情でギルドのメンバーカードをマナに見せつける。

マナ 「おお!やったね!!…じゃあさあ、私が初ミッショ
ンに同行してあげるよ!!…!実戦で分らないことがあったらなんで
も聞いてくれたまえよ?ギルドの先輩としてなんでも答えるよ」

ジャン 「マジツスか!?マナさん!!よろしくお願いしやー
ツス!!」

エヘン!と先輩ヅラをするマナと彼女を尊敬の眼差しで見つめるジ
ヤン。その二人をほほえましく見守りながらエレナは彼らにふさ

わしいミッションを探し出してきた。

エレナ 「『パルムの農園・脱走したコルトバ20頭の捕獲』
って言うのがあるけど、受けてみる？」

二人は同時に頷いた。

「ガーデンズコロニー・ショッピングモール」

一般のヒトも利用することができたため、かなり多くのヒトで賑わっている。そんな中、暗い青色の髪の方が花屋の前で何を買おうか悩んでいる。20分も同じところを行ったり来たりしているの、流石に店員も見かねて声を掛けた。

女性店員 「お客様、何をお探しでしょうか？」

急に声を掛けられたことに驚いたのか「ワッ」と軽く声を出して振り向くと照れ笑いをしながら答えた。

ディーン 「…あの…何かおススメな花ってないですか？」

女性店員 「そうですね……ん……あっ！これなんて如何ですか？」

女性店員は店先にある薄い金色の花を指さした。

デーン 「……いい香りだ……。……あまり見たことがないですがなんて花ですか……？」

女性店員 「テティの花と言って、1年ほど前から見られるようになった花なんですよ！」

デーン 「……テティの花……。……じゃあこの花をください……」

女性店員 「はいっ！……彼女にプレゼントですか？」

デーン 「……ハハッ……。……女性ではありませんね……」

少し悲しそうに微笑んだ。

くショッピングモール内・イタリアン（風）の店く

12時半。ディーンはカウンター席でスープパスタを食べていた。

ディーン 「（このスープ…なんだ？この味は？辛さの中にゴマの風味を感じる…おもしろいな…）」

何口か食べると、携帯端末を取り出し何かを打ち込んでいる。どうやら味覚で感じ取ったスープの作り方のようだ。

ディーン 「（…これなら少しアレンジすれば、オレでも作れそうだ…今夜ギルドで作ってみるか…）」

スープまで残さず食べ終わるとディーンは料金を席において店を出た。

「ガーディアンズ・霊園」

「……やっぱり毎年、花置いて行ったのはアンタだったか……今年は会うことができたな？ デイーン！」

墓の前にテイの花を捧げているデイーンの元に茶色の短髪の男性が近づいて来た。

ディーン 「…イーサン…か…？」

イーサン 「ああ！4年ぶりくらいか！？この前はルミアが世話になったそうだな！」

ディーン 「ああ…立派になってたよ！…それにしても懐かしいな…」

イーサン 「と言うかお前、毎年来てたんならガーディアンズに顔出しゃいいのに！」

ディーン 「…わるい…。…なんか気まずくて…。…ただ…ここだけは毎年来ないと…って思ってた…」

イーサン 「…そっか…。…そうだな…。もう4年も経ったんだな…。…ヴィヴィアンがこの世界を救ってから…」

ディーンは無言で頷いた。

イーサン 「…俺なんかよりもずっと『英雄』ってのが相応しいよ…。ディーン…お前もな…」

ディーン 「……いや…オレがヴィヴィアンを見殺しにしたようなもんだ…。…罪人ってほうが相応しいよ…」

この皮肉な発言に対してイーサンは大笑いした。

イーサン 「ハハハハハハ！！お前、暗くなっただな？！？…でもな…ヴィヴィアンはお前を含めたグラールのヒト全ての未来のためにヘルガを討ったんだ…だから過去を悔やむよりも今を生きた方が…ヴィヴィアンも喜ぶんじゃないか？」

ディーン 「…イーサン…」

ヴィヴィアン ここに眠る

そう墓石に刻まれていた。そして今日の日付も刻まれている。

「夕方・ギルドロビー」

マナ 「あゝ疲れた……コルトバが暴れるから捕まえるの大変だったよ……」

ジャン 「……マジ、家畜と言っても原生生物は侮れないッスね……！」

かなりお疲れな様子の二人が帰ってきた。

ディーン 「おう……！帰って来たか！今、夕飯作ってるからそこに座って待ってる」

奥の方からディーンの声とグツグツと言う料理中ならではの音がする。

マナ 「あっ！ディーンさん帰って来たんですか！？……って、

ディーンさん料理できるんですか!？」

ディーン 「できなきゃ4年間も一人で引きこもり生活なんてできねーよ!ホラっ!食え!オレ特性タンタン風スープ Pastaだ!（っと言っても昼に食ったやつに少しアレンジを加えた程度だが…）」

奥からパスタを二皿持ってきてマナとジャンの前に置いた。

マナ 「わっ!おいしそう!!いただきまーす!！」

ジャン 「なんだこれ!?ヤバいくらいうまいじゃないツスカ!?!ディーンさん、店開いたらどうツスカ!?!…ってアレ?いなくなってる!?!」

マナ 「キッチンに戻ったのかな?…そういえば大事な日って言ってたけどなんだったんだろ?」

二人は残さずにパスタを食べ終えた。

くギルド・テラスく

ディーン 「……今を生きるか……。少し前まではそれを考えることが辛かったけど………」

星空を見上げてくすりと笑みをこぼす。

ディーン 「…ヴィヴィアン…。オレ…お前が救ったお前がいな
い世界で…生きてみるよ…」

…また、来年も会いに行くよ…

ディーンの大事な日（後書き）

o m a k e ! !

> i 3 2 6 3 5 — 3 7 5 7 <

次回から新章です！

テスト期間に入るので更新できるか微妙ですががんばります！

それぞれ（前書き）

新章突入です！

どうぞ！

それぞれ

第6章 英雄たちのウォーゲーム

> i 3 2 6 6 1 — 3 7 5 7 <

〈現在時間より数日前・ペンタクル円卓会議〉

集合しているのは仮面女、バイザーをつけているキャスト、そして今座ろうとしているシエンの3人である。

シエン 「……3人か……、あの方は新しいOSの製作中で今回は参加できないと聞いていたが、ファングはどうした？」

いつもファングが座っている空席を睨みつける。

仮面女 「……彼なら死んだわ……」

シエン 「なっ!？」

その発言がその場の空気を変えた。…と言っても変わったのはシエンの表情(というか顔半分が隠れているから目)だけのように思われる。キャストは特に驚いた様子も無くシエンの目の変化を観察している。

キャスト 「あれ? けっこう動揺してますねシエンさん?…もしかして、喧嘩友達がなくなっただけで淋しくなっちゃった!？」

シエン 「…ワスプ…私をからかうな!! そうではなく、お前がペンタクルに入ってから5年間…一人もメンバーが欠けることがなかったのだ! そもそもメンバーの入れ替えそのものがあの時の一回だけだ! これは一大事と捉えるべきだ!」

仮面女 「まあ…『彼』の場合は戦死したわけでは無いけれどね…」

シエン 「そうだ! ペンタクルのメンバーが戦死など初めての事例だ! ラヴカ! ファングは誰にやられたのだ!？」

シエンの呼び方によると、仮面女の名を『ラヴカ』、キャストの名を『ワスプ』と言うようである。

ラヴカ 「ギルドの傭兵達よ……彼らがフアングを殺したの……」

ワスプ 「疑瑠度野洋平？…誰ですか？そいつは？」

シエン 「ワスプ……。何か根本的な間違えをしていると思うぞ？定義が広いな……もっと詳しいことはわからないか？」

ラヴカ 「そうね……。青髪の若い男…アナタの髪の色よりも、もっと…もっと暗い色…。その男が直接殺したわ……」

シエン 「……まだ足りないな……」

シエンがさらに追及しようとした時、ワスプが席を立った。

ワスプ 「じゃあ、僕は行ってきます」

シエン 「どこに行く気だ！？会議はまだ終わっていないぞ！？」

ワスプはシエンの方を振り向いた。バイザーで目は見えないが、かなり狂気に満ちた表情をしている。

ワスプ 「カタキウチです」…僕、結構あのヒトのこと嫌いじゃなかったんで…。『下手な鉄砲数うちや当たる』……傭兵をたくさん殺せばもしかしたらその中にいるかもしれないじゃないですか？」

シエン 「待て！何をするつもりだ！勝手な行動を取るな！！
オイ！」

ワスプは部屋を出て行った。

ラヴカ 「……また、面白くなりそうね……」

〈現在時刻・軍事会社リトルウィング・事務所〉

事務所の扉が開き金髪の少女が入ってきた。事務所内には髭面のビーストがデスクワークをしている。彼に用があるようだ。

金髪少女 「オッ……っとうさん！アイツ見なかった？」

ビースト 「デメエ……今『おっさん』って言いそうになっただろ？」

金髪少女 「えへへ…バレた？なんかそっちの方に慣れすぎちゃってるからさ…」。…で、そんなことよりアイツどこ行ったか知らない！？」

ビースト 「…アイツならナギサとミッションに出たぞ？」

金髪少女 「え？場所は？」

ビースト 「確か…パルムの旧市街地を改装した演習場だったか？なんでも傭兵の実戦形式の演習会があるそうだ！…なんか用があったのか？」

金髪少女 「あつ、ちょうどよかった！さっき、その辺の空間について調査したら変な電波見つけちゃってさ！ちょうど現地を調べてもらおうと思ってたところなんだよね！よし後で連絡してみよう！ありがとうね！おっさ…じゃなくてお父さん！！」

少女は事務所を後にした。

ビースト 「…ったく…。……………変な電波か……………まあいいか…」

デスクワークを再開した。

くパルム・ローゼノムシティを改装した演習所く

たくさんのお兵が集まっている中にディーンとマナの姿があった。

マナ 「すごい人数ですねー！」

ディーン 「まあ…新しくできた演習所での初のイベントだからな……」

マナ 「イベントって言うっても訓練会ですけどね……はは……」

ディーン 「…オレ達も退院して1週間とちょっとだから…いいりハビリになるだろ……」

放送塔からアナウンスが聞こえた。

アナウンス 「みなさま！時間となりましたのでこれより実践演習のルールの説明をしちやいます！受付で渡されたカードをご覧ください！」

ややテンション高めのアナウンスをウザいと思いながらもディーンはカードをみた。

ディーン 「…EAST?…東…?…なんだ？」

マナ 「私はWESTって書いてあります！」

お互いにカードを見せ合っていると、またアナウンスが聞こえた。

アナウンス 「お済になったでしょうか …?皆様のカードにはEASTまたはWESTと書いてあることと思います!!もう察している方もいらっしゃると思われますが …」

妙に間を取る。普通にウザい。もう野次が飛ばされている。

アナウンス 「WESTとEAST!つまり西軍と東軍に別れて疑似戦争してもらいます!敵を全てスタンさせるか終了時間にスタンしていない人数が多かった方が勝利となります!それでは別れる

ので係りの者の指示にしたがってくださーい!」

お互いが対立するということを聞いて二人は顔を合わせた。

ディーン 「(こいつが...)」

マナ 「(…敵…!?)」

しばしの沈黙。それは係員に呼ばれるまで続いた。

係員 「そこのお二方〜! 移動するので東西に別れて付いてきてください〜!」

ディーン 「あっ!…! 今行く!…!…! じゃあな、マナ! お前も置いてかれるなよ!」

マナに背を向けて係員のところへ走り出そうとした瞬間…

マナ 「ディーンさん!…!…!」

大声で呼び止められた。

ディーン 「あ？」

振り向くとマナは笑顔だった。しかし、表情はマナにしては珍しく強気な感じだった。

マナ 「負けませんよー!!」

それぞれ（後書き）

さてさてどうなるか！？

それではまた次話！

パートナー（前書き）

> i 3 2 8 6 3 — 3 7 5 7 <

扉絵はディーンとマナの服装を入れ替えてみました。というかマナの服のデザインが安定しませんw

それでは35話です！

パートナー

〔東軍本部〕

デイン 「……………」 『負けませんよ』……………」 か……………」

訓練中の諸注意を聞き流しながら先ほどのマナの発言について考えていた。

東西の兵の違いを表す背中貼るステッカーについてや、勝利条件のおさらい等が離されていたが、全く頭に入っていない。

デイン 「……………」 アイツも自信がついて来たってことなのか……………」
……………」 多分負けないと思うけど……………」

一人でブツブツと呟いているため、周りのヒトは皆気味悪がって離れて行った。

諸注意はすぐに終わり、東軍のリーダーとして指名された人物がなにやら演説している。ただし、デインの耳には入ってこない。

リーダー 「え……………」 我々東軍はツーマンセルで行動し、一人が囃、一人が伏兵として敵が油断したところを叩くと言う作戦で行こうと思う！なので今から自分のパートナーを決めて私に報告してくれ！」

そう告げ終えた瞬間、あたりはざわつき始めた。ある者は知り合い同士で組、ある者は近くにいた者と組む。パートナー決めは思いの他スムーズに進んだ。あの男を除いて…

ディーン 「……それにしてもアイツのあんな顔は初めて見たな……初対面の時とはまるで別人だ……まあ、短期間で色んなことがあつたしな……」

まだ独り言をつぶやいているディーンはパートナーがいない。と言うよりも誰も寄り付かない。そもそもディーン自身、今がパートナー決めの時間だと分かっていないようだ。

そんなディーンそばに一人の女性が近寄ってきた。

???? 「あの……その貴方……！」

ディーン 「……ん？ハイ？」

声を掛けられ我に返り声の主の方を見る。
雪のように白い肌で、髪型は黒のロングヘアに蒼い華の髪飾りをつけている……白い軍服のような服を着こなしていて、目つきは鋭く片方の目を眼帯で隠していることからデューマンと思われる。

デイン 「…オレがどうかしました？」

??? 「貴方はまだパートナーが決まっていらないようだが、誰かに声を掛けないのか？」

デイン 「…パートナー？…なんだそりゃ？」

??? 「ん？貴方は『パートナー』を知らないのか？『パートナー』というのは自分の信頼でき、背中を預けることが可能な相棒のことだ！」

腕を組んで『どうだ！』と言わんばかりのドヤ顔をしているが、デインとは話が噛み合っていないようだ。

デイン 「……いや、オレが聞きたいのはそういうコトじゃなくてだな……なんで今パートナーを決めるのかってコトだ……」

??? 「なんだ…そちらについてだったか！……ん？それについては先ほど東軍のリーダーになった人から説明があったはずだが？」

ディーン 「…え？そんなのあったか？」

??? 「あつたぞ！東軍はツーマンセルで行動するそうだし！一人が囃、一人が伏兵だそうだし。…故にパートナーが必要となる…！」

ディーン 「…なるほどな…。…で、今フリーの人はどのくらいいるんだ？」

??? 「私と貴方だけだ。」

一瞬空気が固まった。

ディーン 「……………」

??? 「……………」

ディーン 「…なるほどな…。…つまり、オレのパートナーはアンタってことか…」

「???」
「そうなるな。」

引きつった表情のディーンに対し、デューマンの女性は淡々と答える。

ディーン 「……それで、名前は？」

「???」
「……名前?…なんのだ？」

ディーン 「アンタの名前だよ!!他に何の名前があるんだよ!」
「？」

ナギサ 「ああ、私の名前か!…ナギサと言っ…貴方は？」

ディーン 「……ディーン・オーシャンだ…」

ナギサ 「長いな…もう少しなんとかならないか？」

段々とディーンのアライラメーターが満たされつつある。

ディーン 「フルネームで覚えなくていいから……。…ディーンでいいよ…」

ナギサ 「うむ、それならば簡単だ！では『ジーン』！よろしく頼む！」

ブチっという何かが切れる音がした。

ディーン 「『ディーン』な！…オレの名前！…さっそく間違えんなよ！…早過ぎるでしょ！…」

ナギサ 「…ああ、それはすまない。よく聞こえなかったもので…。ディーン！よろしく頼む！」

ディーン 「…ん…ああ…（………ムリだ……。こっいつ何考えているか分からない奴は苦手すぎる）」

訓練開始の音楽が流れた。

「訓練開始から10分後」

マナ 「……う……各自適当に動けって言われたけど、知っている人いないから単独行動だよ……」

大通りを一人で歩いているマナ。東軍から見ればいい力モだ。

マナ 「ディーンさんにあんなこと言っちゃったけど、多分、私ディーンさんにたどり着く前にやられそうだな……とにかく西軍のグループになってるところについて行こうかな？」

キョロキョロとあたりを見回していると二人組の男を発見した。

マナ 「（あ！あの人たちについていこー！）すいませーん！……」

二人組に駆け寄ったが、銃を向けられる。よく見ると東軍のステッカーを胸につけている。

マナ 「あつ！東軍！」

男A 「ああん？お嬢ちゃん西軍かい？ダメだな？よくステッカーを見ないと」

男B 「わりいけど、さっそく退場願おうか！？」

トリガーを引く！

バンバン！！！！

マナ 「…えっ？」

二発の銃声がしたが倒れたのは二人組の方だった。

すると後ろから声がある。

「??? 「オイオイ」…女の子一人相手に野郎二人でかかるって……ダサすぎるぜ？お前等？」

黒いハットに黒いスーツ。そして黒いツインハンドガンをくるくると回している。その銃を使ったらしい。

パツと見そうとは分かりづらいが声が機械の声だったため、キャストのようだ。

その男はマナの元に歩みより片膝をついて手を差し伸べる。

???

「ケガは無いかい？マドモアゼル？」

マナ

「え…まどもあ…？…あ、はい…」

〔 演習場・中央の管制塔 〕

1人のキャストが歌を歌いながら警備員が全滅した廊下を歩いてい

る。倒れている警備員は大きな外傷は見られないがピクリとも動かなくなっている。

ワスプ 「ぶるんぶるんぶるん はらちりがらとろぶるん おろいりけれのろまらわらりりにり、おろはらながらさらいりたらよろ」

管制室の扉の前で立ち止まる。

ワスプ 「ぶるんぶるんぶるん はらちりがらとろぶるん …
とうちやゝくゝ」

にやりと笑い、一歩踏み出す。

パートナー（後書き）

キャラクター設定？

ワスプ

種族：キャスト（SEEDフォーム）（男性）

年齢：5歳（製造されてからSEEDフォームになるまでの期間。
生きた年数は12年）

身長：172cm

体重：98kg

ICV：柿原 徹也

詳細：ペンタクルの一番新入り（？）。前任のペンタクルのメンバーがとある事情でペンタクルの座についていられなくなり、空席を埋めるため、包帯男がスカウトした。生前は殺しを楽しむ快樂殺人『機』だった。7年前に宇宙船の中で殺そうとした男に思わぬ反撃を受け死亡したが、宇宙船ごとSEED空間に取り込まれSEEDフォームとして再構成された。

現在も邪魔者の殺しを組織内で担当している。性格は無邪気な子供のようなが、その無邪気さ故の残酷さを持つ。

快樂殺人鬼ならぬ快樂殺人機：敵として書いてみたいやつでした。さてさて、どんな能力を持っているのやら…そして何をするつもりなのか？

名前の由来は英語で蜂の意味のwaspから。

ゲームスタート(前書き)

> i 3 3 2 9 3 — 3 7 5 7 <

こんにちは！テストのせいでしばらく更新できませんでした…

扉絵は BIOS のビフォア アフターです！

みなさんはどっちの BIOS が好きですか？僕は髭のほうが好きですw

ゲームスタート

みなさん！こんにちは！ 毎度おなじみマナです！

演習に来たはいいけど、ディーンさんと別々のチームになっちゃった拳句、敵チームのヒトに見つかっちゃって、さあピンチ！！！！

そんなところを救ってくれたのがこのヒト！

???

「ケガはないかい？マドモアゼル？」

何を言っているかはよくわかりませんが、もの凄い早撃ちで東軍の二人を一瞬で倒しちゃいました！このヒトと一緒にいれば生き残れるかな？

マナ 「あ……あの……危ないところを助けていただき、あ、ありがとうございます！」

このヒトの早撃ちに負けないくらいのスピードで頭を下げながら感謝の念を伝えると、そのヒトはハットを取り、片膝について、映画や舞台に出てくる王子様のようなお辞儀を返してくれたのです！

「??? いえいえ！紳士として当たり前のことをしたまでで
ございます！それよりも傭兵の方とは言えこのような戦場にこんな
可憐な女性一人とは…何かとご不安でしょう…。どうでしょう
？私でよろしければエスコートいたしますが？」

えすこーと？ やっぱり何をいつているかよくわからないけど、一
緒に行ってくれるっていうことだね？

マナ 「じゃ、じゃあ、お願いします！あ、私、マナって言
います！」

バロン 「ああ…と申し訳ない！名を名乗っていませんでし
たね！…私^{わたくし}…『バロン・フォーマー』と申します…どうぞお見知り
おきを…」

バロンさんかあ………そういえば少し気になったけど、なんだが
このヒトさつきと雰囲気が違う感じがするんだよね？…ん……気の
せいかな？

バロン 「それではマナさん！私からあまり離れないよう…
よいっしょー！」

マナ 「う……うわあ！…！」

バロンさんの違和感について考え事をしていたら急に体を持ち上げられた。

「こ、これってテレビドラマで見たことがある！た、確か『お姫様抱っこ』て言うのだ！」

マナ 「バ、バロンさん！？ちよっ…降りしてください！大丈夫です！！自分で歩けます！！」

モガイテみるけど、ガッチリと機械の手に固定されていて、降りることができない。その上バロンさんは笑顔で話しかけてくる。

バロン 「いえ、紳士として女性にこのような道を歩かせるわけにはまいりません…。ああ、敵襲に警戒しているのならご安心ください！私、半径50m以内の生体反応をキャッチするオプシヨンが付いておりますので…」

マナ 「いや！そうゆうーことじゃなくって！恥ずかしいです！この態勢めちゃくちゃ恥ずかしいです！」

バロン 「フフ……何、照れることはありません… 私は下心など持ち合わせておりませんよ？」

ダメだ！…このヒト、ヒトの話を聞く気がないっ！

マナ 「い~~~~~~~~や~~~~~~~~!!!!」

↓ 演習場 別ブロック ↓

ディーン 「ナギサ ……そっちの二人は任せた!! オレはコイツ等をやる!!」

ナギサ 「了解だ! そちらは任せたぞ!!」

ディーン & ナギサ コンビは西軍の4人組と交戦していた。しかし、そこいらの傭兵が敵うわけもなく…

傭兵A B 「ぐはああ……!!」

ディーンの神速の剣術について行けず、スタンモードのセイバーで急所を斬られた傭兵AとBはその場で気絶した。

ディーン 「……4年も二トやってたやつ動きも読めないとは……。
ナギサ……そっちは済んだか？」

振り返り、ナギサの戦況を確認しようとして、あらビックリ！ ナギサは重なって気絶している二人の上に足を組んで座っていた。

ディーン 「って早……!!」

ナギサ 「ああ、貴方の方も片付いたのか？ なんだか、この演習に参加している傭兵達の程度が知れたところだな……うん、全く相手にならないじゃないか……?」

穏やかな口調から急変してディーンに大声で文句を言う。

ディーン 「それをオレに言われても困るわ!!」

ナギサ 「ん?...それもそうだな...。ともかく貴方は他の傭兵達とは一味も二味も違うようだ!安心した!」

ディーン 「そりやどーも(...やっぱりワカラン!コイツ何が何だかわけがわからん!)」

ナギサ 「もしかしたら、あのヒトにも匹敵するのかもしれない...」

ディーン 「あのヒト?」

ナギサ 「ああ...私と一緒にこの演習場に来たんだが、西軍に行ってしまったのだ...。グラールを二度救った男だからな...油断できないな...」

ディーン 「.....(グラールを二度救った...?)」

ナギサ 「何をぼーっとしているんだ？早く行こう！」

ディーン 「…あ…ああ…」

二人がその場を離れようとした時、突然それは起こった。

ドオー
ン…！…ドオ
ン…！…！

ディーン 「!？」

突然、演習場で二回爆発が起こった。黒煙の出ている位置から考えるに、一か所は東軍の本部のようだ。もう一か所は演習場全体から見て点対称な位置、恐らく西軍の本部だ。

ナギサ 「なんだ！？今のは西軍の攻撃か！？」

ディーン 「……いや、それは無い……この演習はスタンモードの武器以外使用不可だ……全員装備の検査は受けたはずだ……そもそも西軍の方でも爆発が起きている。」

ナギサ 「……では、いったい……」

ディーン 「とりあえず、本部に向かおう！」

（西軍 本部）

マナ 「……………ひどい……………」

本部に駆け付けたマナとバロン。その光景は無残なものだった。3階建ての建物は崩壊し、爆発によって死亡したと思われる傭兵の死体が一帯にあった。立ち上る黒煙によって黒く染められた空がさらに状況を悪く見せている。

バロンの腕から解放されたマナは崩壊した建物の方へ走って行った。

バロン 「マナさん！どこへ！？」

マナ 「まだ助かる人がいるかもしれません！バロンさんは、外のヒトの手当てをしてください！私は建物の方を見ってきます！」

バロン 「ちょ…危険です！……………って行っちゃったよ…。…まあ、いいや……そんでお前たちは何なんだ？殺気が強すぎて感知能力を使っただけでなかつたぜ？」

口調を変えて物陰に向かって発すると、そこから二人の男が現れた。

一人は坊主頭で僧のような格好をしたニューマンで、もう一人はバンダナをしたヒューマンだ。

僧 「……やはり気付いていらっしやいましたか……」

バンダナ 「女あゝゝ…さっきの女はどこいった？建物の方があゝ？」

バンダナの男はヒトとは思えない跳躍力でバロンの頭上を飛び越えマナの走って行った方に向かった。

バロン 「デメエー！」

銃をバンダナの男に向かって構えるが、すぐに振り返ってツインハンドガンをクロスさせて防御の態勢を取る。

僧 「ハアゝゝゝゝ！！！！」

巨大な斧を振りかざしながら猛スピードで接近してくる僧の男に気付いたのだ。

ガンッ！！！！

僧 「ほう…頑丈な銃ですね？私の一撃を受け止めるとは……」

バロン 「テムエ…何者だ？…この爆発を起こしたのもテムエらか？」

斧を引き、後ろにステップをしてバロンから距離を取る。バロンもそれに反応してすぐに銃を向ける。

しかし、銃を向けられているのに僧の男は喜びに満ちた顔をしている。喜びとかむしろ狂気と言えるものだろうか？

僧 「ええ、この爆発は私たちの主が仕組んだものです…」。

そして我々に与えられた使命はこの演習場にいるすべての傭兵を…
…殺すこと…」

バンッ！！

言い終えた瞬間銃声がした。フォトンの弾丸は僧の男の顔をかすめた。

Baron 「……ああ…理解できたよ…お前等はテロリストってことね…。…それで俺を殺そうとする…。…了解了解…」

帽子のズレを直し、もう一度、銃を構える。

Baron 「オーケーイ！！敵ならば放させてもらっぜ？俺は女性には紳士だが、野郎には容赦ないぜ？」

く東軍 本部く

ディーン 「クソッ…なんだってんだ!？」

倒れているヒトの生死を確認しているディーンとナギサ…。何人も確認したが全員が死亡している。しかも中には爆死ではなく、ヒトに殺害されたようなものもあった。

ピンポンパンポン

突然放送塔から音楽が流れた。

ワスプ 「ハ…イ!!…こんにちは…!死にぞこないの傭兵のみなさん…!元気ですか…!!?」

ディーン 「なんだこの声は!？」

ワスプ 「この演習場の管制塔は我々が占拠しました…!!
先ほどの爆発は僕が仕組んだものであります!」

ナギサ 「なんだとっ!？」

ナギサが放送塔に向けて剣を構える。

ワスプ 『そこで生き残っている諸君に朗報です!現在、僕の部下が4名ほど生き残っている傭兵を殺し回っています!制限時間内にそいつらを倒して管制塔にいる僕を倒せたら君たちの勝ち!もし制限時間をオーバーもしくは、ここから逃げ出したものが出た場合……』

ボオン!!!!

遠くの方から爆発音が聞こえた。

演習所の外の市街地で小規模だが爆発が起こったのだ。

ディーン 「!？」

ワスプ 「こんな感じで市街地にセットした爆弾が爆発します
くー！制限時間はあと2時間！！頑張ってくださいーい！！お相手は
DJ・ワスプでした」

ブツンッ

ディーン 「……どのどいつだが知らねえが……ふざけたこ
としてくれんな……」

ナギサ 「ああ、一刻も早く管制塔に向かおう！」

ディーン 「奴の言うことを丸丸信じるワケじゃないが…… 現
状そうするしかねえからな……行くぞー！」

中央の管制塔に向かって走り出そうとする二人の前に、二つの影が
立ちふさがる。

1人は赤髪のやや美形のデューマン。もう一人は青髪のイカツイ顔
つきの中年で種族はビーストのようだ。

赤髪 「あつれえゝ？ダンナあゝ？東軍は全滅させたんじゃない？」

青髪 「ふむ……生き残りがいたようだな……」

チャラチャラとした雰囲気、赤髪の男の発言を流すように青髪の男は無表情で返した。
武器を構えてはいないものの、その二人組からは凄まじい殺気が感じ取れた。

ディーン 「コイツらが部下ってやつか…」

ディーンとナギサはそれぞれ武器を構えた。

ゲームスタート（後書き）

キャラクター設定

バロン・フォーマー

種族：キヤスト

年齢：製造されてからから20年

身長：176cm

体重：84kg

ICV：小野坂昌也

詳細：リトルウィング所属の傭兵で主力の一人。銃の名手でハンドガンによる早撃ちが得意。その他にも様々な銃火器を使いこなす。性格は女性の前では紳士（執事）キアラだが、男に対してはそつがなく、口調も変わる。ラグナをさらにひどくした感じ。また、女なら誰にでも紳士的に接するため、彼の本性を知る女性には悪印象を与えることが多々。

PSP02のマイキャラがモデルです。レンジャータイプで使つてますw

エグゼキューター（前書き）

> i 3 3 4 0 5 — 3 7 5 7 <

こんにちは！テストから完全開放！次にオレを待ち受けるものは？
！？w

はい、文化祭です。

ただ、これといった準備も少ないため、小説には影響はなさそうです。

それでは37話をどうぞ！

エグゼキューター

「東軍 本部近く」

オレとナギサの前に立ちふさがった二人組のうち赤髪の方が前進しながら話し始めた。

赤髪 「やあやあ！正直まだ生き残っている奴らがいて安心したよ！なんかもう全員弱すぎてさ？なんか：白けちゃったって感じ？：君達がどの程度かは知らないけど、少しは楽しませてくれよな？」

饒舌な赤髪の男に対して青髪の男は頷くだけで終始沈黙を貫いた。

赤髪の男はオレ達に話し終わると振り向いて青髪の男に話しかけた。

赤髪 「つゝわけでダンナ？俺はあっちの黒髪ロングのセクスイーなネーちゃんをやるから、男の方はお願いできます？まあ、デューマン同士仲良くやるんで、そっちは青髪同士なかよくやったってくださいな？」

青髪 「……フン……勝手にしろ……」

赤髪 「…さつてと…それじゃあ黒髪ロングちゃん 仲良く
やろっぜ?…て…え!?’

髪をかき上げるキザな動作をしながら振り向いた赤髪の男は目の前で大剣を振りかぶるうとしているナギサに驚く。

ナギサ 「てやあ——!!!!!!!!」

ザンッ

赤髪 「ぐあはあああ!!!!!!!!!!」

武器を構えることも防御もする間など与えられず横切りが綺麗に決まった。

しかし、胴体が真っ二つになることはなく、ものすごいスピードで横に飛ばされ、飛ばされた先にあった建物の壁を貫通した。

青髪 「ベリアルッ！！！」

さっきまで無表情だった青髪の男の表情が変わった。ベリアルと言うのはおそらく赤髪の男の名前だろう。

ベリアル 「……か……かは………」

白目を向いて血をドバツと吐くと、そのまま動かなくなった。動かなくなったと言ってもピクピクしているので死んでいるのではなく、気絶したようである。

ナギサ 「……すまない……。あまりに隙だらけだったもので……
つい……。安心しろ……。峰打ちだ……」

『つい……』で倒してしまうとは……味方ながら恐ろしい強さだ。それに峰打ちと言ってもナギサの使っている大剣『ステイルハーツ』は片面は刀として作用しているが、反対側の峰に当たる部分はかなりゴツく、ハンマーのようになっている。峰打ちといってもあの男は現在、生死をさまよっているに違いない。

ともかくこれで2対1。こちらが有利だ。

デイン 「……オッサンよ……。アンタがどのくらい強いかは知らんが、オレ達が圧倒的に有利だ……！おとなしくここを通してはくれないか？」

青髪 「……圧倒的に有利……。ふざけたことを言う……。俺をベリアルと同じと思ってくれるなよ？」

やっぱそうだろうな……。それにこの男のいう通り、さっきのチャラ男とは放っている殺気が全然違う。

最初に感じた殺気も全てこの男一人のものだったのだろう。

そう考えている間に青髪の男は武器のナノトランスを解除した。レーザーカノンの類のようだ。

その場に緊張が走る。

青髪 「何はともあれ、アイツとは一応長い付き合いだ……。仇討というわけではないが……。貴様らは消し炭にしてくれよう……！」

く西軍 エリアく

僧の男とバロンは互角の戦いを繰り広げていた。バロンの銃弾は全て斧を盾にして防がれてしまい、僧の攻撃は距離を詰めることができずバロンには届かない…といった具合だ。

バロン 「(ったく…早く済ませてマナさんの方に行った奴をなんとかしねえと…)」

僧 「フッフッフ…焦っておいで？何、あやつが彼女をやる前に私が貴方に安らぎを与え、そして彼女も私が安らぎを与えましょう……」

バロンには安らぎと言つ言葉が妙に引っかった。

僧 「ああ、申し訳ございません…。私……『ビガー・トード』と申しまして、以前までグール教団に仕える僧だったのですが、ある日悟ったのですよ……。ヒトが最も安らぎを得た表情をする時は……死んだ時だと……」

その法衣に似合わぬ邪悪な表情をし、そのあまりの気味の悪さにバロンは吐き気さえした。

ビガー 「その悟りを開いた翌日から私は多くの者をこの斧で救ってきたのですが……どういうワケか処刑人等エグゼキューターと言つ不名誉な異名をいただき全銀河指名手配犯となつてしまったのですよ……私はただ私はヒトを救いたただけなのに……」

バロン 「……女も……殺したのか……？」

ビガー 「ええ……もちろん……！ 女子供はいいですよ？……救われる寸前までは恐怖し泣き叫ぶのですが、私が斧を振りかざした後には……本当に安らかな顔を……」

バンッ！！！

弾丸がビガーの肩を貫いた。出血もしていることからスタンモードではないようだ。

しかし、ビガーは少し冷めた表情をするだけでこれと言って焦った様子も無くバロンを睨みつけた。

ビガー 「なんですか？僧の説法は最後まで聞くものですよ？それとも、早く私を救いたいのですか？」

バロン 「ああ？救う？お前バカか？…男をどれだけ殺そうが知ったこっちゃねえが、女性を平気で殺すようなやつを救うほど俺は甘くねえぞ！？」

言っている内容にめちゃくちゃな部分が含まれているが、バロンは真剣な表情で手をクロスさせてツインハンドガンを構える。

バロン 「テメエは俺が裁く！」

ビガー 「…本当にあなたは救い甲斐がある…！！ならば全力で救ってあげましょう！！！」

狂気に満ちた笑顔で叫ぶと、体中から黒いオーラを発生させ、身体を包み巨大化していく。

バロン 「なんだ！？これは！？」

弾丸を黒いオーラに向かって放つが全く手ごたえがない。

すると黒いオーラの中から異形の者が現れた。

体長は4.5mほどでビジュアルはSEEDフォームによく似ているとされる生物インディベルラに酷似しているが、両手が巨大なトマホークタイプの斧になっている。

ビガー 「やはりこの姿は素晴らしい！！！！！！すぐにでもアナタを救えそうだ！！」

バロン 「お前、さっきのハゲか！？なんだその姿は！？」

ビガー 「わが主、ワスプ様が授けてくれた、偉大なる救いの力！さあ、安らぎを得なさい！！」

両手のトマホークを順番に回転しながら飛ばしてきた。

バロン 「（何が何だか理解できけど、ヴィジュアル的にはインディベルラで、攻撃パターンも似てる！軌道は読めた！）」

態勢を低く構え、斧の下を通って交わそうとした。
それを見たビガーは心の中で笑った。

バロン 「なっ!？」

急に斧の軌道が変わったのだ。

一本の斧がさらに低いところまで下りてきて、バロンの首を切断できる高さまで来た。

バロン 「ヤバいっ!!--!!」

サクツ!!!

上下真つ二つになった彼の帽子が宙を舞った。

どうやら切断されたのは帽子だけで済んだようだ。

バロンは地面に這いつくばりトマホークの直撃をかわした。

バロン 「なんだあ？今のは!？」

ビガー 「まだですよ!？」

もう一本の斧がバロンの真上で一瞬停止すると、そのまま直角に落ちてきた。

ブアーン！！！！

ギリギリ体を回転させ斧をかわす。斧が刺さった地面は大きなヒビが出来ている。…もし直撃していたらどうなったかと考えると恐ろしい。

そして二つの斧は不自然な動きでビガーの両腕に戻って行った。

バロン 「なんだよその斧は！？有り得ない動きをするぞ！？」

ビガー 「……ええ、これこそが私の得た、雷のOSの能力…」

バロン 「雷の…おず…？」

ビガー 「私は自分の斧をラジオコントロールすることが出来ます。それは動きだけではなく、回転速度、回転方向も変幻自在でございます…。…アナタの使用武器は銃器の類のようですが、集中して狙いを定めなければいけない銃に対して、変幻自在の遠距離攻撃を可能とする双刃を有する私が圧倒的に有利……。…さあ、大人しく救われなさい！！」

もう一度両手を振って、二本の斧を飛ばした。それらは別々の方向

からバロンに襲い掛かった。

バロン 「……アイツがなんであんな力を持つてるかはよくわからんが、俺がアイツに勝つにはあの斧を破壊しないと……この銃じゃ威力に欠けるな……」

バロンは落ち着いてツインハンドガンをしまい、ショットガンを取り出した。

ビガー 「血迷いましたか！？確かにショットガンの威力なら斧を破壊できるでしょう！しかし、連射向きでないその武器では一方は破壊できたとしても、もう一方がアナタを切り裂くでしょう！さあ！安らぎの楽園へ逝きなさい！！！」

斧が急加速してバロンに向かって行く。もう2本ともバロンまで1m程の射程に入った。一本は右上から、もう一本は後ろから……逃げ場はない。

ビガー

「ひやはあ

！！！！！！」

バンッバン！！バン！！！！

一瞬の出来事だった。

3つの銃声が鳴り終わった時、2本の斧は同時に碎け、ビガーの腹部にも風穴が空いていた。

ビガー 「……！！なっ！？……何が……おき……！？」

喋っている途中で途切れたのは、一気に距離をつめたバロンにショットガンの銃口を頭に突きつけられたからである。よく見ると、そのショットガンはさっき持っていたモノとデザインが変わっている。

バロン 「確かに、ショットガンは連射に向かない銃だ……。だが、撃つたびに新しい銃に持ち替えれば連射も可能だ……」

ビガー 「あ……アナタ、まさか一発目の弾丸が発射されたのと

同時にナノトランスと新しい銃の解除からの発砲を一瞬で行ったとでも言うのか!？」

Baron 「ああ…その通りだ…。早撃ちの天才に不可能はないのさ!…じゃあタネ明かしも済んだところで…オレがオメエを処刑してやんよ…?」

ビガー 「!?!?!…まっ…待て…!?!?!」

Baron 「あばよ! エグゼキューター 処刑人!」

バアン!?!?!

収束された散弾が放たれ、ビガーの頭部が吹き飛んだ。その後黒いオーラがビガーを包み、ヒトの姿に戻ったが、やはり頭部は吹き飛んでいた。OSの力で変身しても頭を飛ばされたのなら絶命するらしい。

バロンは胸ポケットからキャスト用の電子煙草を取り出し口にした。

バロン 「……死が救いつてんなら本望だろーによ……。ただ、間違っても樂園なんてところには行けねえ……。……お前も……俺も……」

く西軍 本部 く

瓦礫の山の中、マナは生存者を搜索していた。

しかし、爆発の勢いが凄まじかったためか誰一人として原型を留めている者はいなかった。

マナ 「……酷い……酷い……酷い……！！……なんで……なんでこんな酷いことを……」

涙目になりながらも必死にそれがこぼれるのを堪えて生存者を探し続けている。
すると何か音がするのに気付いた。

マナ 「な、何！？……もしかして生きてるヒト！？」

「……けて……くれ……」

今度は間違えなく聞き取れた。

マナ 「どこですか！？すぐに助けます！！」

声をした方を向くと体は瓦礫に埋もれながらもなんとか手だけは出して振って合図をしている。

マナ 「今行きます!!」

ザッ

刹那、マナを人影が追い越して行った。

マナ 「えっ!？」

そのヒトはバンダナをした男で声のする瓦礫のところで立ち止まった。

マナ 「（あ！他にも人がいたんだ！）そこに生存者がいるので救助に協力してもらえますかあ!？」

その男はマナの方を向くとニヤリと笑った。…そして

マナ 「えっ!？」

その男は笑いながら瓦礫の上を踏みつけ始めた。瓦礫のしたから、「ぎゃあ」とか、「痛い」などと言う声と同時に「ぐちゃ」っと言う何かが潰れる音がした。

マナ 「な!! あ、アナタ、なんてことしてるんですか!？」

バンダナ 「ああ? こ…ここにいる傭兵を皆殺しにしてるんだあゝ! お…お前、さ、さっきの放送聞いてなかったのか?？」

マナ 「さ…さっきの放送って…爆弾を仕組んだとか…管制塔を制圧したとか…?」

バンダナ 「そ、そうそう! つかオメエ、か、可愛いな……。し、死に顔が、み、見たくなるうゝ」

バンダナの男は興奮しているのかハアハアと息を荒げている。

マナ 「……………貴方たちが…ここをこんな風にしたんです
ね…？」

真剣な表情でバンダナの男を睨む。

バンダナ 「あ…アあ……、お、オレ達がやったんだ…。よ、傭
兵を、こ、殺すためにな…。…こ、こんな風に！」

踏みつける脚に思いっきり力を入れた。

すると瓦礫のしたからこれまでとは比べ物にならないほど悲痛をまとった悲鳴がすると、それっきり何も声がしなくなった。

マナ 「………さない………」

バンダナ 「な、なんだ？こ、こええのか？」

マナはロッドのナノトランスを解除して構え、さっきよりも強くバンダナの男を睨んだ。

マナ 「私は、ヒトの命を平気で奪う貴方たちを絶対に……
……許さない!」!

エグゼキューター（後書き）

キャラクター設定

ビガー・トードー

種族：ニューマン（男）

年齢：33歳

身長：178cm

体重：58kg

ICV：山崎たくみ

詳細：元僧の快樂殺人機。歪んだ価値観で死こそがヒトの救いと思い込み殺人を繰り返すうちにヒトを救う（殺す）ことに喜びを感じるようになった。

指名手配の殺人鬼ということでワスプに目をつけられやとわれ兵として部下となり、OSの力を手にする。能力は自分の腕（斧）を電波によってラジコンのように遠隔操作すること。

戦場少女（前書き）

> i 3 3 5 8 3 | 3 7 5 7 <

どーも鳥山です

今回はマナの回です。

応援してあげてくださいw

戦場少女

「西軍 本部の瓦礫の山」

マナ 「貴方たちを絶対に……許さない……！」

怒りに満ちた表情のマナに対してバンダナの男は腹を抱え笑い罵った。

バンダナ 「……ひ……ひひひ……ゆ、許さないと……ど、どうなるんだあ？」

マナ 「え、えっと……その……。……と、とにかく許しません……！（こ、このヒト気持ち悪い……それにやっぱり怖い……。……でも……倒すんだ！私の力で！）」

バンダナ 「じゃ、じゃあ、何かされる前に、こ、殺してるよお！」

瞬時に両手にフォントタイプのサバイバルナイフを装備し、先ほどマナを追い抜いた、狂的な速さで特攻仕掛けた。

バンダナ 「そ、その肉、さ、裂いてやるう！-！」

マナ 「（は、速い…でもまだこれだけ間合いがあるから…）
えいっ！-！」

ロッドを振るとマナの前方に電流の壁が発生した。テクニック【ラ・ゾンデ】である。

バンダナ 「（…な、何かと思えば、て、テクニックか…。こ、
こんなもの余裕で、か、かわせるう！-）」

バンダナの男は足を交差させ、そのまま体をぐるりと一回転しながらステップを踏んで長く飛び、マナの正面から離れて振り返り、違う角度からマナに斬りかかるうとした。

この動きからするにこのバンダナの男、ナイフなどの近距離武器による接近戦のエキスパートのようだ。

バンダナ 「（ひひっ…こ、この角度からなら、う、腕を落とせるう！-！……う！-？）」

彼の目の前には電流の壁が存在した。

マナが新しいテクニクを使ったわけでは無く、最初に放った【ラ・ゾンデ】のようだ。その証拠にマナの正面からこの位置までずっと電流の壁が続いている。

「（ば、バカなあ！？こ、この位置まで電流が、と、とどいているだ！？だ、ダメだあ！？も、もう止まらない！）」

バンダナの男はそのまま電流の壁に激突し、彼の体に高圧の電流が走った。

バリバリ！！！！！！！！

「アガガガガガガ！！！！！！！！！！！！」

数秒間電流によつて体を焼かれると、口から煙を吐き、その場に倒れた。

マナ 「（や、やった！倒した！？）は、早くバロンさんと合流しないと……）」

倒れているバンダナの男をそのままにきた方向へと引き返すために、バンダナ男に背を向けてマナは走り出した。

ビュ

キッ

マナ 「痛っ…！」

マナの右肩に切り傷がつけられ、血がタラタラと流れ始めた。後ろから飛んで来たフォトンナイフが右肩をかすめたのだ。

バンダナ 「…ひ…ひひひ…。ど、どこに行くんだ？お、女あゝ……」

振り向くと倒れていたバンダナの男が立ち上がり、一本のナイフを突き立てている。

マナ 「……！……そ、そんなあ……さっきので倒れたんじゃ……」

バンダナ 「……ひひ……た、確かに攻撃範囲と言い、い、威力と言
い、そ、相当なもんだったぜえ……。……で、でも、お、俺はその
程度じゃ倒れねえ……。……」

バンダナ男の体中にある電流による火傷の跡を見るとマナのテクニ
ックの威力の高さが覗えるが、彼はやけどなど全く気にしていない
ようにピンピンしていた。

バンダナ 「……た、ただ俺に一撃与えたことは、ほ、誇りに思っ
ていいぞあ……。……」

男は腕を組んで偉そうな顔つきでマナを見つめ、ペラペラと話し始
めた。

バンダナ 「……お、俺の名は『パール・ベルスキン』……。……お、お
前も傭兵なら、ぜ、『絶影のパール』という殺し屋を、き、聞いた
ことがあるだろあ？……。……お、お前の目の前にいる男が、そ、その絶
影だあ……。……ひひひひひひ……。……」

勝ち誇ったような表情で笑っているが、マナはキョトンとしていた。

そして、一言いづ言った。

マナ

「……す、すいません……。……知らないです……」

パール

「
・
・
・
・
・
・
」

マナ

「
・
・
・
・
・
・
」

一瞬にして微妙な空気が創生された。

そして、パールがこの沈黙を破った。

パール 「……ひひ……ひひひ……。……お、お前、き、恐怖のあまり、あ、頭がおかしくなっただんな？」

マナ 「……いや、ホントに知らないんです……。……傭兵の勉強として、ギラードさんに有名な犯罪者のリストも見せてもらったんですが……。『絶影』なんて乗ってなかったような……。……」

腕を組んで首を傾げるマナを見て、パールはついにブチ切れた。

パール 「……………！！！！！！おおおおお前えええ！！！！！！おおおおお俺をバカにしたなあああ！？おおおお俺のことを小物って、いいいいいい言いたいんだなあ！？……こここここ殺すううう！！……たたたたたた殺すだけじゃないいい！！！！……ぜぜぜぜぜぜ絶望の中で、めめめめめめちゃくちゃにして、こここここ殺してやるうううう！！！！！！」

突如パールの体から出現した黒いオーラが彼の体を包み込んだ。

マナ 「……黒いもやもや……！？確かあれって」

身体全体を包み込んだ数秒後、漆黒のオーラの中から、異形と化したバールが姿を現した。

バール 「……ささささささあー！ききききき恐怖しろお！
！……こここここここの姿こそ、ワワワワワスプさんがくれた、
ささささささ最強の力ああ……！」

姿はSEEDフォーム『デルシャバン』とほぼ一致し、大きさも2m無いくらいだが、手に当たる部分は両手とも5本の白いナイフが鉤爪のようについていて、何よりも特徴的なのは全身が白一色ということである。

マナ 「……や、やっぱりマルコさんと似てる……。……確か
……おず？……だっけ？……ディーンさんの話だと確か固有能力を持つ
てて……」

辺りの風景の異変に気付いた。

マナ 「……なんだか白くぼやけてきた？……アレ！？あのヒ

トがいなくなってる!?)」

まるで濃霧が発生したかのように辺りは白に染まり、ついには伸ばした自分の手さえも白くぼやけてしまうほどになった。

そんな中で数十メートル離れた場所にいる真っ白な化け物を見失うのは当然である。

マナ 「(違う……この白のもやもやのせいで見えづらくなってるんだ……。…ど…どうしよう…?)」

視覚が奪われたも同然の状態に置かれ、不安に陥り後ずさりした。
その直後

ボール 「ひひっ」

マナ 「(後ろっ!?)」

後ろから聞こえたボールの声と腕を振りかぶる音に気付き、慌てて前に飛びこんでかわそうとしたが、少し遅かった。

ザシュ

マナ 「あああああああ！……！」

背中に走る激痛に耐えきれず大声が出た。

かわそうとしたことでそこまで深い傷ではないが、5本のうち3本のナイフがマナの背中を切り裂いた。

パール 「ままままだ、ここここ殺さない……いいいい痛ぶって、もももも弄んでやるうつつ……」

そのまま前にこけてアスファルトの上を転げまわる。アスファルトが赤くなっているのが白いもやの向こうでうつすら視認することができた。

マナ 「（痛い…痛い痛い……。こ、これが殺し屋……。…に、逃げないと……。こ、殺される……。）」

激痛に耐えながら、何とか立ち上がり、涙をボロボロこぼしながら
当てもなく走り始めた。

パール 「どどどどこに行くんだあ?! おおおおお俺の能力は氷のOSによる、ホホホホホホホホワイトアウトの発生だが、おおおお俺の目ではこの白のもやの中でも普通の視覚となるうっ! つつつつつまり、おおおおお前がどこへ逃げようとも、ままま丸わかりだあああ!」

ヒトの形態だったところと同じく素早い動きでマナを追いかける。

西軍 エリア 旧食糧保存施設前

目が使えないうえパールの死角からの攻撃を仕掛けられ続け、マナは心身ともに限界に近づいてた。

背中だけではなく、肩、腕、脚、太もも…急所は避けられている上に浅い傷なのだが、ナイフでつけられた傷は相当堪えるらしい。マントや服もボロボロであった。

マナ 「……………痛い……。…体中が痛い……。…私、このまま殺されちゃうのかな…？」

建物の壁にも背をあてうずくまっていた。
その目は虚ろで、絶望に染まっていた。

マナ 「（きつと、あのヒトは今私がこうしてるのも分かるんだ……。…勝てるわけないよ……。…つい最近傭兵になったばかりの女の子がプロの殺し屋…それも特殊能力をもってるなんて…ムリだよ……。…最初から無理だったんだよ……。…）」

絶望的な状況に飲まれ、ネガティブな考えに頭の中が汚染されている。

そこへ白いデルシャバン バールがマナの目の前に現れる。
もうマナに逃げ出す気力が無いと見たのか、うつすらと見える位置に立ち5本のナイフが付いた右腕を挙げる。

バール 「ひひひひひひ……。…やややややと絶望に、そそそそそ染まったなあ？」

マナ 「（……………痛い…痛い……。…誰か助けてよ……………）」

マナの体から少しずつ黒いオーラが現れた。

「（こここれは、おおお俺達と同じ…？）」「

「マナ（……助けてよ……）助け？」

完全に心が折れかけた時、この『助け』という言葉が引つ掛かった。

マナ 「……そういえば私、助けられてばかりだ……。デ
 イーンさん……エレーナにお父さん、ギラードさん、ラグナさん、ロ
 ークさん……ヤマトさん……ギルドのヒト達……ビオスさん……バロンさ
 ん」

少しずつマナの表情に変化が生じた。虚ろな目も色を取り戻し、黒いオーラも消えた。

「きききき消えた！？きききききのせいだったのか！？まままままあい……」ししししねええええ！！！！」

ボールはその腕を振り下ろす。

マナ

「（

助けられてばかりじゃダメだ！！）」

ザンシ

斬れたのはマナの座っていたアスファルトだった。

パール 「なななな何っ!？」

マナは横に転がってパールの一撃を回避し、そのまま壁伝いに逃げ出した。

そして、その建物の入り口の前にたどり着いた。
ボロボロの看板があり、何か書いてある。近寄ってみると何とか読むことができた。

マナ 「……………食糧…保存庫…?……………もしかしたら……………勝てるかもしれない…!!」

マナは手動の扉を開き中へ入って行った。

戦場少女（後書き）

キャラクター設定

パール・ベルスキン

種族：ヒューマン（男）

年齢：26歳

身長：172cm

体重：53kg

ICV：神奈 延年

詳細：痩せ形で根暗な雰囲気、殺し屋。身軽で動きが素早く、ナイフなどの近距離武器の扱いのエキスパート。ターゲットをいたづつて殺すことに喜びを感じる変態。しゃべり方は特徴的だが、怒るとさらに独特になる。

OSの属性は氷で、能力はホワイトアウト（極地の方で発生する濃い霧のような白い霧）を周囲に発生させる。ただし、自分の目には影響を与えない。暗器の扱いに長けた彼にぴったりの能力である。

強者（前書き）

今回は扉絵ないです。ゴメンナサイ

それではどうぞ！

誤字脱字があれば指摘していただけるとありがたいです！

強者

「西軍エリア 旧食糧倉庫」

マナ 「……よかった！建物の中はまだ白いもやもやが無い！」

バールの能力はあくまで白い気体を発生させるものだったようで、窓が無く壁と扉だけ仕切られていて換気が行われていないこの建物の中はホワイトアウトが発生しておらず、電気が途切れ途切れでしか付いていないが外よりかは視界がはっきりしている。

マナ 「あのヒトが追い付いてくる前にアレを見つけないと……。もし、アレがなくても一応切り札はとってあるけど……精度が……」

キョロキョロと各部屋の入口につけられている案内表示を確認して進んで行くと、ある部屋の前で立ち止まった。

マナ 「あつた！『小麦粉保管室』！！……いけないっ！急がないと！」

周囲に生じた白いもやに気付き、自分の来た道を振り返るが、奥の方は真っ白で何も見えなくなっている。

バールの声も聞こえてきたので慌てて室内に入った。

室内は入口の扉が一枚あるだけで窓はなく、明かりもほぼ皆無であったが、何かが詰まっている袋が大量に積まれていた。中身は小麦粉だろう。

マナ 「は、早くしないと！……えいっ！！」

ロツドのとがっている部分で袋を引き裂き中身の粉を飛散させる。何回も繰り返していると辺りは外と同じように真っ白に染まった。

マナ 「……これで、もう大丈夫かな？（……あのヒトがこの

部屋に入ってきたら、フォイエを使って……そうすれば『粉塵爆発』で……アレ？」

ロッドを握りしめた時、あることに気付いた。

マナ 「（…これって、この場で使ったら確実に私も巻き込まれるよね？…それに一人部屋の外に出て廊下から撃つても建物が崩れる……どうしよう…）」

パール 「みみみみ見えてたぜえ〜？こここここの部屋に入ったろ〜!？」

マナ 「（どうしよう!?!追い詰められた!）」

ガチャ と言う扉を開く音がする。マナは無駄とは分かっているも見つからないようにしゃがんで震えていた。

マナ 「（もうダメだ……逃げ場は入口しかない……殺される……）」

パール 「ななななんだ？こここここの部屋、まままま
ま真っ白で、ななななんにも見えないぞ！？」

マナ 「（えっ！？）」

マナからもパールの姿は視認することはできなかったが、パールもマナを探している。声が聞こえる位置から考えるに数メートルも離れてなく、マナが物陰に隠れているわけではないのに。

マナ 「（…そうだ！小麦粉だ！…このヒトは自分の能力では視覚に影響を与えないけど、この舞っている小麦粉には視界が邪魔されるんだ！…今のうちに…）」

四つん這いになり、音を立てないようにして部屋の入口まで移動する。

パールは気付かずに誰もいない部屋の中で暴れ回っていた。

マナ 「（なんとか出れたけど、ここからどうしよう？……うまく行けばこのまま逃げられそうだけど……）」

退路を見つめながら考え込むが、それではダメだと考え直し、また部屋の中を見つめる。

マナ 「（でも、戦うにしても雷や炎を使うと粉塵爆発で私も巻き込まれちゃうし……普通に戦っても圧倒的にフリだし……『アレ』も当てられるかどうか分からないし……。……ん！？）」

ボンヤリと見える部屋の入り口を見て何かに気付き口元を緩めた。何か勝算を得られたようだ。

マナ 「（……この入口……行けるかもしれない！！）」

く小麦粉倉庫内く

パール 「おおおお女ああ！！なななな何をしたあ！！？
おおおお前も、ややややややっぱり、おおおおOSの力を、
もももも持っていたのかあ！？」

テキトウに両腕を振り回すが、それらはどれも空を切り裂くばかり
で手ごたえが無い。
そのことにも怒りを覚えて暴走状態が悪化し続けているパールの耳
はマナの声を捉えた。

マナ 「ふっふっふ！ここで私が火のテクニクを使って大
爆発を起こしてアナタはお終いです！！」

パール 「（iiiiiiiiの間に外へっ！？こここここれは
小麦粉か！だだだだからおおおお俺の視界も、うっうっ奪われ
たのか！？）ばばば馬鹿め！おおおお前も巻き込まれるぞ！？」

マナ 「アナタを倒せるのなら構いません！！えい！！」

ブンツというロッドを振る音が聞こえた。危険を察しパールは部屋

の入口へ慌てて向かった。

「（くくくくくそっ！！ままま間に合わないか！？）

」

入口までたどり着く小麦粉の影響がなくなりバールの視界は回復した。しかし、特にテクニックが発動している様子は無かった。

その代り、目の前には蒼い魔方陣と体を擦っている水色の生物がいた。その後ろでマナは両手を前に出している。

543

「くくくくく、これは

！！！！！！

！！！！！！」

『それ』が何か理解した瞬間、突如擦っている方向とは逆向きに回転し、突撃してきた水色の生物が彼の胸部に触れている。

そのままドリルのように回転し、その高速の回転と突進に押され、自分の体も回転しながら飛ばされ壁を貫通し、外へ飛ばされていっ

た。

パール　「（ミ、ミミミミミミラージュ・ブラスト!?……ここここ、このガキ……………は、ハハハハツタリをおゝ!!）ぐあああああああああああああ!!!!!!」

ゴッドン

ボールは隣の建物も貫通し、演習場の外壁に叩きつけられた。変身は解け、白目を剥いて気絶している。

「……ハア……ハア……た、倒したの？私……殺し屋にマナ？」

脱力しその場で体を崩し、膝立ちになる。術者が気絶したためか周囲の白いもやは消滅し始めた。

マナ 「……よかったあ……。『ミラーージュ・ブラスト』もうまくいったよお……」

『ミラーージュ・ブラスト』。ヒューマンとニューマン限定の技で、あらゆる属性の精霊を召喚し、相手を攻撃する必殺技である。ちなみに今回マナが使用したのは氷の精霊コンルを召喚する【氷結ノ疾風】である。

マナ 「うっ……痛っ！！痛たたたたた！！！」

バールに切り刻まれた痛みを思い出し、床を転げまわる。戦闘に集中していて忘れていたようだ。

マナ 「うう……こんなにダメージを受けたのは初めてだよ……。……動けるうちにバロンさんと合流しないと……」

ロッドを杖代わりにしてヨロヨロと食糧庫の出入り口へ向かった。

く東軍エリアく

ディーン 「クソッ！あの武器、攻撃範囲が広すぎるだろ？！」

ナギサ 「迂闊に近づけないな……！」

青髪の男が使用する『レーザーカノン』の類の武器はチャージショットが極太レーザーで薙ぎ払いも可能なため攻撃範囲が非常に広く威力も高い。

青髪 「貴様ら！逃げてばかりでは勝てないぞ！？もう一発行くぞ……！」

すぐさまチャージを始める。

ディーン 「そろそろなんとかしねえとマジでヤバいんじゃないか？」

ナギサ 「私に一つ作戦があるのだが……聞かないか？」

真直ぐで力強く、それでいて済んだ瞳でディーンを見つめた。何やらその作戦とやらに自信があるそうだ。

ディーン 「なんだ？」

ナギサ 「時間が無いから、要点だけ話す！……私が囃となり奴に近づき……武器を斬る！」

ディーン 「はあ？」

ナギサ 「アナタにはそれまでに極力相手に接近してもらい、武器を壊したところに一太刀入れてもらいたい！……では作戦開始だ！」

本当に要点だけを述べると、すぐ青髪の男の元へ武器を構え駆けて行った。

ディーン 「ちょ…まつ…!!……………だぁゝもうちくしょー!!!!」

頭をくしゃくしゃ書きながら半ばヤケクソでディーンもナギサの後を追った。

青髪 「……………何か作戦を立ててきたな…？まあ俺の戦術はこれだけで十分だ！」

チャージが完了し、砲口を向かってくるナギサに向ける。

ナギサ 「てえやー!!」

剣を振り上げ高く飛んだ。その飛び方から着地地点は青髪の男の目の前のようだ。

しかし、青髪の男は口元を緩めた。

青髪 「ククッ！空中ではかわすことも出来ぬだろうに！！
バカなお嬢さんだ！！」

トリガーを引き至近距離のナギサに向けて極太レーザーを放つ。

ナギサ 「それはどうかな！？はぁー！！」

振り下ろした大剣の峰の部分から大量のフォトンをジェットのように放出し、そのままナギサは直角に地面に急降下しレーザーを回避した。

青髪 「バカな！？やられ
！！」

ザンッ

慌てて盾にした『レーザーカノン』が両断された。

青髪 「しまった！武器が……いや、それよりも男の方が」

ナギサ 「いけー！！ディーン！！！」

セイバーをいつでも振り切ることができるように構えながらディーンは青髪の男に向かっていった。
その驚異的なスピードでわずか数秒あまりで青髪の男との距離を詰めていた。

ディーン 「ナイス作戦だ！ナギサ！！」

青髪

「…マズイ!!」

「

ブァン

青髪

「ぐぐぐぐぐぐううう!!!!」

ディーン

「ウソだろ…!?!」

青髪の男はディーンのセイバーを素手で押さえていた。そして、もう一方の手で殴り掛かる。

ボカツ

ディーン 「ぐはっ！！」

がら空きの腹を思い切り殴られ、吹っ飛ばされた。
そして先ほどの間合いぐらいのところに落下し地面に叩きつけられた。

ナギサ 「大丈夫か！？」

ナギサもすぐに青髪から離れてディーンの元に駆け寄る。

ディーン 「……………ってえ……。まあ、なんとか大丈夫だ…」

殴られたところを手で押さえながら立ち上がると、青髪の男の方を睨みつけた。

デーン 「オイ！アンタ、武器を破壊されたんだ！もうアンタの負けだろう？止めにしないか？」

これを聞いた青髪の男は大笑いし始めた。

青髪 「ハハハハハ！！武器が破壊されたから俺が負けだど！？面白いことを言う！！だが、俺のレーザーカノンを破壊した動き、俺との間合いを詰めた速さ……確かに貴様らは強い！！強き者同士の戦いはどちらかが倒れるまで決着が着かないものだろう？」

デーン 「じゃあなんだ？丸腰でオレらの相手をすんのか？」

青髪 「フツ…それこそ貴様ら強者への礼儀に欠ける行為だ！おっと、まだ名を聞いていなかったな？強者の名は聞いておきたい！！」

デーン 「あ？名前？…デーン・オーシャン…」

ナギサ 「ナギサ・アーデルハイト・ハウザーだ……。貴方の名前も聞かせてもらおうか？」

青髪 「そうだな、俺も名乗っていなかったな！真の強者の戦いは名乗るところからというモノだと言うのにな……。ゴルドー……ゴルドー・ドレイクだ！！ ……さてここからは本気で行かせてもらおうか！？」

ゴルドーが名乗りを終えて、右腕を点にかざすと彼の体を黒いオーラが包み始める。

ディーン 「……！！！」

強者（後書き）

キャラクター設定

ベリアル・ロッソ

種族：デューマン（男）

年齢：27歳

身長：178cm

体重：68kg

ICV：藤本たかひろ

詳細：ワスプの雇った元軍人。燃えるような赤い髪が特徴。性格はややナルシスト。使用武器はライフル系。ナギサに瞬殺されたが、決して弱いわけではない…多分。

赤い髪、ナルシスト、ICV、即死。わかる人にはわかるのではないのでしょうか？さあ、諸君！上に注意して行こうw（GEネタです）

循環（前書き）

> i 3 3 9 9 6 — 3 7 5 7 <

今回の扉絵はワスプの部下4人です。

ハゲ〓ビガー

赤髪〓ベリアル

ヒゲ〓ゴルドー

バンダナ〓バール

なんかゴルドー以外キモいですねw

それでは記念すべき40話です！

循環

「西軍エリア 食糧倉庫前」

バロン 「くっそ……マナさんもバンダナのヤローもどこに行
ったんだ？……マナさん大丈夫だろうな？あのヤロー、マナさんに
傷でも付けたら三日三晩生かさず殺さずして……」

破戒僧ビガーを倒した後、マナを追って本部に向かったが発見でき
ず西軍エリアをさまよっていた。

バロン 「……つか、この道路に点々としている血はマナさんの
じゃないよな？……『食糧保存庫』？ここに入ってたみたいだな
……」

「まさかな」……と思いつつも心配になり、入り口のドアに手を伸ば
したが、ドアノブを握る前に勝手に開いてしまった。

内側から開けたのだ。

バロン 「マナさん！？」

中からは全身傷だらけ血まみれのマナが出てきた。

マナ 「バ……ロン……さん……」

バロンの顔を見上げると安心して脱力したのか、脚の力が抜けその場に倒れかける。

そこをすかさずバロンが抱きかかえる。

バロン 「大丈夫ですか！？治療しますか！？アイツですか！？あのバンダナのヤローですか！？どこにいるんですか！？抹殺してきましょうか！？」

マナ 「ちょ……ちょっと質問多すぎます！……そ、それにあの人は私が倒しましたから大丈夫です！」

バロン 「も、申し訳ないです……ってアレ？倒したの！？マナさんが！？」

パチクリと目を開閉させ、マナのことを見つめる。とても信じられないぞ！？と言わんばかりの表情にマナは少し脹れたが痛みをまた思いだし、悲痛の声を漏らす。

Baron 「大丈夫ですか！？…ま、まずは治療を…」

ナノトランサーから中世の英国紳士が持っているような形のウォンドを取り出し、回復のテクニク『レスタ』を唱えた。
 光がマナを包み、身体の傷をもの凄い速さで癒していった。

マナ 「（…優しい光…… Baronさん回復のテクニクも使えるんだ…。すごいなあ…… どんどん痛みがひいてく……）」

気持ちよさそうに目を瞑っているマナに対して Baron は焦った表情をしていた。

Baron 「（こ…この娘、回復が早過ぎないか！？オレはテクニクを少しかじっているくらいにしか使えないから応急処置程度の予定だったのに…… もう全快になりそうだ…… 何者なんだ？）…はい、もう終わりましたよ？マナさん回復が早いですね？」

マナ 「えっ！？もう！あ、ありがとうございました！ Baronさん、テクニクお得意なんですね！私が凄いんじゃないくて Baronさんが凄いんですよ！」

Baron 「（自覚は無しか……）じゃあ、マナさん。少し休憩したら管制塔に向かいましょう…私と貴方ならテロリストの首謀者を倒すことができますよ！」

マナ 「あ、はい！」

く管制塔く

たくさんのモニターに囲まれた暗い部屋でワスプは中央の椅子に座ってパズルに熱中していた。周りには銃殺された管制員の達の死体がたくさん倒れている。

ワスプ 「あゝあ、バルさんまで連絡が途絶えちゃったよ……彼を倒した女の子は頭脳で勝ったって感じだったけど、ビガーさんを倒したキヤストのヒトとベリアルさんを倒した女のヒトは強いなあゝ……そんで、あの青髪のヒトは何なんだろうな？確かに強いんだろうけど光るものがないなあゝ……もし、彼がゴルドーさんを倒せたらフアングさんを殺ったヒトが同一人物って可能性が高くなるんだけどなあゝ……。……でも……」

パズルが完成し、満足げにそれを眺める。嵐の海上の写真が完成していた。

ワスプ 「…ゴールドさんはあの中じゃ、ズバ抜けて強いからね……。それにあの能力……ファングさんを倒したヒトだとしても勝てるかな？……」

そっとうとパズルを放り投げた。

そして床に落ちてピースがバラバラになって死体の上に乗った。

（東軍エリア）

ゴールドー 「おおおおおおお！！！！！！！！」

黒いオーラの中から変異したゴールドーが姿を現した。

姿はヒト型の上半身と馬のような下半身を持つモンスター、カオスブリンガーに類似しているが、少し赤みを帯びている。

ディーン 「OSの力か……厄介だな……」

ナギサ 「な、なんなんだ！？何が起こったんだ！？」

ディーン 「アイツは人工S E E Dを投与されたんだ……とにかく戦闘力が上がって一つ厄介な能力が追加される……」

ナギサ 「人工S E E Dだと！？そんなものが……」

ゴルドー 「そろそろ行かせてもらっていいか！？おおおおおおおお……！」

4本の脚のうち、右後ろ足で地面を二度蹴ると、勢いよく突進を始めた。

ディーン 「（…勢いはあるがただの突進だ……。うまくやれば足を切断できる！）ナギサ！オレがやつの体勢を崩す！そこを一気に決めてくれ……！」

ナギサ 「わかった！頼んだぞ……！」

ディーンがセイバーを両手で握りしめ突進してくるゴルドーに向かって走り出した。
ゴルドーの突進はディーンが近づいてもスピードを上げも緩めもせず真直ぐに進み続ける。

そして両者の距離が2mほどに縮まった時、ディーンは強く地面を蹴り、低く飛んでセイバーを振り切った。

ナギサ 「!!!!ディーンダメだ!!」

ディーン 「ああ!？」

ガッ

ナギサの叫びの直後ディーンは宙を舞っていた。
切断する予定だった前足に蹴り飛ばされたのだ。

ディーン 「（な、何が起き……た……!？）ガハッ!!」

強く地面に叩きつけられ、頭からは少し血が流れた。

連撃に備え、何とか立ち上りセイバーを握り直した時、足を切断できなかった理由を知った。

デイン 「（……なんだこれは！？刃の部分が無い！？）^{フォトン}」

どういうワケかセイバーの刃の部分が消えていた。無論、自分でフォトンリアクターの供給を切ったワケでは無い。

そこへナギサが駆け寄ってきた。

ナギサ 「貴方は何を考えているんだ！？斬りかかる瞬間に刃をしまつてどうする！？」

デイン 「はあ！？オレはそんな事してないぞ！？」

ナギサ 「じゃあ何か？貴方は勝手にフォトンが消滅したとでも言いたいのか！？」

デイン 「まあ、そういうコトだが……話し込んでいる暇はなさそうだぜ……」

振り向くとゴルドーがまたこちらに向かって走り出そうとしている。

ナギサ 「わかった！…今度は私がやつに仕掛ける！貴方と役

職交代だ！」

ディーン 「了解！」

今度はナギサが突進してくるゴールドに向かって行った。

ゴールドがナギサの間合いに入る直前にフォトンリアクターの出力を最大にして、大剣のブースターを発動させた。

ナギサ 「はあああああああ！！！！！」

ディーン 「（行ける！……なっ！？…ブースターが…！？）」

加速し始めた大剣がスピードを落とし始めた。フォトンのブースターが光子分解されていた。

よく見ると一瞬空中に漂った光子がゴールドの体に吸収されていた。

ナギサ 「（！？勢いが……だが、いける！！）」

ブンッ

ナギサの大剣は空振りだった。ゴールドは馬のような跳躍力で跳ねてかわして行ったのだ。

ナギサ 「おのれっ！逃がすかああ！！」

ナギサの体から青い光が現れ、それを体に纏った。
デューマンの固有能力『インフィニティブラスト』である。

青いフォトンを右腕に集め、強大なフォトンの剣を形成した。

ナギサ 「はああああああ！！！！」

その青い大剣をすでに離れたところにいるゴールドに向かって振り下ろした。リーチは足りている。

デイン 「だめだ！！そいつには効かない！！！！」

パア

ゴルドーの体到大剣が触れる直前に大剣もナギサが纏っているフォトンも消滅した。

ナギサ 「!？」

ゴルドー 「…そっちのディーンといったか？お前は冷静だったな……。…そうだ、俺にフォトンは効かない…」

ディーン 「……フォトン吸収能力か……最悪の相手だ…」

そう、全ての武器がフォトンタイプのディーンにとっては天敵であった。

カオスブリンガーにもフォトン吸収する能力があるが、ゴルドーの場合は近づいただけで吸収されてしまうようだ。

ゴルドー 「……その通り……俺は俺に近づいた光子を一度光子の状態に分解し、体内に取り込むことができる……。……しかし、おしいな？」

ディーン 「何がだ!？」

ゴルドー 「吸収能力で間違えではないのだが……。……取り込んだ光子はどうなるのかね？」

そういうと、両手をナギサに向ける。そして、身体から赤いオーラを放出し、手に平の前に赤いエネルギーとして収束されていく。

ナギサは大技の反動でよろついている。

ディーン 「逃げろお ……!!!!!!」

ナギサに向かってディーンは走り出した。

ゴルドー 「吸収した光子はそのまま俺のエネルギーとなる……質量保存というやつだな……。……すべてのモノは循環しているのだよ……。……さらばだ…眼帯の少女よ…!!」

レーザーカノンとは比べ物にならないくらい極太の赤い熱線がナギ

ゴオオオオオオオオオ

サに向かつて放たれた。

循環（後書き）

キャラクター設定

ゴールド・ドレイク

種族：ビースト（男）

年齢：42歳

身長：192cm

体重：89kg

ICV：大塚 明夫

詳細：ワスプが雇った凄腕の元軍人。SEED事変以降、平和な日々が続いたため墮落した自分の部隊に絶望し、彼を慕っていたベリアルと共に脱退。なんでも引き受ける戦争屋となった。最終階級は大尉。

能力は火のOSによる、フォトン吸収からの熱線放出。

フォトン武器しか使わないデインはどうやって勝つのか！？

たまにはこういう正義も悪もない純粹な敵役がいてもいい気がします！

それでは次回で！

ギャンブル（前書き）

> i 3 4 1 1 0 — 3 7 5 7 <

今回の扉絵はディーン＆ナギサです。

タイトルを入れ忘れたのは仕様です（嘘）w

いいコンビなんだか、悪いんだか微妙なコンビですw

彼らはゴルドーを倒すことができるのか!？

それでは41話をどうぞ！

ギャンブル

（東軍エリア）

ゴ

ッ！！！！！！！！！！

極太の熱線がナギサに向かって放出された。

しかし、ナギサはインフィニティブラストのフォトンと連結していた体内のエネルギーも吸収されたため疲労し、動けないでいた。

デーン 「ナギサ
だったら……」
！！！！（ダメだ！間に合わない……

銃を構え、ナギサに向かって発砲した。

左腕に被弾するとナギサは横に飛ばされた。そのおかげで熱線の直撃は免れた。

ナギサ 「グッ……!!」

地面に叩きつけられたナギサは左腕を抑えてもがいている。熱線を少し掠ったように軽く火傷も負っていた。そこへディーンがすぐに駆け寄った。

ディーン 「大丈夫か!？」

ナギサ 「……ぐう……ハア……ハア……ああ……貴方のおかげで助かった……」

ディーン 「いや、すまなかった……助けるためとはいえ、仲間に発砲するなんて……」

ナギサ 「……それについては……ハア……構わない……。……しかし、あの熱線は強力だ……掠っただけで左腕の感覚が無くなっている……直撃していたら間違えなく死んでいた……」

ナギサは自分の左腕を見せた後、熱線が通過したビルを指さした。

ディーン 「やべえな……」

ビルには熱線が触れた部分に巨大な穴が開いていて、コンクリートは熱でドロドロに溶け、穴の周りのコンクリートは赤く変色して、穴を広げている。

ゴルドー 「はっはっはっはっは！！！！ディーンよ！賢明な判断だったな！この技を直撃して形を保てるものは存在しない！！」

カツカツと四本の脚を鳴らしディーン達に接近する。

ディーン 「（……とりあえず、あの技を使うにはフォトンを一定量溜めないとダメなはずだ……。無暗に攻撃するのはかえって危険だな……）ナギサ……立てるか？」

ナギサ 「ああ……しかし、この手では大剣が扱えない……」
スティールハーツ

ディーン 「（クッ……実体を持つその剣が頼みの綱だったんだが……）とりあえず距離を取ろう……フォトンを吸収されたらまた使われる……！！」

ナギサ 「ああ……！！」

ナギサは差し出された手を握り、立ち上がると二人は近くの建物の中へと入りこんだ。

ゴルドー 「……敵前逃亡とは……愚かな……」

〈東軍エリア 旧資料館〉

入ってすぐに階段を上がり、一室に逃げ込んだ。彼らを追って階段を上ってくる音や壁を破壊する音が聞こえないことからゴルドーが建物に入ってくる様子はなかった。

ナギサ 「……うぐっ……！」

ディーン 「痛むか！？…今回復弾を撃ってやるからな！」

ビューン

緑色の光線がディーンの銃から放たれ、ナギサの左肩に当たるとみるみる傷を癒していった。それでも高熱による感覚麻痺まではまだ回復していないようで腕は動かせないようだ。

ナギサ 「すまない……ディーン……」

ディーン 「オレの撃った銃弾のせいでもある……気にしないでくれ……。それよりアイツの能力について少しまとめてみた……聞いてくれ！」

ナギサは無言で頷き、ディーンの言葉に耳を寄せた。

ディーン 「まず吸収能力だが、アレは自分の周りの一定の範囲に存在するフォトンの形を崩壊させ、吸収するものだ……セイバーは無効化されたが、恐らく銃弾も効かないだろう……。つまり、フォトンタイプの武器しか持っていない、オレではやつにダメージを与えることはできない……」

ナギサ 「そうだな……では、私のスティールハーツでしか奴を斬れないということか……」

ディーン 「そうだ……しかし、その腕では……」

ナギサ 「……………」

ディーン 「…次に熱線だが、これは威力こそあるが、連射がでないうえ、軌道の変更も不可能なようだ……。……これらの弱点からなんとか策を練らないとな……」

ナギサ 「では、こんな作戦はどうだろうか？」

何かを思いついたのか、手をポンと鳴らし真顔でディーンに提案した。

ナギサ 「ディーンが私のスティールハーツを使えばいいのでは？」

この提案に対し、ディーンは顔を渋くした。

ディーン 「確かにそれができればいいんだが、オレは大剣を扱ったことがほとんど

無いからなあ……。ザコ相手ならともかく、アイツを相手に戦えるかどうか……」

ナギサ 「……そうか……。では、これはどうだろうか？ ディー

ンが体術で……」

ディーン 「無理だ……！」

何も案が浮かばず時間だけが過ぎて行った。

しかし、10分ほど経ったとき、状況は動き出した。

ビ
ン

突如熱線がディーン達がいる部屋の壁を貫いた。

室内の紙資料が発火しあたりは炎に包まれた。

ディーン 「どういうことだ！？フォトン吸収していないのに
なんで熱線が使える！？」

ナギサ 「それよりもここは危険だ！早く出よう！！」

ディーンの手をひっぱり階段を下りて外へ出ると、ゴールドが腕を
組んで彼らを眺めていた。

ゴールド 「うむ、やはり外れたか…」

ディーン 「…どういうことだ？ なんでフォトンの吸収もして
ないのに熱線が放てるんだ！？」

ゴールドは腕を組んだまま首を傾げた。

ゴールド 「言っただけだ…この世のものは全て循環していると
…俺の放ったフォトンの熱線は別に消滅したわけではない… 光
子となって飛散したのだ… 時間はかかるが、その散り散りにな
った光子を吸収すれば、貴様らから吸収せずともこの技を使うこと
は可能だ！」

前足で思いつきり蹴り飛ばされてしまった。
腹を蹴られ、そのまま後ろに飛ばされたところを丁度ディーンが受け止めた。

ナギサ 「ガッ!」

ディーン 「なんて無茶するんだ?!…両腕とも使えなくなった
らどうするんだ!？」

ナギサ 「…悪い… …しかし、どうしろというのだ？」

ディーン 「それを今考えてるんだよ!」

怒鳴られたナギサはなんとも言えない顔をしたが、ディーンはそれを気に掛ける余裕もなく、頭を抱える。

ディーン 「（考えろ!…アイツに疑問点は他になかったか!?
ホントにフォトン武器は全て無効なのか!?… …考えろ!…考えろ
!…）」

ゴルドー 「又ハハハハ!…!詰んだな!貴様らでは俺を倒す
ことはできない!…その大剣は本来両手で使うモノのようだが、ナ
ギサよ!貴様のその腕では十分に扱えまい!そしてディーン!!貴

様はフォトンタイプの軽量武器しか使っていないなあ？仮にお前がその大剣をつかったところで、かわすのは容易！！…貴様らはその大剣に頼ることしかできないため、2対1と言う利点を使えないのだよ！！」

ディーン 「（確かにその通りだ……せめて同時攻撃ができれば……使用できる武器があれば熱線の時の隙をつけばいけるハズなのに……熱線？…待てよ？アレもフォトンのはずだよな？無差別に吸収する能力なら放出した熱線も含まれんじゃないのか？…賭けに近いが、これしかない…！！）ナギサ！！スティールハーツを貸してくれ！！」

ナギサ 「な、何を言っている！？扱えないといったのはアナタじゃないか！？」

ディーン 「うまく扱えないって言ったただけだ！そんでお前はこれを使ってくれ！これなら片手でも負担無く使えるはずだ！」

ディーンは自分のセイバーをナギサに差出し、スティールハーツを受け取った。

…かと思つたら、すぐにスティールハーツをナノトランスし、かわりに銃を取り出した。

ディーン 「オラア！！コイツでも受けやがれ！！」

銃を連射するがそれはゴルドーに触れる前に分解され、吸収されてしまった。

ゴルドー 「遠距離武器なら何とかなると思ったか？それとも単にやけになったか？どちらにせよ我が糧とさせてもらうぞ！！」

ナギサ 「貴方は何を考えているんだ！？効くわけがないだろう！？」

ディーン 「……一旦奴に熱線を使わせて隙を突く…オレがステイルハーツで奴に斬りかかったら続けてセイバーで攻めてくれ…」

ナギサ 「どういうことだ！？説明してくれ！」

困惑した表情でディーンに訴えるが、ディーンは真剣な顔つきでナギサの目を見つめた。

ディーン 「頼む！…オレを信じてくれ…！」

ゴルドー 「何を話し合っているのだ！？そろそろ撃たせて貰う
がいいかね？」

手を前に押し出し、熱線発射のポーズをとると、すぐに赤いオーラ
が彼の右手の前に収束された。

ディーン 「よしっ……！！行くぞ！ナギサ！！」

ナギサ 「ちょっ！？……………私を裏切るなよ！？」

走り始めると強気な表情で少し口を緩ませディーンに放った。

ゴルドー 「はあああああ！！！！！！！！」

ディーン達が間合いに入ったと同時に熱線は放出された。…が、熱

線はディーン達に当たることなくまたも建物を貫いた。
ディーンは放射と同時にスティールハーツを取り出し、ゴルドーに斬りかかった。

ゴルドー 「（しまった！外したか！…それにこの男、放射の隙をついて実体のある武器で……）だが、動けぬとはいえ素人の剣なと止まって見えるわ！！！！」 ダアアア！！」

空いていた左手でディーンの一撃を受け止めてしまった。

しかし、ディーンは……ニコリと笑い…ナギサの名を叫んだ。

ディーン 「ナギサああ！！！！今ダアアア！！！！」

ナギサ 「ハアアアア！！！！！！」

ザスッ

ナギサ 「!？」

ゴルドー 「!？」

フォトンの刃が消滅することなくゴルドーの肩に突き刺さった。

ゴルドー 「ぐあああああ!?!?!?!」

悲鳴を上げ、左手の力が抜けディーンのスティールハーツを離してしまった。

そこへディーンは剣を素早く引き、思いっきり縦に振り切った。

黒いオーラが彼の体を包み、元のヒトの姿に戻った。

かなりキツそうだが、足を踏ん張らせ、なんとか立っていた。

デーン 「なんだ……アンタはこの弱点に気付いてなかったのか？ ……アンタは熱線を放出しているときは吸収を行っていないんだ……」

ゴルドー 「！？」

デーン 「まあ、吸収能力は無意識に発動しているみたいだから気づかないのは無理ないのかも……」

ゴルドー 「……どこで……気付いた……！？」

デーン 「アンタの熱線もフォトンのハズなのに吸収されないのはおかしいなあ……って思ってた……。まあ、あの熱線だけ例外！ つてことだったら完全にお手上げたってたけど……。…正直ギャンブルだったよ……」

ゴルドー 「そんな……不確定なことに……賭けたのか!？」

ディーン 「もともと戦場に絶対はないだろーよ?」

この言葉を聞くとゴルドーはうつすらと笑みを浮かべた。

ゴルドー 「……ふふっ……見事だ……!」

バタッ

く東軍エリア　メインストリートく

ナギサ　「貴方を信じてよかった…」

ゴルドーを破り管制塔に向かう途中、不意にナギサが口を開いた。

ディーン　「いきなりどうした？」

ナギサ　「いや、さっき戦いの時に『オレを信じてくれ』と言った貴方の顔を思い出してな……」

ディーン　「ああ、咄嗟にでたセリフだな……ああ……」

照れ隠しなのだろう。ディーンは一人で納得して終わらせようとしていた。

ナギサ　「ん？どうしたのだ？顔が少し赤くなっているぞ？」

グイツと下からディーンの顔を至近距離で覗き込んだ。
これに過剰に反応し、すぐさま後ろに下がり距離をとった。

ディーン 「だ、大丈夫だ！！それより早く管制塔に向かう！！」

ナギサ 「そっちは逆方向だが？ 貴方は本当に面白いな」

くすりと笑い管制塔の方へと振り返るとカツカツと足を進め直した。

ナギサの後姿を眺めながら赤面しつつ困った顔でディーンは頭を掻いていた。

ディーン 「（やっぱり、コイツは苦手だ……）」

ギャンブル（後書き）

はい！

次回からボス（ワスプ）戦に入ろうと思います！

…この章はいつたい何話になるんだろうか？

ゴールドーがボスでよかったような気がするのは僕だけでしょうかw？

おし！弱音はイカン！！！！気合入れてこの章のクライマックス執筆します！！

それではまた次話で！

合流（前書き）

こんにちはー！

今回からやつとボス戦です！…この章はいつたい何話構成になるのやら…

それではどうぞ！

合流

く????

木製の床と壁、そして民族的なデスクや装飾からここがニューデイズにある建物の一室と言うことがわかる。

水色の長髪を持ち、口元まで覆い隠す襟の長いコートを着込んでいるニューマンの男がデスクに座って通信端末を耳にしており、その傍らに艶のある赤髪をした、ニューデイズ風のドレスを着た女性が立っていた。

男の方はペンタクルの一人、シエンである。

シエン 「ワスプのやつめ……一体どこへ行ったというのだ？」

通信機を耳から離して、不機嫌そうに呟く。

女性 「……シエン様……。……そのワスプと言うのは『ツクヨミ』様の後任という……？」

シエン 「ああ……君も一度会ったことがあるな……」

女性 「私は……あのヒトが苦手です……」

シエン 「……そうか……君は『ツクヨミ』のことを慕っていたからな……」

長髪とコートの襟の隙間から除かせる彼の目は、会議の時とは全く違い、優しく、それでいてどこか切なさを感じさせた。

女性 「確かにそれもありますが……それだけでは無くて……もっとこう……」

自分の伝えたいことをうまく表現できず間誤付いていると、シエンが立ち上がり、女性の肩に手を乗せた。

シエン 「……ああ……わかつている……私もあやつには少々……いや、かなり危険を感じている……正直なせ、あんなワケのわからない快樂殺人鬼が『ツクヨミ』の後釜なのか理解できない……」

女性 「……シエン様……」

シエン 「…しかし、ただ一つ言えることは、奴は強い……
『ツクヨミ』の後任を務めるに相応しいくらいにな……」

物々しい表情でこう述べた後に間を取り、優しい声色で続けた…

シエン 「それに…何よりあのお方の人選だ… 君は何も心配
すことはない…

…イザと言つ時は私がやつを止める……」

女性 「……はい……」

〈管制塔 管制室〉

相変わらず下は多くの管制員の死体が転がっていて、上は多くのモ

ニターに囲まれている部屋の中央でワスプはモニターの画面を見つめていた。

ワスプ 「あちゃ……ゴルドーさんも結局負けちゃったか……期待し過ぎてたかな？ まあ、それよりあの青髪のヒトは十中八九フアングさんを殺した人物と見ていいかもね……」

そう呟くと右手をモニターに向けて押し出す。すると右手が変形し、手の平の部分から銃口が現れた。

そして狂ったように笑いながら、銃を乱射し全てのモニターを破壊した。

ワスプ 「ハア……ハア……早く来ないかなあ………うずうずしちゃうなあ……」

〈管制塔入口前〉

すでにバロンとマナは到着していて、とりあえず待機中であった。

マナ 「……………連絡機器が全く作用しない……」

通信機器を耳から離して困惑した表情で呟いた。

バロン 「恐らく敵が管制塔から妨害電波を飛ばしているため、一旦外部を中継するこの類の通信機器は使用できないでしょう……。無論外部にも連絡は取れないでしょう……。……この演習場内のみで連絡できるトランシーバーみたいなものがあればいいのですが……………」

マナ 「……………そうですか……。……でも、きっとディーンさん来ます！」

一瞬俯いてしまったが、すぐに顔を上げ明るい表情をバロンに見せた。

バロン 「信頼しているんですね……………その方を……」

マナ 「はいっ！」

管制塔の前に着くまでの間、二人は（というかバロンが質問をし続

けマナが一方向的に話していたのだが……自分のことを話していた。マナは自分がギルドに所属している傭兵で、ほんの数か月前に傭兵になったばかりの新人であること、今までした仕事のこと、ギルドのメンバーのこと、パートナーのディーンのこと、そして、今日ここにディーンと一緒に来たこと……。

Baron 「時にマナさん。ディーンさんと言う方について一つお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか？」

ふと何かを思い出したかのように Baron が問う。

マナ 「……？ はい、何でしょうか？」

Baron 「……その方は、女性でしょうか？男性でしょうか？」

マナ 「………」

Baron 「………」

マナ 「お、男のヒトですが…？」

バロン 「あ…そうなんですか…（なんだよ、野郎かよ… 興味無いな…！！）」

明らかに残念であるということが顔に出ていた。その表情の急変はマナも気付いたが、いったい何が気に食わなかったのか彼女にはさっぱりで首を傾げる他なかった。

マナ 「アレ？…あっちの方からヒトが…アレって…」

東軍エリアから歩いてくる二人。青髪に青いロングコート男と長い黒髪に、髪とは対照的に真っ白な軍服のような服を着た女性…デインとナギサである。

マナ 「デインさん！！…と、誰だろう？ ってバロンさん！？」

二人の姿を見つけるやいなや Baron は飛び出して行った。

ナギサ 「アレが管制塔の入口か… 近くで見ると思ったよりは高くないな…」

ディーン 「……と言うか、向こうからに猛ダッシュしてくるやつがいるんだが…？ あいつもワスプの部下か？」

鬼のような形相で突進してくる Baron に向かって自然に戦闘態勢をとる。…だが

バロンのドロップキックが炸裂！　ディーンはそのまま後ろに数メートル吹っ飛ばされた。

Baron 「ナギサさん！！大丈夫ですか！？ケガとかしてないですか！？なんかされませんでしたか！？変な病気とか移さ………
… おぐあー！！！」

今度はバロンの顎にナギサのアップアが炸裂！！　 Baron は宙を舞い真っ逆さまに落下し道路に叩きつけられた。

マナ 「 Baron さん……！！！！今蹴ったヒトがディーンさ………
… って、えっ！？どゆ状況！？」

ナギサ 「貴女はなんだ？　…　もしや、敵の部下か！？」

マナ を睨みつけ、ステイルハーツ 大剣を取り出し構えをとる。両手で構えていることから、もう左手の感覚は戻ったようだ。

マナ 「あわわわわわ！！！！ち、違います！私は…えーつと…　その、そこで倒れている Baron さんと一緒に行動していません…　…あ、あなたと一緒にいた…あ、あのあっちの方で倒れ

ているヒトと同じギルドのマナと言います……」

ああ そうか！ とあっさり納得すると剣をしまつナギサ。
すると空かさずマナに近寄り耳打ちをした。

ナギサ 「……大丈夫か？ 奴バロンに何もされなかったか？」

マナ 「へっ？」

バロン 「ちょ……ちよつとお！？ ナギサさんん！？ 俺が変態
みたいに言わないで下さいよおお！！！」

飛び起きて、ナギサの両肩を掴んで抗議するバロン。その姿はもはや紳士でもなんでもない。

ナギサ 「触るな！ ケダモノ！！！」

その手を払いのけ、冷たい眼差しを浴びせる。

マナ 「アレ？……バロンさんって自分のことは『私』わたくしって言う
ってませんでしたっけ？」

ナギサ 「ああ、これがこの男の素だ… 女を見ればすぐに口説き、だれかれ構わず食事やらデートやらに誘い、みんなを勘違いさせよくトラブルを起こしているんだ…。…まあ、腕は確かなのだが…」

バロン 「いや、俺は世の全ての女性を愛しているんだって！」

マナ 「……………（なんかラグナさんみたい…）」

↓ディーンの場所↓

ディーン 「…いつて…… あの黒スーツなんなんだ！？ ……いきなり蹴りやがって…」

起き上がりバロンたちの方を見つめる。…しかし何かに気付き表情を一変させる。

ディーン 「お前等 ……伏せろおお！！！」

マナ 「えっ!？」

空を見上げると、管制塔の最上階の壁を突き破り何か飛行する物体が出現した。

急降下しマナ達に近づくと、それが両手にマシンガンを装備し、飛行ユニットを背中に装着しているヒトだと分かった。

ワスプ 「キ
ン!!!!!!!!!!蜂の巣になあれ

えええええ!!!!!!!!!!」

ダダダダダダダダダダダダ

マシンガンをマナ、バロン、ナギサに向けて乱射し、地上に近づくと道路に平行に飛行し、マナ達とディーンの丁度間に着地した。

乱射を受けた場所は道路にも弾丸が当たり爆発で煙があがり、マナ達の姿が確認することが出来なくなっていた。

ワスプ 「ハア―イ！青髪クン！ハロハロー」

デイン 「デメエがワスプか？ 管制塔で待ってるんじゃないか？
ったのか！？」

ワスプ 「イエース！あいあむワスプ！よろしくねえ！！
…まあ、そのつもりだったんだけどね、待ちきれなくて……来ちゃ
った」

デイン 「（なんだこのふざけた野郎は…）…オイ、アイツら
に背中向けていいのか？」

ワスプ 「アイツ等々？ もしかしてボクが蜂の巣にしちゃっ
たヒト達のことお？」

デイン 「……その考えは……甘くないか？」

ワスプ 「…えっ？」

ビュッ！！

ザンッ！！！！

突如、煙の中から現れたナギサが大剣でワスプに一太刀を入れた。

ワスプは接近してくるギリギリで気付き、振り返りかわそうとするが間に合わず、わき腹に傷を負った。

ナギサ 「（よし！このまま…！！）」

追い打ちをかけるために大剣を引き直すと、すぐさまワスプに向かって振り下ろそうとした。

ワ
ス
プ

「んふふふ」

ナ
ギ
サ

「（えっ！？）」

ド
タ
ン
ッ
！

どういつワケかナギサはこけてしまった。

ナギサ

「
…!?
」

ワスプ

「
んっ
ふっ
ふ
」

合流（後書き）

さあ、向こうからやってきてくれましたW

いったいナギサに何が起こったのか？

それではまた次回！

蜂（前書き）

> i 3 4 8 1 4 — 3 7 5 7 <

さあワスプ戦2話目！果たして彼の能力やいかに！

蜂

（管制塔前）

ワスプに追い打ちを駆けるべく、スティールハーツ大剣を振り切ろうとするが、どう
いうワケか足が不自然に動き、ナギサは転倒してしまった。

ナギサ 「…！？」

誰よりも当然の本人が驚いていた。
さらに起き上がろうとしても体が不自然な動きをするだけで、全く
起き上がることができない。

そんなナギサを見下ろして、ケタケタと笑いながらワスプがナギサ
に近づいた。

ワスプ 「どうしたの？お姉さん？スゴイ困った表情して
るよ？まるでさ…」

ナギサ 「……ぐう…」

ワスプ 「『手を動かそうとしたら足が動いただ！？』」

って言わんばかりの表情だよ？」

倒れているナギサの真横に立つと、ナギサ顔をを真上から覗き込むようにして眺め、口元を不気味に歪めそう言い放った。

ナギサ 「…なっ！？……き、貴様！何をした！？」

ワスプ 「べつつにいく？ ただ、斬られた時に僕の中の電気を剣を媒体にお姉さんの体に流しただけだよ？」

ナギサ 「（どういうことだ？！それでなんで体が……）」

ワスプ 「あっはっはあゝ！！また困ってるゝ、かつわいゝ！……じゃあ、次は痛がつてる顔が見たいなあゝ」

両手に持っているマシンガンの銃口をナギサに向け、ペロリと舌を出すと引き金に指を当てた。

ワスプ 「いっつあ しょーたいむ……！！」

ナギサ

「……………！」

ダンッ！！！

ダンッ！！

ナギサ 「……………!？」

ワスプ 「いいいいてええええ!!!」

2丁のマシガンには、各方向から飛んで来た青い弾丸と、紫の弾丸が被弾し破壊された。

それぞれの弾丸が飛んで来た方向にはハンドガンを構えるディーンと、ロッドを構えているマナの横でライフルの銃口を向けているバロンの姿があった。

ディーン 「お前が妙な技を使うことは分かったよ…………でも、その能力はお前と直接接触しなければ発動しないんじゃないか？」

バロン 「…だったら簡単だ！俺が撃ち殺してやるよ!…………つーわけでソコの青いの！オメーは引っ込んでろ！」

マナ 「ちょ…！ちょっとバロンさん！？ そんなこと言わないでみんなと一緒に戦いましょうよー!!!」

ワスプ 「痛ってってえ……………まあ、ぶっちゃけ青髪クンの考えは間違えでは無いんだけどさあって……………って、はあ!？」

な〜んで君ら生きてんの！？ …… つか、このお姉さんが生きてるのも結構ビックリなんだけど…… 君らどうやってあの弾丸の雨をしのいだんよ！？」

痛みを抑えるかのように両手に息を吹きかけ、マナとバロンの方を見るや否や早口でそう言った。なんだか忙しい男だ。

バロン 「はあ！？ 舐めんなよ！？あの程度の攻撃、全部撃ち落とせるんだよ！」

マシンガンから放たれる無数の弾丸を撃ち落とすなど不可能と思われることだが、彼の技術とマナ、ナギサのサポートがあつたのならあり得ない話では無いと思えてしまう。

そもそも今、こうして話をしているのだからそれを成し得たのは間違えない話である。

ワスプ 「ふう〜〜！こりやまたバケモノがいたもんだね……！
ていうか、青髪クン？君より絶対あの黒スーツクンの方が強そうだけど、本当に君がファングさんを殺したの？」

急にディーンの方に向き直ると、疑わしい表情でディーンの顔を凝視した。

ディーン 「…ファング…？ あのオッサンが使ってきたOSと

いい、お前やつぱり五芒星^{ペンタクル}と関係あるのか!？」

ディーンはこの問いに対して、ワスプは腹を抱えてバカにしたように笑い出した。

ワスプ 「およ!?! やつぱり君だつたみたいだね! いったやあゝ! 一回目の傭兵狩りで見つけれられるなんてついてるなあゝ! :
つと、僕が五芒星^{ペンタクル}と関係あるかつて? ヒヤッハッハッハッハ! !
! ! 関係者も何も僕がその五芒星^{ペンタクル}の一角だよ! : さてさて、青髪クンがファングさんを殺したのは間違えなさそうだから、ここからは傭兵狩りじゃなくて『カタキウチ』ってことでヤラして貰っちゃうけど、おーけい?」

ディーン 「お前が... 五芒星^{ペンタクル}だと!?! : ん? ちょっと待て! ! オレ達は確かにファングを倒したけど、直接殺したワケじゃないぞ! ?」

そう、ディーン達との戦闘の後、ファングは逃亡を図ったが、何者かに殺害され、ディーン達が発見した時にはすでに死んでいた。

ワスプ 「へっへゝゝ : ウソはいけないなあゝ : うちには情報収集に特化したメンバーが居てさ、そいつがファングさんを殺したのは青髪クンって言ってんのさ! 悪いけど問答無用で死んでもらうよ?」

ディーン 「（情報収集に特化したメンバー？…マルコも確かそんなこと言ってたな… 恐らく五芒星^{ペンタクル}の情報はソイツが頼りなんだろう…）じゃあなんでソイツは嘘を…！？ まさか！！）…
オイ！ワス
」

ダウン！！

紫の弾丸がワスプとディーンの体を掠めた。

ディーン 「はっ！？」

自分の頬に手を当てると血がうつすら出ていた。スタンモードでは無いようだ。

ワスプ 「ふゝ…どうやら長話が過ぎたみたいだねえ…」

弾丸の飛んで来た方向にはものすごい形相でライフルを構え、次の一撃をいつでも発射することが可能な状態のバロンがいた。

マナ 「ちょっと！バロンさん！！ディーンさんに当たったかどうかですか！」

バロン 「大丈夫！彼には当てませんよ！ オーイ！！話込んでんじゃねえぞ！！早くそのバイザーヤローをぶっ殺して終わりにしよーや！」

ディーン 「（アイツ……むちゃくちゃだろ！？）…っ！うおっ！」

バロンに気を取られてワスプから視線を外した僅かな時間で、ワスプは手の平をディーンに向け、そこから銃口が出現した。

ビュン！！

デーン 「…クッ！」

銃を向けられたことに気づき、すぐに回避をしようとするが間に合
わず、手の平に仕込まれていた銃口から放たれた銃弾がデーンの
左肩を貫いた。

傷口を抑えるために手を伸ばそうとした。だが

デーン 「…んな！？」

右腕を動かしたはずなのに、何故か左足が上がった。
そしてそのままバランスを崩して転倒してしまった。

デーン 「！？てめえ……何しやがった！？」

地を這いつくばりながら、ワスプの顔を睨みつけた。

ワスプ 「ふっふっ」 さて問題です！ヒトは脳からの指令で体を動かしています！では！その指令の伝達方法はなんでしょうか！？」

銃口を向け、ニヤニヤしながら質問に問題を返してきた。

デイン 「…………… 電気信号……………！？」

ワスプ 「ピンポンピンポン大正解 ……！！ 青髪クンも気付いたみたいだね〜！ そう！！僕の『この姿での能力』は、『脳からの電気信号を混乱させる電気発電』！！ つまりさっき僕が君に打ち込んだ弾丸は僕の発電した電気を運びさせていてね！青髪クンの体に当たった時に一気に電気が脳まで回ってね…ご覧の有様さ！最低でも5分はその状態が続くよお！」

デイン 「…！！……………クソがああ…！！！」

腕を動かして地面を叩こうとするも能力のせいで足が動いてしまいその程度の動作すら許されない。

ワスプ 「青髪クン、思ったよりアツケなかったね！ あの世

に逝ってファングさんに会ったらよろしく伝えといてねえ！ぐっばあい！！」

銃口ををディーンの顔に押し付け、不気味な笑顔で送ろうとする。

ナギサ 「なるほど……5分で戻るのか……！」

ワスプ 「はにゃ？」

ザンツ！！

剣を振る音がした直後、ワスプの片腕が宙を舞った。

ワスプ 「ガッ……！！」

突然の斬撃で回避も反撃も出来ず腕を斬り落とされ、慌ててナギサから距離を取った。

その表情は斬られた直後こそ焦りを見せていたが、距離を取った後は、また口元に不気味な笑みを浮かべた余裕の表情を作り直した。

ワスプ 「酷いことするねえ」 僕がキャストじゃなかったら

出血多量で死ぬレベルのダメージだよ？ ……それにお姉さん、まだ電気を流してからまだ微妙に5分経ってないと思うんだけど…

「なんで動けるの？」

やはり本心は動揺しているのか、どことなく早口であった。

ナギサ 「ああ、まだ思うように動かないが、この状態でどこを動かそうとすると、どこが動くかを理解した…どうやら手を動かそうとすると、それとは反対側の足が動くみたいだ…足を動かそうとすると反対の腕だったな。本当は体を一刀両断するつもりだったのだが、やはりこの状態では難しいな！」

無表情で淡々とそう告げるナギサ。 この短時間で電気信号が

混乱した状態で動くなど本来ありえない話だが、ナギサはやってのけた。

一気に形勢逆転である。

ワスプ 「（ん）あの状態で動かれたのは予想外だったなあ……
腕も斬られちゃったしこのままここで続けるのは分が悪いなあ（
……さてと…… ちよつとここは戦略的撤退をさせてもらっていいかな
？」

そう言うつと背中に装着してある飛行ユニットを発動させる。

バロン 「テメツ！！逃がすかよ！！」

空へと逃げるワスプに向かってライフルを連射するが、綺麗に全弾
かわされてしまった。そしてある高さまで到着すると管制塔の最上
階へ入り込んだ。

マナ 「アレ？なんで建物の中に逃げたんでしょう？ 飛べ
るんだったらもっと遠くへ行き場良いのに……」

不思議そうな顔で首を傾げるマナ。バロンは銃をナノトランスして
マナの横に立った。

バロン 「誘い込んでいるのでしょ…… もしくは単に片腕で
は飛行しづらいと言うのも考えられますが、恐らく罠ですね……」

ナギサ 「……罠だとしても行くしかないだろう…… 奴を抑え

なければ町が爆破されてしまう……」

そう言って管制塔の入口に向かつて歩き出すナギサ。異論は無いよ
うでその後ろにマナとバロンが続いた。

ディーン 「お、オイッ！」

ナギサ 「なんだ？」

ディーン 「誰かおぶつてくんない？」

〔管制塔 最上階廊下〕

道中は特に異もなく、ただ、ワスプに殺されたであろう警備員の死体が数体倒れていた。

マナ 「…………警備のヒトまで…………あのヒト、許せない……！」

怒りを露わにし表情を険しくしているマナの後ろを、バロンがディーンの背負いながら不機嫌そうに歩いていた。

Baron 「……たく、なんで俺が野郎を背負わなきゃいけないよ？」

Deen 「さっきから同じことばっか言ってるじゃねえよ……！
 つか嫌ならナギサに任せればよかったじゃねえか？ 最初ナギサがやるうとしたのに、お前が背負うって言い出したんじゃないか？」

Baron 「お前マジで殺すよ？ 女性に野郎を担がせるなんて真似、フェミニストとして許せるわけねえだろ！？そもそも、お前をナギサさんに触れさせたくねえ！汚れる！つかお前、何ナギサさんのこと呼び捨てにしてんだよ！？」

Deen 「はあ……！？だったら黙って運べよ！何も言わなきゃ平和に済んだらろ！？つか別にいいだろ！？これがオレのスタンスなの！対等な立場の奴には呼び捨てにするの！お前みたいな紳士へんたいと一緒にすんな！」

Baron 「あ……マジで切れた！お前、降りろ！そんで10発ぐらい殴らせろ！」

Deen 「あ……いいよ、降りてやるよ！とっくに5分経って体は自由に動くんだよ！お前のノ口いパンチなんて当たんねえよ！」

Baron 「はあ！？お前何！？なんで動けるようになったのに
 負ぶわれてんの！？何なの？ホモなの！？殺されたいの！？」

Deion 「何一人で勘違いしてんの？バカなの？死ぬの？お前
 に苦労させるために決ま
 ギャンー！！」

Baron から下りて口げんかをしている所へモノメイトのケースが飛
 んできてDeionの顔面に直撃した。

Baron 「ぎやははははは！！！！！！ざまあ
 ガフンー！！」
 ！！！！

Baron の顔面にもヒットした。
 前方には管制室のゲートの前で明らかに不機嫌な表情をしたナギサ
 がいた。彼女が投げたのだ。

ナギサ 「貴方達いい加減にしろ！！これから共同戦線を取る
 者同士が今からそんなことでどうする！？ もっと緊張感を持たな
 いか！？」

Deion & Baron 「……さーせん……」

ゲートをくぐり、管制室に入ると、その中には10数名ほどの管制員の死体が転がっている中、中央で椅子に座ってこちらを向いているワスプの姿があった。

ワスプ 「おっ！来たね！いらっしゃい！まあ死体散らかってるけどゆっくりしていつてよ！」

相変わらずの非情な余裕の笑みを浮かべている。

マナ 「貴方が…このヒト達を!？」

我慢の限界なのかすでにロッドを構え戦闘態勢に入っているマナが
ワスプに怒鳴るように分切り切った答えを問う。

ワスプ 「ピンポン!でも、安心してくれ!僕は彼らの死体
を無駄にはしないよ!」

マナ 「どういうこと!？」

ワスプ 「こつこつコトだよ!?!」

椅子から立ち上がり両手を広げると、ワスプの体を黒いオーラが包み込んだ。
SEEDフォーム化である。

ナギサ 「こいつも使うのか!」

ワスプ 「おおおおおおお!...!...!」

バリリリリリリリリリリ!...!!

マナ 「きゃあ!」

凄まじい電撃が黒いオーラの中から放たれた。それはディーン達に当たることは無かったが、あたりに倒れている死体に降り注いだ。

そして、黒いもやの中から異形と化したワスプが姿を現した。

ワスプ 「さてさてさてえええええ！！！！ここから最高の『
 しょーたいむ』だあ！！！！」

上半身は機械のヒト、下半身は機械の蜂のような姿をしており背中からは高速流動しているフォトンの羽が生えており浮遊している。右手は指先が全て銃口になっており、手の平もレーザーカノンの様になっている。左手は巨大なブラスター状の武器で、下半身の蜂の針の部分に当たる部分も銃口になっている。まさに全身武器と言う言葉を体現したような姿だ。

ナギサ 「……ディーン……確か彼らはSEEDフォームを元にした姿に変異すると言っていたが、私はあんなSEEDフォームを見たことがないぞ?」

デイン 「…アイツは五芒星ペンタクルって言うOSを使う連中の親玉みたいなもんで、アイツら自身、元々SEEDフォームでそこへOSを投与したらしいんだ…。だから、独自の变化をすることができ

「……なぜ、貴方はそのOSのことについてそこまで

知っているのだ？」

ディーン 「…………それは……」

黙り込んでしまったディーンの様子を見て、ナギサは何かを察したようにディーンからワスプへと視線を動かし武器を構えた。

ナギサ 「……後で話せることを話してくれ！ まずはアレを倒そう…… 不気味な姿をしているが4対1なら勝機は十分にあるだろう……！」

この言葉に続くようにディーンとバロンも武器を構えた。

ワスプ 「『4対1』ね…………それはどうか？」

次の瞬間、ワスプが黒いオーラの中から放った電撃を受けた10数体の死体がまるでゾンビの様に起き上がった。そして、ディーンたちの前に立ちふさがった。

ディーン

「!？」

ワスプ
かな？」

「……これだと『4対17』だけど、勝算はある感じ

蜂（後書き）

んゝ少し長くなってしまったかもしれませんが。

ここまで読んでくださった方！ありがとうございます！

それではまた次回！

リビンゲデット（前書き）

> i 3 4 9 6 0 — 3 7 5 7 <

今回の扉絵は覚醒したワスプとティーンです。

ワスプを書いてて思ったんですが こんなポケモン
いませんでしたっけ？自分はルビィ・サファイアまでの人間
なのですが、新しいやつに……

というかポケモンって今全部で何種類いるんですか？わかる人は教えてくださいw

それでは不吉な（死死）44話です！

リビングデット

）

ワスプ 「さあゝ！！思う存分殺し合ってくれゝ！！……まあ、管制員達はもう死んでるけれどもw？」

ワスプの電撃を浴びた死体たちが起き上がり、そしてディーン達に向かってゆっくりと歩み寄る。まるでパニック系ホラー映画のワンシーンだ。

それらに対して、ディーンとナギサは前衛として近距離戦をし、バロンとマナは後方から援護射撃を行うことにした。

バロン 「オイオイ……こりやどういうことだ？ これもアイツの能力ってやつか？」

面倒くさそうな表情でそう言い捨てると、起き上がった管制員達の死体に向けてショットガンのトリガーに掛けている指に力を入れる。

マナ 「バロンさん！あの人たちはここの管制員じゃないんですか！？」

慌ててバロンに駆け寄り、銃を下げるように促すが、バロンは無表情のまま紳士モードで続けた。

バロン 「……ええ……、しかしアレはもう死体であり、どういう原理で動いているかはわかりかねますが、敵の道具と化しています……。倒さなければこちらが死体になるだけですよ？」

さっきまでと同じ口調ではあるが、どこか冷徹で機械的なセリフだった。しかし、言っていることは最もであるのだが、マナは納得ができない様子だ。

マナ 「あのヒト達がもう殺されていたとしても、罪のないあのヒト達をこれ以上傷つけることはできない！！」

涙目で訴えかけるとバロンは銃口を管制員の屍に向けたままマナの方に首を動かした。そして、切ない表情をして口を開いた。

バロン 「……こんな酷な事を女性に言うのはフェミニストとして堪えるものがありますが……あなたの事を考えた私の意見を言います……」

ここまで言った時、突如一体の管制員の屍がマナの方を向いている

バロンに飛びかかった。

マナ 「あっ！バロンさん危な

」

ビュン！！！！

マナ 「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

ショットガンの銃口から、収束された光弾が放たれ、飛びかかって来た管制員の首元に当たった。

着弾するや否や首から上は完全に吹き飛び、残った胴体がボトリと床に落ちた。

血の飛沫が飛び散り、その一滴がマナの頬にかかった。

バロン 「…………もし、貴女が彼らと戦うことができないのなら…………貴女は傭兵を辞めるべきだ…………」

マナ 「……………え…？」

突然のグロシーンと今の発言で思考が混乱してるマナに向けてバロ
ンは続けた。

バロン 「……………貴女はあのバンダナの男に勝った。それは貴女
が強いことの証明になるかもしれない…。そして貴女は優しさを持
っている。強さと優しさ……………この二つは強者の資格かもしれない
……………ですが、傭兵にはこの二つよりも大事なものがありません……………」

マナ 「……………大事な……………もの？」

バロン 「……………非情さ……………。時として傭兵は……………いや、ヒト
は皆、非情な判断をせざるを得ない時がある……………。…判断の甘さ故
に自分や仲間を危険な目に遭わせてしまう…。今の状況が正にそう
だ……………あの管制員達を倒すのを躊躇うことで、貴女や私たちにも危
険が及ぶ……………最悪、死にいたる……………」

その死という言葉がマナの頭の中で響いた。

バロン 「……………全部を救うことなんてできない……………だったら
せめて……………せめて自分の救えるモノを救うしかないだろ…！」

さっきまでマナに対していた、冷たく優しい言葉ではなく、厳しいが熱い言葉だった。

ビュンッ ビュンビュン!!

言い終えて銃口と同じ方向に向き直ると、次々に管制員を撃ち抜いていく。

その表情はさっきまでの冷徹で機械的なものでなく、何かを堪えているような顔だった。

マナ 「……（このヒトも……バロンさんも辛いんだ……それなのに私や皆を守るために……。……それなのに私は……）」

ナギサ 「……なんなんだ！？ コイツ等は！？ 斬っても斬っても起き上がってくるぞ？」

ディーン 「……（……ヤツのヒトの形態の能力は脳からの電気

信号を混乱させるものだった…。…恐らく、これはその能力を強化したもので

（「

次々に襲い来る不死の軍団を斬りながら考えに更けていると、一体の管制員の屍がディーンの後を取った。

ディーン

「

しまっ

」

ドウオ

ン！！！！！！！

一筋の雷が、ディーンに襲い掛かった管制員の体を頭から貫いた。

ディーン

「！？」

振り返ると精悍な顔つきでロッドを握っているマナの姿があった。

マナ 「ディーンさん！大丈夫ですか!？」

ディーン 「……マナ……お前……」

マナ 「大丈夫です……!このヒト達と戦うのは辛いけど……みんなが……傷つくのはもっと辛いから……」

ぐつとロッドを握りしめるマナの横でショットガンを構えているバロンに目をやる。

ディーン 「……アイツ……。…フッ……」

ディーンは元の方角に向き直り、セイバーとハンドガンを構える。

ディーン 「よし!!背中が預けたぞ!!」

血塗られた床を蹴って攻め込んだ。

ワスプ 「あつりゃあゝ…あの女の子、てっきり戦わないもんだと思ったらやるもんだねえゝ…」

空中で戦況を眺めながら右手の指をくねくねと動かしている。まさに高みの見物と言うワケだ。

ワスプ 「それにしても彼女を戦うように促したのは黒スーツの彼なのかな？…声からして多分キャストだけど……。……ふふふゝ面白いことにしっちゃおゝ!!」

そういうと、ゆっくりと下降を始めた。

管制員は何人かは動かなくなったが、あまり数は減っておらず、倒しても倒しても起き上がってくる。

ナギサ 「アイツは心臓を貫いたはずだぞ？なんでまだ動くん

だ!？」

やや疲労の表情を見せ、少し息も上がっている。

ディーンも同じく疲労していたが、この倒しては起き上がるの無限ループを抜け出すための策を戦いながら考えていた。そんな彼の目に先ほどマナのテクニックが貫いた管制員の屍が映った。

ディーン 「(…アレはさっきマナが倒した……。相変わらず威力はスゴいな……。頭が吹き飛んでる……。……。それよりなんで動きが止まったんだ? いや、止まったきつかけは頭が飛んだからだろう……。他の止まった奴らも頭を切り落とされたり、飛ばされたりしてるから……。問題はなんで頭を飛ばしたら止まったかだ……。ヤツのヒト型の時の能力から考えると脳に影響を与える力だとは思うんだが……)」

バタッ

バタ

バタ

動いていた管制員達が一斉に倒れ始めた。

ディーン 「!?!?…なんだ!？」

ワスプ 「ん〜彼等じゃやっぱり役不足だったね〜…ゴミを再利用しても結局はゴミなのかな？」

さっきまで高所を浮遊していたワスプがディーン達の前に降りてきた。

ディーン 「……………今度はお前自身が相手するのか？」

ワスプ 「まあ、それでもいいんだけど、流石に僕一人じゃキツイかな？ 正直言うとな僕ってファングさんみたいに鉄壁の防御力があるわけでも無いし、シエンさんみたいに怒濤の攻撃ができるわけでも無いし、ラヴカさんみたいに ってあのヒトの能力知らないやー!!」

ディーン 「（『シエン』…『ラヴカ』…？ 他の五芒星のメンバーか？）」

ワスプ 「…とまあ、こんなイカツイ見た目してて申し訳ないけど、僕自身はそんな強くないんだよね！ だから君らと4対1なんてやったら多分死ぬね、僕が。」

軽々しい口調にイライラしながらも前衛のナギサとディーンは警戒心を解かずにワスプの話に耳を傾けていた。

ナギサ 「では、大人しく市街地にセットした爆弾を解除するんだな？」

ワスプ 「んゝ、それはいやだな！あの爆弾すつごく綺麗に爆発するんだよ！流石にそれは見たいんだよね …だからさあ

」

ここで妙に間を開けた。4人に緊張が走った。

ワスプ 「こっさせてもらっワア！！！」

刹那、ワスプの尾の『針』から発射されたレーザー弾がナギサとディーンの間をすり抜け、真直ぐマナへと向かって行く。

マナ 「…え？…わ、私！？」

突然自分が狙われたことに驚き、横へと避けるがレーザーは角度を補正してマナを逃がさない。

ナギサ 「 Baron!! 貴方の銃弾で相殺させるんだ!! 」

Baron 「了解です!! 」

タイミングを合わせ、後は自分の目の前を通り過ぎる時に撃つだけである。

ワスプ 「……………違うよ? 僕の狙いはその娘じゃない

」

Baronの目の前を通り過ぎるコンマ数秒前、トリガーを引いた。

よ
ワ
ス
ブ

「

「

君
だ

ド
オ
ン
! ! ! ! !

バロン 「……なっ!？」

バロンの射撃は外れた。

レーザー弾が突如軌道をバロンへと変えたのだ。

急な方向転換と射撃の反動でかわすことができず、レーザー弾はバロンの右胸に被弾し、彼はそのまま床に倒れた。

マナ 「バロンさん!!」

倒れたバロンに駆け寄る。見た限り外傷は無いようだ。そして、ゆっくりと体制を起き上がらせる。

マナ 「大丈夫ですか?立てま

きや

あ!!--!」

マナの顔を見るや、いきなりショットガンで殴り飛ばした。

ナギサ 「!?!」

ディーン 「!?!?!」

マナ 「……………うぐう……………」

ショットガンで殴り飛ばされたマナは床に激しく叩きつけられたが、どうにか立ち上がることができた。

ナギサ 「どうした!?!お前が女性に……………それも仲間に手を挙げるとは……………いったいどうしたとい……………」

ドオン!!

バロンの撃った銃弾がナギサの真横を通り抜けた。

ナギサ 「…………え…………？」

ワスプ 「ギャハハハハハ！！！！さいっこーだよ！！君、いくらなんでもバカ過ぎでしょ？僕の能力に決まってるんじゃん！！ホラホラ……青髪くん分かってるみたいだから教えてあげたら……？僕の能力……」

ディーン 「……………他人の脳をコントロールする力が……？」

ワスプ 「ピンポンピンポンまたまた大正解……！！！！なるほどねえ、君がファングさんを殺せた理由がわかったよ！戦闘力もさることながら、恐るべきはその洞察力！ってどこかい？ハハハ！！僕の能力についてだったね！そう、僕の『この姿での能力』は『感電させた脳を持つ無生物の脳を操る能力』！！……と、言っても結局操れるのは死体位なだけだね……。でも、三日に一回だけ使用可能な『針』から発射されるレーザー弾は、被弾した『機械』の脳に僕の設定したプログラムを上書きすることができるのさ！」

機械……………それにはキャストも含まれてしまうのである。

バロンの方に目をやると、今度はマナに銃を向けている。

ナギサ 「やめろお！！やめるんだバロン！！」

大声で叫ぶが、バロンには全く銃を降ろす気配がない。

ワスプ 「ハッハッハアゝ！！！！無駄だよゝ！！！！今の彼は『君たちを皆殺しにして』って言うプログラムに従っている只の殺人人形だからさゝー！！ それより、早く加勢してあげないと、あの緑の女の子殺されちゃうよ？いいの？」

ディーン 「……行くぞ！ナギサ！」

ナギサ 「……くっ……！」

自分の仲間が、仲間に襲い掛かっているという現実が彼女を精神的にも追い込んでいた。

二人はマナのところへ走り出した。

ワスプ 「ああ、ちょっと待って！」

ビュン！！

ディーン 「！！！」

ワスプの右手の指から放たれた光弾がディーンの足元の床に被弾した。

ナギサとディーンは足を止めた。

ワスプ 「青髪クンは残って〜！一応、僕、フアングさんの『カタキウチ』しに来たわけだから！君一人くらいなら、僕でもラクシヨ―だしね」

この形態だと表情が分からないが、ヒトの形態の時の不気味な笑みが思い出される。

ディーン 「……………ナギサ…マナを頼む…！」

ナギサ 「…大丈夫なのか？貴方一人で…………？」

ディーン 「…………安心してくれ…こんな虫野郎には負けないさ…」

…。だから、マナと…アイツを助けてやってくれ！」

ナギサ

「

わかった

」

お互いに背を向けて、それぞれの戦場へと走り出した。

リビングデット（後書き）

ワスプの能力まとめ

ヒト形態

・少しでも感電させた相手の電気信号を狂わせる電流の発電。感電したものは5分ほど手を動かそうとしたら足が、足を動かそうとしたら手が動いてしまう。ほぼ行動不能となる。しかし、麻痺をさせているわけでは無いので痛覚は健在。

SEED形態

・電気で攻撃し、感電させた脳を持つ無生物（要は死体）の脳を活動可能な状態にし、電気信号を操り自在に動かすことができる。ただし、脳が吹き飛ばされたり、脳が一定以上のダメージを受けると効果が切れる。また、脳がすでに吹き飛ばされていたりする死体や、脳がすでに腐敗している古い死体には使えない。また、この電撃自体にも大した殺傷能力はない。

・3日に一度「針」からレーザー弾を発射できる。これに被弾した機械（マシナリー、キャスト）は自我を失いレーザーに登録されたプログラムに忠実な人形となる。これも殺傷能力は低い。

・雷のテクニックの使用。殺傷能力はそこそこ。

・????

ポリシー（前書き）

> i 3 5 3 9 8 — 3 7 5 7 <

今回の挿絵はとある料理マンガの表紙のパロディです。

もちろん内容とは一切関係ないのであしからず…

それでは45話です！

ポリシー

「パルム・ローゼノム演習所付近の新市街地」

先ほどの爆発で人々が混乱し逃げ惑う中、一人の少女が片手に端末を持って人々の流れに逆らって走っていた。

金髪の少女「……やっぱりだ…この爆弾、さっき観測された怪電波とリンクしてる。…！？ちよつ、ちよつと待って！？もう一つある！？……しかも、この反応…もしかして相当大きい！？」

端末の画面にはこの周辺のマップが表示されており、場所によって様々な色で分けられている。さっき爆発があった所は黄色く表示されているが、一か所広い範囲で赤く表示されている部分があった。

金髪の少女「これが爆発したら本当にヤバいっしょ！？ 撤去には時間がかかりそうだし…そもそも正確な位置がわからないから…
……何処から電波で遠隔操作してるんだと思うんだけど… ジヤミングができればあるいは……」

誰もいなくなった通りで腕を組んで考えこんでいた。すると、何かを思いついたかのように顔を上げると連絡用の端末を取り出して操作し誰かに繋いだ。

端末の画面には長い銀髪の青年が映っていた。

銀髪青年 「ああ、エミリアか！どうやら無事みたいだな！ 君が『変な電波があるから調査に行く』って飛び出して一時間も経たないうちに爆発するなんて……」

エミリア 「あゝはいはい……あたしは大丈夫です……
つて、そんなことより聞いて、シズル！ 爆弾がもう一個あったの！それも大きさがさつき爆発した奴の比じゃないの！」

シズル 「なんだって！？ ……爆弾についてももう少し詳しく聞かせてくれないか！？」

エミリア 「演習場……多分、あそこの管制塔から出ている電波とリンクしてるから、遠隔操作型のリモコン爆弾だと思う……」

シズル 「演習場！？ ……確か、今バロンとナギサが居るんじゃないか？ ……彼らに連絡は着かないのか！？」

エミリア 「……ううん、なんか妨害電波が演習場を囲むように発生してるから連絡はできてない……」。 そ・こ・で！ア
ンタに頼みがあるんだけど？」

シズル
よう！」

「…頼み？」

ああ、そういうことだな！引き受け

エミリア
！」

「ふっふっ！流石！分かったみたいだね！よろしくう

エミリアは通信を切ると何処かへと走り始めた。

～管制室～

ワスプ 「ホラホラあ！！青髪クン！！逃げてばっかいると、
爆弾爆発しちゃっよ！！？」

空中から右手の平の銃口から光弾を連射するワスプに対し、デインは防戦一方だった。

デイン 「（……くっそ、多分あの光弾も喰らったらさっきみたいに動けなくなるな… 電気だから間接的に触れてもアウトだから

ら防御も無理だ… それよりも厄介なのは飛行能力だ… 上から狙われるのは回避もし辛い上に、こっちの攻撃がほとんど届かない… 銃を使うにしても、ああ動かれると狙うのも難しい……

どうする?」

光弾をかわしつつ、この状況を打破する策を考えるが、これと言ったものはない。

ワсп 「考えるよりとりあえず銃でも撃ってみればいいのに…一発くらいあたるかもよ?」

攻撃の手を止め首を傾げてディーンのことを自分の圧倒的有利な状態を見せつけるかのように見下ろす。

ディーン 「……（ただ無理に攻めなければ、アイツの攻撃をかわすのはそう難しくない……ナギサたちの援軍を待つこともアリかもしれないな……）」

ワспの問いかけに全く反応せず、ひたすら策を練り続けていた。しかし、この態度がワспを一変させることとなった。

ワсп 「おい青髪クン? 聞してる? 返事くらいしてくんな?」

「……（だが、あの二人だけで黒スーツを倒せるか？）」

「オーイ。シカトすんなー？」

ディーン「……（それに時間がかかり過ぎて爆弾が爆発したらそれこそ最悪だ……やはりコイツはオレ一人で）」

焦点をワスプに合わせ直すと、左手の巨大ブラスターの銃口を向けられていた。

「なっ……!？」

ワスプ
「僕の話……聞けええええええ！！！」

ゴ

ブラスターからゴルドーの熱線よりも太い光線が薙ぎ払うように放たれた。

ディーンはその攻撃に反応することができなかったが、ワスプは当てるつもりがなかったようで、ディーンの足元をギリギリの部分を通るように光線を薙ぎ払ったようだ。

光線が通った部分は下の階まで貫通しており、高圧の電流に焼かれたため周りは真っ黒に焦げていた。

ディーン 「……………なん…だ？…今のは！？ 威力も速度も反則じゃねえか！？」

黒く染まった足場を目にして、ディーンはつい一步後ずさりしてしまった。

ワスプ 「『電流収束砲』！僕の攻撃の中で最も殺傷能力に特化した技だよ？ 僕は無視されるのが大嫌いでさ あんまり反応が無いときは ツイツイぶっ放しちゃうんだよねえ まあ、充電もすぐ終わるからいいんだけどさあ 次は当てにいくよ？」

ディーン 「・・・（マジでどうする！？）」

~~~~~

バロン 「あああああああ！！！！！！」

怒り狂ったか様に奇声を上げショットガンを乱射するバロン。

その弾丸を掻い潜りナギサはバロンとの距離をつめ間合いに入った。

ナギサ 「目を覚ませえ！バロン ！！！！」

大剣をバロンに向かって振りかざす。相手がバロンだからだろうか？手加減無用の全力の一撃である。

バロン 「あああああ！！！！！」

ガキンッ！！

ショットガンを盾にナギサの一撃を防いだ。大剣はショットガンを半分ほど切断したが、バロンには届かなかった。

ナギサ 「……くっ！」

剣を引こうとするが、すでにバロンはショットガンから手を離し、拳を引いていた。

Baron 「があああああ！！！！！！！」

Gosu 「！！！！」

Nagisa 「！！！！はっ！！！！」

殺人特化のプログラムを打ち込まれたため、リミッターの解除された Baron の拳が Nagisa の腹部を打った。  
殴られた Nagisa は口から血を吐きながら後方へ飛ばされた。

Mana 「だ、大丈夫ですか！？ Nagisa さん！！」

目の前に飛ばされた Nagisa に慌てて駆け寄る。  
呼吸ができず殴られたところを必死に抑えている Nagisa の背中をさすって呼吸を落ち着かせた。

ナギサ 「…………ハア…………ハア…………すまない…………もう大丈夫だ…………。…………それよりもアイツから目を離さない方がいい！」

バロンの方を向き直ると、新しい武器を換装し彼女たちに銃口を向けている。

…ツインハンドガンだ。

ナギサ 「…………厄介だな……。作戦を一つ思いついたのだが、あの武器で来られると少し難しくなる…………」

マナ 「どういう作戦ですか？」

ナギサの顔を覗き込むようにして不思議そうに問う。

しかしナギサは視線をバロンに向けたまま険しい表情をしていた。

ナギサ 「…………今はとりあえず、隠れよう……！そこで作戦を話す……！出口まで走るんだ！」

そう言うとともに立ち上がり、管制室の出入り口まで走り始めた。マナも慌ててナギサを追うと、後ろから弾丸が複数飛んでくるがそれらが二人に当たることは無かった。

無事に入入り口までたどり着くと、近くいあった柱の影に隠れた。



ナギサ 「……どうやら攻撃力や防御の反応速度は強化されているが、射撃の命中精度は格段に落ちているな……」

腕を組んでバロンの変化について考察を述べているナギサの横でマナは心配そうに声を発した。

マナ 「……あ、あの……、ディーンさんを一人置いてきちゃいましたけど、大丈夫なんでしょうか？ あの蜂みたいなヒトとバロンさんの二人で攻められたら流石に……」

ナギサ 「ん？ああ、その点については心配はいらないと思うぞ？ ワズプは『カタキウチ』と言っていた。何かはわからないが個人的にディーンに恨みがあるようだ。恐らくディーンは自分の力だけで倒すつもりなのだろう……それより作戦を伝える……」

マナ 「……………はい……………」

「

管制室から出てきたバロンはツインハンドガンを構えたままあたりを見渡していた。

ナギサ 「……よし、出てきたぞ… マナ、手筈通りに頼む！」

マナ 「……本当に…やるんですか？」

苦渋の表情を浮かべ、頼りなさにロッドを握っていた。

ナギサ 「 気持ちはわかる…だが、本当につらいのは女性を気付着けないと言うポリシーを無視され無理やり戦わされているアイツだ… アイツを救うにはワスプを倒す他にこれしかない！」

マナ 「……でも…」

パン！！

マナの態度に痺れを切らしたナギサの平手がマナの頬を打った。

マナ 「……いったあ?!……え?」

頬を抑えてナギサの顔を見ると、今にも泣きだしそうな表情をしていた。

ナギサ 「……アイツは……バロンは……そのポリシーを……捨ててまで私を救ってくれたんだ……だから……私はもう……これ以上アイツにポリシーに反することをさせたくないんだ! すまない……手が出てしまった……だが……頼む……アイツを助けてやってくれ……」

頭を下げるナギサの言葉を聞いて先ほどのバロンとのやり取りを思い返す。

マナ 「(……さっきバロンさんが言ってたことは……こういうことだったんだ……ナギサさんも……分ってるんだ……私がこんなじゃダメだ……!)」

マナは強くロッドを握り直した。

マナ 「……バロンさんを……助けましょう……!」

ナギサ 「……感謝する……!」  
「では、作戦開始だ!」

そういうと、すぐにナギサは柱の影から飛び出しバロンに向かって走り出した。

ナギサ 「行くぞ！バロン！！（…おそらく奴を停止させるには、マナの強力な電気技でショートさせ一度停止させるのが一番だ… しかし、やつの武器はツインハンドガン… 同時に二か所を攻撃できる…）」

バロン 「あああああ！！！！！」

ナギサを見つけると二つの銃口から弾丸を連射した。

ナギサ 「…（この攻撃を避けるのは容易だ… しかし、接近戦が得意でないマナが避けるのは難しい… だから、一旦私が接近戦を取り……………）」

ナギサはバロンを間合いに入れると剣を振りかざした。

防御に転じようと銃をクロスさせて胴体を守るが

ナギサ

「

私の狙いは……腕だ！……！」

ザンッ！……！

急に剣の軌道を変化させ、バロンの右腕を肘から斬りおとした。そのままナギサは転ぶようにバロンとの距離を取った。そ

バロン

「ああああああ！……！！！」

バロンの悲鳴が廊下に響く中、ナギサの声が悲鳴を突き抜けた。

ナギサ

「マナああ！！ 今だああ！！！」

マナ

「は、はい！！……やあああ！！……！」

柱の影から出てきてロッドをふるつと、雷でできた巨大な矢がバロンに向かって放たれた。

ナギサ 「よしっ！これで成こ……」 なっ！？」

バロンの方を向くと、残った腕に握ったハンドガンの銃口をナギサに向けていた。

ナギサ 「……まずい！今撃たれたら……」くっ」

両腕を自分の顔隠すように交差させた。しかし次に聞こえたのは銃声ではなかった

バロン 「……フッ……」

ナギサ 「えっ！？」

バリリリリリリリリリ

マナの雷のテクニック『ゾンデ』がバロンに直撃すると、凄まじい音を立ててバロンの全身に電撃が走った後、バロンは体中から煙を出しながらその場に倒れた。

マナ 「……………や、やったの？」

恐る恐るバロンに近づくが、すでにナギサが倒れたバロンを抱きかかえていた。

マナ 「……………ナギサさん……。バロンさんは…？」

ナギサ 「……………大丈夫だ……。今は強力な電撃を受けて機能を停止しているだけだ… それにコイツはキャストだから腕も修復できる……………」

ナギサは振り返らずに答えた。 ナギサの様子を心配して近づいた時、バロンの表情を見て、マナは驚いた。



それはバロンがゾンデを受ける直前に作った表情だった。

マナ 「笑ってる…」

ナギサに銃を向けた後、バロンは笑顔を作ると銃を降ろした。そしてゾンデをなんの抵抗もせずに受けたのだ。

ナギサ 「……フツ……フツ……本当に……本当に……大したポリシーだよ……」

ナギサはボロボロと涙を流してバロンを抱きしめた。

く管制室く

ワスプ 「ん？今、外で音がしたけど決着が着いたのかな？

まあ、どちらにせよ僕らも決着をつけないかい？」

管制室は既にワスプが何発もブラスターによる攻撃を行ったことが容易にわかるほど焦げた穴がたくさん空いていた。壁にも長い穴が空いていて外の景色を望むことができた。

その部屋の壁際でディーンは息を荒げていた。

ワスプ 「さつきから部屋の端を逃げ回ってるけど、そろそろ攻めてくれないかな？僕もつまらないんだよねえ？追い詰められたんだったら潔く死んでくれない？」

ディーン 「……オレが追い詰められたって？……くはは……ははは……何言ってるんだ？お前？」

壁に寄りかかりながらディーンは不気味に笑い始めた。

ワスプ 「んにゃ？おかしくなっちゃった？」

ディーン 「……追い詰められたのは………」

ディーン

「

お前だよ………！！」

ポリシー（後書き）

マナが説教されまくりかもしれんです…

成長できるよ（笑）

それではまた次回。

## 悪あがき（前書き）

> i 3 5 7 4 1 — 3 7 5 7 <

今回の扉絵はブイール社の社長と会長です。全く出番がありませんw

この章もいよいよです！！！よろしくお願いします！

## 悪あがき

〈管制室〉

ワスプ 「僕が…追い込まれた？ ……やっぱりおかしくな  
っちゃったのかなあ？ 青髪くん？」

穴だらけの管制室の壁に寄りかかり、不気味に笑うディーンにブラ  
スターの銃口を向けてつまらなそうに見下ろした。

ディーン 「……く……くはは……。お前は……ハア……気付いて  
ないようだが……多分『次の一撃』で勝負は……ハア……決まる  
ぜ？」

息を切らし、俯きながらもディーンは笑みを作った。

ワスプ 「『次の一撃』？ ヒヤハハハハハ！ ……そりやそうだ  
！ 僕の一撃で君は木端微塵になってゲーム終了だああ！ ……強がって  
るみたいだけど、もう動けないんだろ！ ……？」

バチバチと音を立て、ブラスターにフォトン収束しいつでも放射  
可能な状態を作った。

ワスプ 「カッコつけてないで、死ねよ!!」

ゴ

轟音を立ててブラスターから『電流収束砲』がディーン目掛け真直ぐに放たれた。

ワスプ 「ヒヤハハハハハ!!お前の言う通り『この一撃』でお終いだあ!!」

向かってくる光線に対してディーンはピクリとも動かなかった。しかし、直撃する寸前でまたニヤリと口元を歪ませた。

ディーン 「……………『この一撃』でお終いね…………その通りだよ馬



鹿野郎!!」

身体を急旋回させ、近くに空いた穴へと飛び込んだ。

光線はディーンに当たることは無く、また壁に大きな穴を開けた。

ワスプ 「ヒヤハ……ヒヤハハハハハハハハハ!! 散々力ツコつけといて何!? 逃げた!? それとも自殺!? ヒヤハハハハハハハハ!! ダツサ!! ダサ過ぎでしょおオオオオ!!」

ディーンの飛び降りた穴を指さし、これでもかと言うほど大爆笑をした。

しかし、途中から笑い声以外にも音が聞こえてきた。

ワスプ 「ハハハハハ……ハハ……ハ? ……なんだ? この音?」

周りを見渡すと、天井から欠片がポロポロと振ってきた。

ワスプ 「……………ちょ……………これって?」

壁に穴が空き過ぎて天井を支えることが出来なくなったのだ。

ワスプ

「まずいつ！早く穴から出

」

次の瞬間には天井は崩れワスプはなす術もなく、降り注ぐ天井の下敷きとなった。

ワスプ

「（……くっそお…少し調子に乗り過ぎたなあ…）」

瓦礫に首から下が埋もれワスプは首だけ出しているという状況。

ワスプ 「（……！？…来る！走ってくる音が）」

タタタタタ

首の回らない後方から駆けてくる音と気配を感じ取った直後、その声を聞いた。

ディーン 「……ハア……捕獲……成功……！」

ワスプ 「なっ！？」

首にまたがり、後頭部に銃を突きつけ、首元にセイバーを突きつけ

る。

ワスプ

「お……お前……飛び降りたんじゃ!？」

銃とセイバーを突きつけられ首が動かせず、そのまま焦り満ちた声を漏らした。

ディーン

「……オレが本当に飛び降りたと思ったのか？」

ワスプ

「……くっ……!」

ディーン

「……飛び降りたんじゃない……外へ避難したんだ

よ……」

ワスプ

「……外にそんなスペースなんて……」

ディーン

「……流石に結構キツかったぞ?これで体支えるのは

……」

グイグイとワスプの首にセイバーを押し付ける。

ワスプ 「!？」

デーン 「…これをブツ刺してる壁が崩れたら万事休すだったけどな……。まあ、これでお前もお終いだ……。爆弾を解除して貰おうか？」

ナギサ 「……何が起こったんだ？急に管制室の壁が……。デーン無事か!？」

廊下側は天井が崩壊することはなく、マナ、ナギサ、バロン（停止中）に直接害はなかった。マナとバロンを背負ったナギサが管制室に入ると、ワスプに銃とセイバーを突きつけているデーンの姿を目にした。…が、デーンの表情は穏やかではなかった。

デーン 「お前!!どういうコトだ!!」

ワスプ 「だ〜か〜ら〜……あの爆弾を止める方法なんてないよ〜？あの爆弾は僕から発せられる電波に反応して爆発するんだけど……時間になったら勝手に送信するように設定した拳句、変

更も不可能だからねゝ あ、そうそう、僕を殺しても駄目だよゝ  
？僕が死んだときにも同様の電波が送信される仕組みになってるからゝ  
設定時刻まであと3分を切ってるよおゝ？」

再度、自分が絶対優位とは言えないまでも、アドバンテージを得た  
ワスプはその無機質な顔の奥に笑みを浮かべていた。

ディーン 「……（くそ……くそくそくそ……！考える……！……これ  
以上コイツの思い通りにしてたまるか……！何か……何か策は……！）」

ワスプを制圧したままの状態で策を考えるも、何をやるにしても時間  
がないことで全ての策は実現不可能となる。そして、ただ時間だけが  
過ぎていき……

ワスプ 「ほらほらゝ僕の体内時計だとあと30秒くらいじゃない？あゝあ、これで市街地は火の海だあゝ」

ディーン 「だまれえ……！！（……クソ……！結局……結局止められないのか……！？）」

深刻な表情でまだなお策を考えるディーン、狂ったように笑い出す  
ワスプ。その場に居合わせたマナとナギサはただただ呆然とその光  
景を眺めるしかなかった。

ワсп  
「ヒヤハハハハハハ！……あと10秒だ！……きゅ  
う！はちい！ななあ！……ろくう……！」

もう間に合わない。そう悟ったナギサとマナは目を瞑った。デインもこれではどうすることもできなかった。正に「万事休」と言える状況だ。

ワсп  
「さあ！ん！に……いい！……い……ちいいいいい……！……！」

ワсп  
「どっかああああああああん……！！……！！……！！……！」





ナギサ

「

?」

その場にいた誰もが不思議に思った。どこからも爆発音がしないのだ。

マナは市街地の方に目を向けるが、一回目に爆発したところから煙が上がっている以外、どこかで爆弾が爆発した形跡はない。

ワスプ  
の？」

「……へ……?ええ……?なんで……?なんで……爆発しない

この中で最も不思議そうで情けない声を発したのはワスプだった。

ブルルルルル

誰か端末が音を発している。

ナギサが、私か？と端末を取り出すと、鳴っているのは彼女のものだった。そして、中央のボタンを押し、通信に応じた。

エミリア 「あっ！？ナギサあ？よかったあ！繋がったよ〜」

端末の画面の中には金髪の少女、エミリアが映っていた。その背後にはおそらくこの近くの市街地のものであるう建物建っていた。

ナギサ 「エミリア！？そこは……どうして貴女がそこにいるんだ！？」

エミリア 「どうしてって…変な電波が観測されたから、アンタ達に調べてもらおうと連絡したら繋がらないからあたしがここに来たんしょ！ 大変だったんだからねえ！」

ナギサ 「……………すまない、話が見えないのだが？」

エミリア 「…えつとね、平たく言うと私はこの地下にセットされている爆弾が、ナギサたちが今いる演習場の管制塔から発せられている電波によって爆発する仕組みだと気付いたの！…ここまでおーけい？」

ナギサの理解力を彼女なりに考えできるだけゆつくりと説明する。  
ナギサ以外のメンバーもこの通信に耳を寄せている。

エミリア 「それで、それが爆発するのを防ぐためにシズルに頼んでインヘルト社にこの地域の電波をジャミングして貰って、現在この爆弾は爆発することはないの！後は撤去するだけってこと！おーけい？」

この説明を聞いて3人に納得と笑顔が生じた。ワスプはただ呆然と聞くしかなかった。

エミリア 「…つーかそっちも相当大変そうな状況になってるね？てゆーかバロンやられてんじゃん！！増援は必要？！」

慌てふためくエミリアに優しく微笑んだ後、ナギサは礼とガーディアンズへの連絡の要請をするとディーンに目で合図した。

ディーン 「…と、いうワケだ…！お前の完全敗北だよ！ワスプ！お前には色々と聞きたいことがあるんだ！大人しく捕まって貰おうか？」

ワスプ 「……僕が…捕まる…？」

魂の抜けたような声を出すと彼に乗っかっている瓦礫が音を立てた。

ナギサ 「ディーン！かわせ！！！」

ディーン 「！？」

ガア  
アア

瓦礫の中から突然ワスプの巨大な腕が現れ、ディーンの体を握りしめた。

それと同時に何かが始動したような、ピツという音がした。

ディーン 「うぐっ … お前…まさか…!？」

強い握力に締め付けられながらも押し殺すような声をだし、ワस्पを睨みつけた。

ワस्प 「ピンポーン!! 今のは自爆スイッチです!! 威力はそれほどではないけど、君を道連れにすることぐらい他愛無いよー!! さあ、10秒前だ! ごーとうへるうううう!!!!」

自分の命を諦めた者の恐ろしさを感じさせる狂い笑をしながら、またカウントダウンを始める。ディーンは抜け出そうとして締め付ける力が弱まることはなく、彼の命も風前のともし火に思えた。

マナ 「ディーンさん!!!!」

ビュン

一発の紫色の弾丸がディーンを握りしめているワスプの手に当たり爆発した。

不意打ちの驚いたワスプはつい手を離してしまった。

バロン 「青髪いいい！！！！走れえええええ！！！！」

弾丸の飛んで来た方を振り向くと、ナギサに背負われた状態で片手にハンドガンを握っているバロンの姿があった。

そしてディーンはその言葉に従い急いでワスプから離れるため駆け出した。

ワスプはディーンをまた掴もうとするが下半身と左半身が埋まっているためその腕は届かず抜け出すことも出来なかった。

ワスプ 「……………そんな……………僕が……………僕がこんなダサい……………死に方……………ウソだああああああああ……………」

ドゥー  
ン

断末魔と爆音が醜く共鳴した。

爆風がディーンの中を押し爆発に直接巻き込まれることはなかった。

ディーン 「…………ハア…………ハア…………」

荒い呼吸が自分の生を実感させた。



管制塔の隣のビルの屋上でディーン達の様子を眺めている者がいた。

ピンクのセミロングヘア、ディーラーのような服装、スペードが描かれた仮面　　五<sup>ペンタクル</sup>芒星の紅一点、『ラヴカ』と呼ばれている女である。

ラヴカ　「…………哀れなものね…………でも、おかげで今回は彼<sup>ファンク</sup>の時みたいに『処理』する手間が省けたわ…………」

その仮面が彼女の表情を隠すが、冷淡な口調はまるで仮面がそのまま表情なのではないかと思わせるほどだった。

ラヴカ　「それに今回は直に『彼女』を見れたしね…………。…あのバンダナの彼との戦闘中に見せた黒いオーラ…………やっぱり間違えないわ…………。…フフ…………ファンクも惜しいことをしたものね…………」

クスクスと笑い声を漏らすと、管制塔に背を向け歩き始めた。

ラヴカ 「……そう遠くないうちにまた会いましょう?……  
可愛い邪神さん?」

そういうと彼女の前の空間が歪み、その中へ吸い込まれるように消えて行った。

1時間もしないうちにガーディアンズが到着し、ディーン達の保護、倒れているテロリストの回収、生存者の捜索が行われた。

犯人グループ・市街地の爆弾に巻き込まれた者も含め死亡者43名、負傷者147名と言う形でこの事件は幕を閉じた

お約束のようにディーンは病院に運ばれたが、今回はそこまで大きなケガが無かったので3日で退院でき、その後マナと二人リトルウイングへあいさつに向かった。

ナギサ 「ああ、待っていたぞ！あの時は世話になったな！お互い大きなケガもなく安心したぞ！」

リトルウイングに着くなり笑顔でナギサが迎えてくれた。

ディーン 「まあな……。つか、マナに至ってはほぼ無傷じゃなかったか？」

マナ 「え?!違いますよ?かなり傷ついたけど、バロンさんがレスタで直してくれたんです。」

ナギサはバロンはテクニクがそんなに優秀なものだっただろうか？と考えこもうとしたが、結局はあまり気にせずスルーした。

ディーン 「そういえば、黒スー……バロンはどこにいるんだ？あの時の礼を言いたいんだが……」

少し照れくさそうにするディーン表情もスルーし、ナギサは事務所の方を指さした。

バロン 「エミリア ！！何ですかこれは！？なんで片腕がサイコガンになってるんですかああ！！」

失った腕の代わりにサイコガンを携えたバロンが大声を上げて金髪の少女を追い回していた。

エミリア 「かつこいいじゃん！」

満面の笑みを浮かべ逃げ回るエミリアに対して、バロンは若干涙目

だ。よほどサイコガンが嫌だったのだろう。

ディーン 「……ん、まあ元気そうで安心したわ……」

ナギサ 「……ああ、そうだな……。とりあえずウチの社長に会ってもらえるか……」

ディーン 「ああ！よし、マナ行こう……」

マナ 「あ、はい！」

三人は事務所の中へと入って行った。

普段、五芒星<sup>ペンタクル</sup>が会議をしている施設と同様の建物と思われるが、部屋が違っていた。その部屋にはリーダーらしき包帯の男とシエンが向かい合って座っていた。

シエン 「先ほど、ラヴカからワスプが敗北し死亡したとの連絡を受けました……」

仲間の死を悔やむような悲しい瞳を長髪とコートの襟の間から除かせた。

包帯男 「……そうか……ファングに続いて奴まで……」

シエン 「……万が一のことを考え、欠番を補充すべきでしょうか？」

包帯男 「…いや、ファングに任せていた『財の確保』もワス  
プに任せていた『工作活動』も、もう必要ない……。万が一強硬手  
段に出なければならなくっても、『最高』の能力を持つラヴカと『  
最強』の戦士である君……。そして『最凶』のあの男が居れば、戦  
力としては申し分ない……………」

『最凶』のあの男と言つ言葉を耳にした瞬間、シエンは眉間にしわ  
を寄せ嫌悪感を抱いた。

同じ施設の地下室。牢獄のようになってるがほとんどが空である。  
しかし、ただ一つ…一番奥の牢屋にはヒトが入っていた。

しかし、その右腕は異形に変異しており、その変異した腕でひたす

ら自分の心臓部分を突き刺そうと繰り返している。だが、身体に触れた瞬間、腕が体を突き通り空打ちとなっている。

「……………今日も……………今日もお前は……………俺を死なせてくれないんだな……………」

大きなため息をつくとき焦点の合っていない瞳で虚空を見つめながら口を開いた。

「……………誰か……………誰か……………俺を……………」





殺してくれ……!!

## 悪あがき（後書き）

「英雄たちのウォーゲーム」終了です！

長い…長かった…。ついでに言えば急展開かもしれん…

何かあれば感想の方をお願いします。

次回はとりあえずインターストーリーを挟もうと思ってますのでよろしく願います！

それではまた次話で！

**OUT BREAK!! マナ(前書き)**

> i 3 5 8 6 4 — 3 7 5 7 <

はい！インターストーリーです！なんかほとんど料理小説です！

実際に作れるんでよかったら作ってみてください！

## OUT BREAK!! マナ

ある日……その事件は突然起きた…。

ディーン 「……………ぐっ……………ううう……………」

ラグナ 「……………あ……………んあ……………」

ギラード 「……………ううう……………」

ジャン 「…………………………」

ギルドのロビーで主力の三人が呻き声を上げ、ジャンは完全に意識を失っていた。

マナ 「……………み、みなさん……………な……………なんで……………？ どうして……………？」

ただ全身を震わせ、なす術もなく呆然と立ち尽くしかなかった。

ディーン 「……………マ……………ナ……………」

マナ 「ディーンさん!! いやだ!! 死んじゃ嫌です!! 死  
なないで!!」

ロビーに少女の叫び声が木霊した。

なぜこんなことになったのか？

それを明らかにするためには少々時間を遡る必要がある。

……約1時間前。

午後5時。ギルドのロビーではラグナ、マナ、エレーナがテレビ画面を眺めていた。

番組の内容は主婦向けの料理番組で何やらパエリアを作っているようだ。

シェフ 「なんとここでえ……さきほど細かく刻んだ花びらを入れちゃいます〜!」

TVの画面では細かく刻まれた花びらがパラパラとリゾットに盛り付けられていく。

マナ 「え〜っ!? お花って食べれるんですかー!？」

ラグナ 「…ん、まあテレビで言ってるんなら食えるんじゃないの? 俺は料理に詳しくないからわかんねーけど… エレーナちゃん分かる?」

エレーナ 「え〜…そうですね…。見栄えを良くする際に飾りとして使ったことでしたら何度かありますが、食材としては……」

三人が料理に花を使うことについて考えていると、ギルドの出入り

口のゲートが開いた。

マナ 「あ！ディーンさん！ジャン君！お帰りなさい！」

昼間から二人で出かけていたディーンとジャンが帰ってきたのであった。

なんでも武器の新調にディーンが出かけようとしたところ、武器選  
びの参考にとジャンもついて行ったそうだ。

ディーン 「おう！ なかなかいい買い物できたぜえ！」

満足げなディーンの隣には疲れた表情をしたジャンの姿があった。

マナ 「アレ？ジャン君どうしたの？欲しいもの無かった？」

ジャン 「……いや、俺は元々今日は買い物をするつもりは無  
かったんで、そういうワケでは無いんすが……。 ……何というか  
…あんまり参考にならなかったと言うか……」

マナ 「…へ……………」

ジャンのこの様子の原因が分からず「？」を頭上に掲げているマナ



だが、ディーンが買った品を取り出し見せつけ始め、ようやく理解できた。

ディーン 「実はこの前フォトン武器が効かない相手との戦闘になつてさ。そんなことがこの先もあるんじゃないかって思って今日は金属製の武器を見に行ったワケよ！」

よほど嬉しいのか、いつもよりも饒舌なディーン。そうして買ったものをナノトランサーから取り出した。

黒光りするそれを見たその場にいた全員が啞然とした。

ディーン 「そんでこれ！『フライパン』！なんか料理にも使えるみたいだし一石二鳥じゃね？」

エレナ 「……まさか、それで戦うつもりですか？」

ディーン 「？ 武器なんだし戦うだろ？普通に……」

若干ドン引きしたエレナの問いに何の引け目もない様子で答えた。

エレナ 「……ディーンさんって……」

マナ 「……割と天然なんですね……あははは……ははは……」

冷たい視線を浴びせるエレナ、苦笑いするマナ、そして大爆笑しているラグナ。これらの反応に対してディーンは腑に落ちない表情をする他なかった。

マナ 「……ははは……ん？あ、そうだ！」

ディーン 「なんだ？」

マナ 「ディーンさんって結構料理するヒトですよね？」

ディーン 「まあ、一人暮らし長いし、4年間ニートしてた時も節約のため自分で作ってたから……」

マナ 「お花って食べれるんですか!？」

先ほどの番組でのが忘れられずディーンにも尋ねた。

ディーン 「……花か……」

腕を組み遠くを見つめて考え始める。

デーン 「まあ、食えるな。食用のやつがあつて結構栄養価も高い、その上料理の見た目の美しさの上昇と、カラーセラピー効果も期待されるってんでなかなか面白い食材だ。あと、中には雄蕊をスパイスとして利用したり、葉や茎もサラダとして食べることはまあ知ってるか… あ、それから」

ペラペラとさつきとは違い、専門家のように語った。マナは目をキラキラと輝かせながら聞いていたが、他のメンバーは後半はついてきてはいなかった。

デーン 「……と、まあこんなもんな？…なんだ？マナも料理に関心があるのか？」

マナ 「は、はい！！ ……でも、ほとんどやったことなくて……」

まあそうだろうなと頷くとエレーナの方を向いた。

デーン 「今からキッチン使っていいか？」

エレーナ 「……フツ…構いませんよ？」

お互いに目で合図を交換すると、ニヤリと口元を緩めた。

マナ 「えっ……何？」

ディーン 「夕飯を作るぞ！」

くギルド・キッチンく

マナ 「…あの、私本当にやったことないんですけど……」

ディーン 「とりあえず今日はアシスタントをしてくれ……基本はオレがやるから見て覚えてくれ！」

自信なさげにキッチンに立つマナをしり目に先ほどテレビでやって

いたパエリアのレシピを読んでいた。

ディーン 「…んゝなるほどな！花を使う以外基本的には普通のパエリアだな。」

そう言うと慣れた手つきで材料を並べ始める。洗っていない米4合、鶏もも肉300g、にんにく4片、青ピーマン4個、パプリカ2分の1個、マッシュルーム6個、トマト2個、イカ2杯、貝500g、エビ300g、白ワイン、ローリエ、オリーブオイル…

ディーン 「まあ、こんなもんか！流石に食用の花は置いてなかったな…マナ！何か使えそうな花持ってたんじゃないか？」

マナ 「…えゝつと、この前ミツシヨンの途中で見つけて倉庫に入れたんですけど、…名前なんでしたって…？…黄色い奴で……なんとか…えゝつ…ルル？ミミイ？えゝつと、えゝつと…」

ディーン 「テティの花？」

マナ 「あ！多分それです！！」

ディーン 「…テティの花か…。まあ食用ではないけど、香りや色を付けるのには持って来いかな？オレ、今から下処理するから

用意してくれ！」

マナ 「あ、はい！」

マナがキッチンから出ていくと、ディーンは庖丁を握った。

〈5分後〉

マナ 「持つてきましたよー！」

キッチンにはすでに下処理が終了した食材が、食材ごとに皿で分けられていた。

鶏も肉とイカは小さ目の一口サイズに、にんにくはみじん切り、マッシュルームはスライス。トマトとピーマン、パプリカは1cm角に切られ、エビは皮を向かれた状態で、貝は砂抜きを終えた後、水をよくきられていた。

マナ 「早っ！！」

ディーン 「お、ご苦労！ じゃあ洗って、そのあと適当に干切っておいてくれ！ そんでオレは今日かったコイツを……っ！」

ナノトランサーからフライパンを取り出した。

マナ 「……あ、はい……（ディーンさん……絶対これを使い  
たかっただけだ　！！）」

口には出さず、流して持ってきた花を洗い始めた。

ディーン 「さつてと！はじめてっか！」

熱したフライパンにオリーブオイルをひき、弱火でにんにくを炒め  
始めた。

マナ 「（あ、おいしそうな匂い……）」

香りがし始めると、あらかじめ塩こしょうをした鶏もも肉を入れ、  
弱火から中火に火力を上げた。

そして焼き色が付いたら米を入れてよく炒める。

自分の作業が終わるとマナはディーンの前でフライパンの中をのぞき始めた。

マナ 「（あ、お米が透き通ってきた…！）」

ディーン 「よし！このタイミングでコイツラを投入だ！」

マッシュルーム、青ピーマン、パプリカを一気にフライパンの中に入れると熱が全体に伝わるように木べらで他の素材と混ぜ合わせた。

ディーン 「マナ！その白ワインを取ってくれ！」

マナ 「えっ！？白ワイン使ってますか！？…あの、私まだ未成年なんですけど…」

このマナの発言にディーンは呆れたような声を出した。

ディーン 「……………アルコールは熱することで吹き飛ぶんだよ…！…つか、料理酒とか知らないのか？」

マナ 「……………すいません…」



大きじ3白ワインを加えると、ローリエ、千切った花、トマトの順にフライパンに加え混ぜ込んだ。

ディーン 「（…ん？今の本当にテティの花だったか？　なんか微妙に……）」

マナ 「ディーンさん！ディーンさん！パエリアにイカとか並べるのやっていいですか！？」

ニコニコしながら魚介類の乗った皿を持ち上げた。

ディーン 「ん？…あ…ああ、もう仕上げだから適当に盛ってくれ！」

許可が下りると、何とも楽しげな表情でイカ、貝、エビを一個ずつ丁寧に並べて行った。

並べ終わるとディーンはフライパンに蓋をして20分ほど炊き上げた。そして蓋をあけ、水分が飛んでいることを確認すると皿から外して蓋をしたまま5分ほど蒸らした。

マナ 「うわぁ…いい香り!」

ディーン 「じゃあ、蓋とるな…」

むわつと白い煙と香ばしい匂いが湧き上がると、その奥には綺麗な黄色に染まったパエリアがあった。

ディーン 「よし、これにこしょうを少々と、パセリを全体に振りかけて……………完成だ!」

ロビーに戻るとギラードもそこにいた。

マナ 「みなさぁん!できましたよー!」

ワゴンにパエリアを5皿乗つけて運んできた。

そして、テーブルに並べていく。

ラグナ 「おっ！うまそうじゃん！」

ギラード 「マナ……料理覚えたのね……」

ディーン 「まあ、ほとんどオレが作ったようなもんだけど……」

キッチンからディーンが出てきて本人も席に着いた。

ディーン 「そいじゃ……いただきますか？」

マナ 「あ、私飲み物取ってきますね！」

席を立ち冷蔵庫のあるキッチンに入って行った。

パク

モグモグ

ディーン、ジャン、ラグナ、ギラードは一斉にパエリアを口にした。

ジャン 「おおーっ！！流石ディーンさん！マジでうめえ  
！！！」

ギラード 「…料理のできる男…フフ…素敵じゃない？」

しかし、この3秒後、全員が腹痛を訴え始めた…。そこへマナがキッチンから戻ってきて冒頭に繋がるのであった。

ディーン 「…………マナ…………これに使った花…………詳しく教えてくれ…………？」

マナ 「……えっと……黄色くて……これは小っちゃいけど、  
大きくなるとレーザーとか光弾とか出すモンスターになるらしいん  
ですけど……」

倒れている全員が絶句した。

ディーン 「お前……それ……テティの花じゃなくて『オブリリー』  
の……幼体じゃね……？」

マナ 「あ！そうです！そっちの名前です！」

『オブリリー』……ポゾナスリリーという強力な毒を持つ植物型のモ  
ンスターの変異上位種である。追尾性能のある光弾を発射すると  
もやっかいなモンスターだ。

ディーン 「……モンスターって分かって……出したのか……  
？」

マナ 「……えっと……コルトバってモンスターいるじゃな  
いですか？アレっておいしいじゃないですか？だから、これもモン  
スターだけとおいしいかなあ……って……アレ……？ディーンさん？」

ディーン 「……なんか……もういいや……」

ディーンの意識はここで絶えた。

言う…

その後マナはギルドのキッチンへ出入り禁止になったと

## OUT BREAK!! マナ（後書き）

はい。パエリアでした。僕も作りましたがおいしかったですよ！

ちなみに花の代用としては少々値段が高いのですがサフランを使用します。

オブリリーを入れなければディーンたちのようにはならないと思うので安心してください！

次から新章です！張り切っていきますぜ！

それではまた次章！

もし、実際にパエリア作って食べた人がいたら教えてくださいw



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0457u/>

---

ファンタシースターポータブル外伝～After the tragedy～

2011年11月27日08時49分発行